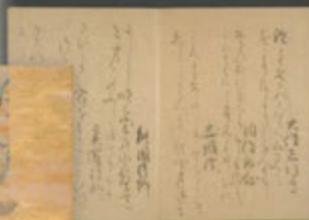
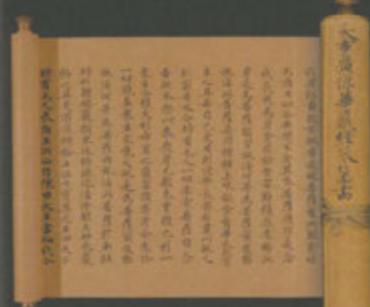


主催.. 慶應義塾図書館
協賛.. 丸善株式会社

第20回慶應義塾図書館貴重書展示会

義塾図書館を読む

和・漢・洋の貴重書から



ESTABLISHED IN 1869

 MARUZEN

第20回 慶應義塾図書館貴重書展示会

義塾図書館を読む

和・漢・洋の貴重書から

2007年1月26日(金)～31日(水)

午前9時～午後9時 最終日は5時閉場〔入場無料〕

丸善・丸の内本店4階ギャラリー

主催：慶應義塾図書館

協賛：丸善株式会社

ESTABLISHED IN 1869

 **MARUZEN**

「義塾図書館を読む」講演会

講演会 4階ギャラリー /各日とも午後2時30分～4時

1月26日(金)

佐々木孝浩 慶應義塾大学助教授 「和本の美容術」

1月27日(土)

井上 進 名古屋大学大学院教授 「漢籍からたどる中国の伝統文化」

1月28日(日)

高宮 利行 慶應義塾大学教授 「イングランドに輸入された中世写本と初期印刷本」

1月29日(月)

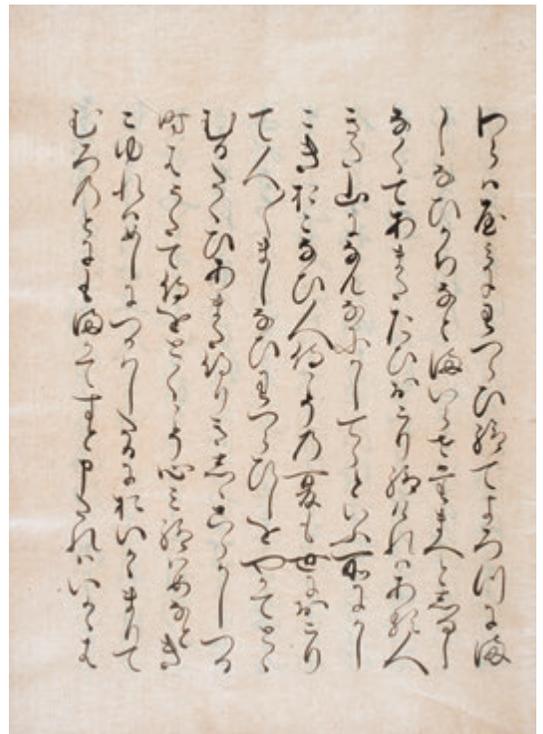
小秋元 段 法政大学助教授 「古活字本の誕生」

1月30日(火)

住吉 朋彦 慶應義塾大学専任講師 「日本漢学の伝統」

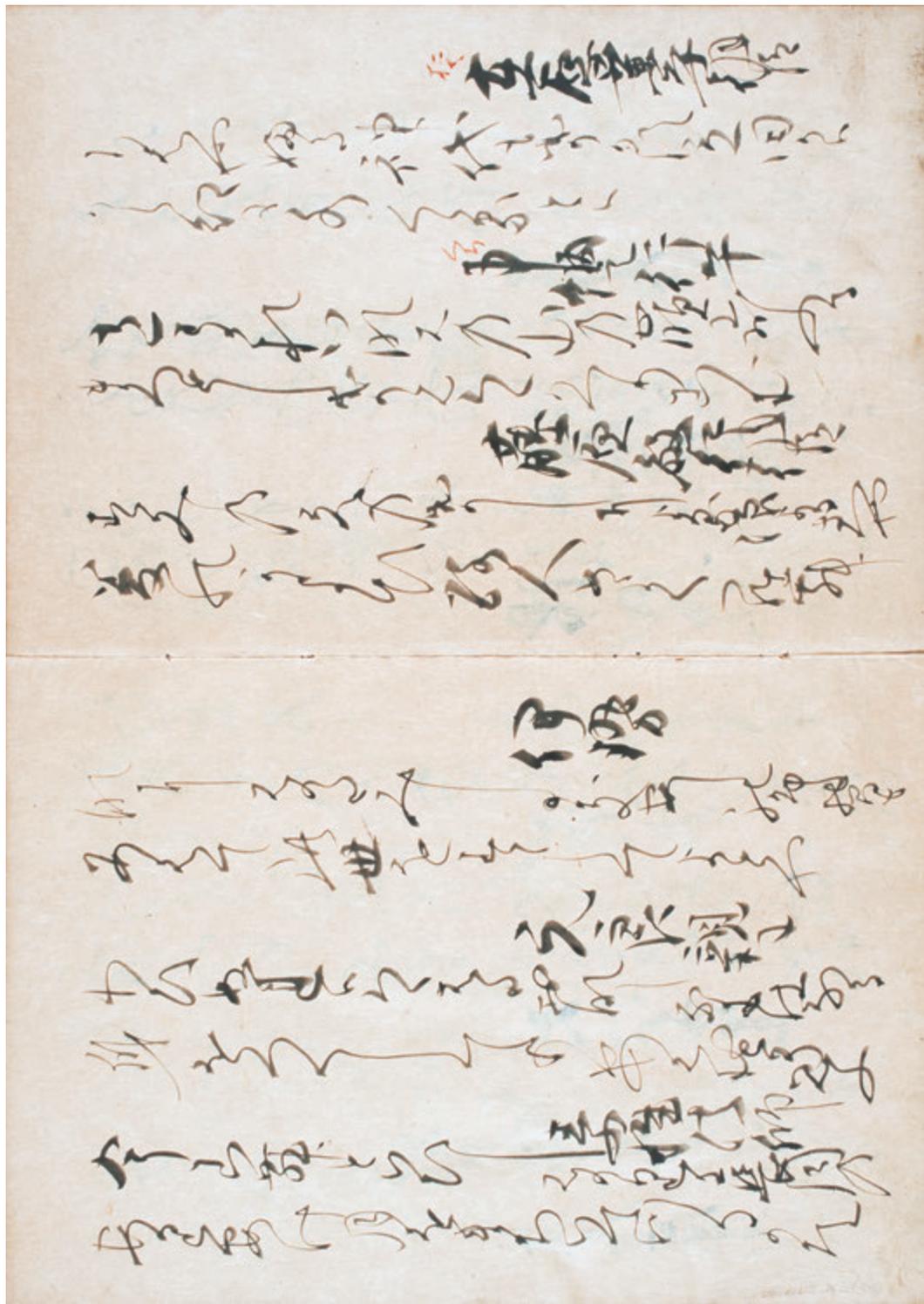
1月31日(水)

松田 隆美 慶應義塾大学教授 「挿絵とレイアウトからたどる西洋書物史」

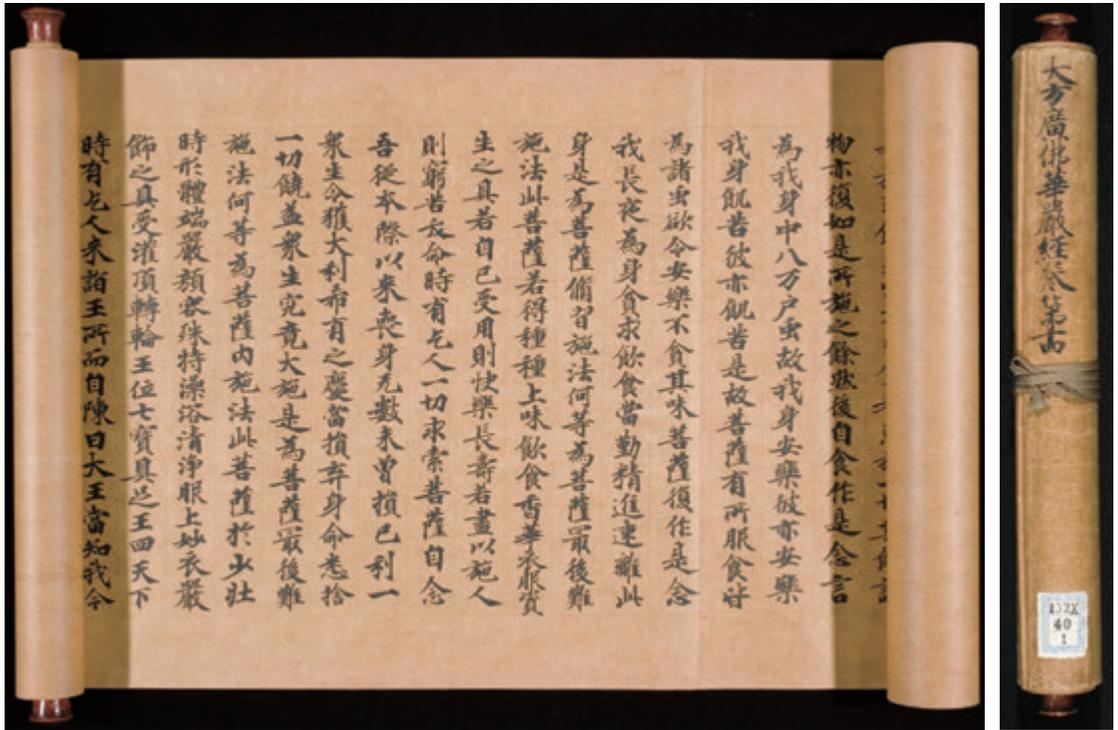


15. 〔源氏物語〕 54卷 〔紫式部〕

〔江戸初前期〕写 54帖 (132X 158 1)



22. 百人一首 [藤原定家] 元和7年(1621) 烏丸光広写 1帖 (56X 76 1)



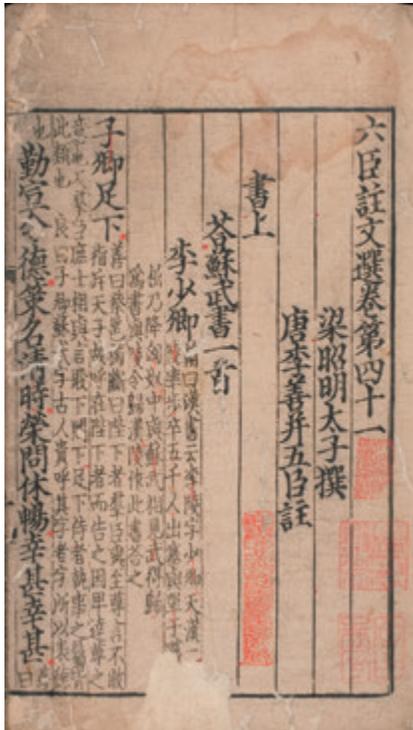
大方廣佛華嚴經（展示1）



叢林公論（展示22）



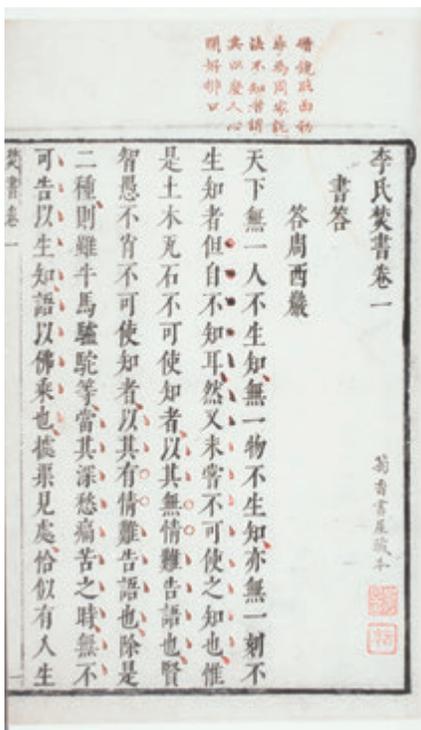
北溪先生性理字義（展示30）



六臣註文選（展示11）



事林廣記（展示14）



李氏焚書（展示19）



周易函書別集（展示21）



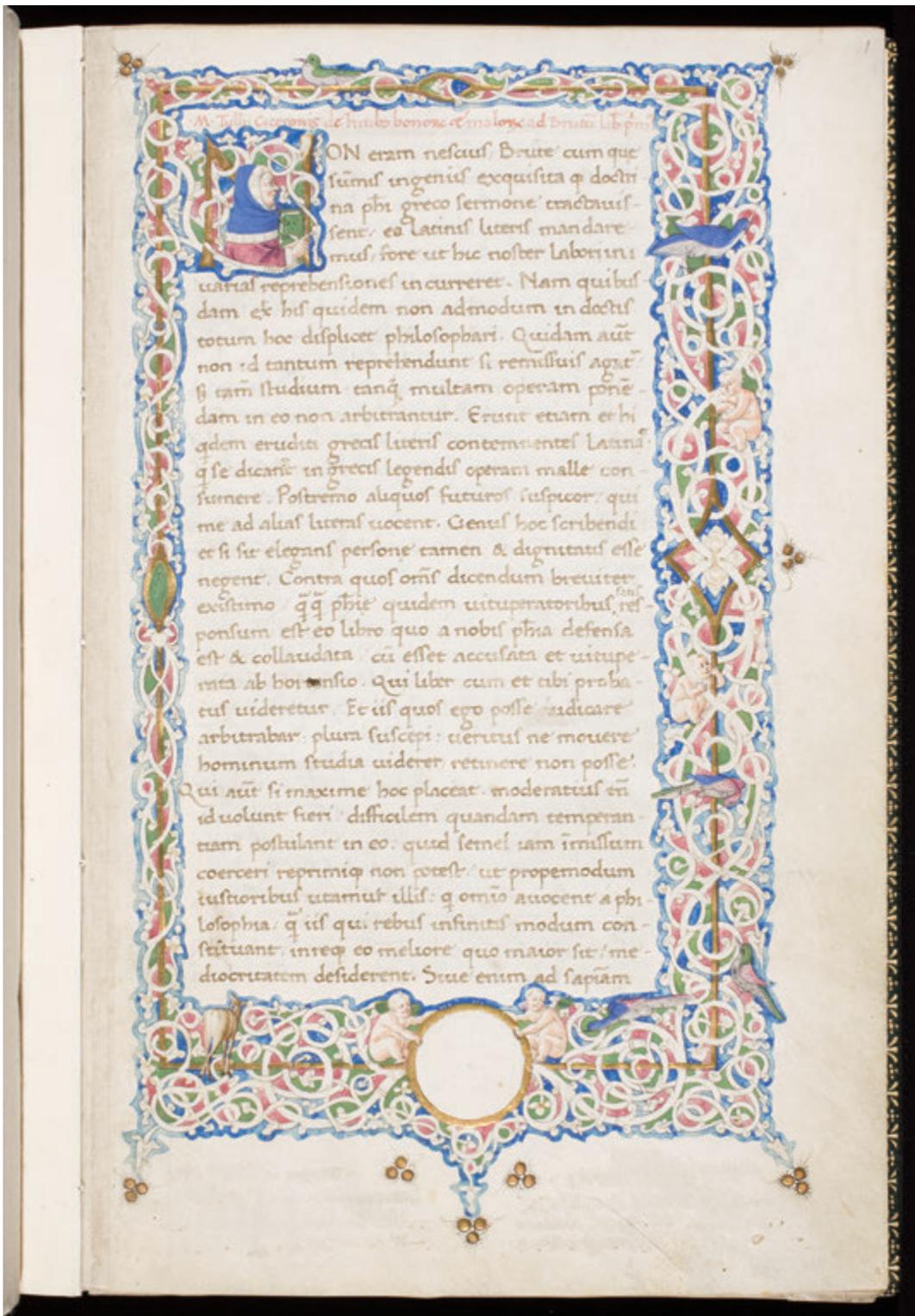
[c1: fol. 25r]

3. 「ラテン語時禱書」 写本（ルーアン、1465-80年頃）



[c2: d6']

6. 『ローマ式聖母マリアの時禱書』（パリ、1503年頃）



[c3: fol. 1r]

7. キケロー『善と悪の究極について』 写本（フィレンツェ、1450-60年頃）

Faulstich Isidorus
a. i. c. n. d. 1086

Prologus

1205411111

INCIPIT EPISTOLA ISIDORI IV-
NIORIS HISPALENSIS EPISCO-
PI AD BRAVLIONEM CESARAV-
GVSTANVM EPISCOPIVM.

Domino meo et dei
suo Braulioni epo
ysidorus omni vobis
perio vobiscum nunc
videre facie tua. et
venia aliqui imple-
ret deus voti meum
antequam moriar Ad
presens autem deprecor ut commendes me deo ora-
tione tua. et ut in hac vita spem meam im-
pleat & in futuro beatus tuus tue confortium
michi concedat. et manu sua. Ora pro nobis
beatissime domine. et frater.

BRAVLIO AD ISIDORVM.

Domino meo et vere domino: xpoq
electo ysidoro episcopo summo. Brau-
lio seruis iustis scorum dei. O pie-
domine et viros prestantissime. sera est in qui-
sitione. et tarde data est michi scribendi opor-
tione. quia peccatis meis exagitatio non est
modo sterilitatis vel inopia malo. verum
etiam pestis mortalitatis huius et hostilitatis
quomodo inquirere horribili sui prope in-
cursum. Nunc autem et si mille necessitatibus &
mille curis arerit eius post longum miserie te-
pus veluti ab impiis soporis ut ita dixerim
grauitate suscitatus. isti meae suggestionis
assatus dependere summo salutis obsequium
et cordis et corporis humilitate prostratus.
impetrans excellentissimam tue beatitudinis poe-
stare. ne peculiariter famulum quipio illo sa-
ere dignationis intuitu semper habuisti sus-
ceptum. vobis in fine habere iubetis commenda-
tu. Nam et ego xps nouit gratia dolore dis-
curios quod amensio epe tam plixio vel nunc
vrum non mereo videre conspectum. sed spero in
illu qui non obliuiscit misereri. nec repulsi-
in fine quod exaudiat precem pauperis et vno me
miseru respiciat aspectum. Suggoro sane
et omnimoda supplicatione deprecor. ut li-
brum tebibimologiarum que iam fauete dno au-
diuim? olumatu pmissionis vre memoros
seruo vro dirigere iubetis. quod ut michi sui
consensus. magna tibi ex parte serui tui postula-
tione sudasti. Et ideo in me primum exister-
municus. sic in scorum crebro & felix habea-
ris et primus. Gesta etiam sinodi in qua sui

cautus exanimis vbi igne. et si non puri-
ficatus: inuenit tunc decoctus. quod ut vno
instinctu a filio vno dno rege. nobis diri-
gatur cito. Nam et nra eius sic flagitauit
etiam suggestio quod muleri in coelo pro tunc
stigmata opus est veritate. De cetero crea-
toris altissimi pietatem efflagite ut coros-
nam beatitudinis vre pro integritate fidei. &
statu ecclesie sue longo tempore precipiat conser-
uare. meque me oblatantia presentis mundi
varia & immutabilia discrimina munire red-
dat tue incessantis gratia ac reddite iugiter
memorie tue tuum ab omni compellat pec-
cati oratu. vno efficiat trinitas sacramentis
Et manu sua. Ego seruus dno Braulio. yside-
ro in dno: fruar et lucerna ardans et non
marchescens.

ISIDORVS AD BRAVLIONEM

Domino meo et dei suo Braulioni
epo. ysidorus. Quia te scilicet
cognoui. gratias xpo ego: & vrinaz
eius cognoui saluti. in hoc corpe aspicerem
et visionem. Quod autem michi tuentur pro pec-
catis meis manifestabo. quod non fui dignus
eius portatore eloquia. statim enim ut accepti
picturam tuam puer regis ad me venie. dedi
cubiculario meo illud picturam: et ceteris am-
bulanti ad principem vel postea plegeri refer-
barum Reuersus e palatio regis. non solum sep-
ta tua non inueni. sed etiam quicquid aliud in
castris fuit perire. & idcirco scit dno. luxie
meritum meum. quod non plegeri eloquium tuum. sed
rogo ut quicquid occasio cuncterit: rescribe
michi. Et gratiam verbi tui non auferas ut quod
ex meo delicto perdidit. iterum gratia tua reci-
piam. Et manu sua. Ora pro nobis beatissime
domine.

BRAVLIO AD ISIDORVM.

Domino meo & vere dno xpoq de-
cto ysidoro episcopo summo. Braulio
seruis iustis scorum dei. Soler reple-
ri leticia bonis interioribus ac spiritalibus. cum inquit
fungit amatis. Ob id velle meum est mi dno
reuerentissime. non culpam maceriam meam obli-
stat et benigne et inquisitionem meam ample-
cti & querelam calumpniam pacem accipere.
Verum quod ago. et officium inquisitionis pro-
uo. & tibi contra te cauillam meam necessi-
tates dirigo. quod ut benignissime tuo auditui
admittas. in ingressu huius dictationis
portuque prostratus peto a culmine vestri

[c4: fol. 1']

10. セビリャのイシドルス『語源論』([ストラスブール]、[1473年頃])

ごあいさつ

21世紀にはいりITの社会的な普及にともなって、大学に対する社会的要請も大きく変化してきています。なかでも、貴重書をはじめとするコレクションだけではなく、教育や研究などの学術的なコンテンツもふくめて、ひろく社会に公開し、知的資産として共有していこうという潮流が国際的にも強くなっています。慶應義塾図書館では、こうした流れに先んじて、1985年から丸善株式会社の協賛を得て展示会を開催し、図書館所蔵の貴重な資料をひろく公開してきましたが、この展示会も、今年でちょうど20回を迎えることになりますので、これを機会に、これまでの展示会のひとつの区切りとして、「義塾図書館を読む」と題して、慶應義塾図書館が所蔵する貴重な和書、漢籍、洋書のなかから名品や逸品を選んで、展示することにいたしました。

これまでの展示会では、慶應義塾の慶事やイベントにあわせて、義塾図書館の所蔵する貴重な資料のなかからテーマを選び、展示会を開催してまいりました。たとえば、1990年に湘南藤沢に新キャンパスが開設された折には、「広重・東海道錦絵 日本橋より藤沢・箱根まで」と題して義塾の至宝である高橋誠一郎浮世絵コレクションを展示し、また2001年の福澤先生没後100年に際しては、「慶應義塾の経済学」をテーマとする展示会を開催いたしました。今回のテーマに類するものとしては、1992年に「和漢書善本百選」を開催したことがありますが、今年の展示会では、その後の収蔵品をふくめて、あらためて企画を立てなおしました。

今回の展示会に際しては、まず展示点数を約100点とすることに決め、それにあわせて、洋書については、文学部の松田隆美教授にお願いしておよそ30点の貴重書を選んでいただき、さらに和漢書のうち、和書については斯道文庫の佐々木孝浩助教授に、また漢籍については斯道文庫の住吉朋彦専任講師にそれぞれ30点をご推薦いただき、それらの資料を中心に解説を付して、ここに図録を作成する運びとなりました。

来年2008年には、慶應義塾は創立150年を迎えることになりますが、今後もこの展示会の機会を活用して、慶應義塾のもっているさまざまな知的資産を積極的に公開していきたいと考えております。

最後に、展示会開催にご協賛いただき、ご協力いただきました丸善株式会社に深く感謝するしだいです。

2007年1月

慶應義塾図書館長

杉山 伸也

目 次

ごあいさつ…………… 慶應義塾図書館長 杉山 伸也

目 次

和 書…………… 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫助教授 佐々木 孝浩	
展示書リスト（和書）……………	3
慶應義塾図書館所蔵古典籍の一性格……………	5
展示番号1～32……………	7
漢 籍…………… 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫専任講師 住吉 朋彦	
展示書リスト（漢籍）……………	43
I 漢籍総説……………	45
展示番号1～21……………	52
II 日本漢籍の来源……………	75
展示番号22～33……………	80
洋 書…………… 慶應義塾大学文学部教授 松田 隆美	
展示書リスト（洋書）……………	95
慶應義塾図書館の洋貴重書……………	99
展示図録について……………	102
展示番号1～33……………	104

和 書

展示書（和書）リスト

図録番号	書名
1.	日本書紀 神代卷2巻 舎人親王等 〔江戸前期〕写 2冊 (215 650 2)
2.	日本書紀 30巻 存神代巻 舎人親王等 〔慶長15年(1610)〕刊 古活字 2冊 (110X 406 2)
3.	日本書紀纂疏 8巻 一条兼良 〔江戸前期〕刊 8冊 (110X 601 8)
4.	日本紀聞書 2巻 吉田兼俱講 証宣記 〔文明13年(1481)頃〕写 円信筆 1冊 (110X 176 1)
5.	古今和歌集 20巻 紀貫之等 〔室町中期〕写 伝飛鳥井雅俊筆 1帖 (132X 105 1)
6.	古今和歌集 20巻 紀貫之等 〔江戸前期〕写 1帖 (JL 2A 664)
7.	〔古今和歌集序注〕 零巻 〔南北朝〕写 1軸 (132X 117 1)
8.	〔古今和歌集序注〕 首欠 〔二条為忠〕 享禄3年(1530) 尊鎮親王令写 尊鎮自筆奥書 経厚自筆加証奥書 1軸 (132X 65 1)
9.	古今和歌集聞書 宗祇講 宗碩記 〔文亀元年(1501)以降〕写 宗碩自筆 2冊 (132X 62 2)
10.	〔伊勢物語〕 残欠 永禄5年(1562)以前写 伏見宮貞敦親王筆 1帖 (207 73 1)
11.	〔伊勢物語〕 〔江戸前期〕写 1帖 (128 80 1)
12.	伊勢物語〔註〕 〔室町中後期〕写 1冊 (132X 34 1)
13.	〔伊勢物語肖聞抄〕 宗祇講 肖柏記 〔室町後期〕写 伝宗梅筆 1帖 (132X 63 1)
14.	伊勢物語聞書〈九禅抄〉 九条植通 天正20年(1592)写 橘秀弘筆 九条植通自筆奥書 1冊 (110X 102 1)
15.	〔源氏物語〕 54巻 〔紫式部〕 〔江戸初前期〕写 54帖 (132X 158 1)

16. 紫明抄 10卷 存卷1 (自桐壺至末摘花) 素寂
〔鎌倉末・南北朝〕写 1帖 (132X 102 1)
17. 〔源氏物語古注〕 存末摘花卷
〔南北朝〕写 伝浄弁筆 1軸 (132X 130 1)
18. 源氏明石物語 3卷 欠上
〔天和頃〕江戸・鱗形屋刊 2冊 (220 7 2)
19. 源氏物語〈花鳥風月〉 2卷
〔江戸前期〕江戸・鱗形屋刊 2冊 (220 25 2)
20. 〔花鳥風月〕
〔室町後期〕写 伝飛鳥井一位局筆 1冊 (146 184 1)
21. 光源氏物語系図 三条西実隆
〔室町末〕写 1冊 (110X 174 1)
22. 百人一首 〔藤原定家〕
元和7年(1621)写 烏丸光広筆 1帖 (56X 76 1)
23. 百人一首 〔藤原定家〕
〔江戸前期〕写 1帖 (128 95 1)
24. 小倉山庄色紙和歌〔抄〕〔東常縁講 宗祇記〕
〔元和寛永頃〕刊 古活字 1冊 (110X 166 1)
25. 百人一首抄 細川幽斎
〔江戸初期〕写 1冊 (110X 307 1)
26. 〔百人一首抄〕 細川幽斎
寛永20年(1643)写 賀川柳碩筆 1冊 (214 140 1)
27. つれつれ草 2卷 吉田兼好
〔江戸初期〕写 伝松永貞徳筆 2冊 (110X 606 2)
28. 〔つれづれ草〕 2卷 存卷上 吉田兼好
〔慶長元和〕刊 古活字 1冊 (1002 9 1)
29. つれつれくさ 2卷 吉田兼好
〔江戸初期〕〔京〕・杉田玄与刊 覆古活字 2冊 (88 213 2)
30. つれつれ草 2卷 吉田兼好
〔江戸前期〕写 2帖 (11X 29 2)
31. 〔徒然草寿命院抄〕 2卷 秦宗巴
慶長9年(1604) 京・如庵宗乾刊 古活字 2冊 (102 37 2)
32. 〔鉄槌〕 4卷 青木宗胡
〔江戸前期〕写 4帖 (110X 516 4)

慶應義塾図書館所蔵古典籍の一性格

— 和書32点の解説の前書きとして —

大学図書館の古典籍というものは、一般の研究図書とは異なり、なければ絶対に研究が行えないというようなものではなく、従って何が無ければならないというものでもない。その大学及び図書館の予算に応じて、種々の補助金等を受けつつ、そこに所属した、時々の様々な専門分野の研究者や司書達の、考えや希望に沿って徐々に集められていくものであり、集まれば自然とその蔵書群の性格も形成されていくのである。

慶應義塾図書館は、規模も大きく歴史も古いので、その所蔵する古典籍の数も少なからぬものがある。購入したものばかりではなく、寄贈されたものも数多い。そうして複雑な成長を遂げた蔵書群の性格を、簡単に言い表すのは至難の業だが、貴重書に限ったものとして乱暴を承知で纏めるならば、かなり玄人好みの蔵書群であると言えるのではないだろうか。判りやすく説明すると、一般の人が聞いて直ぐに判る作品が少ないという言い方ができるかもしれない。

そのことを窺う為に、やや古いデータとはなるが、昭和33年11月に刊行された『慶應義塾図書館蔵和漢書善本解題』を取り上げてみたい。ここには268点に及ぶ和漢の写本版本が掲出されている。その書名索引を和書に限って50音順に眺めてみると、伊勢物語は注釈が2点あるのみ、源氏物語は系図が1点、古今集も注釈が1点、徒然草は本文と注釈が各1点、平家物語・大和物語も1点ずつ確認することができるのだが、百人一首や新古今集・万葉集、あるいは枕草子あたりは、全く目に付かない。しかも掲出されているものも、その作品の本文は少なく、殆どが注釈書の類ばかりなのである。

およそ半世紀が経過した今日においても、この傾向はあまり変わってはならず、慶應義塾図書館の貴重書には、注釈書あるいは古典の研究書が多くて、古典の本文のみのものは少ないのである。断っておくが、それはあくまでも貴重書の範囲であって、普通書の古典籍にはそうしたものが少ない訳ではない。

その理由は様々に考えられるが、限られた予算の中で、如何に効率的に学問研究に役立つ資料を購入するかという命題に対して、多くの関係者達が下してきた判断が、注釈書類の蒐集ということであったのであろうと思われる。

世に著名な古典作品の伝本は少なくないが、書写も古く研究的にも価値のある本文を有するものとなると、やはりそれは稀少であり、また極めて高額で取引されるものである。これに対して古典の注釈書類は、今日でこそ学界でも広く認知され、その研究的な価値が目ざれているものの、近時まで高い評価を受けることが少なかったものであるので、比較的購入が容易であったのである。

満遍なく多種類が存在する蔵書も参考資料として良いが、特定の分野に集中した集書というものは、研究に大きな成果をもたらしうる存在である。そうしたことから、善本が複数存在する分野がある、いわばコレクションの芽があるとなると、意図的にそれに関連する資料を購入するようになっていく。義塾図書館の和書に関するその代表的な分野が、奈良絵本類であり古典の注釈書類なのである。

今回「慶應義塾図書館を読む」という展示会を開催するにあたり、以上に述べたような特徴を判りやすく表現するために、以下の様な基準を設けて展示品の選定を行ってみた。中学校の

教科書に記載されているような著名な作品とその関連書に限定し、さらに比較的善本に恵まれた注釈書ばかりではなく、必ず本文のみの伝本も併せて選ぶものに限った。

そうして取り上げることができたのが、『日本書紀』『古今和歌集』『伊勢物語』『源氏物語』『百人一首』『徒然草』の6作品に関連する32点である。選定方法による制約の為に、必ずしも善本展として相応しいものばかりとはならなかったが、貴重書として保管されているものに限定せず、できるだけ書物としての面白みを有するものを探し出した心算である。

一般に古典籍は製作された時点からは古びる一方で、書き入れなどがされることがあっても、その姿が変わるものではないと思われがちである。しかしながら、美術品としての側面も有し、高価な商品ともなりうる古典籍は、より価値を高く見せる為に、しばしば大規模な外科手術が施されもしたのである。表紙がより豪華で美しいものに付け替えられることはしばしばあるが、元の姿が判らなくなるほどに徹底的に大改造がなされることも少なくないのである。解説ではそうしたことも簡単に指摘してみた。古典籍の華麗な？変身の過程を楽しんでいただければと願う次第である。

また解説の執筆にあたって心掛けたのは、旧蔵者や寄贈者の名前をできるだけ明示するようにしたことである。伝来過程というものは、その本をより深く理解する為に貴重な情報となりうるものであるし、また単純に興味深いものでもある。今回の展示品の中では、福沢諭吉の弟子であった朝吹英二旧蔵の奈良絵本『花鳥風月』などは、いかにも慶應義塾らしいものと言えるであろう。また同書は英二の息常吉の寄贈になるものである。建学の精神に共鳴したり、母校の為を思ったり、あるいは自分や先祖のコレクションを分散させずに保つためなど、様々な理由で寄贈される典籍は、図書館にとってありがたく貴重な財産であることは言うまでもない。

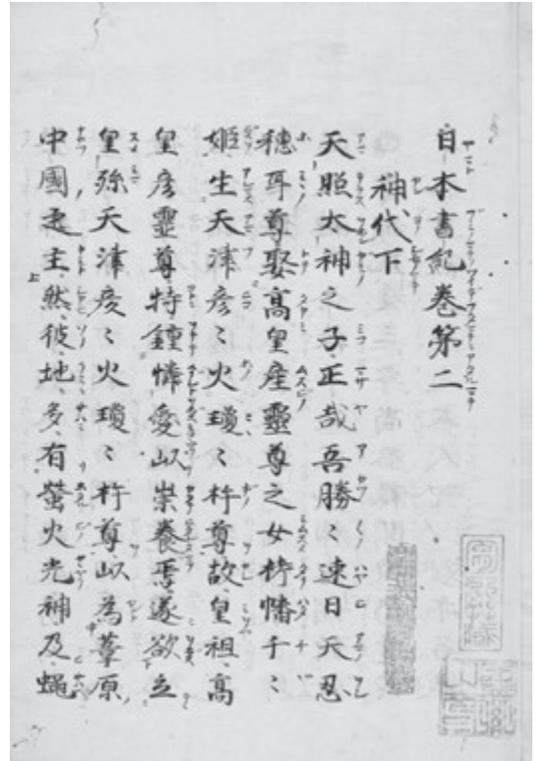
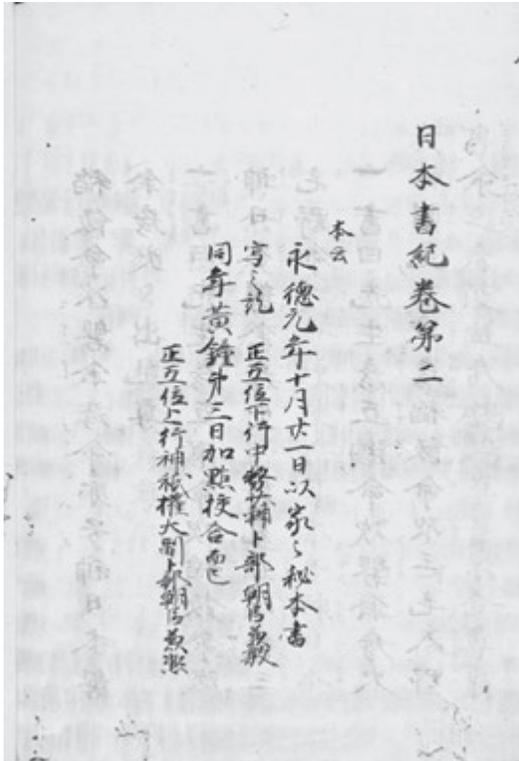
コレクションの一括寄贈や購入は、それが特定のジャンルに絞って集書されたものである場合は特に、その図書館の蔵書に新たな性格を付与することになるものである。慶應義塾図書館に所蔵される特定の個人や団体の旧蔵書については、図書館ホームページの「調べる・探す＞各種文庫」のページを参照いただきたいが、今回対象とした中世以前成立の古典作品に関して言えば、幸田成友博士旧蔵本の「幸田文庫」は大きな柱となる存在である。また「各種文庫」には数えられていないものの、渡辺金造の「刀水文庫」や横山重の「赤木文庫」旧蔵本等は、点数もまとめり善本の多いものとして、義塾図書館の古典籍を語る際に欠くことのできない存在である。それらが今回の展示でも活躍していることは御覧の通りである。

古典籍の調査研究を専門とする研究所に所属する者として、日頃慶應義塾図書館から受けている恩恵は計り知れないものがある。研究の必要に迫られて見たいと思うものが、遠くまで出かけなくても、かなりの率で身近に存在しているのである。無くてはならないものではないものだが、あれば様々な研究に資するものがこれ程に豊富に存在することは、大学及び大学図書館として自覚的に誇ってしかるべき事柄であろう。今後もますます購入や寄贈を通じてその蔵書の厚みが増すことを願ってやまない。

(附属研究所斯道文庫助教授 佐々木孝浩)

1. 日本書紀 神代卷2卷 舍人親王等

〔江戸前期〕写 2冊 (215 650 2)



袋綴。縹色艶出表紙 (27.9×19.4cm)。左肩白具引地緑色尾花文金泥雲霞題簽。料紙薄手斐格交漉紙。半葉8行・字面高さ約20.8cm。

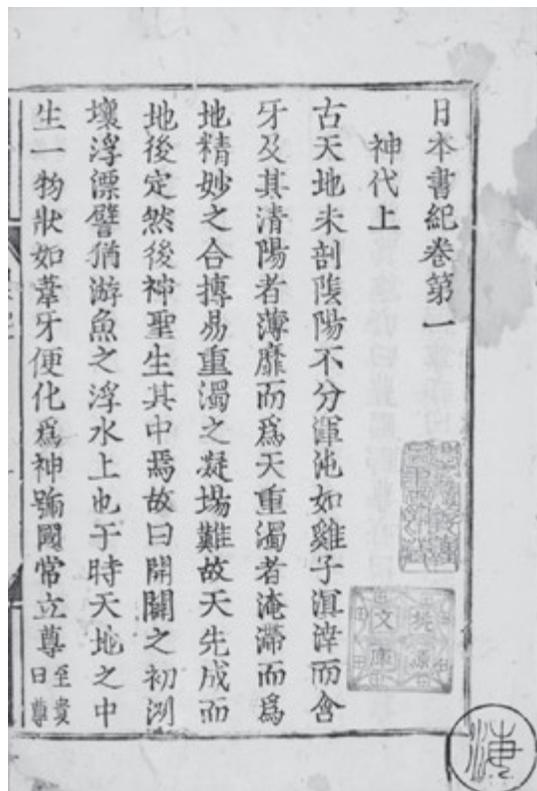
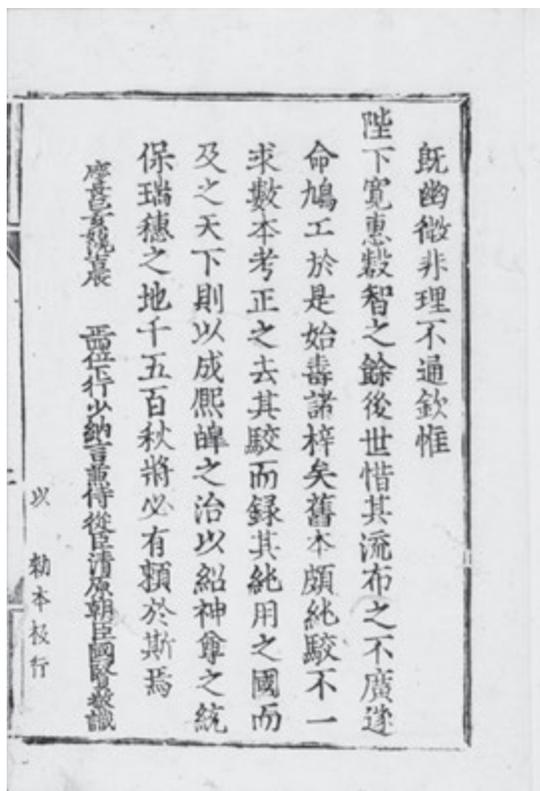
内題と尾題に「日本書紀卷第一(二)」とありながら、外題に「日本記上(下)」とあるように、神代巻のみを書写したものである。神代巻は神道書としても尊重されたので、単独の伝本も多い。下冊末尾に「本云」として、「永徳元年十月廿一日以家々秘本書／写之訖 正五位下行中務少輔卜部朝臣兼敦／同年黄鐘第三日加點校合而已／ 正五位上行神祇權大副卜部朝臣兼熙」との本奥書があり、永徳元年(1381)に卜部(吉田)家の兼熙・兼敦父子によって書写校合された本の転写本であることが判る。詳細な調点や振仮名等が丁寧に加えられており、神道の家吉田家における訓み方が判る。「円融蔵」「盛胤／之印」の印記があり、三千院門跡井宮盛胤親王(1651-80)の旧蔵と知られる。もう一つの「幸田成友」印は、幸田露伴(かじいのこうだろはん)の弟で慶應義塾大学教授であった歴史学者成友(しげとも)(1873-1954)のものである。その蔵書は義塾図書館と一橋大学図書館に分蔵されている。

〔書誌・参考文献〕

『慶應義塾図書館蔵和漢書善本解題』

2. 日本書紀 30卷 存神代卷 舍人親王等

〔慶長15年 (1610)〕刊 古活字 2冊 (110X 406 2)

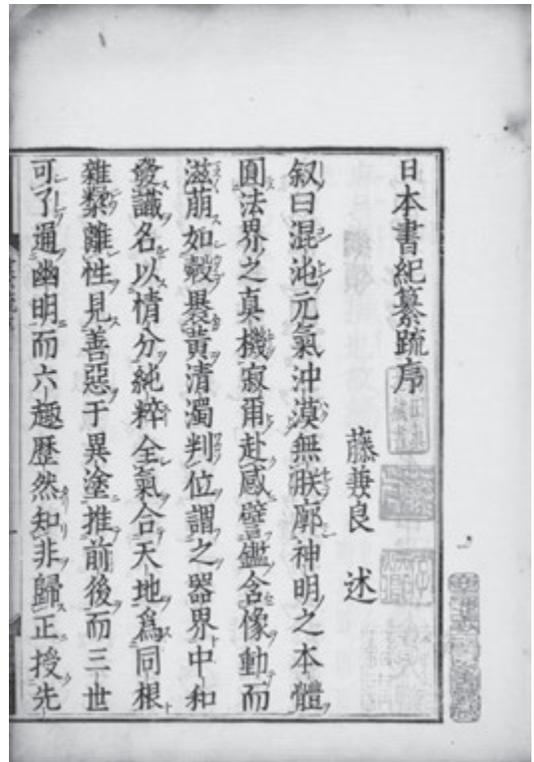
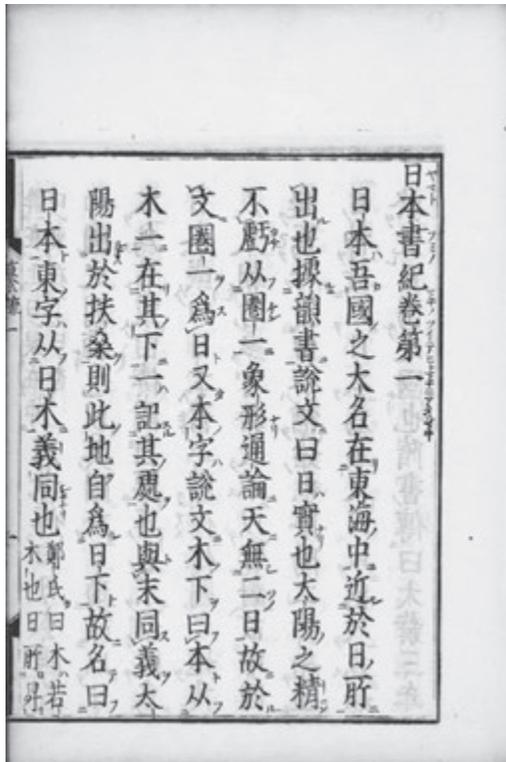


袋綴。茶色地〔菱繫花唐草文〕空押表紙 (28.0×19.8cm)。四周双辺 (22.5×15.8cm)・半葉8行・1行18字。

表紙左肩に打付けで「神代上(下)」とあり、右下に同筆で「祐範」と墨書されている。内題・尾題は「日本書紀卷第一(二)」とあり、版心には「日本紀一(二)」と見える。やはり義塾図書館に所蔵される古活字本(合5冊・欠巻3～6、20～30・110X-535)と同版で、共に慶長4年(1599)刊の後陽成天皇による勅版を元に、同15年に刊行されたものである。ルビ等はなく、先の写本とは対照的である。帙題簽によれば、表紙の署名は日本紀伝授の始祖となった中臣(東地井)祐範(1542-1623)のものとのことだが、尊経閣文庫蔵『古事記』の奥書署名とは似ていない。表紙右下の署名は僧侶の所持本に多いので、伝未詳の僧祐範ゆうはんのものである可能性もある。外題からすると祐範所持の段階から神代巻のみであったか。「海」「桃源/文庫」等の印記がある。

3. 日本書紀纂疏 8卷 一条兼良

〔江戸前期〕刊 8冊 (110X 601 8)

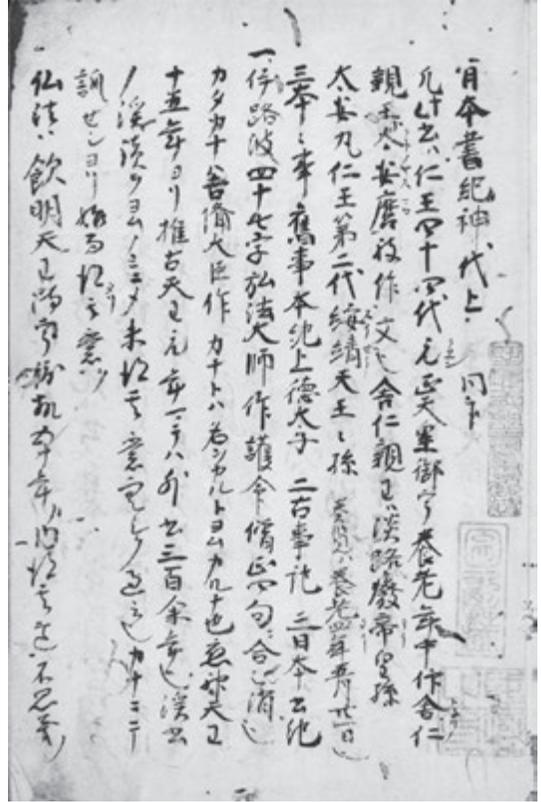
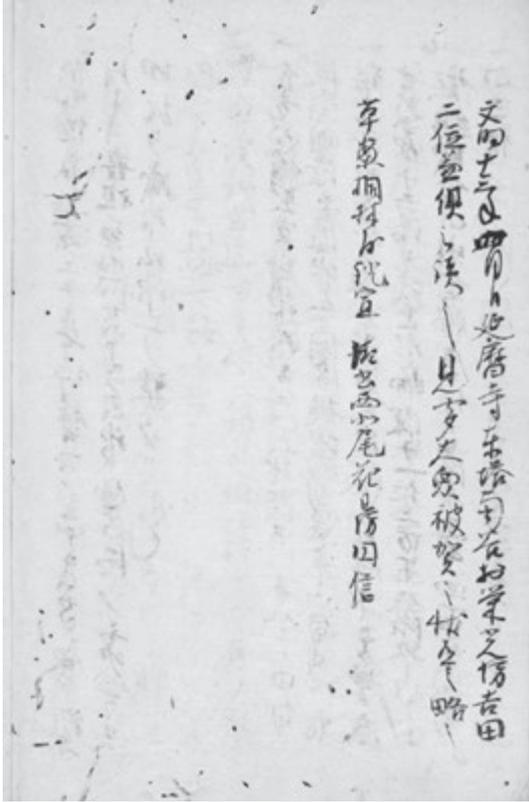


袋綴。藍色地小石畳文空押艶出表紙 (28.4×20.3cm)。左肩子持柀刷題簽。四周双
辺 (20.6×15.3cm)・半葉 8行・1行15字。

外題には「日本書紀纂疏 上一 (～五・下一～三)」とあり、内題には「日本書紀纂疏序」とある。室町時代を代表する碩学であった、関白一条兼良 (1402-1481) の著した神代巻の注釈書で、神仏儒一致を説くことに特色がある。吉田神道の大成者である卜部兼俱等の注釈にも強い影響を与えており、写本も多く伝存している。版本としては、寛文4年 (1664) 刊『日本書紀神代合解』の頭書に刻されたものの他、享保6年 (1721) の松会三四郎版が知られている。本書は享保版とは異版の無刊記本の1本で、刷も良く大振りな上装本である。版面の大きさや、書体の様子等からして、享保版はこの無刊記版を覆刻したものであろう。高名な東洋史学者であった内藤湖南と、大蔵書家として知られる岡田信の旧蔵であることが印記から知られ、他に不明印1顆がある。

4. 日本紀聞書 2巻 吉田兼俱講 証宣記

〔文明13年（1481）頃〕写 円信筆 1冊（110X 176 1）



袋綴。朽葉色艶出表紙（25.7×17.6cm）。中央薄茶色地不明文蠟箋題簽。料紙斐楮交漉紙。半葉11行・字面高さ約22.0cm。

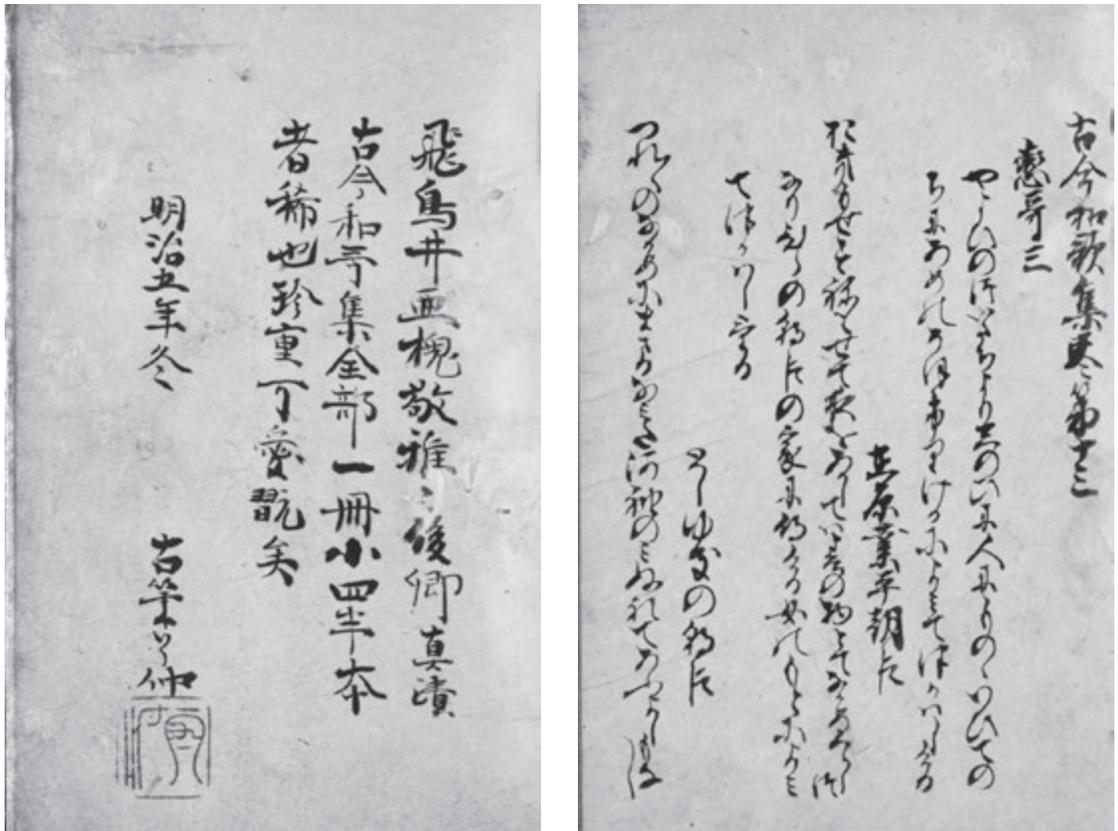
外題には本文同筆で「日本紀聞書■」（■は「語」を墨滅）とあり、内題には「日本書紀神代上 同下」・「日本紀同時聞書少々」とある。「（神代）下」の末尾に、「文明十三年四月日延暦寺東塔南谷於栄光坊吉田／二位兼俱之談之見聞大衆被賀之状有之略之／（1行アキ）／草案桐林坊證宣 清書西北尾花王坊円信」との書写奥書があるように、神道学者として令名の高かった卜部（吉田）兼俱が、文明13年4月に延暦寺で行った神代卷講義の聞書で、証宣が講義ノートを整理し、円信が清書したものである。本文は一つ書形式で、漢字片仮名交りで記される。兼俱の神代卷の注釈には自筆の神代抄を始めとして、少なからぬ種類の聞書も存しているが、本書も時と場所の明らかな講義の資料として貴重なものである。やはり「円融藏」「盛胤／之印」「幸田成友」印があり、梶井宮・幸田文庫旧蔵本である。

〔書誌・参考文献〕

『慶應義塾図書館蔵和漢書善本解題』

5. 古今和歌集 20巻 紀貫之等

〔室町中期〕写 伝飛鳥井雅俊筆 1帖 (132X 105 1)

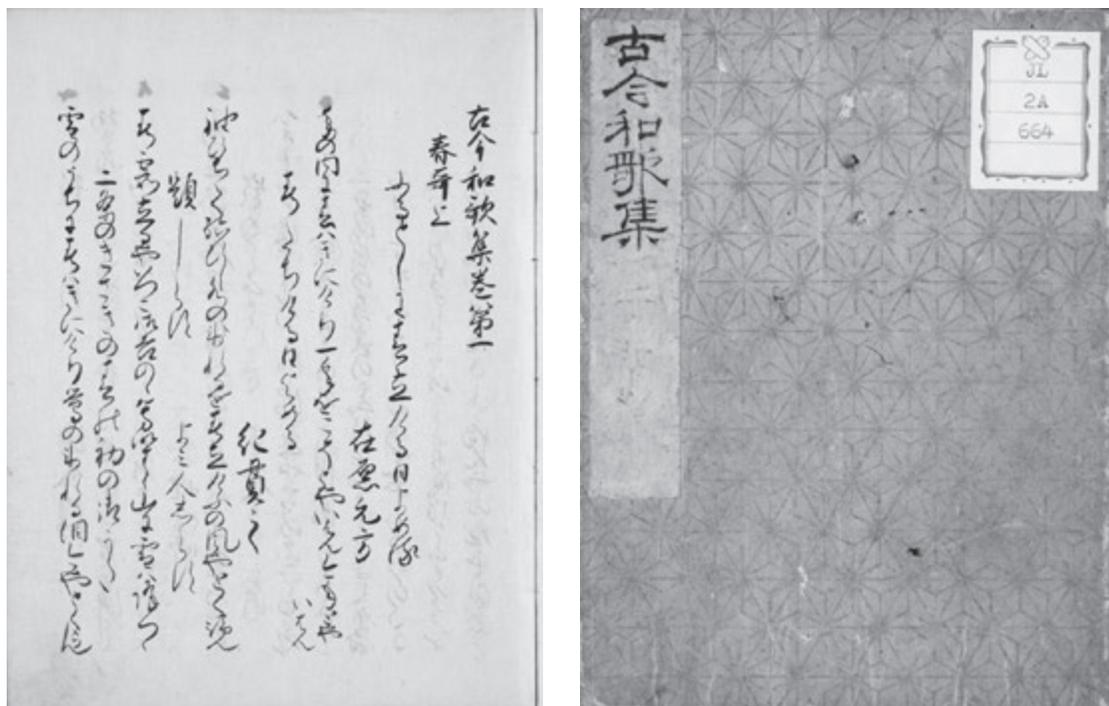


綴葉装。後補紫色地七宝花唐草文金欄表紙（12.2×8.3cm）。見返し後補雷文繫空押金紙。料紙鳥の子。半葉10行・字面高さ約10.1cm。

外題はなく、内題に「古今和歌集巻」とある。歌道における聖典であった古今集には、本書のような袖珍本しゅうちんぽんなどと呼ばれる小さな写本版本は少なくないが、室町時代のものとなるとかなり稀である。虫損が激しいものの、本来上等な造本であり、貴顕の姫君の愛玩本であったか。仮名序・本文・真名序の順で、末尾に貞応2年7月22日の藤原定家ふじわらのていか本奥書があり、古今集流布本の代表たる定家貞応本こひつりようちゆうに属するものである。末尾に古筆了仲りようせつが飛鳥井雅俊筆と鑑定した明治5年の識語がある他、前遊紙に同じ鑑定をした古筆了雪きわめふだの極札が貼付される。雅俊(1461-1509)筆と断定はできないが、ほぼその頃の書写であろう。

6. 古今和歌集 20巻 紀貫之等

〔江戸前期〕写 1帖 (JL 2A 664)

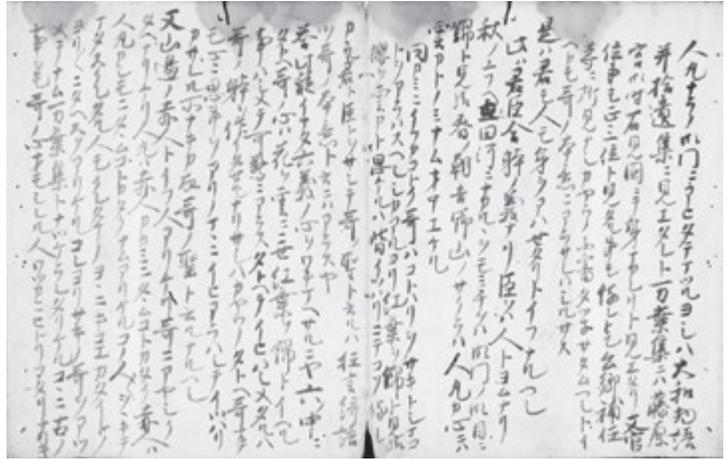


綴葉装。鳥の子色地鶯色麻葉文刷艶出表紙 (14.7×10.4cm)。左肩素紙題簽。料紙やや薄手斐紙。半葉12行・字面高さ約11.4cm。

外題・内題共に「古今和歌集」とある。先の伝雅俊筆本よりも一回り大きく、版本の小本よりもやや小振りで、携帯性も高く読みやすいものとしては程の良い大きさであろう。仮名真名両序に続いて本文があり、末尾に墨滅歌があるので、奥書はないものの定家貞応本に属するものと思われる。奥書がないことからすると、八代集や二十一代集の別れである可能性もあろうか。歌頭に意味不明の朱色不審紙を貼付する。外題の隷書^{れいしよ}的な書体や本文の書風は、石清水八幡宮の社僧^{しょうじょう}昭乗^{しょうかどう}に始まる松花堂流に属するものであろう。国文学研究室の所蔵本である。

7.〔古今和歌集序注〕 零卷

〔南北朝〕写 1軸 (132X 117 1)



原装袋綴・現状卷子装。後補鶯色布目地花菱文雲母刷表紙（高さ32.0cm）。見返し
白色具引布目地金銀切箔散し。料紙厚手楮紙。字面高さ約30.3cm。

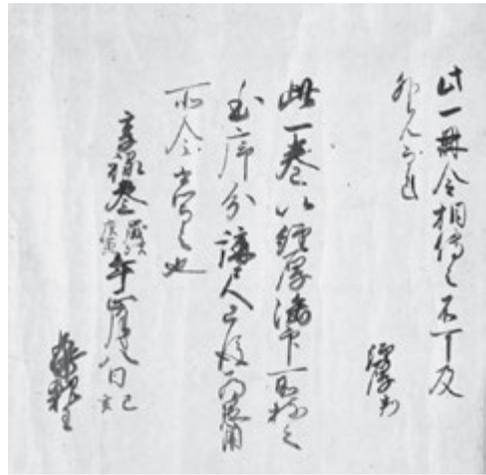
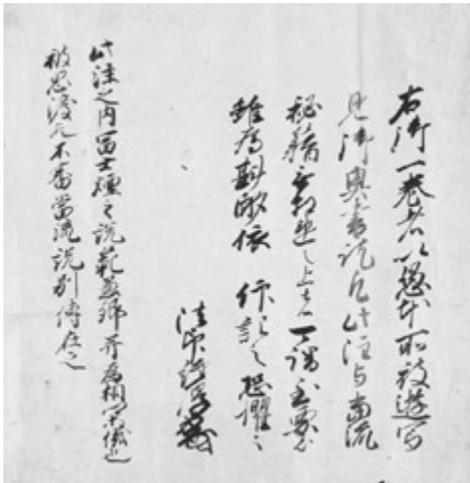
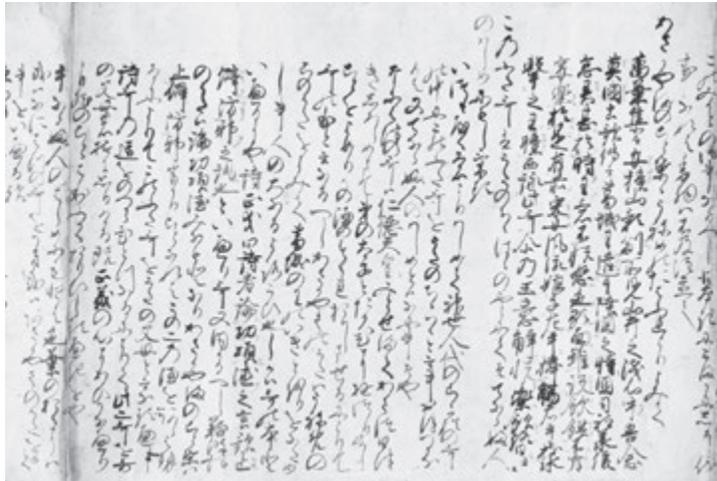
不用になった消息を集め、裏面を表にして袋綴本を作り、半葉14行程度で古今集の序の注積を書写したものの一部を、比較的近時に卷子に改装したもの。これにより裏面の仮名消息も読めるようになっている。水染み等のため状態が悪く、断続的に3割程度が残存するばかりだが、古今集注積書を数多く所蔵する義塾図書館と附属研究所斯道文庫の蔵本中でも、最古写の古今注である。漢字片仮名交りで書写されたその内容は、藤原定家^{ふじわらのていか}息の^{たぬいえ}為家作とされる「為家序抄」の影響を強く受けたもので、京都府立総合資料館蔵『古今和歌集聞書』（〔近世初〕写）と同類のものであることが確認されている。蔵書印は無いが京都大学教授であった吉澤義則の旧蔵書である。

〔書誌・参考文献〕

川上新一郎『『古今和歌集序注』（〔南北朝〕写本』『三田評論』1990・3

8. 〔古今和歌集序注〕 首欠 〔二条為忠〕

享禄3年(1530) 尊鎮親王令写 尊鎮自筆奥書 経厚自筆加証奥書 1軸 (132X 65 1)

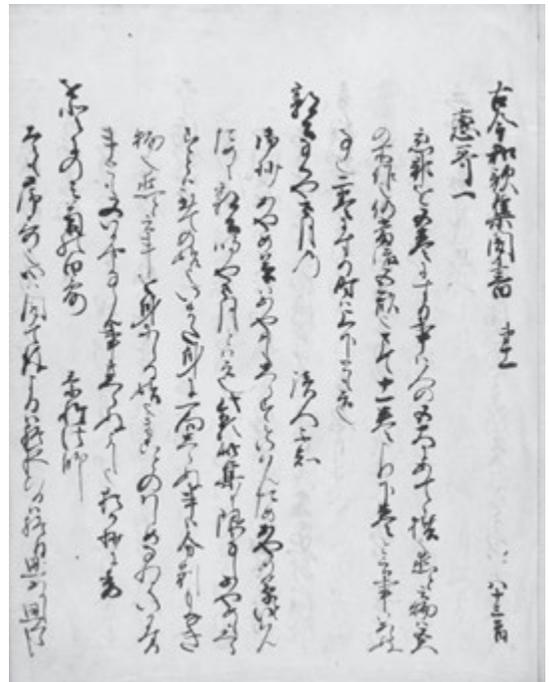
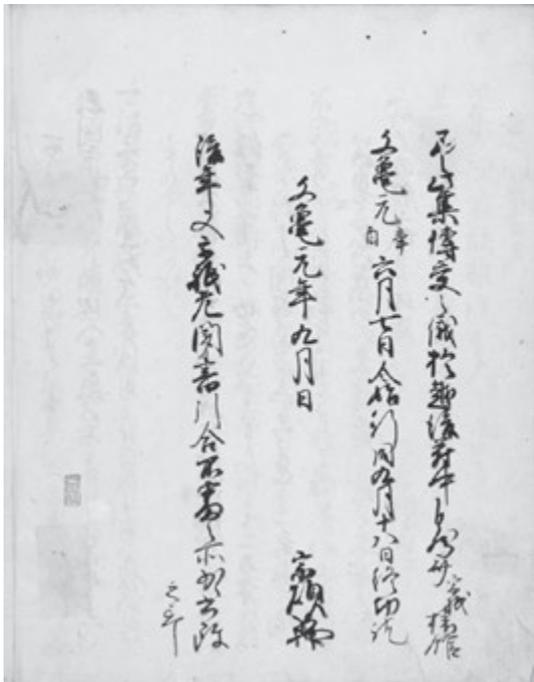


卷子装。後補縹色艶出表紙(高さ25.2cm)。後補六角水晶軸頭。見返し雲母引地銀切箔散し。料紙鳥の子。字面高さ約22.3m。

二条為忠^{にじょうためただ}(?-1373)が5代の祖為家の注釈「為家序抄」を根幹に作成した仮名序注の最古写本で、惜しくも冒頭部分を欠いている。青蓮院坊官であった鳥居小路経厚^{しやうれんいんぼうかん}(1476-1544)所持の本を、その歌学の弟子であった青蓮院尊鎮親王^{そんちん}(1504-50・後柏原天皇皇子)が、享禄3年正月8日に書写させたものである。尊鎮の奥書の後に、やはりその命により経厚が書写の経緯等を書き加えている。上質紙を用いた卷子に書写された格の高い本である。紙背に「三寶」との継目印がある。なお本書の転写本と思われるものが国立公文書館に所蔵されている(200-22)。

9. 古今和歌集聞書 宗祇講 宗碩記

〔文龜元年（1501）以降〕写 宗碩自筆 2冊（132X 62 2）



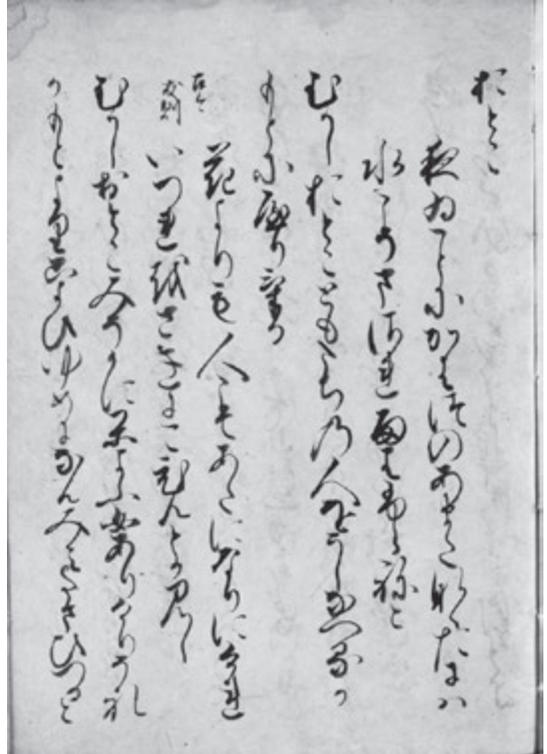
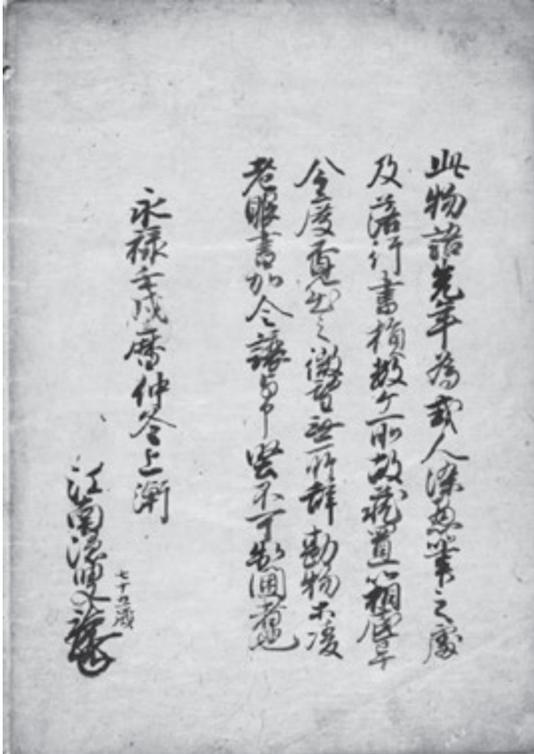
結綴（大和綴）。後補薄茶色地金銀泥花唐草帯文刷表紙（28.2×23.0cm）。左肩後補金泥朱蔦文題簽。見返し鳥の子地銀泥砂子雲霞文金砂子散し。料紙斐楮交漉紙。半葉13行・字面高さ約23.5cm。

外題・内題共に「古今和歌集聞書」とある。下冊奥書によれば、連歌師宗碩（1474—1533）が、文龜元年6月7日から9月18日まで、越後府中において師の宗祇からうけた古今伝授の内容を、既成の宗祇聞書を参照して纏めたものである。惜しくも序注部分を欠いている。古典学者でもあった宗祇は多くの注釈書を成し、以後の古典学に多大な影響を与えており、その古今集注には『両度聞書』や『古聞』他がある。宗祇は文龜2年に82歳で没するので、この「宗碩聞書」はその最晩年の説を伝えていることになる。改装されてはいるが、室町期特有の幅の広い大振りな書型を有している。2冊各々に宗碩筆と鑑定した古筆了珉の極札を付す。
〔書誌・参考文献〕

平沢五郎他「資料紹介慶応義塾図書館蔵 宗碩自筆「古今和歌集聞書」」『斯道文庫論集』21、1985・3

10. 『伊勢物語』 残欠

永禄5年(1562)以前写 伏見宮貞敦親王筆 1帖 (207 73 1)

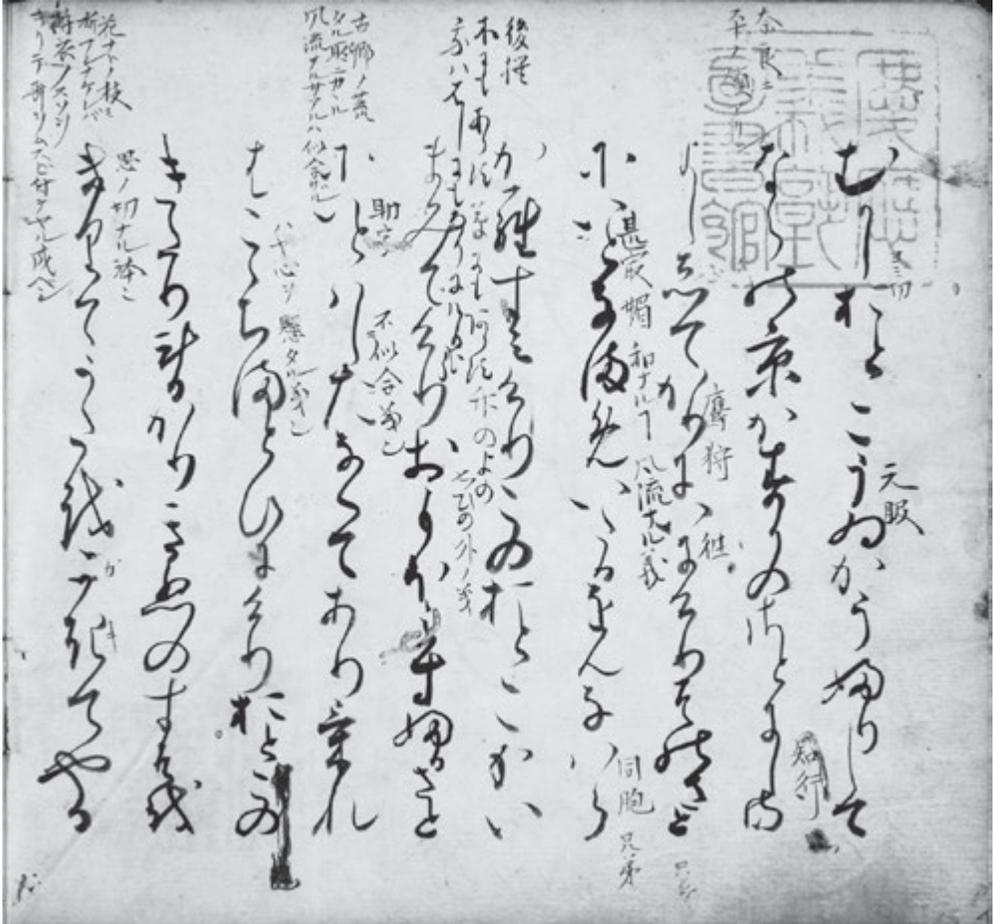


綴葉装。新補茶色表紙 (24.7×17.5cm)。料紙厚手鳥の子。半葉9行・字面高さ約20.6cm。

『伊勢物語』は古写本に恵まれており、鎌倉写本も少なくないが、本書が義塾図書館中の最古写本である。綴葉装の末尾1折のみの残欠本であり、百一段途中以降が存している。『伊勢物語』の流布本たる定家本を代表する天福本に属する一本で、末尾に天福2年の定家本奥書があり、続けて「此物語先年為或人染愚筆之處／及落行書損数ケ所故蔵置箱底畢／今度覓出之微望無所辞勸物等凌／老眼書加令讓与申堅不可出闔者也／(1行アキ)／永禄壬戌曆仲冬上澣／江南隱叟(花押)」との、伏見宮第6代貞敦親王(法名澄空・1488-1572)の書写奥書がある。書き誤りがあるので放置しておいたものに、勸物を加えて改めて人に与えたものであることが判る。貞敦親王は書の名手としても知られるが、本文の筆跡の方が奥書よりも闊達であり、永禄5年よりは些か遡る書写であると思われる。国学研究者で蔵書家としても著名な陸軍中将渡辺刀水(金造・1874-1965)の旧蔵本である。

11. 〔伊勢物語〕

〔江戸前期〕写 1帖 (128 80 1)

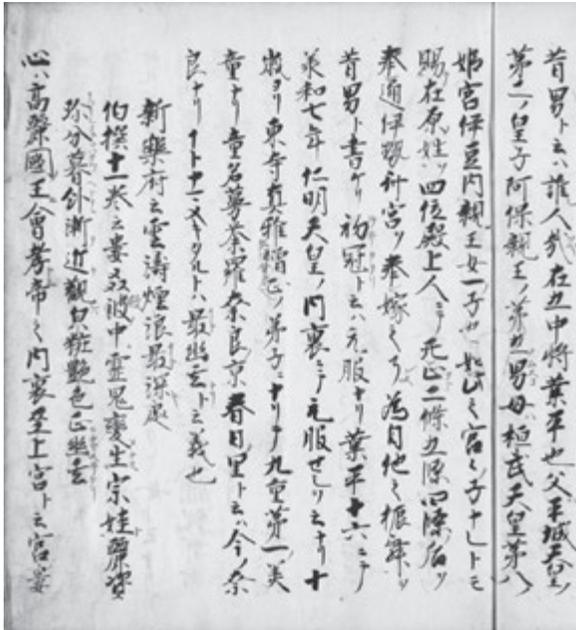


綴葉装。萌黄色地菊唐草帯文緞子表紙（16.5×17.5cm）。見返し牡丹菊唐草文空押布目金紙。料紙鳥の子。半葉10行・字面高さ約12.3cm。

外題・内題共にない。正方形に近い、^{ますがたほん} 枳形本・^{ろくほんほん} 六半本等と呼ばれる書型は、歌書よりも物語に多く用いられており、『伊勢物語』でもよく見かけるものである。『伊勢物語』の伝本は古今集と同様に藤原定家の校訂した本が圧倒的に多いが、その定家本にも各種あり、代表的なものだけでも3系統を数える。それらを校合して奥書を列記するものも多く、本書にも天福2年本と根源本の奥書がある。本文には定家本の^{かんもつ} 勘物の他に、後筆の注記が書き込まれているものの、良くあるように始めの方のみで終わっている。書写奥書もなく、^{きわめ} 極の類もないが、書き慣れた公家風の筆跡である。これも渡辺刀水の旧蔵本である。

12. 伊勢物語〔註〕

〔室町中後期〕写 1冊 (132X 34 1)



袋綴。後補雲紙表紙 (27.1×22.9cm)。料紙斐楮交漉紙。半葉12行・字面高さ約23.9cm。

内題に「伊勢物語 定家流」とある。打付書きの外題「伊勢物語註」は後筆。『伊勢物語』は歌人必学の書でもあったので、中世以降多くの注釈書が作られた。その内の一系に、物語中の人物や場所・出来事を誰・何処・何時などと具体的に特定しようとする荒唐無稽な内容を有するものがあり、これを研究上「冷泉家流古注」と称する。本書はその内の1本で、問答体形式で片仮名書であることなどに特徴があり、全く同一のものは確認されていない。書写も古く、中世期に弥漫し、謡曲や室町時代物語の内容にも影響を与えていた、秘儀秘伝の世界を窺える好資料である。三条西家流を思わせる筆跡で謹直に書写されている。蔵書印より大蔵書家で国学者の黒川真頼 (1829-1906)・真道父子の旧蔵と知られる。他に「月明荘」(反町弘文荘)印がある。

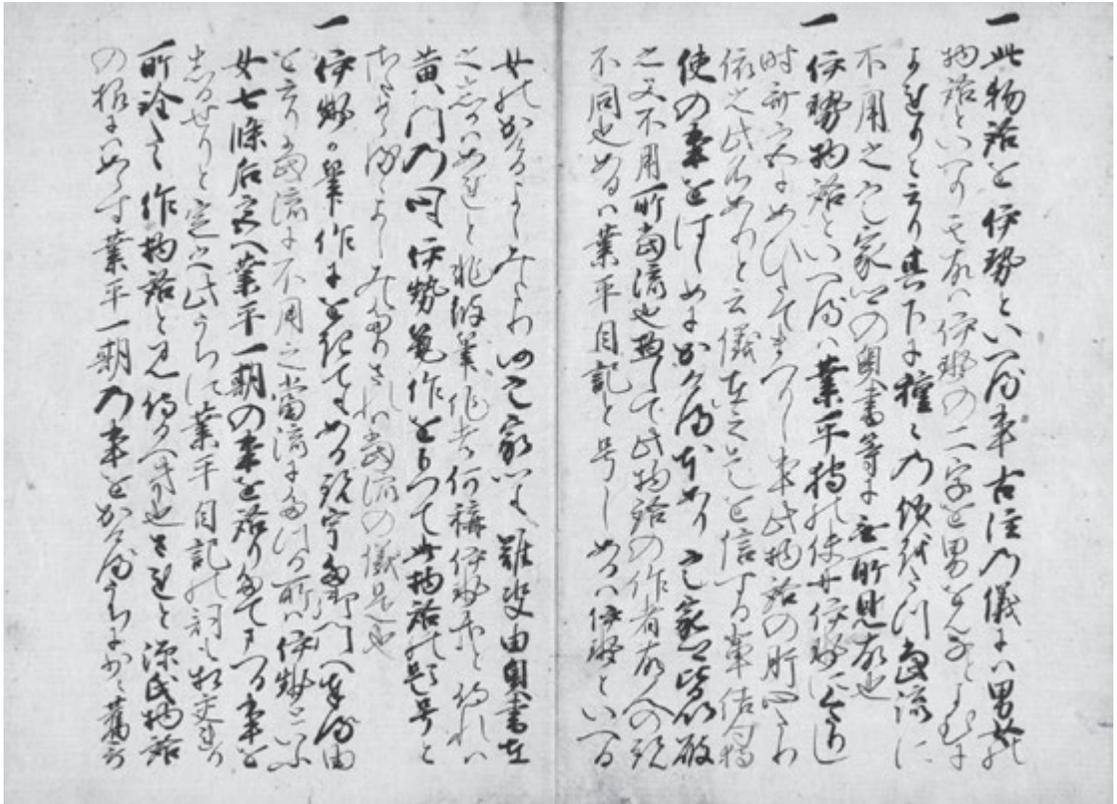
〔書誌・参考文献〕

長尾一雄「定家流伊勢物語註 解題・翻刻」『国文学論叢 第3輯 平安文学 研究と資料』桜楓社、1959

片桐洋一『伊勢物語の研究 研究篇』明治書院、1968

13. 〔伊勢物語肖聞抄〕 宗祇講 肖柏記

〔室町後期〕写 伝宗梅筆 1帖 (132X 63 1)

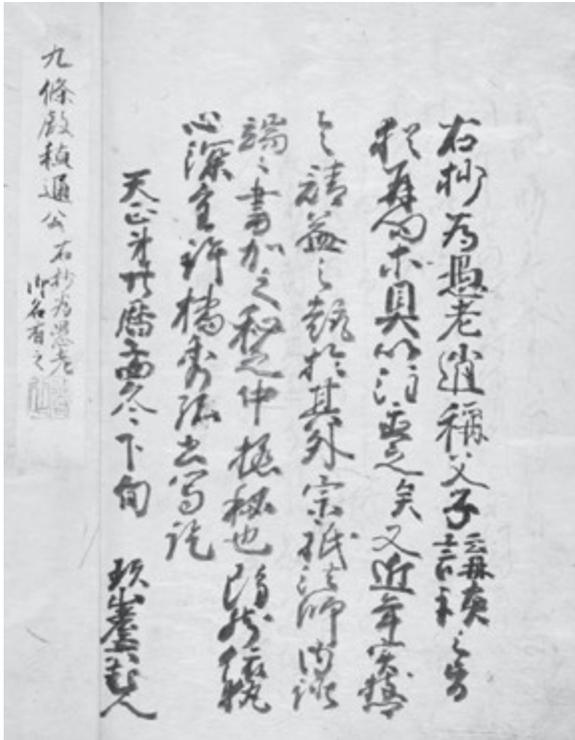


原装袋綴、現状綴葉装。後補枯草地双鶴菱文紗表紙 (24.5×16.8cm)。左肩鳥の子題簽。見返し布目金紙。料紙斐楳交漉紙。半葉10行・字面高さ約22.8cm。

本文別筆ながら古い題簽に「肖聞」とある。連歌師牡丹花肖柏^{ぼたんかしょうはく} (1443-1527) がその師である宗祇 (1421-1502) の講義を聞書した伊勢物語注釈書である。『肖聞抄』は増補が加えられたことにより、文明9年本・文明12年本・延徳3年本の3種が存している。本書は奥書の類は一切ないものの、本文の特徴より、非常に珍しい延徳3年本に属するものと考えられる。ただし、一部に文明12年本の特徴も有しており、延徳3年本の成立を考える上でも重要な伝本である。桐箱の蓋裏に「宗祇右筆宗梅」と鑑定した古筆〔了周^{こひつりょうしゅう}〕の極札^{きわめふだ}を貼付する。宗梅は宗祇晩年の弟子らしいが伝は未詳。本書は袋綴であったものを、価値を高める為に大幅に手を加えて綴葉装に改装したものである。

14. 伊勢物語聞書〈九禅抄〉 九条植通

天正20年（1592）写 橘秀弘筆 九条植通自筆奥書 1冊（110X 102 1）



原装綴葉装・現状単葉装。後補紺色地金泥梅枝文艶出表紙（24.2×17.0cm）。左肩題簽剥落。見返し縹色地金銀切箔銀切金散し。料紙薄手鳥の子。半葉10行・字面高さ約21.0cm。

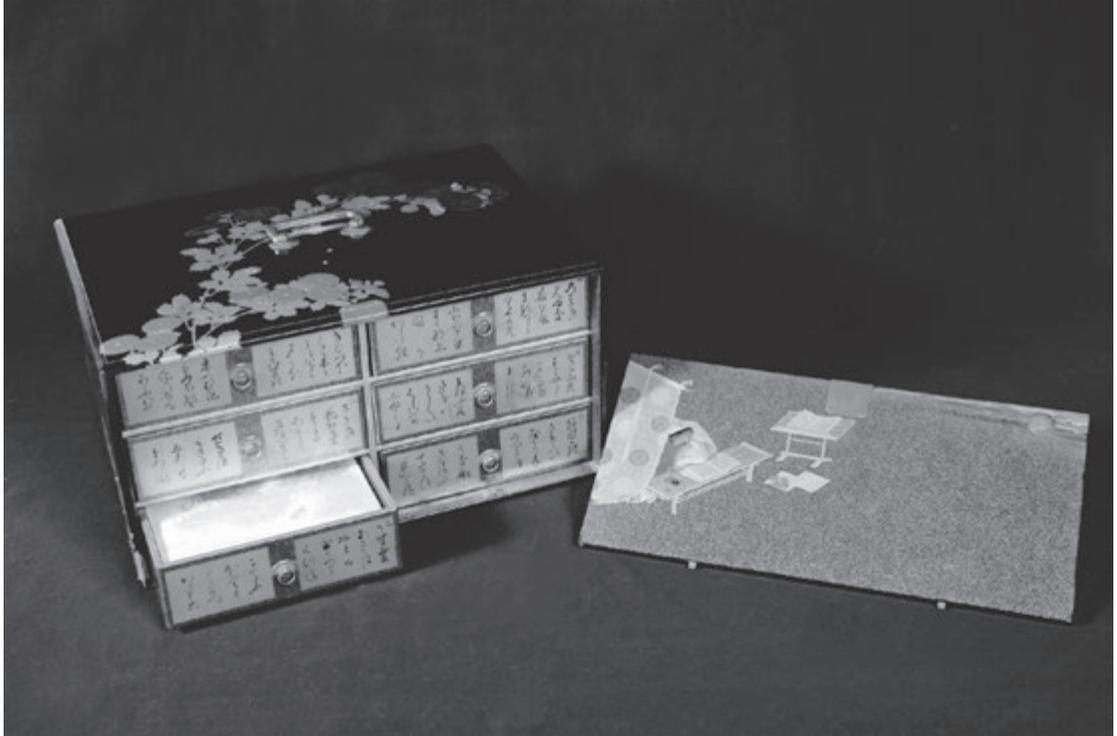
内題に「伊勢物語聞書」とある。中世期を代表する古典学の家である三条西家の、^{さんじょうにし}実隆・^{さねたか}公条・^{きんえだ}実枝三代に学んだ^{くじょうたねみち}関白九条植通（1507-1594）が、三条西家や実隆の師である宗祇等を始めとする諸家の説を基に、折々自説を交えて編纂した伊勢物語注釈書で、「^{くじょうぜんこうしやう}九条禅閣抄」（禅閣は出家した撰関経験者）・「^{くぜんしやう}九禅抄」等と称される。末尾の「天正第廿曆孟冬下旬 玠山耄六老人」とある、植通86歳時の自筆奥書によれば、本文は橘秀弘（伝未詳）の筆跡と知られる。伝本極稀な「九禅抄」の完本として貴重なものである。本書は綴葉装であったものを、右端を裁断して、袋綴の様に糸綴じしており、喉が窮屈になっている。奥書を植通と鑑定した神田〔^{どうほん}道伴（四代）〕の極札を附す。「柳澤真次郎蔵書」・「月明荘」（反町弘文荘）印あり。

〔書誌・参考文献〕

『慶應義塾図書館蔵和漢書善本解題』

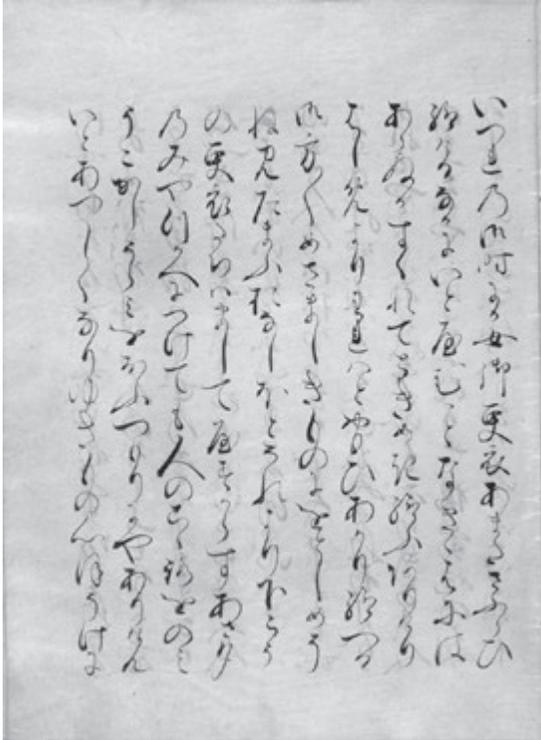
15. 〔源氏物語〕 54巻 〔紫式部〕

〔江戸初前期〕 写 54帖 (132X 158 1)



綴葉装。鳥の子地金銀泥雲霞草木等文表紙 (24.6×17.8cm)。中央金泥下絵雲紙題簽。見返しは鳥の子地大小金切箔散し。料紙鳥の子。半葉10行・字面高さ約19.0cm。

全巻一筆書。通常の『源氏物語』写本と同様に、題簽に巻名のみが記されている。「きり壺」巻には桐の木と壺が金銀泥で描かれるといった具合に、表紙には巻名や内容を象徴する図が描かれる。料紙も上質紙を用いる等、美しい装丁を有しており、大名や公家の姫君の婚礼用に調整されたいわゆる「嫁入本」^{よめいりほん}でも、かなり上等な部類に属する1本であろうと思われる。嫁入本は見栄えすることが大切で、読むことは二の次であったが、本書にもあまり読まれた形跡はなく、ために保存状態は極めて良好である。読むことを主目的としない嫁入本の本文は、版本の写しであったり、誤写が多かったり、奥書がなかったりと、本文研究的には価値の低い場合が多い。しかしながら本書には、桐壺巻に、室町前期の歌僧で源氏の注釈書もある、正徹^{しょうてつ} (1381-1459) の校合に関する奥書2種 (後者には嘉吉3年 (1443) の年紀) と、その間に正徹が校合に用いた本にあった冷泉為相奥書^{れいぜいためすけ}、そして最後に正徹の講釈を聞いた宗耆^{そうぎ}の奥書等があるのを始めとして、帚木・空蟬・夕顔・若紫・末摘花・花宴・葵の各巻にも正徹の本奥書

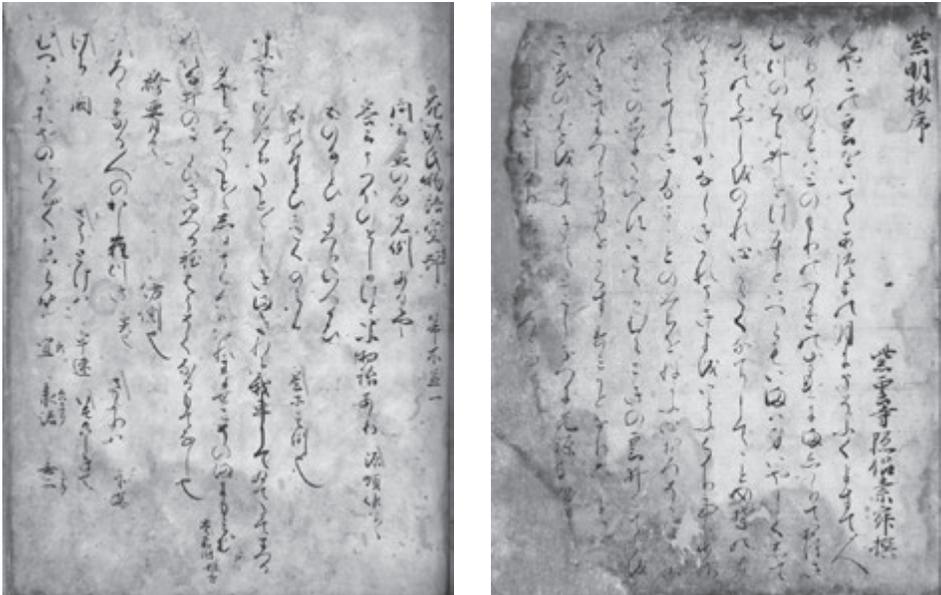


が存しており、珍しくまた貴重である。同じ奥書を有する伝本も国文学研究資料館蔵のものなど数点が確認できるが、奥書を有する箇所や巻数が異なっている。紅葉賀を除いた最初の8帖のみに奥書が在していることからすると、ほぼ同文が繰り返されることにより、以下は省かれてしまった可能性がある。正徹本や定家筆本の姿を伝えるという為相本の姿をどの程度遺しているかは不明だが、その復元に価値ある伝本であると言えよう。

嫁入本はそれを納める箱も豪華に仕立てるのが通例だが、本書の箱も、黒漆に高蒔絵で野菊や竹垣を施し、銀で露をあしらった美しい慳貪箱である。「源氏物語」と金蒔絵の文字がある蓋の裏は梨地で、銀の月を眺めながら几帳の陰の机に寄り掛かり、物語を案じている紫式部の姿がやはり高蒔絵で描かれている。2列3段に配された抽出も梨地で、細工の細かな金具が取付けられる。鍵金具に松川菱の紋が刻されており、清和源氏小笠原家との関係が想定される。

16. 紫明抄 10巻 存巻1 (自桐壺至末摘花) 素寂

〔鎌倉末・南北朝〕写 1帖 (132X 102 1)



原装綴葉装、現状単葉装。本文共紙表紙 (28.5×22.2cm)。料紙黄葉染楮紙。半葉12行・字面高さ約25.5cm。

外題はなく、内題に「紫明抄序 (巻第一)」とある。鎌倉時代に父源光行と共に源氏物語の校訂本 (いわゆる「河内本」) を作成した親行の弟素寂 (俗名たかゆきまたは保行とも) の編になる源氏物語注釈書。永仁2年 (1294) に鎌倉8代将軍久明親王に献上されているが、成立はそれより30年以上前かと考えられている。世尊寺伊行の『源氏釈』や藤原定家の『奥入』、光行・親行父子の『水原抄』 (散佚) 等の先行注釈を取り込み、問答形式で和漢仏の諸書を引用しつつ詳細な考証を行っている。本格的な源氏注釈としては現存最古のものである。『紫明抄』は古写本や断簡に比較的恵まれているが、本書は冊子形態の最古写であると思われる。本文は南北朝期写とされる京都大学国文学研究室蔵本に近似するが、巻第編成や叙述形態に異なるところがある。河内本源氏物語の古写本に多い特大本を想起させる大きさだが、それらよりはやや小振りであり、文芸に関する写本としては珍しい黄葉染の料紙であることからしても、写経か刷経用のものを転用した可能性があるだろう。現在の装丁は近時の修補によるものである。

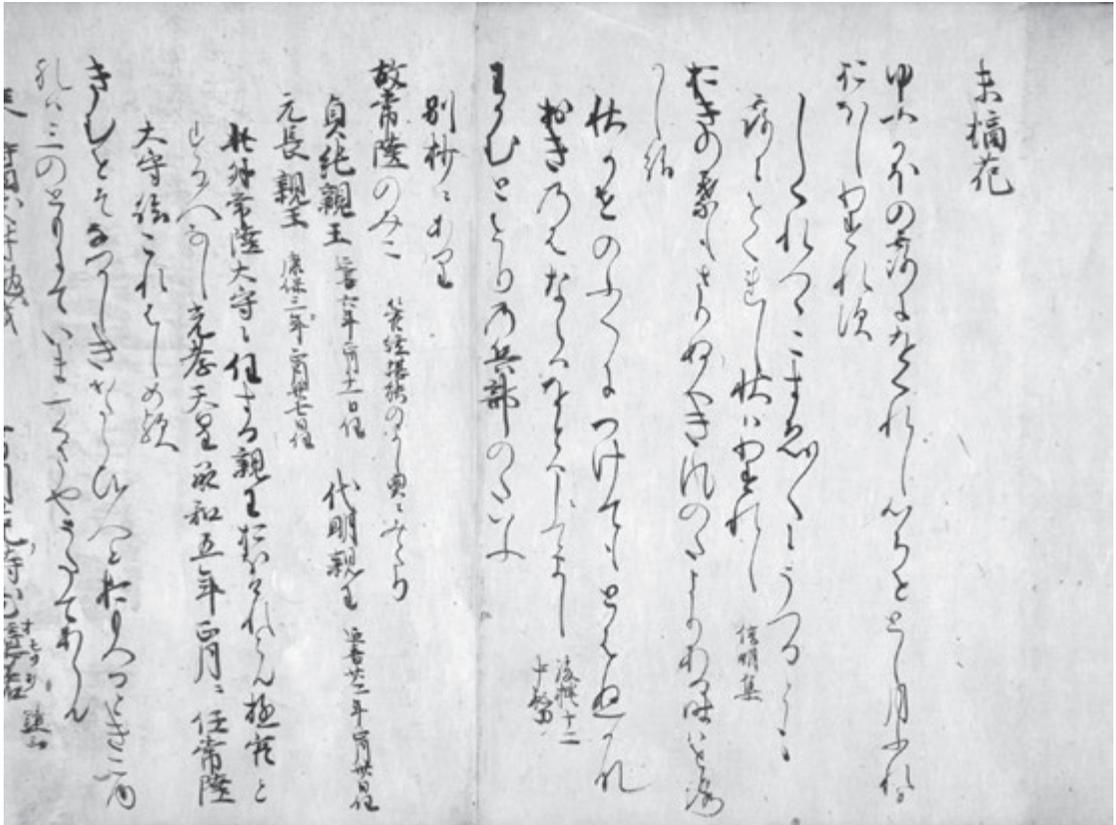
〔参考文献〕

平澤五郎「慶應義塾図書館蔵〔鎌倉末南北朝〕写『紫明抄』巻第一零巻一本文篇 影印並びに翻刻」『斯道文庫論集』29、1994・12

同「慶應義塾図書館蔵〔鎌倉末南北朝〕写『紫明抄』巻第一零巻一解題篇 (一)」『斯道文庫論集』30、1996・1

17. 〔源氏物語古注〕 存末摘花卷

〔南北朝〕写 伝浄弁筆 1軸 (132X 130 1)



原装〔綴葉装〕、現状卷子装。後補銀鼠色地に桃飛雲文緞子表紙（高さ25.7cm）。
見返し布目金紙。料紙斐楮交漉紙。字面高さ約23.2cm。

幅22cm余りで半葉13乃至14行書きの冊子本を卷子に改装したもの。外題はなく、内題には「末摘花」と巻名があるのみ。他に類本の見当たらない源氏物語の注釈書で、先行する『源氏釈』『奥入』『異本紫明抄』等を始め、和漢仏の多くの典籍を引いて、摘記した文章や語句の解釈及び典拠の指摘等を行う。引用された物語本文は、藤原定家の青表紙本の特徴を示しており、同本を用いた本格的な注釈としては現存最古のものとして注目される。完存していれば相当大部なものであったと思われるが、ツレは東京国立博物館蔵の「若紫」部分1軸（B7）が知られるのみ。その東博本の外題や箱書に浄弁筆とあるが認めがたい。『未刊国文古注釈大系 11』の解題によれば、京都大学教授であった吉澤義則の旧蔵本である。

〔参考文献〕

川上新一郎「伝浄弁筆源氏物語古注 翻刻と解題」（『斯道文庫論集』40、2006・3）

18. 源氏明石物語 3巻 欠上

〔天和頃〕江戸・鱗形屋刊 2冊 (220 7 2)



袋綴。藍色地に繫牡丹唐草文空押表紙 (27.2×18.8cm)。左肩題籤剥落痕。四周単
辺 (22.3×16.6cm)・半葉16行。

内題に「源氏明石物語 中(下)」とあり、版心に「明石中(下)」とある。刊記には「大傳馬町三町目／鱗形屋板」とあるのみ。本書の失われた上冊の存在が報告され、その全貌が明らかとなっている。本作は、『源氏物語』「明石」巻の世界を下敷きにした、帝の弟なにかしの大臣と明石の前の苦難の恋の成就話(上中)と、大臣の浮気にも動揺しない明石の前が中国の貞女姦婦の故事を列挙する部分(下)からなる、いわゆる女訓物の仮名草子である。延宝3年(1675)初刊のこがめすひで小亀益英作『おんなごきょう女五経』の女訓部分を大幅に削った改編本であり、『源氏物語』の名を全面に押し出し、ひしかわもろのぶ菱川師宣風の挿絵を加えるなど、書肆の商魂が窺える。天和2年(1682)の大火で版木が焼けてしまったためか、他に同版本の存在を聞かない稀本である。中本の貞享3年(1686)鱗形屋版もあり、こちらも非常に珍しい。蔵書印は無いが、義塾出身の大蔵書家よこやましげる横山重の旧蔵本である。

〔参考文献〕

渡辺守邦「源氏明石物語について」『近世文芸』56、1992・7

同「源氏明石物語—翻刻と解説—」『源氏物語古注釈の世界』汲古書院、1994

19. 源氏物語〈花鳥風月〉 2巻

〔江戸前期〕江戸・鱗形屋刊 2冊 (220 25 2)



袋綴。薄縹色地毘沙門格子卷龍刷文表紙 (22.9×15.9cm)。中央子持棹刷題簽。四周単辺 (16.8×12.2cm)・半葉14行。

上冊のみ原題簽を存し「〈新／板〉源氏ものかたり 上」とあるが、版心には「繪合鑑」とある。本書は『源氏物語』の本文抜粋や梗概本などではなく、一般に『花鳥風月』と称される室町時代物語の絵入刊本である。葉室中納言の家で催された扇合で、出された扇の絵が在原業平か光源氏かを巡って争論となり、花鳥と風月という名の姉妹の巫女が呼ばれ、業平と光の霊を呼び寄せて光であることが判るといもの。風月に末摘花の霊が乗り移ったり、光が源氏物語の秘事を語ったりと、いかにも中世的な内容である。古写本も少なくなく、古活字版や慶安3年(1650)絵入版本などの存在も知られており、なかなか人気のあった作品である。冒頭に2行文の空白があることや、柱題などからして、内題や刊年を削って外題を変えた改題本である可能性がある。「源氏物語」とさえ付ければ売れたのであろうか。東北大学狩野文庫に表紙を欠く同版本(目録題「繪合鑑」)が確認できるのみの稀本。蔵書印は無いものの、これも横山重の旧蔵本である。

[参考文献]

横山重・松本隆信『室町時代物語5』古典文庫、1961

20. 〔花鳥風月〕

〔室町後期〕写 伝飛鳥井一位局筆 1冊 (146 184 1)



袋綴。上下藍雲紙表紙 (27.3×21.9cm)。中央題簽剥落痕。料紙斐楮交漉紙。半葉11行基本・字面高さ21.5cm。

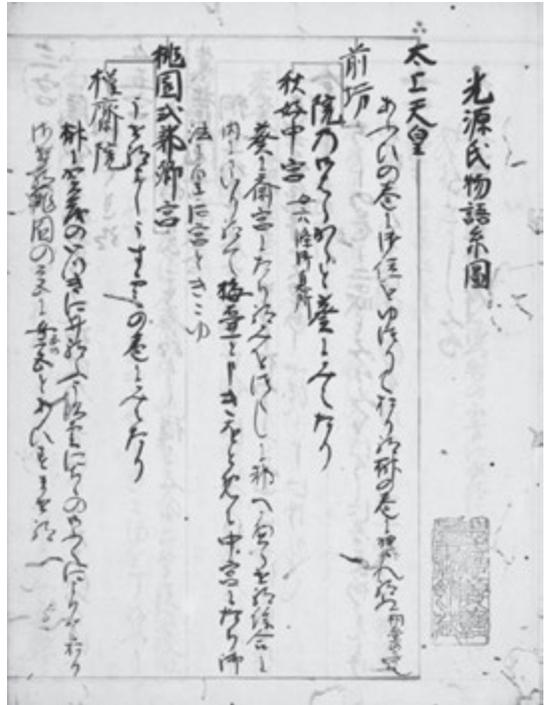
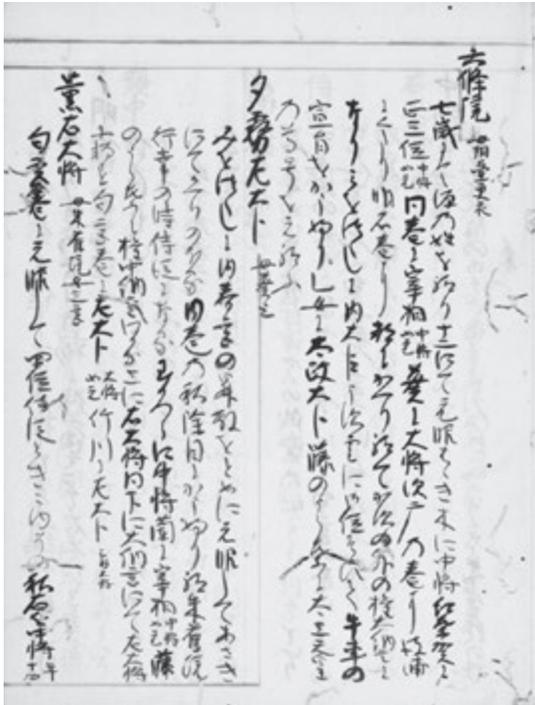
巫女の口寄せにせよ、業平や光源氏の登場する贅沢な話であったせいか、『花鳥風月』は人気のあった作品のようで、伝本は少なくなく、室町期の写本も数本が確認されている。本書は、天理大学図書館蔵の大型袋綴絵本1冊と双壁をなす古写本である。天理本がすやり霞や背景を含めて極彩色で描き込んだ挿絵を有するのに対し、こちらは歌仙絵風に背景を描かず、本文中に余白を取ってやや小振りに人物を描いており、稚拙な愛らしさがある。見返しに「扇合物かたり自画賛／飛鳥井榮雅卿之息女／一位局正筆」との〔古筆了伴〕の正筆書がある。飛鳥井一位局はしばしば古い奈良絵本の筆者とされる人物であるが、あすかいいちいのつぼね 飛鳥井一位局はしばしば古い奈良絵本の筆者とされる人物であるが、こひつりようほん 〔古筆了伴〕の正筆書がある。しょうひつがき 正筆書がある。福沢諭吉暗殺を企てるも改心して慶應義塾に学び、あさぶきえいじ 実業界で活躍した朝吹英二 (1849-1918) の旧蔵本で、その息常吉の寄贈になるもの。

〔参考文献〕

横山重・松本隆信『室町時代物語5』古典文庫、1961

21. 光源氏物語系図 三条西実隆

〔室町末〕写 1冊 (110X 174 1)



袋綴。灰汁色表紙 (25.6×20.4cm)。料紙斐楮交漉紙。字面高さ約23.2cm。

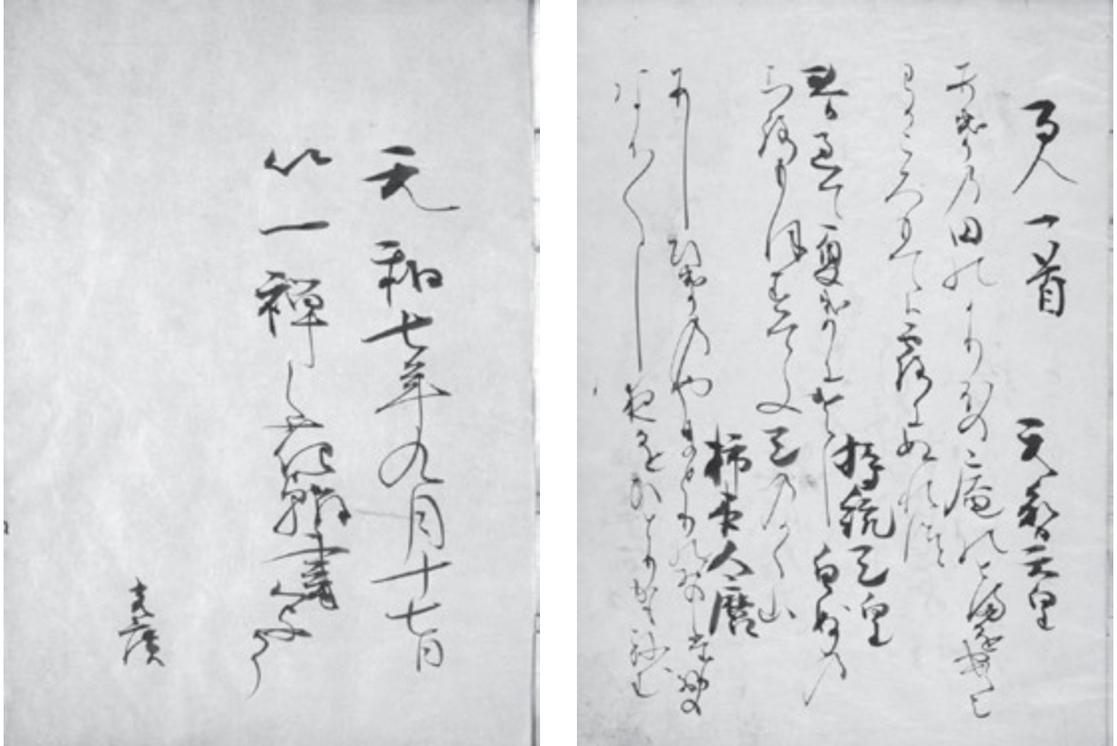
表紙左肩に打付けて「光源氏物語系図」とある。『源氏物語』は長編で登場人物も多いため、通読する際の手引きとして、登場人物を系図形式で整理し、その人物の紹介を付したものが、平安末期には成立していたと考えられ、鎌倉時代以降の成立のものが何種か伝わっている。室町中期の歌人で古典学者としても著名な三条西実隆 (1455-1537) は、既存の源氏系図の不審箇所を連歌師の肖柏や宗祇にも相談して、長享2年 (1488) に新たな源氏系図を完成させた。実隆はその後も改訂の手を加えており、明応8年 (1499)・文亀4年 (1504)・永正9年 (1512) の実隆奥書を有する伝本が知られている。本書は永正9年12月27日に書写し、翌年2月8日に「巻々年紀」を注付したとの本奥書を有する、永正9年本の1本である。江戸時代に版行もされた文亀4年本を中心として、実隆作のものは大いに流布し、源氏系図を代表する存在となったので、今日ではそれ以前のを「古系図」と総称し、実隆の「新系図」と区別する。表紙に「加持井御文庫」の朱印があり、三千院門跡梶井宮盛胤親王の旧蔵と知られる。飾り気のない実用的な造本である。こちらも幸田成友博士旧蔵本。

[参考文献]

『慶應義塾図書館蔵和漢書善本解題』

22. 百人一首〔藤原定家〕

元和7年(1621)写 烏丸光広筆 1帖 (56X 76 1)

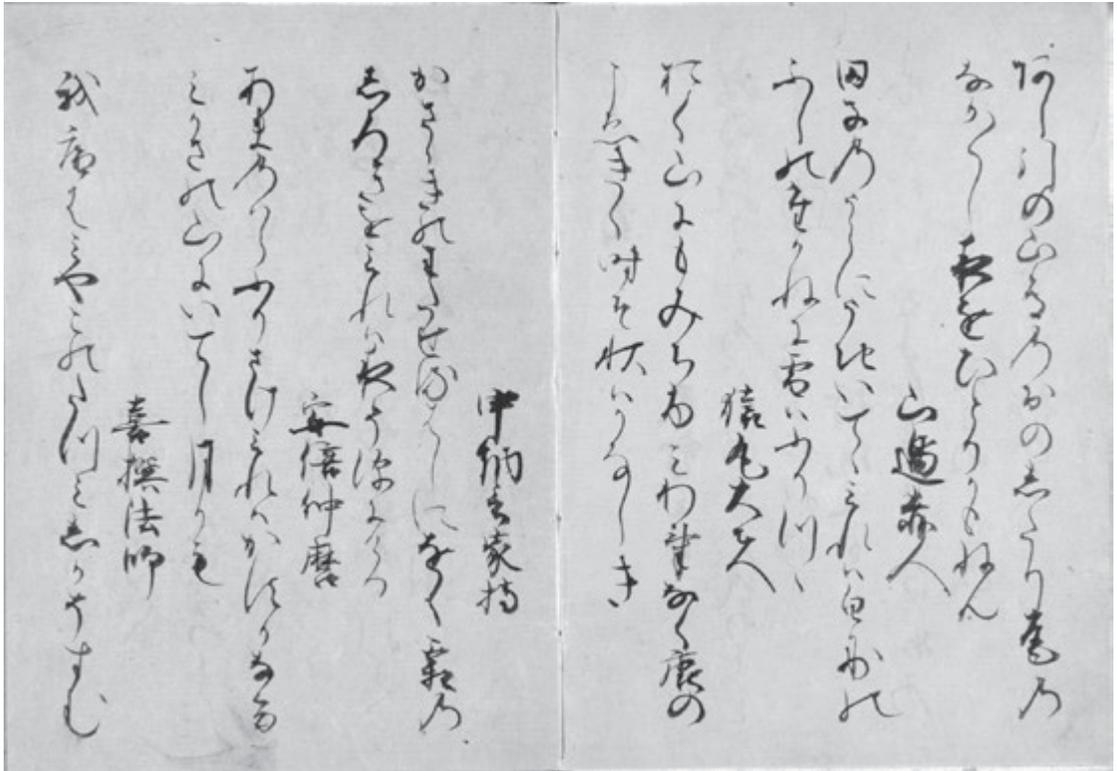


綴葉装。後補白茶色地雲文銀欄表紙(25.5×18.0cm)。見返し鳥の子地に銀泥雲霞、金羽箔切箔野毛散し。料紙斐楮交漉紙。半葉9行・字面高さ約22.1cm。

外題はなく、内題に「百人一首」とある。「^{おぐら}小倉百人一首」・「^{おぐらさんそうしきしわか}小倉山庄色紙和歌」との呼称もあるように、^{ふじわらのていか}藤原定家が^{うつのみやよりつな}宇都宮頼綱(法名蓮生)^{れんしやう}の嵯峨小倉山の山荘の障子に貼る色紙用に撰歌したと考えられるが、成立に関しては謎が多い。室町中期頃から和歌の聖典として尊重されるようになり、恐らく歌書では最多と言って良いほどに、大量の写本が遺っている。本書は特別古いものではないが、「元和七年九月十七日／以一禅之花翰書了／^{からすまみつひろ}光広」との書写奥書があり、^{いぢじやうかねよし}烏丸光広(1579-1638)が一条兼良(1402-1481)筆本を写したものである。光広は寛永三筆の一人にも数えられる能筆であり、本書はその43歳時の筆跡の基準作ともなる資料と言えよう。奔放闊達な書きぶりにはその筆才が発揮されているが、速筆であった故か、書き飛ばして行間に補入された歌もある。^{こひつりようせつ}古筆了雪の極札を附す。箱の貼紙に抛れば岡山藩の^{いくさか}支藩生阪藩池田家旧蔵という。昭和10年に花房子爵家より寄贈されたもの。

23. 百人一首〔藤原定家〕

〔江戸前期〕写 1帖 (128 95 1)

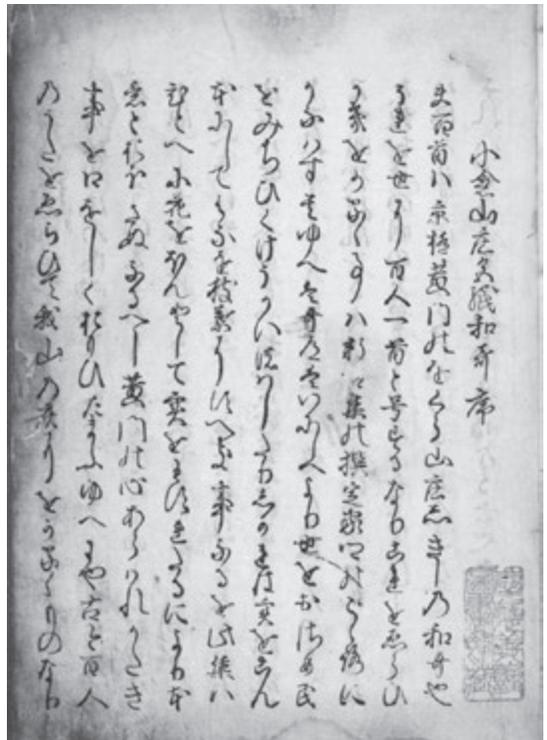
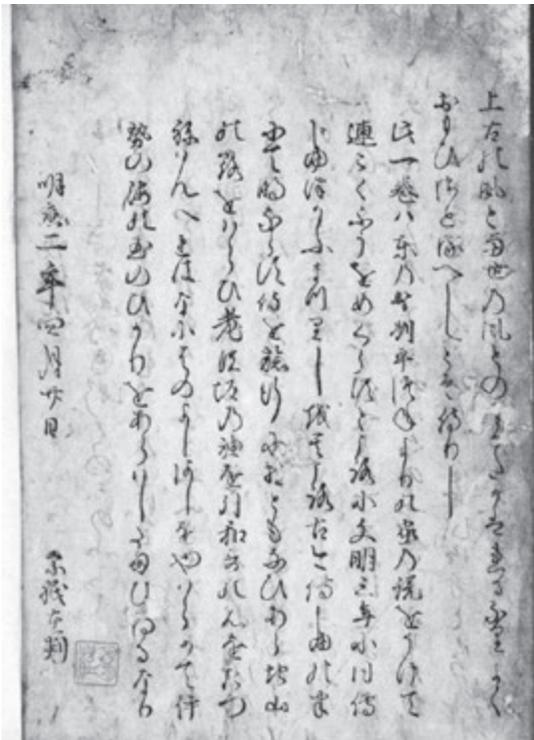


綴葉装。後補紺色地花格子角切り角文金欄表紙 (12.7×9.1cm)。左肩藍雲紙地金野毛散し題簽。見返し白絹。料紙鳥の子。半葉8行・字面高さ約10.71cm。

外題・内題は同筆で「百人一首」とある。数多い伝本の中には、本書のような小さく愛らしいものも少なくなく、雛人形の飾りにする雛本と呼ぶ特別小さなものもある。本書は雛飾りとしてはやや大きいようだが、その大きさや装丁からみて、高貴なお姫様や富裕なお嬢様の教育あるいは慰みを目的として調製されたものと思われる。奥書はなく、後遊紙に本文とは別筆で「白川雅信筆」とあるが、該当する人物は見当たらない。小さな文字であっても格調高く書き上げているので、能筆の公家の手になるものと見てよいであろう。これも渡辺刀水（わたなべとうすい 金造・1874-1965）の旧蔵本である。

24. 小倉山庄色紙和歌〔抄〕〔東常縁講 宗祇記〕

〔元和寛永頃〕刊 古活字 1冊 (110X 166 1)

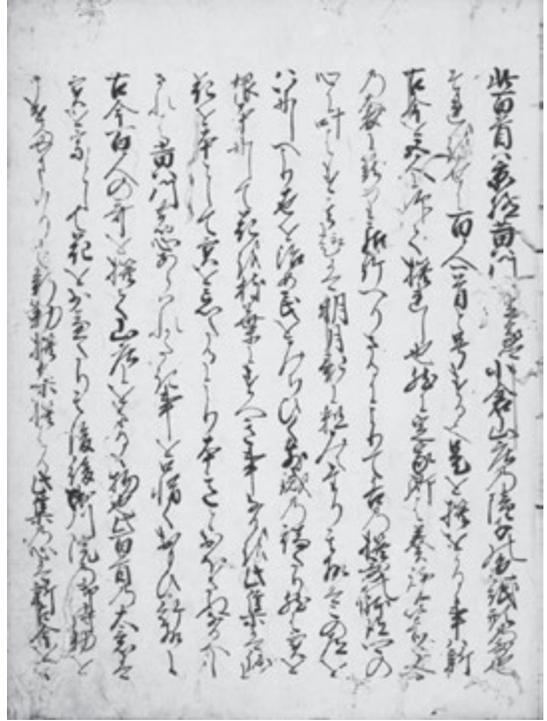


袋綴。後補栗皮表紙 (25.8×19.6cm)。半葉11行・1行22字基本・印面高さ約21.5cm。

「小倉山庄色紙和歌序」との内題がある。聖典たる『百人一首』には注釈書も数多いが、確實なものとして最古のものは、文明10年(1478)の奥書を有する「宗祇抄」で、その増補本が明應2年(1493)奥書本である。本書は後者の古活字版であり、刊記はなく、末尾に「此一卷は」で始まる「明應二年四月廿日」付の宗祇本奥書のみがある。川瀬一馬『増補古活字版の研究』には2種の異植版が報告されているが、本書は(口)種に該当するものである。ほぼ真っ直ぐな2文字分の「し」活字に特徴がある。「よこ山」・「重」との蔵書印があり、これも横山重の旧蔵と知られる。他に「月明荘」(反町弘文荘)印あり。

25. 百人一首抄 細川幽齋

〔江戸初期〕写 1冊 (110X 307 1)

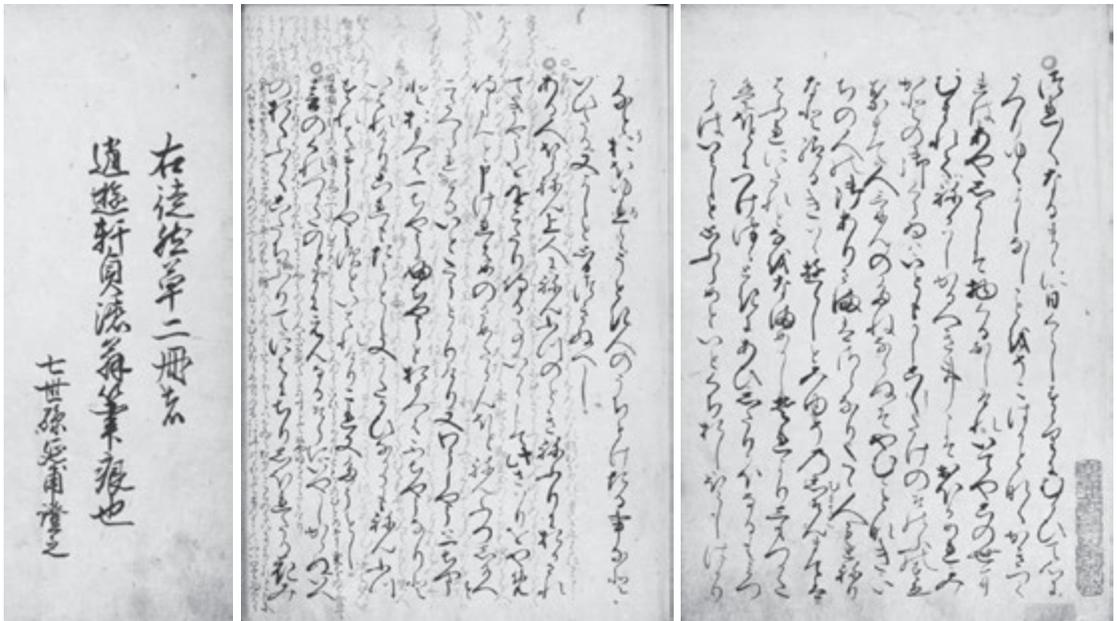


袋綴。藍色艶出表紙 (28.4×22.3cm)。料紙斐格交漉紙。左肩鳥の子色唐紙地金銀泥菊文題簽。半葉12行・字面高さ約23.7cm。

外題には『百人一首抄』とあるのみだが、慶長元年(1596)大晦日の玄旨(細川幽齋)の本奥書があり、「幽齋抄」の一本であるとわかる。「宗祇抄」を基に、武将にして一級の文化人であった幽齋(1534-1610)が、也足軒(中院通勝)の作者注と他文献等からの補注を加えたもの。歌道の権威二条流の正説を伝えることと、幽齋の高名が相俟って、写本・版本共に大いに流布した。細川家永青文庫に年次不明の自筆本と、慶長3年自筆識語本が伝わっているが、慶長元年奥書の自筆本は確認されていない。本書は自筆本とされてきており、署名や花押等自筆かと見紛うものだが、筆跡や奥書に数カ所の誤写があること等からして、転写本と考えられる。本の大きさや筆跡からみても、慶長元年からまもなくの書写であると思われるが、同じ奥書を有する写本や版本は、署名が「丹山隱士」となっており、通りの良い名に差し替えられた可能性がある。

27. つれつれ草 2巻 吉田兼好

〔江戸初期〕写 伝松永貞徳筆 2冊 (110X 606 2)

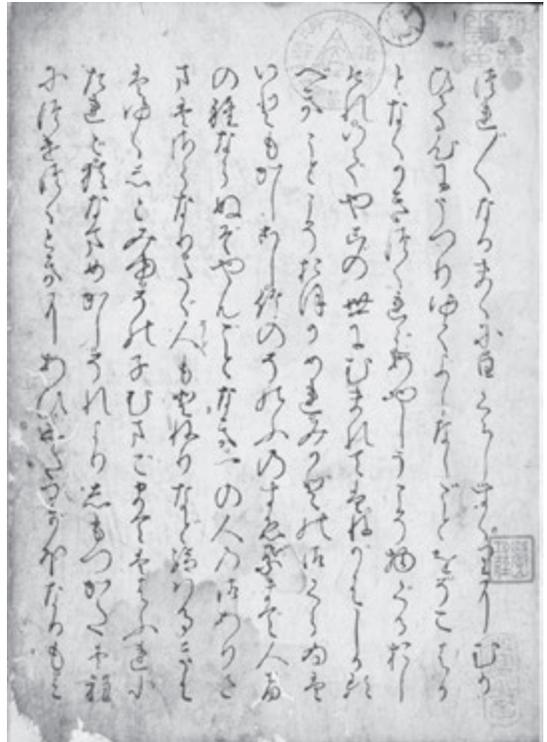
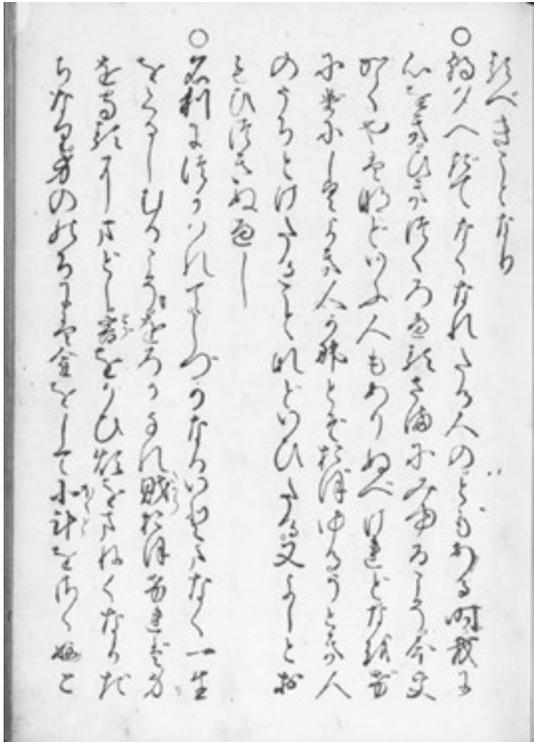


袋綴。後補瓶覗色布目表紙 (25.3×18.7cm)。左肩薄柿色地唐草文雲母刷題簽。料紙薄葉。半葉11行・字面高さ約21.4cm。

外題に本文とは別筆だが同時期かと思われる手で「つれつれ草 上(下)」とある。古写本に恵まれない『徒然草』としては、かなり古い写本である。本書の最大の特徴は、圧倒的に流布している烏丸本ではなく、珍しい常縁本系の本文を有していることである。上冊には、朱墨を用いた流布本との校合書き入れがなされている。下冊末尾に「右徒然草二冊名／道遊軒貞徳翁筆痕也／七世孫延甫證之／(印2顆)」との、古典学者としても名の高い俳諧師である松永貞徳 (1571-1653) 筆と鑑定した、子孫の延甫の識語がある。貞徳は『徒然草』講釈を行ったことが知られているが、貞徳筆とは認めがたいようである。

28. 『つれつれ草』 2巻 存卷上 吉田兼好

〔慶長元和〕刊 古活字 1冊 (1002 9 1)

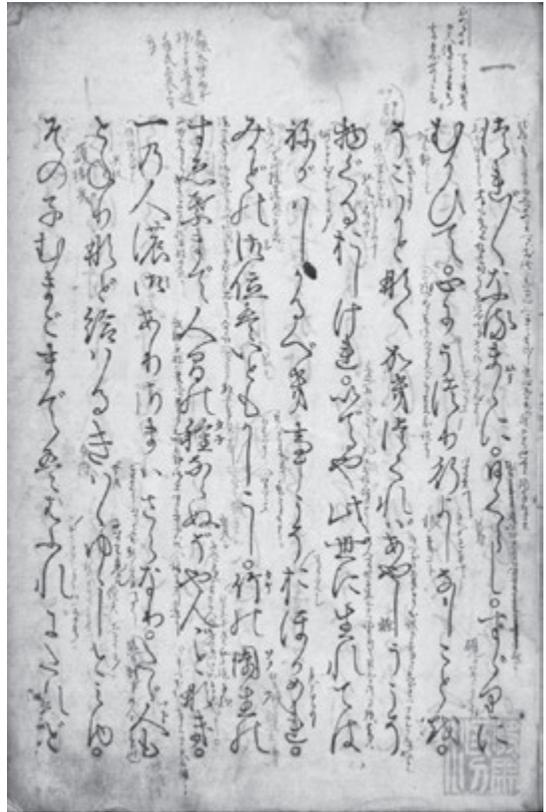
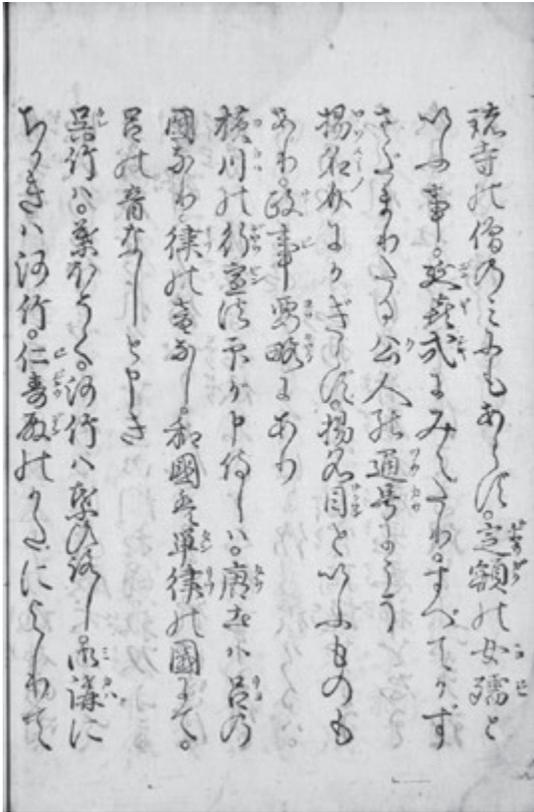


袋綴。新補瓶覗色表紙 (26.9×20.3cm)。半葉11行・1行20字程度・印面高さ約22.6cm。

新補題簽に「つれつれ (つれ) 艸」とある。近世初期の古活字による出版において、『徒然草』は『太平記』や『平家物語』等と並んで人気のあった作品で、豪華な嵯峨本も含めて度々刊行されている。本書は川瀬一馬『増補 古活字版の研究』では、慶長 (元和) 中刊十一行本 (イ) 種とされているが、図版に掲載された久原文庫本とは異版である。新たな慶長 (元和) 中刊十一行本異種字版と認定すべきものであると思われる。4顆の印の内の「江風山/月荘」は、古版本の収集で知られた稲田福堂のもの。東洋学者で慶應義塾大学教授であった田中萃一郎の旧蔵書からなる「田中文庫」中の1本である。

29. つれつれくさ 2巻 吉田兼好

〔江戸初期〕〔京〕・杉田玄与刊 覆古活字 2冊 (88 213 2)

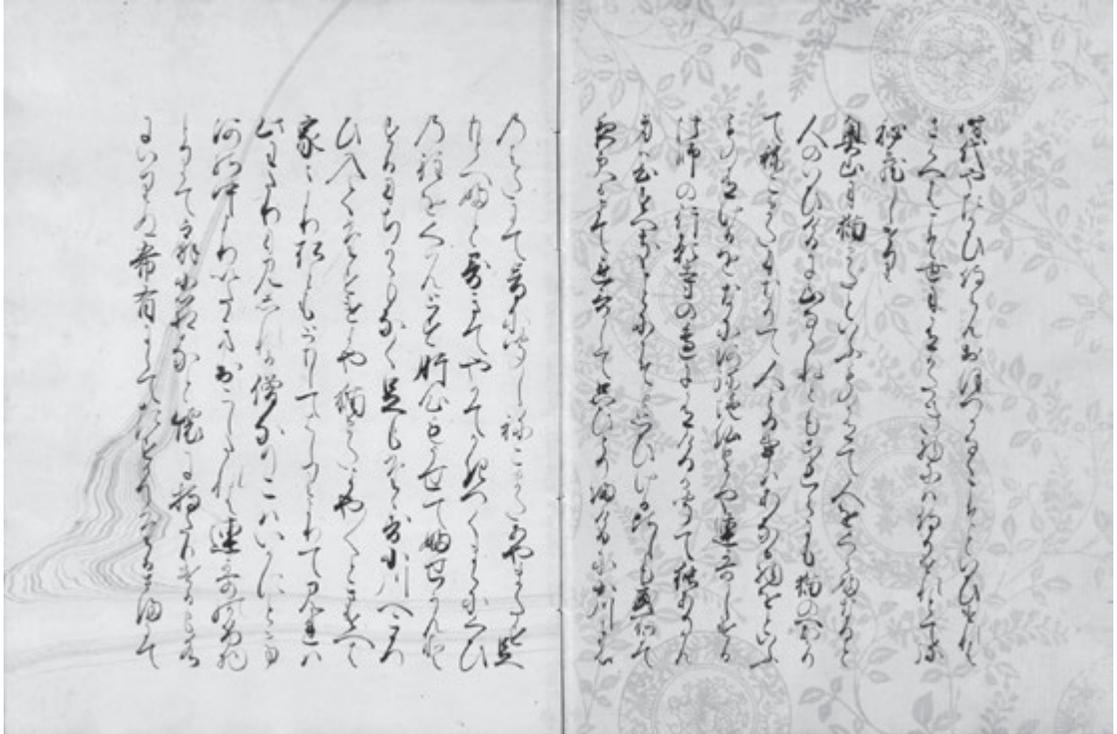


袋綴。藍色地に繫牡丹唐草文空押艶出表紙 (27.5×19.5cm)。左肩題簽。料紙楮紙。
半葉10行・印面高さ約21.5cm。

原題簽に「つれつれくさ〔以下破損〕」とある。近世初期の古活字による印刷は、大部数の出版に適さないものであったので、結局古くからある整版印刷が主流となっていく。本書も嵯峨本と称される、豪華な古活字版（『古活字版の研究』の分類に抛る第一種本）を版下として整版印刷を行った、被彫（覆刻）による一本で、嵯峨本にない濁点や読点に加えられている。上冊末に「杉田良菴玄与開板」との刊記があり、その裏丁に明治23年に名古屋の秋田屋で購入した旨の忠一なる人物の感得識語がある。玄与は元和・寛永期に整版本の刊行を行っていた京都の書肆であり、本書の刊行もその頃であろう。上冊には鉛筆も含め数手の書き入れがある。これも渡辺刀水の旧蔵本で、「■齋珍藏」「山田蔵書」「白杜」他、主不明の印数顆がある。

30. つれつれ草 2巻 吉田兼好

〔江戸前期〕写 2帖 (11X 29 2)

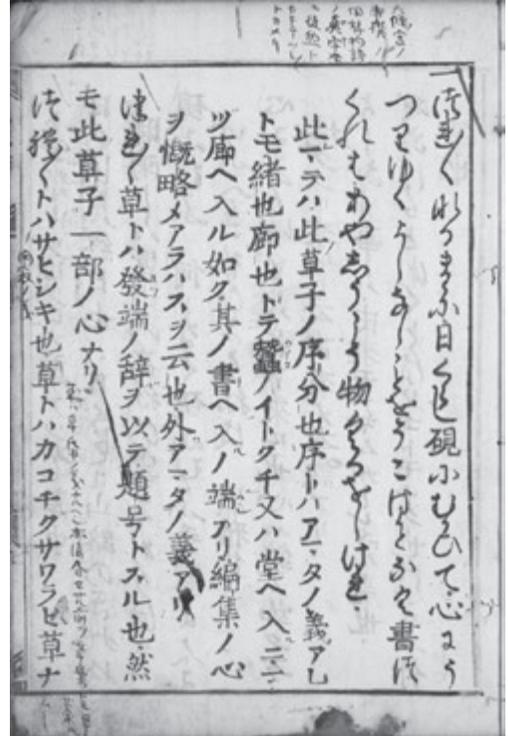
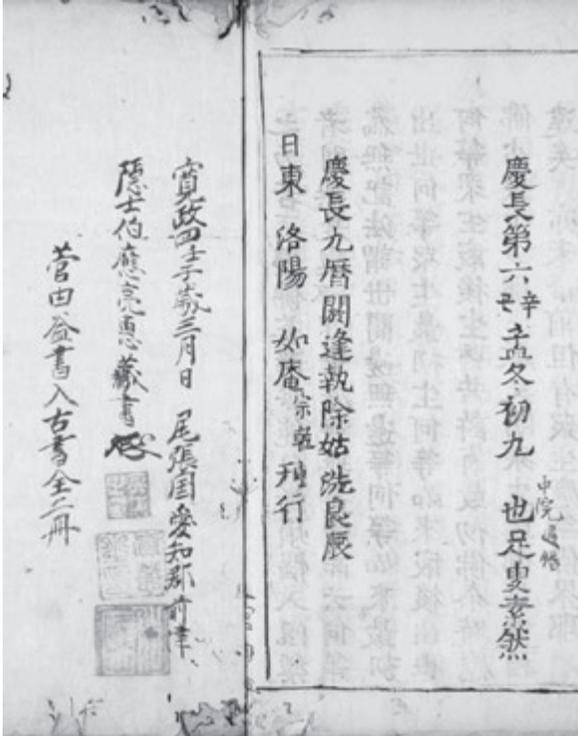


綴葉装。後補薄青地洋花文モール表紙 (23.8×17.7cm)。中央鳥の子地金銀泥菊雲霞文題簽。見返し金切箔散しの千歳紙。料紙色模様替りの唐紙・墨流し鳥の子等混用。半葉10行・字面高さ約18.0cm。

外題に本文同筆で「つれつれ草 上(下)」とある。近世初期の古活字による出版の人気書目となった『徒然草』だけあって、江戸時代になると数多くの写本も作成されている。本書は江戸前期頃に流行した唐紙や墨流紙等の、装飾性の強い料紙を用いた豪華な造本の1本である。四周の余白が大きく、見返しがやや新しいことから等すると、未装丁のままになっていたものに、後になって茶道で珍重されたモールで表紙を付したものの思われる。本文は流布本系である。大正5年に岩間友鶯より『伊勢物語』と共に寄贈されたもので、『伊勢物語』の箱の岩間筆貼紙に拠ると、庄内藩第9代藩主酒井忠徳さかいただのり(1790-1854)の旧蔵で、綾小路大納言あやのこうじの筆というが、該当しそうな人物は見当たらない。

31. 〔徒然草寿命院抄〕 2巻 秦宗巴

慶長9年(1604) 京・如庵宗乾刊 古活字 2冊 (102 37 2)



袋綴。保護表紙の下に茶色雷文繫牡丹唐草文空押艶出の原表紙 (29.1×21.1cm)。
〔左肩題籤剥落〕。料紙楮紙。四周单辺 (24.7×17.8cm)・半葉10行。

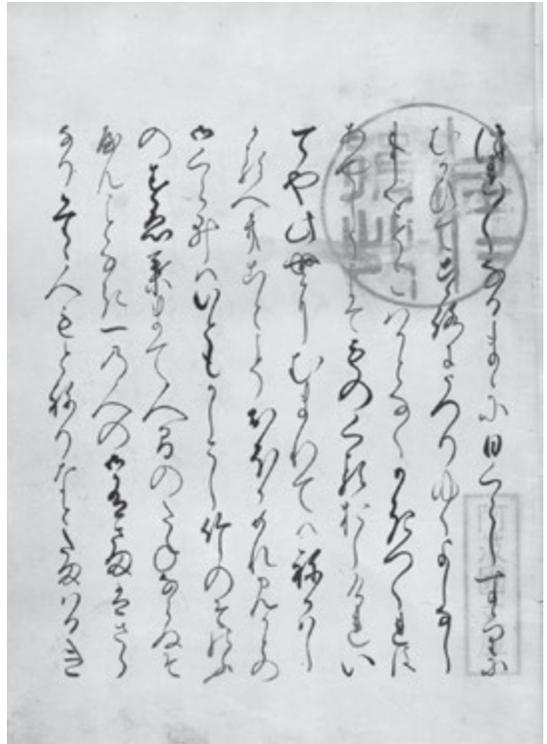
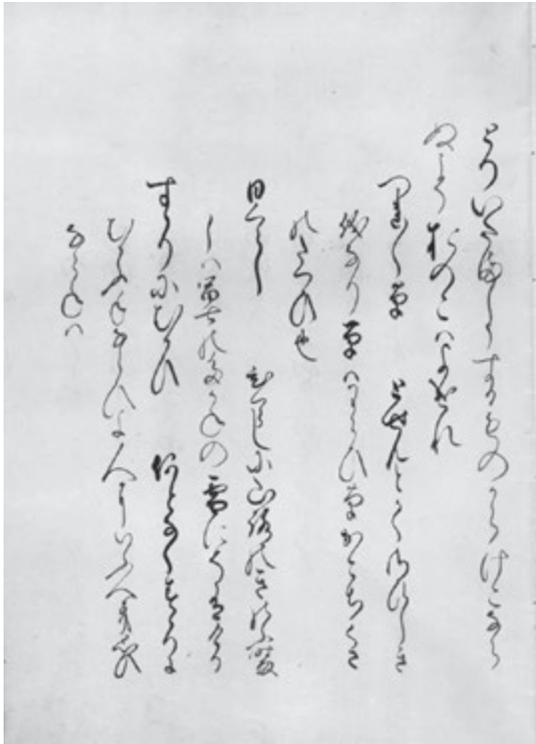
版心に「徒然抄」とある。京の医師で豊臣秀次・徳川家康等の侍医であった、^{じゆみょういんはたそうは}寿命院秦宗巴 (1550-1607) による最古の徒然草注釈書。慶長6年(1601)の^{やそくそうそねん}也足叟素然(中院通勝)の跋に続けて、「慶長九曆閏逢執除姑洗良辰/日東 洛陽 如庵宗乾刊行」との刊記がある。「閏逢執除」は甲辰、「姑洗」は3月のことである。漢字片仮名交りの古活字版としては、前年の『平家物語』に次ぐもので、『徒然草』関連書としては、翌年の平仮名活字版『徒然草』に先立っている。上冊冒頭近くの数丁に存する平仮名活字部分は、その最古例としても注目される。各冊末に漢学者・菅由益^{かんゆうえき}(?-1695)の書入本であること伝える、寛政4年(1792)3月の尾張愛知郡前津^{はくおうりょうえ}の伯応亮恵の識語と印記がある。他に「尾州名古屋/護国院蔵書」印あり。伯爵^{はやしただす}林董の寄贈本。

[参考文献]

『慶應義塾図書館蔵和漢書善本解題』

32. 〔鉄槌〕 4巻 青木宗胡

〔江戸前期〕写 4帖 (110X 516 4)



綴葉装。紺地金泥金砂子水辺模様表紙 (24.5×17.5cm)。左肩鳥の子地金泥文題簽。
見返し雷文繫牡丹唐草文空押金紙。料紙鳥の子。半葉10行。字面高さ約18.1cm。

各冊外題が故意に擦り消されているが、幽かに「鉄槌」と読める。慶安元年(1648)初刊の『鉄槌』は、青木宗胡(伝未詳)が『寿命院抄』と林羅山の『野槌』を抜粋して纏めたもので、簡便な注釈として幾度も版を重ねて広く流布したものである。本書は、各段の末尾に、注文が本文と同じ大きさで二字下げにしてゆったりと記されており、一見ただけでは版本を写したものとは思えないものである。版本を基に嫁入本のような豪華本を作成した典型例であると言えよう。「阿波国文庫」印より徳島藩蜂須賀家旧蔵本であることが判る。他に不明印1顆あり。

漢籍

展示書（漢籍）リスト

図録番号

書名

1. 大方広仏華嚴經60卷 存卷14 十無尽蔵品 東晋 仏駄跋陀羅訳
〔神護景雲2年(768)〕写(称徳天皇勅願經) 和 大 1軸
2. 成唯識論述記10卷 存卷7末(首欠) 唐 釈窺基撰
〔平安末〕刊(〔春日版〕) 和 大 1軸
3. 妙法蓮華經8卷 存卷1 序品 姚秦 釈鳩摩羅什訳
〔鎌倉〕刊(〔春日版〕) 和 大 1軸
4. 大般若波羅蜜多經600卷 存卷374 無相無得品 卷456 同性品 唐 釈玄奘訳
〔南北朝〕刊(〔春日版〕) 和 大 2帖
5. 秘密曼荼羅十住心論10卷 欠卷1 釈空海撰
建長6-正嘉3年(1254-59)刊(金剛峰寺) 和 大 9帖
6. 表無表色章 不分卷 唐 釈窺基撰
正応5年(1292)刊(唐招提寺) 和 大 2帖
7. 大方等大集經60卷 存卷9 海慧菩薩品 北凉 釈曇無讖訳
宋元豊8年(1085)刊(福州 東禅等覚院) 崇寧蔵本 唐 大 1帖
8. 大般若波羅蜜多經600卷 存卷511 不思議等品 唐 釈玄奘奉詔訳
〔宋末〕刊(〔平江府 磧砂延聖院〕) 磧砂蔵本 唐 大 1帖
9. 深密解脱經5卷 存卷4 弥勒菩薩問品 北魏 釈菩提流支訳
〔金〕刊(〔解州 天寧寺〕)〔後修〕金蔵広勝寺本 唐 大 1軸
10. 大毘盧遮那成仏神変加持持経7卷 存卷4 密印品 唐 釈善無畏 釈一行訳
高麗高宗30年(1243)刊(〔江都〕大蔵都監)再彫高麗蔵本 韓特大 1帖
11. 六臣註文選60卷 存卷17, 18, 41, 42, 47, 48, 57-60 梁 蕭統編 唐 李善并五臣注
〔南宋〕刊 唐 大 5冊
12. 広韻5卷 宋 陳彭年等奉勅重修
〔宋末元初〕刊 唐 中 5冊
13. 史記130卷 欠59卷 漢 司馬遷撰 劉宋 裴駰集解 唐 司馬貞索隱 張守節正義
元至元25年(1288)刊(吉州安福〔彭寅翁〕崇道精舎) 唐 半 28冊
14. 新編纂図増類群書類要事林広記6集35卷 宋 陳元靚編
明洪武25年(1392)刊(梅溪書院) 唐 大 6冊
15. 遜志齋集30卷 拾遺10卷 附1卷 明 方孝孺撰
明成化18年(1482)跋刊 唐 大 16冊
16. 六家文選60卷 首目1卷 梁 蕭統編 唐 五臣并李善注
明嘉靖13-28年(1534-49)刊(呉郡 袁褰嘉趣堂) 唐特大 31冊

17. 新刻古今玄機消長八譜 8 卷 欠卷 7, 8 欠名撰
〔明〕刊 (劉龍田) 唐 大 1 冊
18. 酒顛 2 卷 補 3 卷 明 夏樹芳撰 陳繼儒編 (補) 陳繼儒撰
〔明萬曆 40 年 (1612) 序〕刊 唐 大 1 冊
19. 李氏焚書 6 卷 明 李贄撰 欠名批
〔明末〕刊 (朱墨套印) 唐 大 6 冊
20. 新刻增補批評全像西遊記 20 卷 (100 回) 欠名撰 欠名批
明崇禎 4 年 (1631) 刊 (〔建陽〕閩齋堂楊居謙) 唐 半 8 冊
21. 周易函書別集 16 卷 欠卷 15, 16 清 胡煦撰
〔清乾隆 47-52 年 (1782-87) 間〕写 欽定四庫全書本 唐 大 7 冊
22. 叢林公論 宋 釈惠彬撰
〔鎌倉末〕刊 (〔南禪寺〕) 和 中 1 冊
23. 禪儀外文集 虎関師鍊編
〔南北朝〕刊 和 半 1 冊
24. 諸家集註唐詩三体家法 3 卷 存卷 3 宋 周弼編 元 裴庚 釈門至注
〔南北朝〕刊 和 半 1 冊
25. 三体詩鈔 不分卷 首尾欠 〔塩瀬宗和〕撰
〔室町末近世初〕写 和 半 1 冊
26. 坡詩脞說 25 卷 欠卷 5, 6, 9-15 瑞溪周鳳撰
〔室町〕写 (惟高妙安等) 3 種取合せ本 和 大 10 冊
27. 史記 130 卷 漢 司馬遷撰 劉宋 裴駰集解 唐 司馬貞索隱 張守節正義
朝鮮刊 (庚子字) 韓特大 34 冊
28. 近思錄 14 卷 宋 朱熹 呂祖謙編 葉采注
朝鮮刊 覆甲寅字刊本 韓特大 4 冊
29. 医方大成論 元 孫允賢撰
慶長 3 年 (1598) 刊 (古活字 京 迎称寺) 和 大 1 冊
30. 北溪先生性理字義 2 卷 宋 陳淳撰
〔江戸初〕刊 (古活字) 和 大 2 冊
31. 白氏文集 71 卷 唐 白居易撰
元和 4 年 (1618) 跋刊 (古活字) 和 大 30 冊
32. 易本旨 5 卷 附繫辭解 文言解各 1 卷 欠卷 5 伊藤蘭嶼撰
宝曆 11 年 (1761) 写 (自筆第 2 稿本) 和 大 6 冊
33. 韓非子翼蠹 20 卷 首 1 卷 太田全齋撰
文化 5 年 (1808) 刊 (木活字) 自筆書入本 和 大 21 冊

I 漢籍総説

1. 漢籍・唐本

ふつう漢籍といえば、中国で著述された書物を指し、ほとんどの場合、中国人の著作という意味で用いられる。例外として中国社会に同化した外国人が、その内部にあって漢文で記したり、外国の書物を漢文に翻訳したりと、成立事情のいくらか異なる書物も知られているが、これらも一応、漢籍と同様に取り扱う。例えば魏晋南北朝時代(3-6世紀)にインドや西域の国々からやってきて、仏教の経典を伝え漢訳した僧侶たち、明清時代(14-20世紀)にヨーロッパから入朝し、西方の科学技術やキリスト教の扶植を図った、西洋人の訳述著作などがこれに当たる。金、元や清といった征服王朝の支配層も、出身の民族からすると中国人とは見なしがたいが、その著作を漢籍から除外することはしない。しかし中国社会の外にあって、漢文を用い中国風に作った書物はどうかといえば、一般にはこれを漢籍と区別することが多い。例えば『易経』や『論語』などの中国の古典を日本人が注解した書物や、中国人の詩歌や文章を、日本人の求めに応じ選び集めた編著などは、準漢籍といって、漢籍と同列には扱わない。また朝鮮人や日本人、ベトナム人の中には、漢文に精通し純中国風の著作を成す者があったけれども、これらもやはり漢籍とは呼ばない。それでは、元朝の使節として来日した中国僧・一山一寧の語録はどうか、清朝に服属することを嫌って来日し、水戸光圀の賓客となった明人・朱舜水の著述はどうか、琉球から台湾、福建、薩摩からさらに琉球へと漂流し護送された琉球人・楊文鳳(嘉味田親雲)の漢詩集はどうかなど、いろいろと判定の難しい場合もあるが、中国社会に向けて著述編集された書物が漢籍であると考えれば、大方その趣旨を失わないであろう。しかし今日では、漢籍に加え、準漢籍や周辺の漢文文献をも併せ見る方が、より一層、実り多いことと考えられている。本展示でも漢籍の意を広くとり、狭義の漢籍や仏典、準漢籍や日本人撰述の漢文文献を取り上げることにした。

漢籍と紛れやすいことばとして、唐本という表現も使われる。唐本といえば、中国で製作された伝統的な体裁の書物を指す。当然のことながら、漢籍の多くは唐本である。漢籍と唐本とは、いったいどう違うのかといえば、漢籍は中国人による著作の意であって、これを朝鮮人や日本人が、手を加えずに写したり出版したりした本も、やはり漢籍である。従って江戸時代に日本で出版された漢籍を、特に和刻本漢籍と呼んでひとまとめに扱うことがあり、時代を限らず日本漢籍と呼んだりもする。例えば室町時代の公家が筆写した司馬遷の『史記』の写本は、漢籍にして和本(日本製の書物)、日本漢籍だということになる。しかし唐本といえば中国製の書物の意で、中国で造られた品物に限るから、日本漢籍を唐本と呼ぶことはできないのである。また朝鮮半島製作の書物について、唐本・和本と同じような意味で韓本と呼ぶことがある。中国で複製された日本人の著作はどう呼ぶか、これは数が少なく特別の用語は聞かないけれども、江戸時代の儒者・やまのいこんらん山井崑崙の記した『七経孟子考文』が評判を呼び、清朝の嘉慶年間(1796-1820)に出版された例がある。単純なことばの問題のようではあるが、唐本を見ることで漢籍の本流をたどっていくことができるし、韓本や和本を追うことで、その広がりや複雑さを考えることができ、これらを比較研究すると、相互の関わりをも知ることができる。ただ唐本、

韓本などというのはあくまでも日本語の語彙であって、現在の中国や韓国では通用しづらい。漢籍の研究対象が必ずしも中国製の書物に限られなくなった今日、日本語の唐本・韓本・和本に相当するような、共通の用語を確立する必要が生じてきたといえよう。今回の展示は、仏典を含む広義の漢籍について、唐本（展示7-9、11-21）、韓本（展示10、27・28）、和本（1-6、22-26、30-33）の3種を交えて構成した。和本の比率が高いのは、慶應義塾図書館における漢籍収集の姿を反映した結果である。

2. 漢籍の始発 — 周～後漢（紀元前11～後3世紀） —

漢籍ということばに立ち戻ると、一般に近現代の著作は漢籍に含まないようである。中国ではいつから近代かという、やはり様々に難しい問題も生じてくるが、ここでは大ざっぱに、伝統文化が中国社会の基礎を成していたと思われる清朝の末、20世紀初め頃までの著作を、漢籍と考えることにしたい。一方、漢籍はいつから存在していたのか、最古の漢籍は何かということになると、これまたはっきりした答えを述べるができない。始終漠然としていて恐縮であるが、現在に伝わる書物の中で最古の漢籍と考えられるのは「五経」と呼ばれる儒教の經典で、その一部は周代の著述、少なくともそれを元に構成した書物と考えられている。かつては經典の全体が周代の遺著とされたが、歴代の批判的研究によって、多くの部分は後の述作と見なされるに至った。しかし部分的にせよ、周代以前、すでに現在につながる著作が行われていたことは、考古学の成果によっても傍証される。周といえば、西暦の紀元前1066年頃、中国の盟主として擡頭した王朝であるから、漢籍には少なくとも3000年、恐らくはそれを上回る長い歴史が備わっていることになる。また、周の治世が乱れ群雄の割拠した春秋戦国時代（前8-前3世紀）ともなれば、諸子百家として名を馳せた思想家や弁論家の著述が、次々にまとめられて行った。ただこれは著作の時期について考えた場合であって、漢籍の実物について見ようとすれば、戦国時代の末、紀元前3世紀頃まで下らなければならない。文字資料全般には、周を遡る殷の遺物も伝わっているが、その多くは先祖の祭祀、また権威の記念として甲骨や金属の器、石碑に刻まれたもので、まとまった著作ではない。書物の遺品としては現在のところ、戦国末の楚（長江中流域の大国）の墓棺から出土した副葬品が最も古く、これらは「竹簡」と呼ばれる細長い札を右から左に並列し、横に編み連ねて長い巻物とし、1枚の簡札を1行に使って筆墨を用い、古代の筆書体をもって記した形である。その内容は『老子』などの他、新発見の本文を含み、学界に多くの問題を提供している。

続く秦漢の時代（前221-後220）には、秦の統一（前221）と、漢の継承による政治的安定を背景として、数多くの著作がなされた。韓非の唱える法家思想を採用した秦代には、一時様々な著作の伝承が阻害されたものの、漢代になるとその回復が図られた。漢の武帝（在位前141-前87）が国を挙げて儒教を重んじたことから、儒教の經典が整備され、それを研究した関連の書物も蓄積された。またこの頃、司馬遷が『史記』を著して歴史書の典型を打ち立て、漢籍の世界に一分野を切り開いた。さらに、今日のいわゆる文学の方面でも、古い楚の歌辞をまとめた『楚辞』や、「賦」と呼ばれる長大な文学作品が流行して、その数を増した。様々な技術に関係する著作も加わってくる。武帝は宮廷図書館の充実を望み、全国に書物の収集を命じたが、前漢の末にはすでに相当な数の書物が蓄積されたので、宮廷学士である劉向・劉歆の父子

がこれを整理研究し、個々の文献解題に相当する『別録』と、分類目録に当たる『七略』を作った。今日、前者は断片的に残存し、後者は形を変え『漢書』藝文志として行われ、当時の様子を伝えている。これらを見ると、前漢（紀元前206-後8）までに漢籍の基礎骨格を成す著作が、すでにある程度出そろっていたことがわかる。この時代の書物は、前代同様に竹簡に記して編み連ねた巻物が主であったが、漢代の統一書体となった「隸書」（お札の「日本銀行券」や額面の書体）で記された。貴顕の家では特に「帛」と呼ばれる絹布に記した帛書を用いることもあった。帛書の実物も漢代の墳墓から出土しているが、その書写の様子は、竹簡の書物の10数行分を、やや幅広い平面に模写した形である。また漢代の竹簡や木牘の実物も、稀に各地の墳墓や西域の城塞から出土して、当時の姿を止めている。一方、前漢の時代にはすでに紙の製造されたことが確かめられ、後漢（25-220）を迎えると、文字の書写用に改良され、上層貴族の日常生活に浸透して、書物の世界を一変させることとなった。紙は、廉価ながら重くかさ張る竹簡と、軽量ではあるが高価な帛書との、両者の欠点を除き利点を併せたような画期的な書写材料であったため、次第に普及し書物の姿を改めていった。

3. 仏教伝来と卷子本 — 三国～唐（3～10世紀） —

後漢の時代、書物の世界に起きたもう一つの大きな変化は、仏教の伝来である。古代インドに行われた仏教は、釈迦の説法をまとめた経典が編集されてからは、これを中心に信仰が築かれ、その布教も経典を基にして行われたから、後漢の時代、西域方面から中国に仏教の僧侶が入ってきた際には、古代インドのことばであるサンスクリット語の、または西域の言語に翻訳された経典が携えられ、この後、数百年にわたり、経典を漢文に翻訳する訳経の事業が行われた。魏の曹丕によって後漢の時代に終止符が打たれ（220）、中国社会は三国時代（220-280）から西晋を経て南北朝時代（317-589）へと、長い分裂の局面を迎えることになるが、この時代、仏教は、儒教や在来の思想との間に摩擦を起こしつつ、南北に支持者を広げ一大潮流を成すに至った。この過程には漢訳された仏典の流通が欠かせなかったため、仏教ではこれを重んじ、経典そのものへの信仰を強め、経典の複製を勧め写経を奨励するなど、様々の策を立て信仰を扶植したのである。このことは中国における書物の数を、格段に増やす結果を招いたが、当時の漢訳仏典の具体的な形は、前代の末、新たに成立していた紙本墨書の巻物の器によるものであった。今日、この時代の書物の実物はほとんど伝わらないが、例外的に敦煌莫高窟から発見された出土品や、西域の発掘品の中には、いくつかその頃の巻物が含まれている。その姿は、長方形に切り整えた紙を横に使い、これを右から左に次々と貼り継いで長大な紙面を作り出し、竹簡を敷き並べたかの如くに一行一行、縦の罫線と天地の界を引いて、そこへ一定数の文字を埋めていき、先端に棒状の留め具を巻き付け、これを軸に全ての紙を巻き返し、1軸の巻物として収蔵した。この形の巻物を「卷子本」と呼ぶ。敦煌からは早く4-5世紀頃の卷子本が出ているが、その内容はやはり仏教の経典であって、もともと中国の西域が仏教伝来の道に当り、経典の需要が高かったことを差し引いても、新しい器に盛られた仏典普及の勢いの大きさが窺われる。卷子本の登場は書物の構成に変化を与え、様々の古典に対する詳細な注釈や、論議の書が多く作られるようになった。また文章や記事などをたくさん集成した書物が作られた。さらに、数ある著作の中から要所を抜き出した編集物もよく行われた。これらは卷子

本1軸に格納される情報が、竹簡の書物とは段違いに増えたことに起因し、数百巻に及ぶ大著の製作が可能になり、網羅的な編集への欲求や、逆に効率的な読書の必要に迫られた結果と考えられる。書物の内容についていえば、仏教の他に老荘思想の流行が指摘され、その方面の著作も増加した。また南朝における貴族文化の興隆に伴い、文学や書画の制作が盛んで、『文選』のような文学の集成や藝術論、品評の書物が流行した。書物の文字を見ると、紙本墨書の環境に適応して、隸書の中から次第に楷書が成立し、標準の書体となった。このような魏晋南北朝時代の書物の趨勢は、特に南朝の洗練された文化情況がより強く反映される形で、続く隋唐の統一期に連なっていた。

現在に伝わる隋（589-618）唐（618-907）時代の書物は決して多くないが、しかしそれでも相当な数の実例を見ることができる。その中で敦煌発見の出土品と並んで価値が高いのは、日本の正倉院や、その他の伝世品である。特に正倉院聖語藏は、奈良・東大寺の塔頭である尊勝院の旧蔵品で、近代になってから皇室に献納されたものであるが、その実態は、隋唐や奈良平安時代の古写経の集積である。これらは人の手によって伝えられ宝蔵されてきた書物である点が殊に貴重である。敦煌や正倉院に残った隋唐の書物を見ると、南朝の遺風を受けて端正な様式を備え、黄檗に染めた麻紙や穀紙を用いて卷子本とし、予め淡墨の界線を引いて欄を設け、そこへ力強く均整のとれた正楷体の文字を埋めていった形である。これら隋唐の写本は、卷子本による書物が完成形に到達したものと見える。日本の奈良時代から平安の初めにかけて作られた書物は、この隋唐の書物の形を写したものであり、逆にいえば、奈良平安の書物が8-9世紀頃の東アジアの書物の様式を示しているのである（展示1）。結局、後漢の末から魏晋南北朝を経て隋唐に至る間は、書物の歴史からいうと、紙本墨書の卷子本の全盛時代であり、この頃ようやく文化の開けた日本では、その当初から、すでによく完成された形の書物を受容したのである。ただ唐代に至り、次の段階を導く変化がおこる。その変化とは印刷本の登場であり、現在、敦煌を含む西域出土の古い印刷物のいくつかは、唐代に遡るものと考えられている。また確認される唐代の印刷物はみな仏教の經典であり、ここでもやはり仏教の流通が、さらなる書物普及への動きと結びついていた。唐代に始まる仏典の印刷は、すみやかに平安時代の日本にも移植された（展示2）。

4. 版本の登場 — 五代～宋・元（10～14世紀）—

書物を印刷する技術の起原は、様々に論じられ定説を見ないけれども、一枚刷りのような断片的な刷り物を除いて、書物全体を多数の木版に彫刻し、凸部に墨を塗って順次印刷する複製の技術は、唐代に実用化されたと思われる。この木版印刷によって作られた書物を「版本」という。版本の出現時の姿は、在来の卷子本をそのまま写した形であったが、後に仏教の經典類は、一定の幅で蛇腹状に紙葉を屈折させる「折本」の様式に変化した。当初の出版物であった仏典や曆の他、唐の滅亡をうけた五代（907-60）の混乱期には、儒教の經典が版に付された記録がある。この事業を主導したのは、後唐から後周まで五朝に仕えた宰相として知られる馮道という人物で、戦乱の中、21年をかけて完成されたと伝えられる。馮道の刊行した経書は、実物を存せず後の複製品を伝えるに過ぎないが、中国の為政者が出版事業を起し、その権威を示すという先例を打ち立てた。五代の混乱を征し統一を成し遂げた宋朝では、長期安定政権

を目指して文治を標榜したが、宋の初め、二代皇帝の太宗が編集させた百科事典類、いわゆる「四大類書」は、併せて3500巻にも上る。このうちの『太平御覽』1000巻は、当時出版事業の盛んであった蜀（四川省）の地で刊刻されたというのが、これより先、初代の太祖は開宝年間（968-75）に、漢訳された一切の仏典を取める叢書「大蔵經」（日本では一切經と呼ぶ）の刊行を命じ、これも蜀の地で実行に移されていた。この時の版経である「開寶蔵」は、すでにほとんど滅びてしまったが、辛くも伝わった残巻数点が知られている。この蜀版・開寶蔵は、日本や高麗にも下賜されたが、後には各地で複製され、覆刻本である「高麗蔵」や「金蔵」の出版を呼び起こした（展示9・10）。さて、東洋史の用語では宋代を二分し、宋の都が汴京（開封）にあった前半期を北宋（960-1127）と、女真族の王朝である金の侵出によって都を臨安（杭州）に移した後半期を南宋（1127-1279）と呼んで区別するが、書物史の北宋期は、公共事業としての大規模出版を皮切りに、出版事業がある程度一般化していく時代であり、すでに蘇軾（東坡）の如き著名な文人は、自らの文集を出版し、罪を得て絶版の難に遭うことすらあったという。北宋版の東坡集は惜しいことに伝わらず、その他、北宋の出版物の伝存は非常に稀であるが、このことは一面、出版業の普及の程度をも反映していよう。また宋代の書物の姿は、出版印刷に適応し、1枚の板木に応じ一定の大きさに切り分け、1枚ずつ印刷し半折した紙葉を、本文が通じるように順序よく束ね、糊綴じや糸綴じとする「冊子本」の形に変化した。早い時代には、片面刷りの印紙を半分に谷折りし、文字のない背面どうしを向い合せに糊綴じとしたものらしい。この様式はすでに敦煌出土の唐代の携帯用写本に現れているが、たくさんの情報を集積する方法として、印刷本に活かされ広がった。今日よく見かける、片面に印刷した紙を山折りにして重ね、糸を通して袋綴じにする装訂は、やや遅れて一般化したようである。

北宋から南宋に移る頃、中国の南方でも大蔵經の出版が行われ、宋元にかけて盛んに印刷され（展示7・8）、その他、一般の漢籍にも版本が備わるようになった。蜀の他、浙江、福建、江西方面でも出版業が盛んになり、版木を彫る職人である刻工集団の存在も認められるようになって、それぞれの地方が特色のある版本を生み出した。南宋は、北方の金との軍事的平衡を保ちながら、一方では南方の豊かな経済地盤に拠って繁栄したが、宋代に出版事業の恩恵を蒙った書物の受容者は、任用試験である「科挙」を経て支配階級に立つ官僚と、それに準じて知識層を成す「士大夫」である。また士大夫の帰依を受け、国家宗教の地位を占めた禅宗の寺院でも、出版に関わることが多かった。この時期の出版主体は、公共事業を担う官署、官僚候補者の養成を担う私塾や、禅宗寺院などであったから、当初は士大夫に求められる古典的価値観に従い、儒教道徳に基づく経史の書や正統的文学の書（展示11・12）、また士大夫の私的信仰に関わる禅宗の書が出版の大部分を占めた。しかし南宋時代に杭州や建陽で商業出版が勃興すると、出版の受容者は次第に幅を広げ、識字層の外縁にまで及んでいった。そこでは文雅の大衆化、世俗化も図られたし、営利出版を前提とした百科事典、啓蒙書や指南書の類も多く作られるようになった。この傾向は、金の後方からモンゴルの兵馬が押し寄せ、南宋の版図が呑み込まれてからもさらに続き、元朝（1289-1368）の出版書には建陽、江西方面の商業的な版本が目立つ（展示13）。宋代以来、学者の私塾である書院を中心に学問文化が発達し、元代に継承されていたが、元の前半期には科挙が行われず、その方面で私塾の存在意義が薄れたためか、一部の書院は出版主体としての性格が目立ち、出版業専門の書店と区別がつきにくくなった。また戯曲や小説の流行を反映して、これらの出版が相次ぐようになり、為政者としてのモンゴ

ル人の登場は、漢語の口頭語である白話を用いた啓蒙書の一般化を促進した。また延祐元年(1314)の科挙の復興後は、これに関連した出版も活力を取り戻し、元末に向け版刻が重なった。なお文献によると、宋代に活字印刷技術が発明されたことになっていて、実際には元代の遺品しか伝わっていなかったのだが、13世紀に中国の西北方に領土を保っていた西夏王朝の遺跡から、西夏文字による活字印刷物が出土して耳目を驚かせた。しかし西夏文字自体が漢字を変造したものであるように、活字印刷についても、中国の技術が伝播したものと考えられている。

5. 印刷文化の行方 — 明・清 (14~20世紀) —

再び中国人を為政者に仰いだ明朝(1368-1644)では、儒教道徳に基づく治世を理想とし、伝統的な科挙を行ったが、明初の政治的混乱が一段落すると、永楽帝(在位1402-24)の命によって『四書大全』など、儒教の經典の注釈を集成する作業が進められた。その結果、經典の解釈は南宋以来の「朱子学」に基づき、解釈の幅は『大全』の範囲を出ないことと定められ、科挙の運用に及ぼされた。明前期、建陽の書店を主体とする出版は、科挙の受験参考書や通俗書が主で、元末の刻書の「覆刻」(先行の版本をまるごと複製すること、被せ彫り)が相次ぐなど命脈を保ったが(展示14)、新たな学術に裏打ちされた新奇な事業には乏しかった。その他、散発的に行われる官署や書院の出版は、その土地に由緒ある先人の著作(展示15)や、実務書に止まる場合が多かった。しかし明も半ばを過ぎると、長江下流域の經濟發展が前代に類を見ないものとなり、江南を地盤とする士大夫を潤し始めると、大都市に成長した南京や蘇州の周辺では、書物の受容がこれまでになく高まった。郷党の集う家塾や都市の書店では、正徳(1506-21)嘉靖(1522-66)頃から古典の復刊が相次ぐ形勢となり(展示16)、銅活字を用いて版本の欠を補おうという者も現れた。このころから官僚や学生、大商人の集まった南京や蘇州が、書物の主要な消費地であり、かつ生産地ともなって、伝統的な建陽の書店をも凌ぐ勢いとなった。また王陽明によって「陽明学」が唱えられ、官学である朱子学の相対化が起こると、士大夫の中にも堅苦しい道徳や官僚の立場を嫌う者が現れ、より自由な立場から著作や出版を行うようになり、そうした都市在住の知識人やヴェテラン受験生の中には、官界との繋がりを背景として、自ら出版業に乗り出す者が現れた。嘉靖から万暦年間(1573-1619)にかけて出版書の本数は爆発的に増加し、正統的な著作から在来の俗書、李卓吾の如き反俗的思想の書、隱逸趣味の著作や書画の模刻、都市風俗に取材した歌集や評判記、新たな趣向の文学批評や娯楽小説などなど、明末に向け漢籍の多様化が極点に達した(展示17-20)。これは經濟的充実に背景としながら、版刻技術の進展に伴って出版が比較的容易になり、凶版の多用が常套化するなどの条件が介在しているが、何よりも士大夫層や都市住民が、清濁をあわせた様々なもくろみを胸に、出版界に自覚的に参入してきたことが主な原因であろう。互いに利を奪い合う競争は当然ながら、全体として闊達な出版事業が謳歌され、清の征服に伴う破局が間近に迫った明の最末期にすら、出版書の中にはそうした緊張感が感じられないほどであった。また現在でも出版物に用いられる「明朝体」は、当時の版刻に使われ流行した書体をもとにしており、明末の出版文化高潮の中から生じた遺産の一である。

清初には新しい異民族の王朝により、反清活動の克服を狙って過酷な統制が行われたから、出版の自由は大きく損なわれ、明末に比べるとその多様性において後退を示し、物堅い書物の

出版が大勢を占めた。ただし「漢学」と呼ばれる客観的古学研究の深化によって、高度な学術著作の発刊が増え、明代に重視されなかった元人の著作刊行にも特色が見える。また清前期には優美な模写体の版刻が文学書に行われて一世を風靡するなど、版刻の技術にも一段の深化が窺える他、出版業者の数や規模において、前代にも倍する拡大と普及が見られた。これによって出版が一部の個人にも手の届く事業となり、文人を自任する著述家たちが資産を投じ、自作や父祖の著作を上梓することが頻繁になった。また朝廷における大規模な編集事業を好んだ康熙帝（在位1662-1722）や乾隆帝（1736-95）は、現在でも利用される大百科事典の『古今圖書集成』や、一大叢書の『四庫全書』（展示21）を作った他、官営の出版所を設けて書物の世界に貢献を続けた。これらは清末以降にも、各地に「書局」となって広がり、近代中国の出版界を準備した。さらに、客観的考証を重んじた清代の学術傾向は、使用する文献の質においても最善を求めたから、宋版をはじめとする善本や稀覯書の複製が出版された他、全体に書物の流通量が増え、良書善本の富を競う個人蔵書家が輩出して、いわゆる蔵書文化が盛んになった。特に、稀少である上に本文が勝れていると重視された宋元版や、その他、書物への愛好が高まったため、技巧を凝らした装飾が行われ、転売の際には偽装まで行われるようになった。さらに漢籍自体への認識が高まり、西洋近代文明との本格的接触の前夜、すでに自覚的な研究者が現れて、目録学・版本学という、漢籍の基礎的な整理研究を行う専門が成立した。

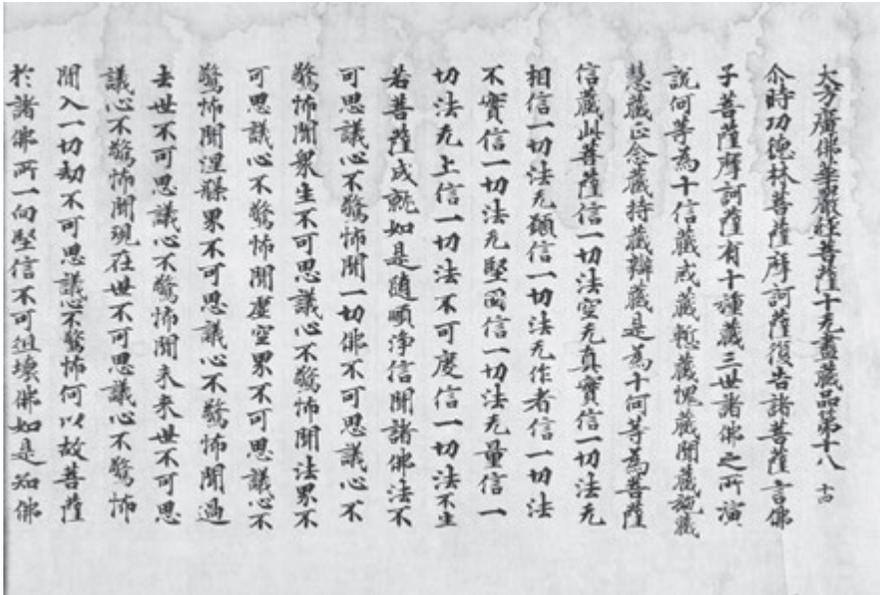
以上、先秦より清朝に至る漢籍の展開につき縷々述べてきたが、このうち慶應義塾図書館に収蔵するものは、近代までに日本に伝来した宋元明清の版本類がほとんどである。ただ中国や他の地域においても、宋元以前の書物を伝存することは比較的稀であり、そのこと自体、特に異とするには当たらないし、漢籍の歴史全体について、現存資料の明らかにし得る範囲にも自ずから限界がある。しかしその故にこそ、幸いにして伝存した資料を集め蓄え、学問に応える営みが絶やされてはならないはずである。近世の日本で主に漢籍を蓄えてきた旧藩や多くの寺社が、かつてのような収集を維持できなくなった近代以降の社会において、大学図書館の役割の1つは、これを補って伝世の収蔵を保つことにあるが、義塾図書館では、歴任教職員や塾員による支持協力の下、この点について一定の考慮を払ってきた。今回、義塾図書館収蔵の漢籍から貴重書を選び、大方の観覧に供することは、広くその成績を問うことにもなるであろう。謹んで精鑑を請う次第である。

1. 大方広仏華嚴經60卷 存卷14 十無尽藏品

東晋 仏駄跋陀羅訳

〔神護景雲2年(768)〕写(〔称徳天皇勅願経〕)

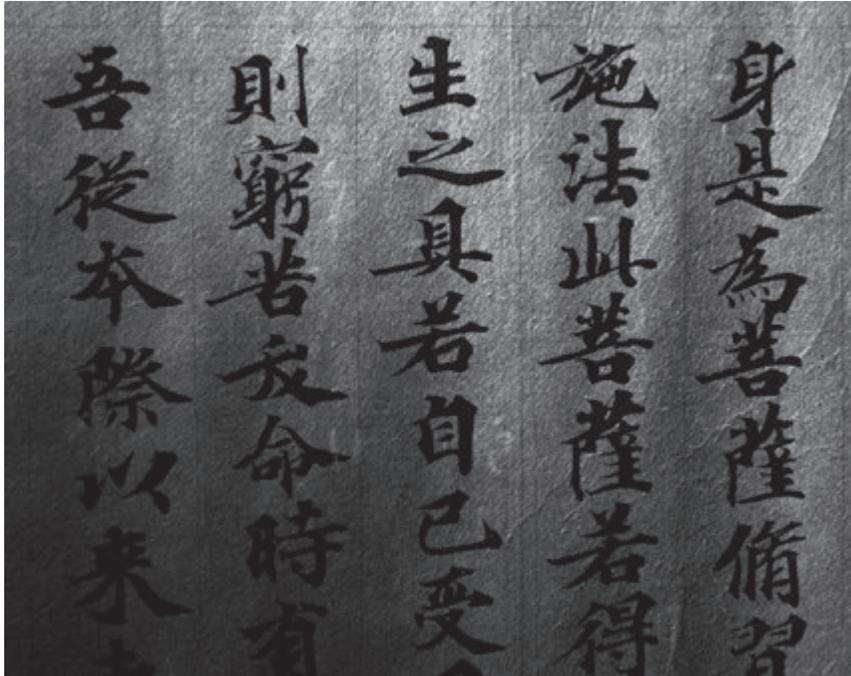
和 大 1軸(132X 40 1)



卷子本。渋引き漉き目表紙(27.8×23.9cm)。本文黄麻紙、淡墨界、毎紙約56.5cm、26行。字面高さ約21.3cm、毎行17字。

この經典は、ふつう「^{けこんぎょう}華嚴経」と呼ばれ、はじめ古代インドにおいて作られたが、東晋時代(317-419)に中国にもたらされ、西域出身の僧^{ぶつだぼつたら}仏駄跋陀羅によって漢文に翻訳された。『華嚴経』は繰り返し訳され、60巻本、80巻本、40巻本と、3種の漢訳が知られている。展示品は1巻のみの残存であるが、その文章から、初訳の60巻本と判断される。『華嚴経』を根本經典とする華嚴宗は、隋唐時代に盛んに行われたが、朝鮮半島にも伝播し、8世紀に興った新羅朝では、唐に留学する僧が輩出して盛んに学ばれた。華嚴宗は奈良時代の日本でも信仰され、聖武天皇の建立した奈良の東大寺は華嚴宗の本山とされ、新羅僧を招いて研究を推進した。

東大寺の大仏開眼の供養は、聖武天皇の皇女・孝謙天皇(在位749-58)が即位して行った。孝謙天皇は藤原仲麻呂の推す淳仁天皇にいったん譲位したが、道鏡と結んでこれを廃し、復位して称徳天皇(在位764-70)となる。展示品は、天皇が復位後の神護景雲2年(768)に、「先聖」のために書写させた一切経「称徳天皇勅願経」のうちの1巻で、他の大部分は、東大寺尊勝院の経蔵である^{しょうごぞう}聖語蔵に伝わった。聖語蔵の經典は近代になって皇室に献納され、現在は宮内庁正倉院事務所の管理下にある。経巻の奥書にある「先聖」とは、父帝の聖武天皇とする説と、立願の直前に廃死した淳仁天皇と見る説とがある。なお全体に奥書のある経巻は稀で、本巻にもないが、書誌学的な見地から一連の経巻と推断される。また本巻の背面には「東大寺印」の印記がある。



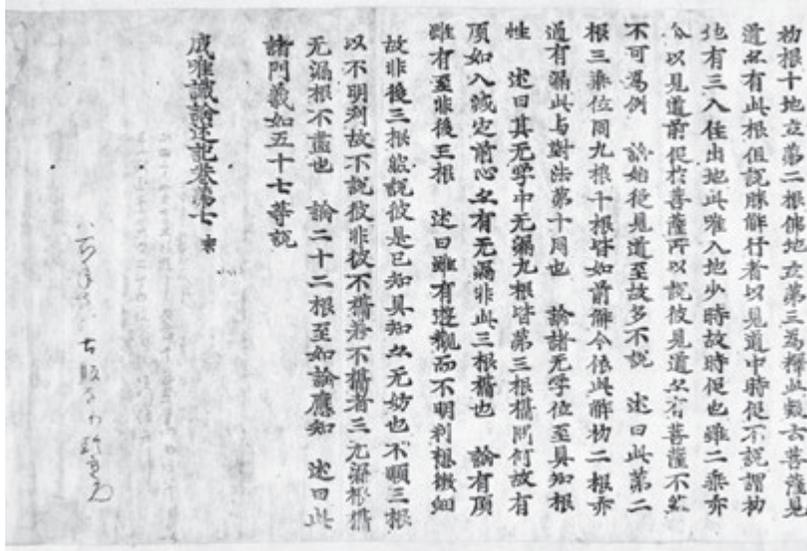
3行目「自」右下に白点の片仮名「ラ」、4行目「窮」右に同「ク」
3行目「具」中央から右上に角筆の節博士「〜」

本巻の謹直な楷書は、単に書法としても嘆賞に値するが、経巻全体を見渡すと、黄褐色に染めた幅56.5cmの横長の麻紙を用い、淡墨の界線を引いて、1行に17字の定数により大粒の楷書を書き切った上、赤蜜陀の撥状の軸に巻き止めた体裁である。このような卷子本の姿は、奈良時代後期の写経を代表し、8世紀東アジアの書物の典型を示している。

この巻物の行間や字間に目を凝らして見ると、本文の濃墨とは異なる、白墨の痕跡も見てとれる。これには句読点もあるが、多くは漢文を和文に転訳するための符号で、和文にあって漢文にはない活用語尾や付属語を補う機能をもっている。その表示形式は「、」式の星点を打ち、その位置によって決まった音を示す「ヲコト点」と、漢字の字画を省略した速記のための表音文字である「片仮名」の両方が認められる。本巻に付されたものは、平安初期の加点と見られ、早い段階の姿を止めている。例えば片仮名では「良」から「ラ」へ、「久」から「ク」に至る途中の字体が見出される。近年これらの補記方法は、東大寺周辺の学僧が、奈良時代に新羅僧から学んだとの説が提出されている。さらに肉眼ではなかなか見えづらいが、漢字の周囲に「角筆」と呼ばれる箸状の筆記具で引っ搔いた「〜」「・」式の符号も認められる。これらは「節博士」「声点」などの、経文の朗唱を助ける符号と見られる。本巻は奈良時代の写経の姿や、仏教を信仰する精神の在り方を止めるだけでなく、奈良末平安初期の日本の漢文訓読法を伝えており、外来の符号を使って海外の文化をわが物とし、日本語の世界を広げた古代の活動を窺うようすがとしても貴重である。もと慶應義塾教員の日本史家・幸田茂友氏遺愛の品で、他の仏典多数とともに義塾図書館に寄贈された。

2. 成唯識論述記10卷 存卷7末(首欠) 唐 釈窺基撰

(平安末)刊(〔春日版]) 和 大 1軸(132X 80 1)



卷子本(折本改装)。後補渋引き表紙(27.3×21.5cm)。本文楮紙、もと毎折7、8行。無辺無界、字面高さ約23.7cm、毎版15行、毎行21字、和様、淡墨印。

本書は唐代の僧、慈恩大師^{きき}窺基^{じょうゆいしきろん}が『成唯識論』に注釈を施した書物である。『成唯識論』は仏教の教理を分析した理論の書であり、三蔵法師^{げんじょう}玄奘によってインドから中国にもたらされ、唐顯慶4年(659)長安の慈恩寺で漢訳された。窺基は玄奘の弟子で、『成唯識論』の漢訳に重要な役割を果たしたが、のちに同書の研究講義を行って『成唯識論』の含意を詳しく述べたのが、この『成唯識論述記』である。唯識を研究する学問は、専門学派の法相宗を生じ、日本では奈良の興福寺がその中心となった。この『述記』も奈良時代に日本にもたらされ、教学の柱として研究された。

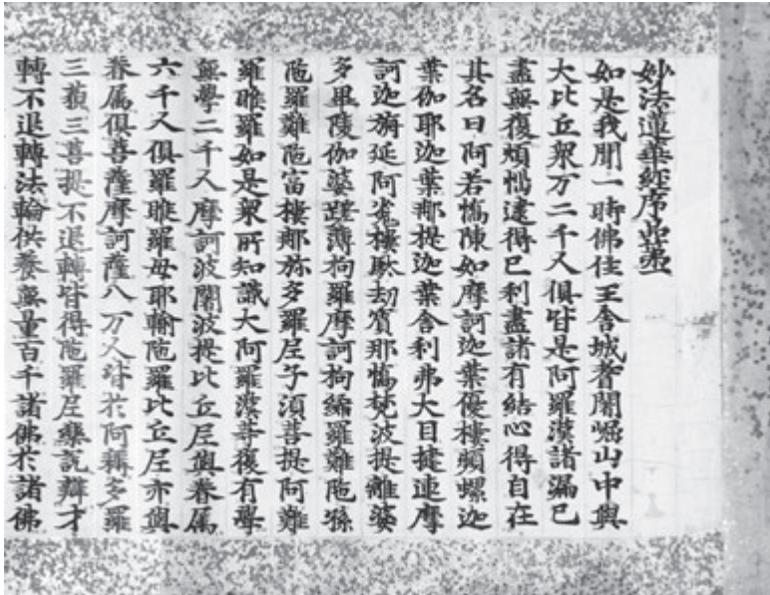
興福寺では平安時代から、摺り経^{すぎょう}供養の經典、教学のための出版を行ったが、これらを総称して「春日版^{かすがぼん}」と呼ぶ。『成唯識論』や注釈書はその主要な出版書目であったが、展示品も春日版の一種と思われる、巻末に正治2年(1200)の朱の書付けがあるため、それ以前、平安時代末の刊行と推定される。日本で本格的な出版の始まった時期の版本として貴重である。また正治2年の書付けは、俊弁という僧が「移点」したという内容であるが、これは本文中に見える朱点^{しゆてん}が、他本から写し取られたものであることを意味する。この書入れは漢字の周囲に「、」式の星点を付し、その位置によって決まった音を付記する「ヲコト点」で、日本語への訳読に際し活用語尾や付属語を補う機能がある。ヲコト点によって示された訳は本文の解釈を反映し、学説を凝縮するものとして珍重された。平安時代の仏教学、漢学や日本語の様子を知る材料として注目に値する。

3. 妙法蓮華經 8 卷 存卷 1 序品

姚秦 釈鳩摩羅什訳

〔鎌倉〕刊 (〔春日版〕)

和 大 1 軸 (132X 16 1)



卷子本。後補梨地銀砂子散らし雲霞文表紙 (27.2×22.0cm)。見返し黄檗染め、銀切れ箔散し。本文斐紙、金泥界、天地金銀切れ箔散らし。無辺無界、字面高さ約 21.2cm、每版30行、毎行17字、和様、濃墨印。

古代インドで作られた『法華經』^{ほけきょう}の原本に対しては、何度も漢訳が行われたが、「妙法蓮華」と称するのは、姚秦の弘始 8 年 (406) に作られた鳩摩羅什^{くまらじゆう}の訳本である。鳩摩羅什はインド人を父にもち、中国西域の国・クチャ (亀茲) の王族に生まれ、出家して各地に仏教を説いた。その頃、^{きょう}羌族の姚氏が立てた後秦朝は仏教を重んじ、鳩摩羅什を招いて各種の經典を漢訳させたが、この『妙法蓮華經』も訳され、流通した。さらに隋の時代、智者大師^{ちし}智顛が注釈書「法華三大部」を著し、『法華經』を重視する天台宗を興してからは、一層力強く行われた。

日本では飛鳥時代から『法華經』が学ばれたが、平安初期に伝教大師^{さいちゆう}最澄が天台宗を伝えてからは、『法華經』の研究と、經典そのものへの信仰が強まった。また平安中期、經典印刷の習慣も伝えられ、經典複製の功德が後世を益するという信仰に結びつき、写經に代わる「摺り經供養」^{ぎょう}を流行させた。そこでやはり、もっともよく信仰を集めた『法華經』が刷り出されたことが、藤原道長の日記『御堂関白記』^{みどうかんぱくき}に見える。藤原氏の氏寺である奈良興福寺の出版物を「春日版」と称するが、『法華經』の刊行もたびたびにおよぶ。展示品は、文字の様式から春日版と見られ、特徴的な濃墨の印色などから鎌倉時代の刊行と推定される。朱をもって書入れた句点と声点は、『法華經』朗唱のたよりと見なされ、丹念な装飾は經典への信仰の深さを示している。

4. 大般若波羅蜜多經600卷 存卷374 無相無得品 卷456 同性品 唐 釈玄奘訳

〔南北朝〕刊（〔春日版〕） 覆貞応2至嘉禄3年（1223-6）刊本 和 大 2帖（110X 17 2）



折本（経摺装）。渋引き金銀切れ箔・禾・砂子散らし雲霞文表紙（26.1×9.4cm）。

見返し金銀切れ箔散らし。本文黄檗染め斐楮交漉紙、銀泥界、毎紙5面、1面5行。

無辺無界、字面高さ約20.3cm、毎版20行、毎行17字、和様。

展示品には口絵の版面があり、2帖とも同じ版木による。中国宋元時代の版経を真似たもので、仏典を荘厳し、あがめる習慣を示している。経文が読めない大衆にも経巻の価値を知らしめる意図に出ている。この図は中央に釈迦三尊像を、その左右に十六善神像などを配した構成であるが、三尊の右に、多数の経巻を背負う旅姿の僧侶が描かれている。これは600巻におよぶこの『大般若経』^{だいほんにやぎょう}を伝え訳出した、三蔵法師玄奘^{げんじょう}の姿を描いたものと解される。玄奘は隋末に河南省に生まれ、出家後、中国各地に遊学して頭角を顕し、唐の貞観3年（629）インドへの求法の旅に出発、西域の諸国をめぐって北インドに入り、インド各地で修学し、中国に伝来のない経論律の仏書を集め、同19年に長安に戻った。太宗はこれを迎えて大慈恩寺を建立、玄奘は寺内の翻経院に入って翻訳に明け暮れた。そして顕慶5年（660）から『大般若経』の翻訳にかかり、龍朔3年（663）600巻におよぶ大業を完成、生涯を通じ計75部1335巻の仏典を遺し、翌年に没した。

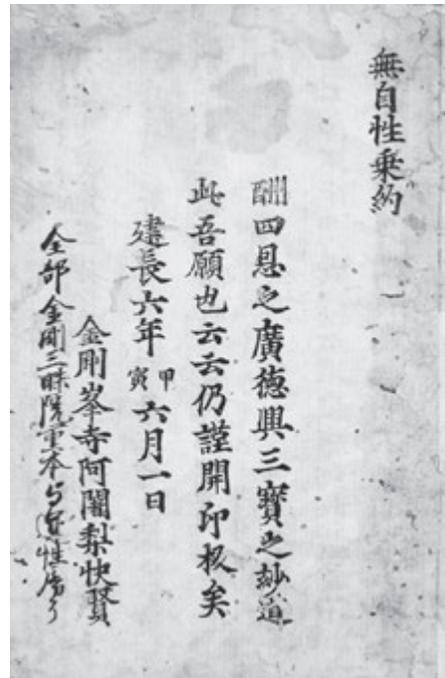
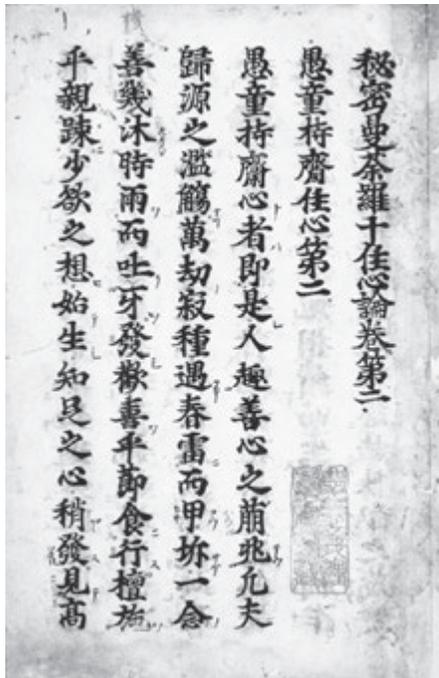
大部な『大般若経』は、その存在感から広く崇拜され、大蔵経の首に置かれたり、本文を読まずにめくる「転読」の対象となったりするほどであったが、日本では鎌倉時代、貞応2年から嘉禄3年（1223-26）に興福寺で開版された。展示の両巻はその覆刻で、永徳3年（1383）の墨書があり、それ以前の印造とわかる。但馬の大乗寺（兵庫県城崎郡香美町に現存）に寄進され伝わった。

5. 秘密曼荼羅十住心論10卷 欠卷1

釈空海撰

建長6-正嘉3年(1254-59)刊(金剛峰寺)

和大 9帖(110X 2 9)



粘葉装。茶色表紙(25.4×15.4cm)。本文雲母引き斐紙。無辺無界、字面高さ約20.6cm、每半張6行、毎行17字、和様、両面刷り。

この『^{じゅうじゅうしんろん}十住心論』は、弘法大師^{くわいかい}空海がその仏教観を示した理論的主著とされる著作で、入唐帰朝して高野山に金剛峰寺を開き、日本に真言宗を始めた後、天長年間(824-34)に淳和天皇の求めに応じ、他の宗派の高僧とともに、一門の立場を述べた書物である。以後、真言宗では教学の中心に据えられた。

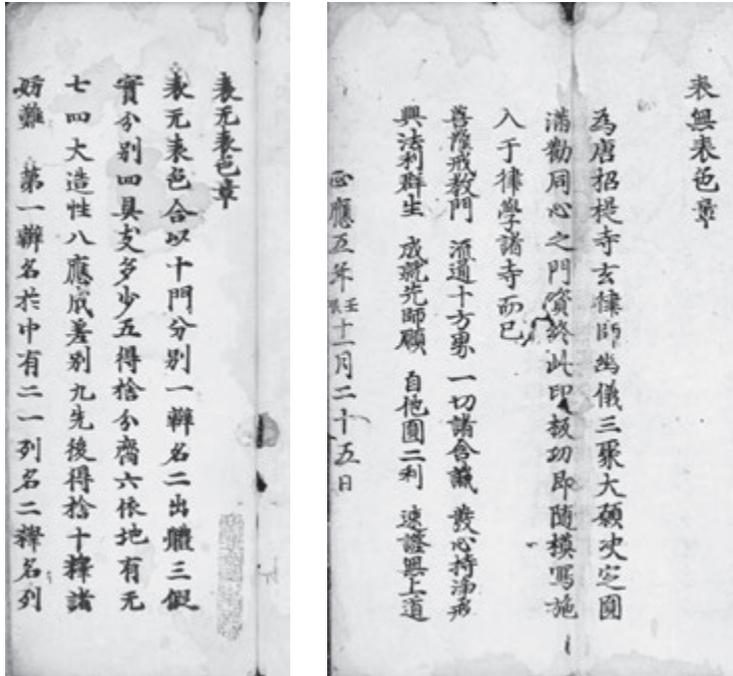
高野山金剛峰寺では平安末鎌倉初期から出版印刷が行われるようになり、その版本を「高野版」と呼ぶ。高野版の伝本には鎌倉期以降のものが遺されているが、展示品もその一つに当たる。毎巻の末にある刊記を見ると、これは鎌倉中期、建長6年から正嘉3年(1254-59)の間に、高野山の^{けんぎょう}検校(一山を統括する僧)や阿闍梨(指導資格のある僧)たちが、1、2巻ずつ分担監修して成った版本であり、宗門の重視する空海の著作を版刻したもの。また本品の末尾には、高野山金剛三昧院の余剰の本を、^{あじやり}運性房に与える旨の墨書や、その他の所蔵した僧の名を留め、本文に詳細に付された訓読の符号(返り点、連合符、音訓送り仮名、ヲコト点、声点)は、これら真言僧の学問の跡を伝えている。本品はさらに、中世以来、華嚴宗、律宗、真言宗を兼ねた学問の寺である久米田寺(岸和田市に現存)に伝わったことが、蔵書印によって知られる。

6. 表無表色章 不分卷

唐 釈窺基撰

正応5年(1292)刊(唐招提寺)

和 大 2帖(110X 593 2)



折本。縹色艶出し表紙(29.3×10.7cm)。本文斐紙、1面5行。無辺無界、字面高さ約23.3cm、每版31行、毎行18字、和様。

本書はもと独立した書物ではなく、慈恩大師窺基ききの主著『大乘法苑義林章』だいじょうほうおんざりんしやう全三十章のうち、だいじょうほうおんざりんしやう 枢要の第十一章を取り上げた版本である。窺基は、玄奘の門下で唯識の学を修めた仏教理論の大家にして、法相宗の大成者であり、『義林章』は『成唯識論述記』じやうゆいしきろんじゆつぎとともに、仏教界で重んじられた(展示2参照)。

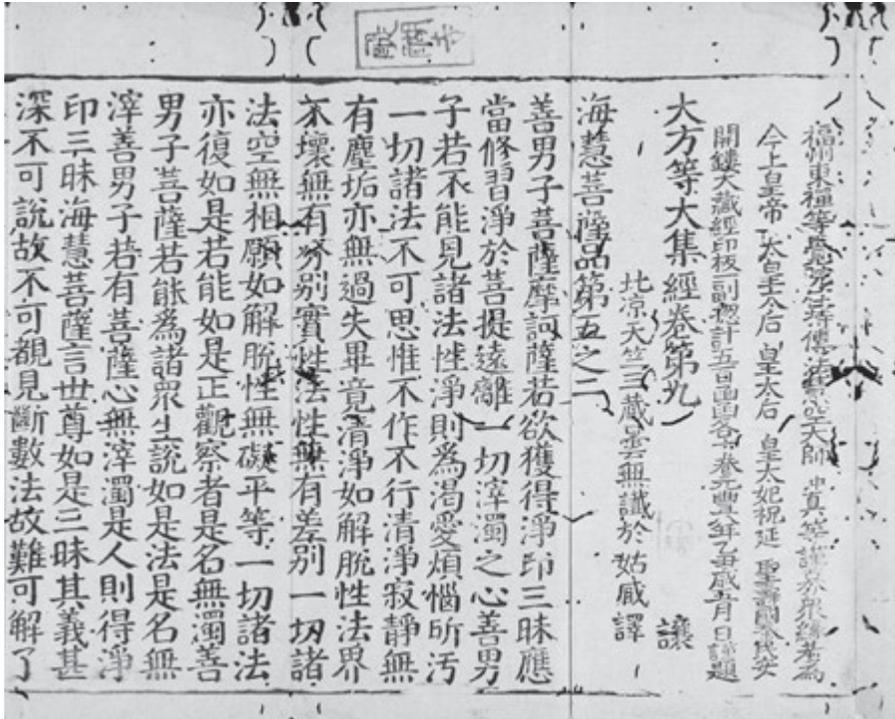
展示品は、奈良時代に鑑真を招いて開かれた唐招提寺において、鎌倉時代後期、正応5年(1292)に出版されたもの。唐招提寺は、戒律に基づく修行生活を重んじた律宗の寺院であるが、鎌倉時代には、真言宗と律宗を融合した西大寺の叡尊の影響下にあった。刊記によるとこの版本は、唐招提寺を中興し正応5年に没した円律証玄の菩提を弔うために、同寺で出版されたものであり、この版本を基にした、さらなる伝写を図るものであった。唐招提寺版の伝存は非常に珍しいが、版式や字様と彫刻した工人の名は、同時期の西大寺版と共通する。また本品には朱墨の訓点が施されているが、これは正安4年(1303)に西大寺の写本と、叡尊の講義や、別の古本の説を勘案して、叡尊の弟子である幸尊が付した点を、元亨4年(1324)にさらに移写したものである。鎌倉時代末の真言律宗の教学と、学説流布のために果たした版本の役割を窺わせる。

7. 大方等大集經60卷 存卷9 海慧菩薩品

北涼 釋曇無讖訳

宋元豊8年(1085)刊(福州東禪等覺院) 崇寧藏本

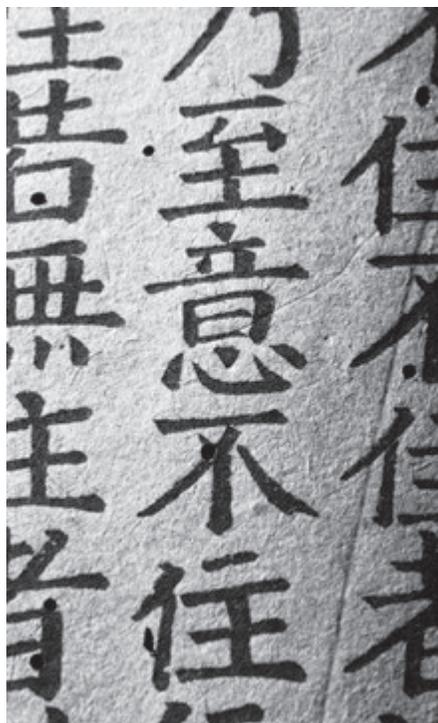
唐大 1帖(110X 523 1)



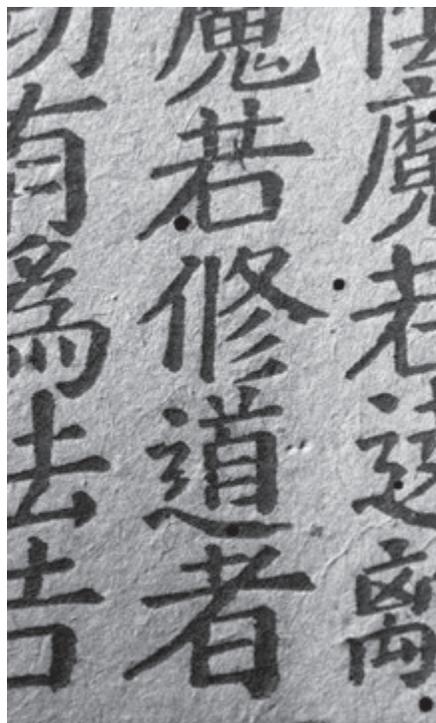
折本(経摺装)。後補標色艶出し表紙(28.9×11.1cm)。本文竹紙、毎紙6面、1面6行。天地単辺(24.5cm)無界、毎版36行、毎行17字、顔真卿体。

『大集經』は4世紀の初め、中国西北部にあった王朝の北涼において曇無讖が翻訳した経を基に、さらに増編されて伝わった經典で、いわゆる五部大乘經の一に数えられる。曇無讖はインドの人、西域を経て中国との間を往還し、北涼を作った匈奴出身の王・沮渠蒙遜に迎えられ、訳経に尽力したが、北魏との争いに巻き込まれ蒙遜に殺害されたという。同じく五部大乘經に含まれる『大般涅槃經』をも訳出した、中国大乘仏教の祖師の1人である。

展示の版本は、北宋末の元豊3年から政和2年(1080-1112)にかけ、中国福州(現福建省)の東禪寺において出版され、南宋から元にかけて増補印造された大藏經「崇寧万寿蔵」(「崇寧蔵」と略称)6108巻の中の1巻である。崇寧蔵は、それまでの勅命による版経と違って、慧空大師冲真ほか、東禪寺歴代の住職が尽力して成った蔵経で、南宋の初め、同じ福州の開元寺で出版された「毘盧蔵」とともに、私版大藏經の先駆けとなった。これらは日本に近い中国東南部の出版であったため、しばしば兩種混合の形で、平安末から室町時代にかけて日本にもたらされ、高野山、醍醐寺、三聖寺、東寺、称名寺、法華山寺などの大寺に取められ、中世の日本仏教に基盤を与えた。



「意」中央から右上「・」



「道」右傍に「・」

展示の1帖は、崇寧蔵すなわち東禅寺版一切経から分かれたもので、印記から京の醍醐寺旧蔵とわかる。醍醐寺の宋版一切経は、文献記録から、建久6年(1195)に、源平争乱後の東大寺再建の勧進で有名な俊乗房重源ちようげんが、入宋帰朝してもたらしたものと考えられている。醍醐寺では、現在でもその大多数に当たる6096帖を収蔵しており(重要文化財、『大般若波羅蜜多経』600巻は開元寺版)、調査記録によると、版本の中に南宋時代になってから修理補刻したものが見出され、その年代は南宋の紹熙2年(1191)におよぶという。また東禅寺版の他の本にある紹定6年(1233)以降の補刻は見られないというから、醍醐寺の本が印造されたのは、この間のことである。慶應義塾図書館の蔵する1帖には、その際の「福州東禅経生王愈印造」の墨印が捺されている。

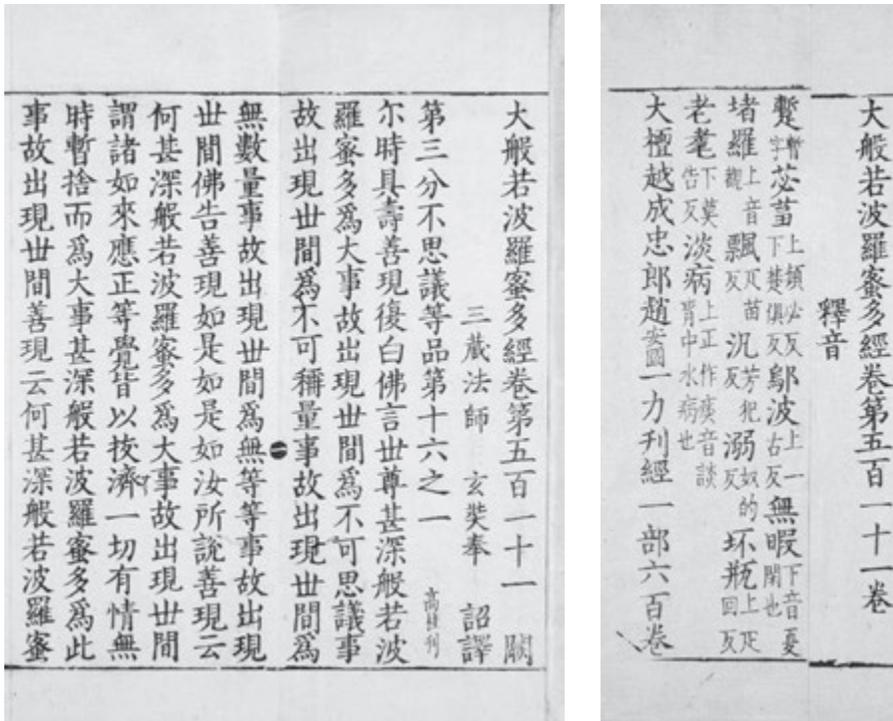
この版本の行間や字間に目を凝らすと、しばしば引つ掻き傷のような「\」「・」「～～」といった形の、わずかな痕跡を認めることができる。これは、角筆と呼ばれる箸状の筆記具で記した符号で、小林芳規・山本真吾両氏の調査研究によれば、漢字の用法、経文を朗唱する際の節回しを示し、展示品に見られる符号は、朝鮮半島や日本で行われたいかなる方式とも一致せず、もとの中国で宋代に付されたものという。この説が正しければ、中国の符号が各地に伝播したことを証明し、醍醐寺に伝わった東禅寺版は中国の寺院で使われていた蔵経を譲り受けたものということになる。なお広範な検証が待たれる。

8. 大般若波羅蜜多經600卷 存卷511 不思議等品

唐 釈玄奘奉詔訳

〔宋末〕刊（〔平江府 磧砂延聖院〕）磧砂蔵本

唐 大 1帖（110X 24 1）



折本（経摺装）。香色艶出し表紙（30.5×11.5cm）。本文竹紙、毎紙5面、1面6行。天地单辺（24.1cm）無界、毎版30行、毎行17字、歐陽詢体。

展示の版本は、南宋から元にかけて、平江府（蘇州）の陳湖の砂洲に建てられた磧砂延聖院（のち延聖寺）において刊行された私版大蔵經である「磧砂蔵」6362巻中の1巻である。磧砂蔵刊行の経緯は複雑で、宋嘉定9年（1219）に『大般若經』600巻の刊行を開始したが、思うように進捗せず、紹定4年（1231）から宋朝宗室出身の趙安国が支援して巻13以降の彫版を強く推進し、淳祐2年（1242）までに『大般若經』の全巻を完成、その他の經典にも着手した。展示品は『大般若經』巻511であるから、趙安国による刊行期間の中、淳祐2年に近い頃の開版と思われる。その後、この蔵經は、モンゴル兵が中国江南を征圧した宋末元初の混乱に際会し、堂舎を焼失するなどして中断を迫られながら、様々の支援者を得て元の中頃まで開版を続け、100年以上の時を費やし、ようやく完成された。

磧砂蔵も、古くから数多く日本に到来しており、展示品には、鎌倉時代の書入れと見られる古い片仮名の音注や、朱の声点が認められるから、そうした例の1つと見られる。また展示7の東禅寺版と同様、角筆による符号も確認され、やはり中国での記入かと推定される。なお『大般若經』については、展示4を参照されたい。

9. 深密解脱経 5 卷 存卷 4 弥勒菩薩問品

北魏 釈菩提流支訳

〔金〕刊 (〔解州天寧寺〕)〔後修〕 金藏広勝寺本

唐 大 1 軸 (132X 108 1)



卷子本。新補黄檗染め表紙 (29.4×22.5cm)。本文竹紙。天地单辺 (21.6cm) 無界、
每版23行、毎行14字。

『^{じんみつげだつぎょう}深密解脱経』は、北魏の末年頃 (6世紀前半)、^{ぼだいるし}菩提流支によって漢訳された經典である。菩提流支は、インド出身の訳経僧で、中国に渡り、永平元年 (508) 鮮卑族の拓跋氏 (のち元氏に改める) が立てた北魏朝の洛陽に入って、永寧寺に住み翻譯に従事した。生涯に39部127卷を訳出したと伝えられる。なお本経には、同じ原本を唐の玄奘が訳した『^{げじんみつぎょう}解深密経』もあり、併せ行われている。

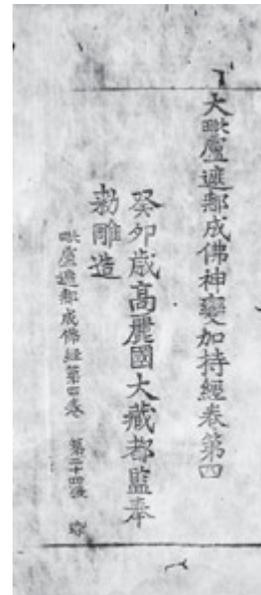
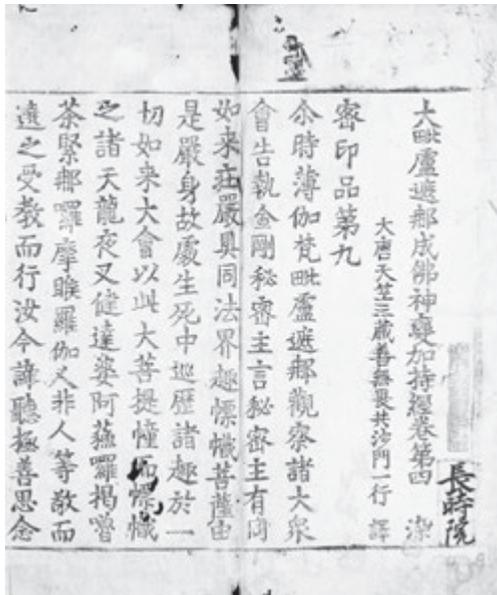
展示の版本は、通説では金朝において版刻された大蔵経とされる「金藏」中の1巻である。金藏は、1933年に山西省趙城県の広勝寺から初めて発見された他、近年チベットからも発見されて (北京・宝集寺旧蔵) 注目を集めた。現在のところ知られるのはこの2本のみ、展示品は、口絵画像の首に「趙城県広勝寺」とあるように、広勝寺本から分かれた巻軸である。本体は現在、北京の中国国家図書館に収蔵する。金藏は、最も古い版本の大蔵経である開宝蔵を基に、解州 (現山西省) 天寧寺の法珍尼が願を發し、約30年をかけて出版、大定18年 (1178) までに完成されたという。印本が献上された後、その版木は北京に運ばれて元の時代に至り、弘法寺において修理補刻と印造が行われた。展示品もこの時期の印造と見られる。金藏は、現在ほとんど伝わらない開宝蔵を、1行の字数もそのままに覆刻した版経として貴重であり、近年には中国で『中華大蔵経』として影印出版されている。なお口絵の釈迦說法図は、明代に付刻されたと考えられている。

10. 大毘盧遮那成佛神變加持經 7 卷 存卷 4 密印品

唐 釈善無畏 釈一行訳

高麗高宗30年(1243)刊(〔江都〕大藏都監)再彫高麗蔵本

韓特大 1帖(110X 29 1)



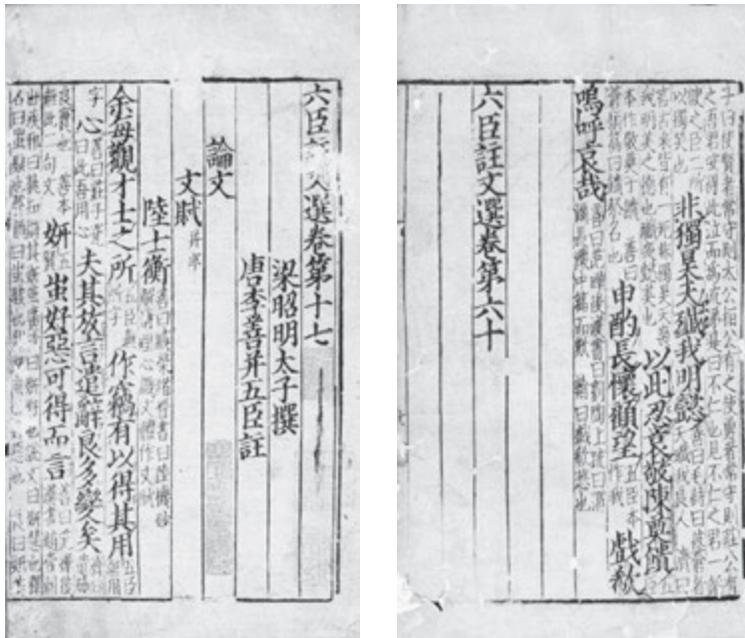
折本(卷子本改装)。後補淡渋引き表紙(30.7×14.7)。本文楮紙、毎紙4面、1面6行、折り幅区々。天地単辺(23.0cm)無界、毎版23行、毎行14字、張付け「毘盧遮那成仏經第四卷 張数 染」。

本經はふつう『大日經』^{だいにちぎょう}と呼ばれる經典で、真言密教の根本經典に当たり、善無畏とその弟子の一行が翻訳した。善無畏はインドの王族出身で、インド諸国を遍歴した後、チベットを経て唐朝に入り、開元4年(716)長安に至り玄宗皇帝に迎えられた。その後、同12年、洛陽の大福先寺で『大日經』の翻訳を行う。これは当時最新の仏教が中国に伝えられたことを意味し、その92年後、長安から戻った空海により、『大日經』に基づく日本の真言密教が開かれた。

展示の版本は、高麗朝(10-13世紀)で作られた大藏經中の1巻である。高麗朝はもともと仏教を重んじ、宋朝が開宝蔵の版刻を成し遂げると、使者を遣わしてその下賜を受けるなど、入手に心がけた。その後、11世紀に北方の契丹が高麗に攻め込むと、その退散を祈願し国都開城で大藏經の版刻を行った。これを初彫高麗版蔵經と呼び、のちに大邱の符仁寺に移されたが、高宗18年(1231)モンゴルの侵略を受け焼失した。高麗朝はその兵を避け、都を江都に移したが、ここでもモンゴル兵の退散を願い、再び大藏經の版刻を計画、初彫本を基にして、高宗23から38年(1236-51)の間に刊行した。展示品は、この時の版本に当たる。その版木は、朝鮮朝になって伽那の海印寺に移され、現在まで遺されている。高麗版大藏經は、中世以来日本にも移入され、各地に散在するが、開宝蔵の系譜を引く上に、校訂が優れていたため、江戸時代になって評価され、近代の「大正新脩大藏經」の底本となった。幸田成友氏寄贈書。

11. 六臣注文選60卷 存卷17・18、41・42、47・48、57-60 梁 蕭統編 唐 李善并五臣注

〔南宋〕刊 唐 大 5冊 (110X 21 5)



冊子本（袋綴）。後補栗皮包背表紙（26.2×16.5cm）。左右双辺（20.9×13.1cm）
有界、每半張10行、毎行18字、柳公権体。線黒口、双黒魚尾間「文（選）幾」、耳格。

中国南北朝時代について、文雅の栄えた南朝に注目する時、歴代の王朝を数え六朝時代りくちようと称することがある。六朝の第五番目、梁の時代に、昭明太子しょうとう蕭統の命により、それ以前の文学の名篇を集成し、文体ごとに分類して編まれた書物がこの『文選』で、当初は30巻に分けられた。成立以来、本書は広く流行したが、当時から見ても難解な文章が含まれていたため、隋から唐にかけて『文選』を注解する学問が盛んになった。その中で、初唐の李善が付けた注が高く評価され、本文とともに転写されたが、文字の量を増したため、巻数は倍の60巻とされた。また李善注は、字句の典拠のみを挙げるなど、その理解に高い学力を要する内容であったため、玄宗皇帝の命により、呂延祚以下、五人の臣下が共同で、補注とパラフレイズを宗とする五臣注を作った。宋代になると冊子体の版本が行われ、書物の格納する文字の数が増えたため、傾向の異なる李善注と五臣注を、合刻して出版するようになり、以後、この六臣注60巻の形が主流となった。

展示の版本は、おおよそ南宋中期の出版で、版式や字様から、当時商業出版の中心であった建陽方面（現福建省）の版本と見られる。六臣注『文選』としては、最古版の1つ。『文選』は奈良時代から日本の官僚や学者に学ばれ、漢文の教科書として尊重されてきたが、平安中期以降は、こうした宋版を輸入して用いた。展示品にも、室町時代以前と思われる訓点の書入れがあり、伝統的な『文選』解釈の流儀を伝えている。近代の取書家、伊佐早謙の旧蔵書。

12. 広韻5卷

宋 陳彭年等奉勅重修

〔宋末元初〕刊

唐 中 5冊 (110X 594 5)

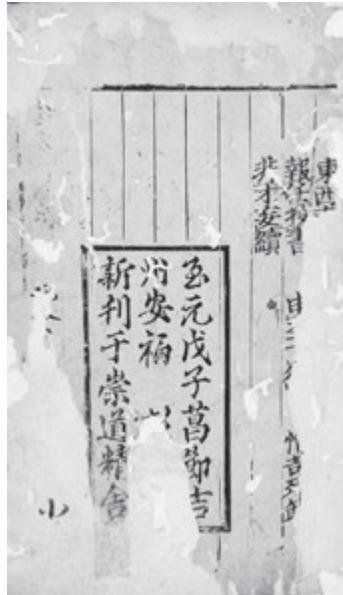


冊子本（袋綴）。後補標色艶出し表紙（19.3×12.0cm）天地裁断。四周双辺（17.1×10.3cm）有界、每半張11行、毎行小31字内外、柳公権体。線黒口、上象鼻大小字数、双黒魚尾間「韻幾」。

漢語の音韻は多岐にわたるが、いずれも韻母（日本語の母音のような発音の響き）を1つ含んでいる。また漢字は1字1音を単位としているので、これを韻母によって分類することができる。そして漢字は特定の意味に結びついているから、分類された字に付してそれぞれの意味を説明すれば、韻引きの辞書が出来上がる。この方式による伝統的な辞書を、「韻書」と呼ぶ。韻はまず、アクセントなどを示す四声によって大きく分類され（平声〈上下〉と上・去・入声）、その中に韻部が並び、個々の文字が振り分けられる。韻部の名称には所属の文字を1つ挙げ、上平声「東」韻から始まることが多い。韻書は六朝時代の末に編まれ、隋唐時代に『切韻』が流布した。しかし音韻は時代や場所とともに移り変わるため次第に修正が加わり、宋代に206韻部の『広韻』の形に固定された。これはのちに簡略化されつつ、科挙の答案や一般の韻文を綴る際の規範となった。現在では、漢語中古音の資料として重視される。

辞書は、その需要の多きから出版の中でも特有の地位を占めるが、この『広韻』も、宋代から版刻が数多い。展示の版本は、注釈本文を簡略にして版面を縮小、常用に便利な体裁とした通俗的な版本であろう。当時、識字層の拡大しつつあった情勢を窺わせる。版式や字様から見て宋末元初、建陽周辺の版刻と推される。この種の11行本は他に知られない。

13. 史記130卷 欠59卷 漢 司馬遷撰 劉宋 裴駙集解 唐 司馬貞索隱 張守節正義
元至元25年 (1288) 刊 (吉州安福〔彭寅翁〕崇道精舍) 唐 半 28冊 (57X 52 28)



冊子本 (袋綴)。新補茶色表紙 (23.0×15.6cm)。本文竹紙、裏打ち改装。左右双
辺 (18.1×12.1cm) 有界、每半張10行、每行21字。線黒口、上象鼻大小字数、双
黒魚尾間「史 (記) 幾」、耳格。

中国歴代王朝による正史の編集は『史記』を範とするが、本書はもと司馬氏の家業に出たもので、以後の正史とは編集の意図が異なる。収録の範囲は、上古より前漢の武帝の元狩元年 (前122) におよび、本紀12卷 (帝王の記録)、表10卷、書8卷、世家30卷、列伝70卷 (諸家の伝記) から成る。その構成は「紀伝体」と呼ばれ、後世に学ばれた。六朝時代には宋の裴駙の注釈『史記集解』が作られ、唐代には司馬貞の『史記索隱』、張守節の『史記正義』が併せ行われた。わが国でも奈良時代以前から、律令官僚によって『史記』が学ばれ、当時行われた写本の残巻も遺されている。平安時代には大学寮の紀伝道の教科書とされ、表現の淵藪となった。

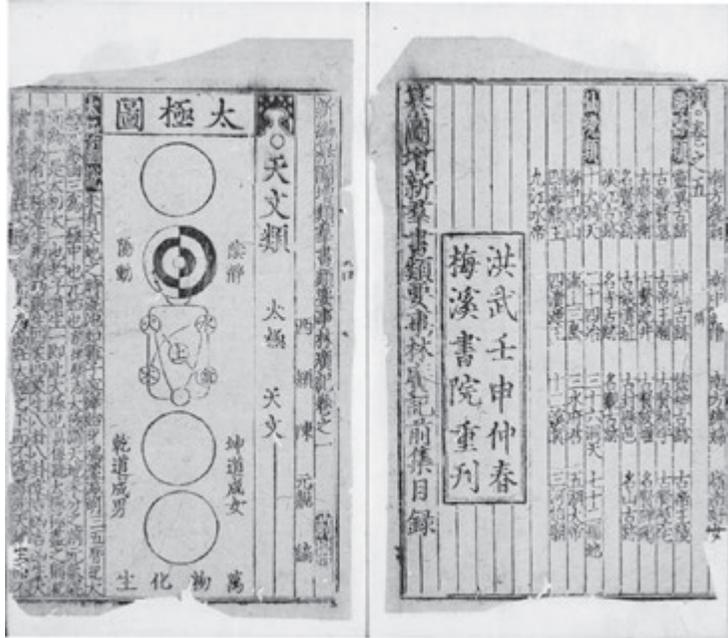
『集解』『索隱』『正義』は併せて「三注」と呼ばれるが、宋代に『史記』が出版されるようになると、慶元年間 (1195-1200) に黄善夫によって三注合刻本が刊行され、広く流通した。ただし三注本は、重複を避けて記事を省略する場合があります、しばしば大胆に注釈を削ったため、原本の面目は損なわれている。展示の版本は、この黄善夫本を継承したもので、江西吉州路安福県崇道精舍の彭寅翁が重刊した。この版本は、室町時代以前からわが国にもたらされ、五山僧や好学の士に用いられた。室町後期を代表する公家の学者、三条西実隆が本版を伝写している他、展示品にも、五山僧の書入れと思われる訓点や補注が夥しい。これらは五山僧が、博士家の訓説を移写吸収する過程を示している。近代の収書家、伊佐早謙の旧蔵書。

14. 新編纂図増類群書類要事林広記 6集35巻

宋 陳元靚編

明洪武25年（1392）刊（梅溪書院）

唐 大 6冊（1005 574 6）



冊子本(袋綴)。後補丹表紙(25.3×15.7cm)。本文竹紙、裏打ち修補。四周双辺(20.0×12.8cm)有界、毎半張18行、毎行30字。細黒口、双黒魚尾問題「事前幾」等。

この『事林広記』は、6集35巻からなる通俗の類書、百科事典の類である。類書はもともと知識を補うための二次的編集物であるが、利用の幅が広がったため、宋代に商業出版が浸透し文字の大衆化が始まると、しばしば版刻の対象となり、新たな編集も増加した。宋代の類書では、編集の工夫に関心が集中し、書物の構成を知らせ、読者の視線を誘導するように標識を強調し、卷子本以来の割付けに変化が加えられた。その長い題目は編集上の努力を広告するもの、集を区切って連ねる行き方には、経費のかかる版行の息継ぎを短くする効果がある。

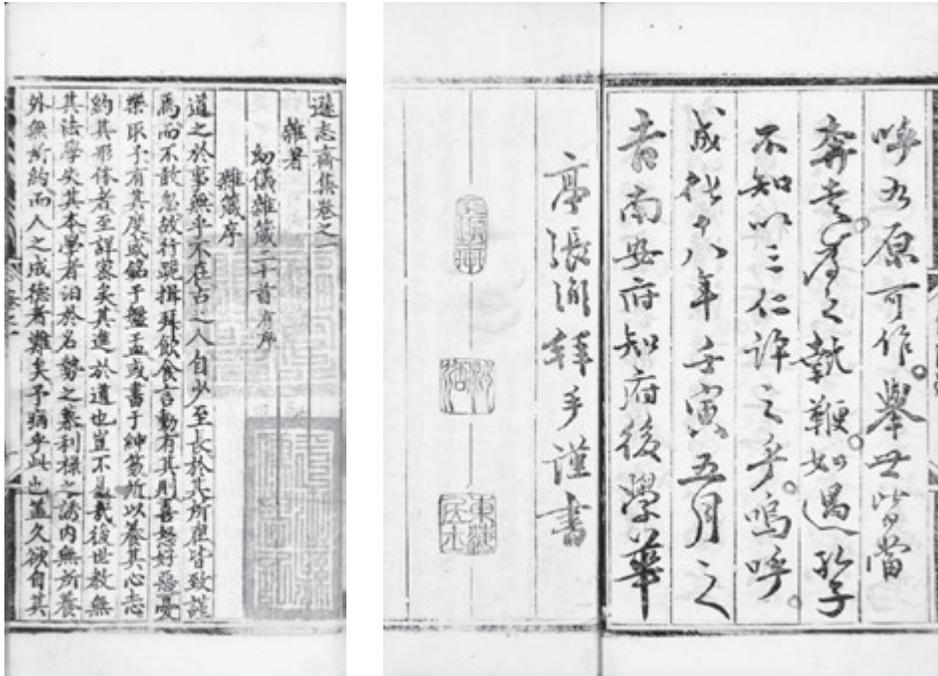
『事林広記』は、宋末の類書の中でも一層通俗的で、事物の解説に図版を用いたことが特徴である。記事内容は日常生活に密着し、新興識字層の利用を想定したものであり、時々の情勢に柔軟に応じ、版刻を重ねるたび、元代に行われたモンゴル文字の書き方を加えたり、明代の行政区画に合わせたりと、装いを改めた。現代からは、当時の社会状況を窺う貴重な文献となる。展示の版本は、明初の出版であり、その内容はいまだ元代の内容を主とする。出版者の梅溪書院は、儒学の研究教育組織である「書院」の名を用いるが、実質は元代から商業出版を続けている書店である。この版本は朝鮮や日本に伝わり、韓国学中央研究院にも同版本を収蔵する。義塾図書館収蔵品は、五山の一に数えられる東福寺龍眠庵の旧蔵、江戸前期の東福寺の住持・太華令瞻の手沢本である。義塾教員であり元朝史研究を開拓した田中萃一郎氏の寄贈書。

15. 遜志齋集30卷 拾遺10卷 附1卷

明 方孝孺撰

明成化18年（1482）跋刊

唐 大 16冊（110X 134 16）



冊子本（袋綴）。新補香色表紙（26.5×15.0cm）。本文白棉紙。四周双辺（20.8×12.6cm）有界、每半張10行、每行22字、写刻体。粗黒口、双黒魚尾。

本書の著者^{ほうこうじゆ}方孝孺は、明初に活躍した儒者で、^{せつこう}浙江台州府寧海県の出身、明の太祖洪武帝の遺命により、二世建文帝の顧問に登庸された人物である。建文帝は洪武帝の孫、皇太子であった父の死を受け、祖父の没後に即位した。方孝孺はその南京の朝廷に招かれ、儒者の理想である徳治を実践しようとした。しかし建文帝は、北京にあった叔父の燕王、のちの永楽帝に叛かれ、4年にして皇位を奪われる。方孝孺は燕王に抵抗し、即位後も懐柔を受け容れなかったため、建文4年（1402）に処刑されて節に殉じ、親族や門人を含む十族までも葬られる惨劇の主人公となった。このために永楽年間以後、その著作は外見を憚るものとなったが、なお文名が高く、天順年間（1457-64）臨海県学教諭の趙洪がその遺文を集めて刊刻したのを始め、明中期以降にはかえって版刻が相次いだ。

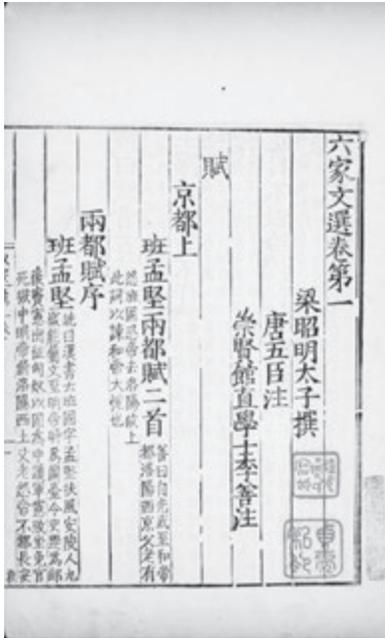
展示の版本は、趙洪の版本を基に、黄孔昭^{しやたく}と謝鐸が共同で編集を加えたもので、これを聞いた寧海県令の郭紳が、地元の先学を顕彰するために出版を申し出、さらに増補を施した上、成化18年（1482）頃に発刊、本集流布の原形を成した。展示品には、同じ浙江の平湖県儒学の印記があり、周辺の県の学校に頒布されたことを窺わせる。しかし江戸時代までに日本人の学ぶ所となって、王可大の編刊した別の明版と比べ、朱の校正を加えた跡が見られる。

16. 六家文選60卷 首目1卷

梁 蕭統編 唐 五臣并李善注

明嘉靖13-28年 (1534-49) 刊 (呉郡 袁褰嘉趣堂)

唐特大 31冊 (110X 505 31)



冊子本 (袋綴)。香色表紙 (33.7×23.3cm)、淡青刷り題簽。本文白棉紙。左右双辺 (24.0×17.8cm) 有界、每半張11行、每行18字。白口、中間「文選幾」、下辺工名。

梁の昭明太子^{しょうとう}蕭統が編集させた『文選』は、唐代に注釈が付され、宋代からは李善注と五臣注を合刻した六臣注本が盛んになった。元代までこの形での刊行が続き、明初に一時、版刻が途絶えるが、明中期頃からまた元版の覆刻が行われ始める。展示の版本は、呉郡 (現蘇州市) の袁褰^{えんけん}が、家蔵の善本の中から宋代の蜀広都県 (成都市) 裴宅刊本を選び、善本普及のために私財を投じ、16年をかけて複製したもの。元版以下の覆刻本を飛び越え、本文のすぐれた宋版による複製を意図した所に特徴がある。今日、もとの宋版は台北の故宮博物院に伝わる (昭仁殿旧蔵) が、すでに不完全である。本版はその精善な覆刻本で、この本によって初めて、宋版の全体像が知られる。

本版の刊刻事情を記した跋文には、袁家百年におよぶ収書の結果、『文選』には五臣、六臣、李善本、巾箱、白文、小字、大字と、数十種におよぶ収蔵があったと記されている。この記事は、明中期以降の江南における、蔵書的一端を教える文言として注意される。またそうした個人の蔵書家が、学界や読書界の利益のために、善本の版刻普及を企てていることは、出版技術の一般化と江南の士大夫の経済力が、出版に堪えるだけの段階に近付いたことを伝える。袁氏刊行の『六家文選』は、明代後半、16世紀における出版史の転換を象徴する版本といえる。民国時代の『文選』学者、周貞亮の旧蔵書。

17. 新刻古今玄機消長八譜 8 卷 欠卷 7・8 欠名撰

〔明〕刊（劉龍田） 唐大 1冊（74 102 1）



冊子本（袋綴）。新補香色表紙（24.9×14.1cm）。本文竹紙、裏打ち修補。四周双辺（19.5×12.2cm）有界、每半張11行、每行25字。白口、上辺題「消長八譜」、単黒魚下題「琴譜幾七」等。

題目の「消長」とは、内容から推して「退屈しのぎ」「暇つぶし」の意であろう。本書は琴、囲碁、将棋、麻雀、双六、蹴鞠などの遊戯を取り上げ、その沿革や法式を説明したものである。八譜とあるからには、元来8種の遊戯を説いたと思われるが、展示品は6種に止まり末尾を欠く。本書は他に伝本を聞かないため、残り2種が何かわからない。恐らくは投壺や射覆の類であろうか。作者も不明、封面に劉龍田の発行とある。版式や字様から明の万暦年間、16世紀前半頃の出版と見られる。遊戯娯楽の解説書が版本となることは従来になく、中国の出版状況の変化を窺わせる。

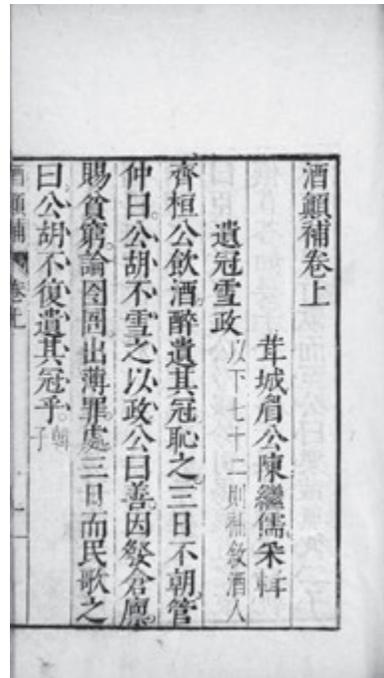
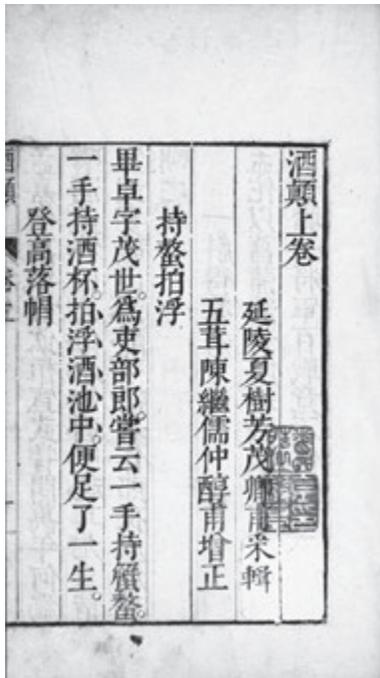
この版本の封面は、「銷長八譜」の題目の左右に、大書して門柱に掛ける「聯」をかたどった牌記を設け、表紙を繰る者に雅趣を呼び起こす。また遊戯ごとに首に扉絵を付し、歴世の貴人が遊戯にふける様を描き、本文中にも図解を多用する。筆跡の写刻や版画など自在の刀法をもって目を奪い、書物を手に取らせる技術は、商業出版の発達深化を伝えている。

18. 酒顛 2 卷 補 3 卷

明 夏樹芳撰 陳繼儒編 (補) 陳繼儒撰

[明万曆40年 (1612) 序] 刊

唐 大 1 冊 (151 32 1)



冊子本 (袋綴)。後補黄檗染め草花文空押し朝鮮表紙 (26.3×16.5cm) 五針眼。本文竹紙。単辺 (18.4×11.7cm) 有界、毎半張 7 行、毎行 16 字、方刻体。白口、上辺題「酒顛(補)」、単線黒魚尾。

この書は、古今の逸話の中から酒をめぐる話を集めた、隠逸趣味的な著作である。この書を作った夏樹芳は、氷蓮道人と号する明後期の文人で、江陰出身の挙人ながら仏教に通じた隠士、出版にも手を染めた人であるが、本書に注目し世に送ったのは、これも明末の文人として著名な陳繼儒である。陳氏は江蘇華亭の出身、おおよそ万曆から崇禎年間にかけて、16世紀後半から17世紀前半に活躍した人で、はじめ国立大学の学生となり博学をもって鳴らしたが、詩文や書画をよくする一方、儒学や官途には背を向け、陳眉公と号して著述を主に活動した。編集や批評を手掛け、自ら出版した書物も数知れず、出版界の重鎮として隠然たる勢力をもっていた。この『酒顛』も、そうした編刊書の一つであろう。

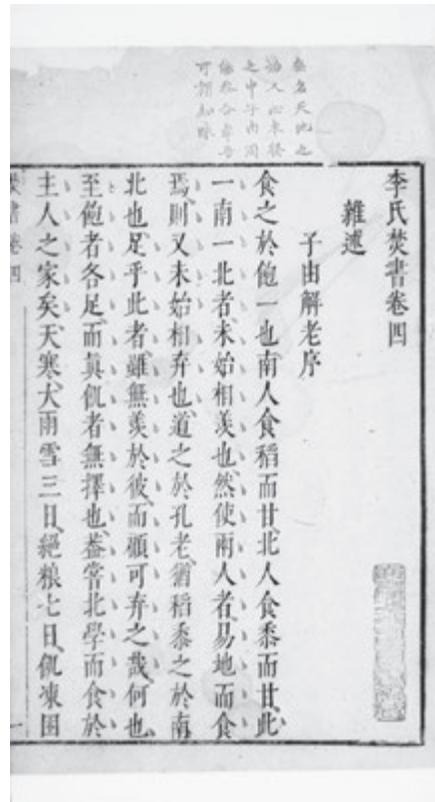
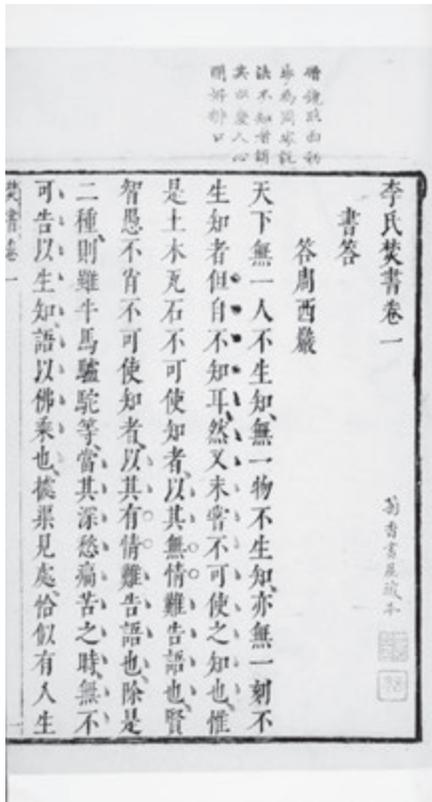
展示品は首の「酒顛題詞」の末尾を欠いているが、これは他本によって確認すると、万曆40年 (1612) の刊序があり、その頃の版本と見てよい。朝鮮朝に伝来した本で、陸軍出身ながら近世史伝研究に通じ、和学者に転じた渡辺刀水 (金造) 氏の寄贈書。義塾図書館では、本書の姉妹編で『茶董』と称する版本をも収蔵している (準貴重書、CL・C・9-3・78)。この本では、陳氏と同郷の先輩である董其昌とうきしやうがその序を揮毫した。

19. 李氏焚書 6 卷

明 李贄撰 欠名批

〔明末〕刊 (朱墨套印)

唐 大 6 冊 (110X 136 6)



冊子本(袋綴)。新補藍色表紙(28.6×18.1cm)。本文白棉紙、金鑲玉装。単辺(19.8×13.7cm)無界、毎半張9行、毎行19字、方刻体。白口、上辺題「焚書卷幾」。

この書は、ただ「^{ふんしよ}焚書」とも称する、李卓吾(名は贄^し)の代表作である。李卓吾は地方官の出身であるが、王陽明の創始した陽明学を継承して、より先鋭な立場をとり、官界を去って麻城(現湖北省)の芝仏院に隠居、明初以来の正統的な学問である朱子学に反対した。本書はこの時期に書かれたもので、書簡や雑著、詩編からなるが、「真心」「童心」を重んずる李卓吾の立場を明らかにした内容、自ら「^や焚き棄てるべき書」と命名した。挑発的な態度から時人によって異端視され、実際後年には禁書として破却されたが、万曆当時は官界や知識人の間にも理解者があって、展示の版本の如き、翰林修撰を務めた^{しやうこう}焦竑の序文を付して刊行されている。

この版本はいわゆる朱墨套印本であり、白棉紙の地に墨印した本文の他、傍点や圈発、欄上の批評を重ねて朱印したものである。万曆末から天啓、崇禎年間にかけて、呉興(現浙江省湖州市)の^{びんせいきゆう}閔齊伋や^{りやうもうしよ}凌蒙初のような専門の出版者があらわれ、藍紫緑と色種を増した套印本が作られて、明末の版本を彩った。塾員で編集者の大塚英雄氏の寄贈書。

20. 新刻増補批評全像西遊記20卷 (100回)

欠名撰 欠名批

明崇禎4年(1631)刊〔建陽〕閩齋堂楊居謙

唐半 8冊(110X 553 8)



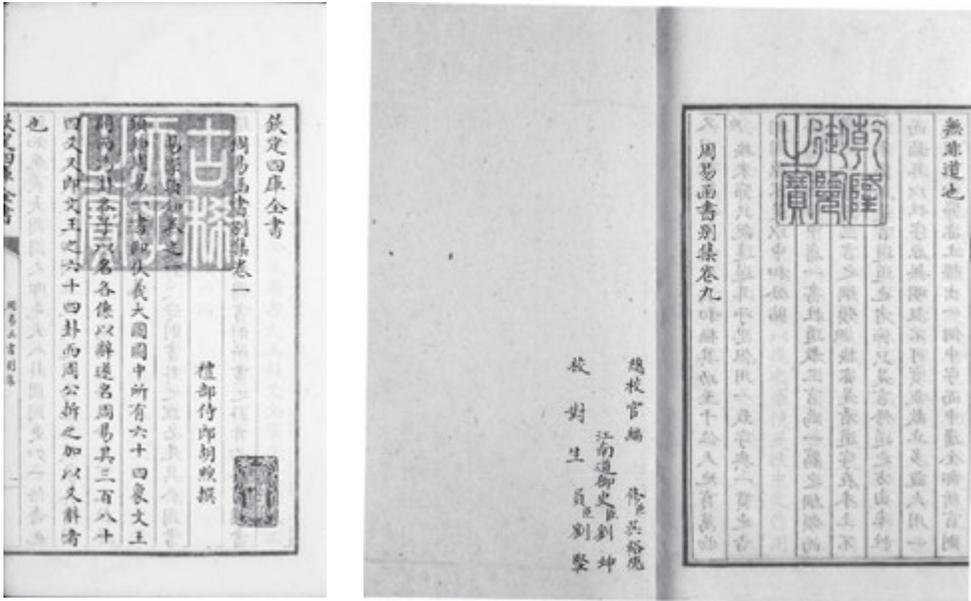
冊子本(袋綴)。後補香色表紙(23.5×13.5cm)。本文竹紙。単辺二層(4.9+16.2×12.0cm)無界、毎半張15行、毎行26字、方刻体。版心白口、上辺題「全像西遊記」。

中国の長編小説として名高い『西遊記』は、唐代の僧、三蔵法師玄奘のインド旅行と取經の事実に基づくが、孫悟空の活躍など種々の奇談や潤色で覆い、架空の物語に仕立てたものである。宋末までに街頭の講談本として出版され(『大唐三蔵取經詩話』等)、金元の頃には戯曲の題材に取られて、すでに「西遊記」と称せられ、現在知られる筋書きに近づいた。小説の『西遊記』がほぼ形造られたのは、明中期から万曆にかけ、書生や下級地方官として過ごした呉承恩によってであるという。呉氏の関与がどの程度であったのか、諸説あり判然としないが、無名の作者によって語り継がれてきた筋であるから、もともと特定の撰者はいないともいえる。

展示の版本は、100回本の小説『西遊記』を簡略に書き改め、すべての頁に挿し絵を付けた(全像)もの、明末の建陽(現福建省)の出版に特徴的な「上図下文」の方式である。また、本文に対する批評も付される(増補批評)が、これは当時流行の、李卓吾の小説批評を模倣したとの触れ込みで、陽明学の進展が、娯楽小説の潤色にまで結びついたことを伝える。この『西遊記』や『三国志演義』『水滸伝』のように、回を区切って筋を構成する小説を「章回小説」といい、この形式は日本の曲亭馬琴の読本や、その他の戯作、明治の小説にまで影響を及ぼした。義塾教員で中国文学者の奥野信太郎氏の旧蔵書。

21. 周易函書別集16卷 欠卷15・16 清 胡煦撰

〔清乾隆47-52年（1782-87）間〕写 欽定四庫全書本 唐 大 7冊（110X 504 7）



冊子本（袋綴）。緑絹包背表紙（27.7×17.2cm）。本文太史連紙。四周双辺（20.2×12.5cm）紅格、每半張8行罫紙、每行21字写。白口、上辺「欽定四庫全書」、単線紅魚尾下「周易函書別集」。

清朝の最盛期といわれる康熙帝、乾隆帝の治世には、皇帝の命による大規模な編集事業が次々と行われた。その中で最大の事業は、乾隆37年から47年（1772-82）にかけて行われた四庫全書の編集である。これは中国に伝える重要な書物をすべて集めようというもので、全国から書物を集めて検討し、叢書に収めるかどうか吟味した上、採用の書物には詳しい校勘を加え、決まった格式の清書本を作った。漢籍を經史子集の4部に分ける伝統的な分類法に従い、それぞれに書庫を設けて写本を収めたことから、集成された叢書は「四庫全書」と名付けられた。この四庫全書は約8万巻に上り、乾隆47年（1782）に第1部が完成、經史子集ごとに緑紅藍灰の4色の絹表紙を掛けて保存された。さらに6部の写本を作り、中国各地に専用の蔵書閣を築いて収めたが、7閣のうちの3閣は、清末民国期の争乱によって焼失し、浙江省の杭州に置かれた文瀾閣本は、かなりの数が流出した。

康熙朝（1662-1772）の高官であった胡煦の撰述した『周易函書』は、儒教の經典の筆頭に挙げられる『周易』の注書であり、もと正集99巻を存したが、刊行される前に散佚、自ら要約した簡略本のみが遺された。展示品は、これを四庫全書に収めた際の正式の写本である。經部の書であるから緑絹の表紙が掛けられ、首尾に「古稀天子之宝」「乾隆御覽之宝」の印記（文瀾閣本に同じ）、首には詳校官の龔驂文、末尾には総校官の吳裕徳以下の名が列記されている。

II 日本漢籍の来源

1. 漢籍到来 — 上代・中古（5～10世紀）—

漢籍がいつ頃輸入され日本人の目に触れるようになったのか、その正確な時期を知ることは、すでに不可能であろう。文献の上では応神天皇の世、百済の和爾（王仁）が『論語』と『千字文』を伝えたというから、この頃までに漢籍の伝来があったとされる。応神天皇の世とは、いまだ神話の世界を脱し切らず、正しい紀年も定かではない。天皇の世代からいって、おおよそ5世紀以前と見られるが、これは中国の南北朝時代に当たっている。また5世紀には、刀剣の銘など日本において漢文を使用した証拠があるし、仏教の伝来は6世紀、朝鮮半島経由とされているが、その經典は漢訳仏典であり、すでに漢文の理解が深まっていたと思われる。この間、中国大陸や韓半島との使節の往還や、渡来人の帰朝が多かったから、漢籍受容の機会も増したに違いない。中国南北朝時代の漢籍といえば、紙本墨書の卷子本を器とし、その中には仏典も多く含まれていたであろう。飛鳥時代の聖徳太子の著作とされている『法華義疏』などの仏書の受容には、すでに高度な漢文の知識が前提とされている。7世紀以降、大和朝廷は遣隋使を派遣して中国と正式の交流を持ち、留学生の往来もあったから、漢籍の移入はますます広範になったと思われ、現に7世紀末の日本の書写と見られる仏典も伝わっている。8世紀に成立した令制には、「五經」その他の儒教の經典や『文選』など、学ぶべき漢籍の書目が列挙され、奈良朝ともなれば実際に「正倉院文書」や「平城京跡出土木簡」中に、漢籍を学んだ証拠は跡を絶たず、ついには『日本書紀』など、多くの漢籍に典拠をもつ書物が日本人によって書かれるに至った。日本伝来の漢籍の実物についていえば、奈良時代を通じ国家的な庇護のもと、写經生の手によって何度も一切經の書写奉納が繰り返され、多数の經卷が今日に遺されている。一般の漢籍でも、正倉院に伝わる慶雲4年（707）以前書写の王勃の『詩序集』は、色麻紙に流暢な筆致で記された華麗な卷子本であって、中国南朝以来の洗練を経た書物が、隋唐を経て日本にも流入していたことを知らせている。聖語藏や、奈良の諸大寺に伝来した隋唐や新羅・奈良朝の写經は、この間、書物による結びつきががいに強かったかを教えている。

古代の学制は官僚養成という目的に伴い、中国唐代の制度をまねたものであったから、政治理念の根本を成した儒教の經典を学ぶことが課業の中心であった。これに加え、鑑戒の思想に立ち、前朝の歴史を書き継ぐため「三史」（『史記』『漢書』『後漢書』）に学び、さらに「文章經国」と称し、すぐれた政治の執行を整った文言で飾るという発想のもと『文選』や最新の文学に学び、美しい漢文で文書や記録を綴る習慣が確立された。官僚の他、仏教の僧侶たちは、先輩の学僧や来朝した新羅の僧侶に漢文を学び、最新の教学研究に力を尽して漢訳仏典を読み解き、朗唱した。このような学問の結果、日本人は漢文を用いて記述する能力を蓄えた上、従来は日本語の音を表記する文字を持たなかったものを、漢字の音訓を借りて日本語を音写する技術、いわゆる万葉仮名の表記法を編み出した。また漢文解読の過程は、符号を使って書物の行間に記されるようになったが、漢語を日本語に転訳する際、漢語と日本語の語順の違いを表す返読符号を加え、また漢語にはない助詞や用言の活用語尾を補記する必要を生じ、決められた位置に星点を付して示す方法、いわゆるヲコト点や、万葉仮名の省画体である片仮名の表記

を獲得した。これらの符号は、奈良朝末から平安初期以降の多くの漢籍に見え、角筆と呼ばれる箸状の筆記具、白墨や朱の細筆を用いて書入れられた。特に奈良時代以前からの伝統がある諸大寺で用いた仏典には、この種の書入れが数多く見られる（展示1）。近年、これらの符号の一部は、新羅經由で韓半島の方法に学んだものとする説が提出されている。この時期までに輸入された写本のうち、経史の書や『説文解字』『玉篇』『淮南子』『世説新書』など、今なお日本に現存する残巻は、中国にはほとんど残らなかった唐代写本の伝世品として貴重視され、これらの「唐鈔本」を伝写した日本の写本も、奈良時代書写の『漢書』『瑠璃集』、平安時代書写の『史記』『文選』『白氏文集』『蒙求』など、元来の面目を伝えるものとして代わるものがない。平安時代には遣唐使や留学僧、商船の往来に従い多数の漢籍が輸入され、その盛んな様子は、嵯峨天皇時代の宮中の漢籍目録である『日本国見在書目録』に著されている。また漢文訓読のための表記法が確立し、中央の国立大学では明経科、紀伝科などの専門が生まれ、いくつかの家が歴代の博士を出し、独自の説を講じて学問を継承した。漢文訓読の型は、家により若干の差を生じていたが、平安末に向け、漢語の音写を避けて和訓を多く用いる傾向にあった。これらは博士家の訓法として固定され、天皇や貴顕のために講ずる機会を除き、秘説として温存されるようになった。この状況は中世を通じて長く続き、秘説を付した証本とともに家々に伝わった。

2. 版本普及の初歩 — 中古・中世（10～16世紀） —

平安時代の初め、遣唐使とともに留学した僧侶たちは、新しい仏教思潮を学んで天台宗、真言宗を起し、広く信仰を集めたが、唐末五代の混乱期には遣唐使も廃絶され、公式に留学する者もなくなった。しかし永観元年（983）、東大寺の僧・裔然が建国後まもない宋朝に入るなど、平安中期には寂照、成尋と相次いで、商船に乗り込み入宋する者が現れた。裔然は宋の太宗に謁見し、大蔵経を下賜され帰国しているが、この大蔵経とは、刊行されたばかりの版経、開宝蔵を指すと考えられる。また入宋僧の成尋が記録した『参天台五台山記』には、版本の入手を示す記事が散見され、これが日本にもたらされ、最新の文物として歓迎された様子が、藤原道長の日記『御堂関白記』に見える。一方、同じ『御堂関白記』に、「摺り経」と称し従来の写経を版経に代え、多数の経巻を用いた供養の行われたことが見え、平安時代の版経の実物も伝来する。特に奈良の興福寺で出版した仏典には「春日版」と呼ばれる平安後期以降の版本が数多く伝わる。これは唐代に成立した仏典版刻の風潮が、わが国に伝わったものと解され、もともと写経の代替の意味があったから、筆写の卷子本に似せた様式を備えている（展示2-4）。また平安末から鎌倉時代にかけて、入宋僧や宋商の仲介によって版本の輸入が拡大していったことは、諸家の記録や目録に見える他、鎌倉時代の蔵書を今に伝える東福寺普門院蔵書、金沢文庫旧蔵書などによって、その実情を確かめることができる。さらに鎌倉時代には、南都の大寺や高野山などの有力寺院が、自らの教学振興のために、經典や注釈、祖師の著作などを出版する動きが広がり、春日版に加え、高野版、東大寺版、西大寺版、唐招提寺版、泉涌寺版などが開版され、印刷出版が日本の仏教界に普及した（展示5・6）。これらの鎌倉時代の版本を見ると、すでに卷子本や折本の形を脱し、「粘葉装」と呼ばれる草子式の装訂を前提とした版刻も現れている。ただこれら中世の出版物は、宗門の書物を複製し、内部での使用に便宜

を図るのが目的であり、広く知識層一般に向けて刊行されたものではない。一方、博士家の写本は、家説の訓法や注説を伴う秘巻として写し継がれ、なお新渡の宋版本によって校合を試みる段階に止まっていた。

鎌倉時代、新たに興った宗派の最大のグループに、禅宗の教団が挙げられる。禅宗は平安末鎌倉初期の入宋求法にっそうぐほうの末にもたらされ、達磨大師以来の師資相承ししそうしやう、師匠と弟子の間の直接の伝法が重視されたから、中国に渡って名僧に弟子入りすることがしきりに行われた上、禅宗に帰依した鎌倉幕府に招かれたり、宋末の戦乱を避けて渡ってきたりと、中国禅僧の来朝するケースが重なって、日本の禅宗寺院にも、宋元時代の寺院生活がそのまま移植された。禅宗では論理的思考よりも経験的悟入を重んじ、寺院生活や師弟の対話の中に悟りの契機を見出す習いであったから、悟入者の体験や言行に親しむ風潮が生じ、先師の語録を書き止め、参考に供する習慣があった。また中国の禅宗は、朝廷を支える士大夫しだいふに支持を求め、その子弟を教団に吸収したから、自然にその趣味を共有し文人の雅交を身につけていた。そこで中国の禅宗寺院では語録や文集を出版することが行われ、世俗の漢籍を学ぶことも常態となっていた。鎌倉末までにはこの風習が日本に移植され、教団生活の中で出版が行われるようになる。当初は、祖師にあたる中国僧の語録をそのまま複製し、純中国風の宋元版の覆刻ふつこくが主であった。中国の禅宗は朝廷の帰依を得て、官立の寺院を教団の中心としたが、その中で最も有力な寺院を「五山」と称し、その他の寺院が五山の下に編成される組織をもっていた。この五山制度は日本でも学ばれ、武家や公家の庇護のもと、南北朝時代までに京・鎌倉にそれぞれ五山を組織した。この制度に組み込まれた禅僧の社会を、五山禅林と呼ぶ。五山の僧侶たちは鎌倉・室町幕府の帰依を得て、その漢文解読能力や表現能力を用い、中国通として将軍家の公私の活動に参加する習慣となったため、漢籍一般の理解が必須の教養と位置づけられ、日本における最新の漢学を担う階層として認知されるようになった。その準備のために五山では漢籍一般の普及が図られたが、南北朝時代に元末の戦乱を避けた刻工の集団が来朝し、禅宗寺院の出版事業に従事したことも重なって、中国の営利出版に近い形の、宗門の枠に捉われない出版が行われた。今日、この時期に刊行された宋元の様式に従う日本の版本を「五山版」と呼んでいる（展示22-24）。室町時代の末までに相当数の漢籍や準漢籍、来朝僧・日本僧の著作が五山版として行われ、これによって日本における漢籍の普及に一定の基礎が築かれた。五山僧の学問の姿は、伝来の唐本や五山版の書入れに窺われる他、個々に作られ写された編書や字書、注釈書として遺されている。殊に日本語で漢籍に注解を施した「抄物しょうもの」がたくさん作られ、講義調の解説によって漢学が普及した（展示25・26）。

3. 書物のあふれる世界 — 近世（16～19世紀） —

応仁の乱（1467-77）の被害により、京師の書物は大きな打撃を蒙ったとされるが、次の16世紀は、書物の復興が図られる時期となった。漢籍についていえば、室町末から近世初頭にかけて、五山僧の往還や五山版の刊行によって、禅僧の居室や武家、公家の書齋には、到来の版本や伝写本が普及しつつあった。そして各地に大名が擡頭し、教線を延ばしていた五山禅僧と結びついたことは、書物と学問の普及を全国的規模に拡大し、独自の外交で知られる山口の大内氏や越前の朝倉氏などは、好学の大名としても著名である。また戦国時代の社会的動揺は、大

名の他、大商人や医師など新興の知識人を生み出し、漢籍の受容を広げていった。彼等は先行の知識人である五山僧の講義に連なり、あるいは旧来の博士家に関係をもち、漢学を修めて知的欲求を満たそうとした。その際、まだまだ入手困難だったとはいえ、手を尽して漢籍の版本を求め、伝写本を作り、これに権威の注説を移写し書入れた。社会的動揺の一面として、知識が求められ、書物の数が増えて広がる状況を生じたのであり、室町時代までは博士家や五山僧の専有であった漢学の知識は、漢籍の広がりとともに開かれ始めたのである。ちょうどこの頃、豊臣秀吉が号令を発し、明の征討を目指した朝鮮半島への侵略、いわゆる文禄・慶長の役が起こった。この時、多くの日本人は初めて朝鮮朝の文物に触れ、略奪など様々の経緯によってこれを我が物とし、日本に持ち帰った。さらに捕虜となった官吏の他、文物の製造に関わる技術者まで連行することがあって、一連の戦乱が広く日本の文化を刺激した。書物の世界でもこの侵略の結果が大きな影響をもち、多数の韓本が日本に持ち込まれた。

当時、朝鮮半島では、儒教道徳、特に朱子学を基礎とする王朝政治が行われ、その一環として儒教の經典や漢籍一般の印刷普及が、大王によって主催されていた。この政策は、中央の金属活字印刷と、地方における整版印刷の二段構えで行われ、特に高麗時代から研究されてきた金属活字印刷術は、中国や日本にも類を見ない高い水準に達していた。朱子学を身につけた学者でもある中央の官僚が、その学識を活かして漢籍を校正編集し、活字印刷を用い、王の教化を助けたのである（展示27・28）。日本人が朝鮮の文人や文物に触れ、韓本を手に入れた際、朝鮮流の朱子学が学ばれ、儒者の独立を促したのであるが、為政者による書物複製という行為自体が、植工と活字印刷の移入を通じ学ばれたことは、後世に重大な変化をもたらした。日本の活字印刷の草分けは、医者・小瀬甫庵おぜぼあんらの文禄年間（1592-96）の活動に求められるが、ほぼ同じ頃、慶長初年に朝廷で後陽成天皇の主催による木活字印刷が試みられ、次の後水尾天皇に引き継がれた他、洛中洛外の寺院でもこれが試行されていく。文治を目指した徳川家康も、京伏見の円光寺において木活字印刷を試み、晩年には居城の駿河で銅活字印刷を行った。これらの印刷はたいてい漢籍を取り上げたものであるが、嵯峨の吉田素庵の工房では日本の古典を印刷する活動が興った。活字印刷は、慶長年間以降、一種の流行となったが、この現象は、書物売って生計を立てる専業者を産み出し、寛永年間まで持続する。文禄慶長から寛永頃に出現した日本の活字印刷本を一般に「古活字版」と呼ぶが（展示29-31）、古活字版の流行は、すでに新興知識人の欲求が成熟している局面で起こったために、急速な広がり多様性を示したのであり、ほぼ50年の間に書物の需要を強く喚起して、その需要が活字による供給を上回る段階に至り収束した。古活字版は、朝鮮朝の政策と技術に学んで産み出されたといえるが、その本文の来源を考えると、急速に転回する社会情勢を反映し、当時流通したあらゆる種類の本文が取り込まれたらしく、朝鮮本はもちろんのこと、在来の写本や五山版、またこの当時、爆発的な勢いで普及し始めた明末江南の版本がもたらされ、次々に翻印された。こうして古活字版の刊行は、営利出版の仕組みを得て書物の行き渡る近世社会の到来を準備し、これを呼び起こす起爆剤の役割を果たした。

近世の儒者の祖と見なされている藤原惺窩ふじわらのせいこや林羅山はやしらざんは、朝鮮の官僚と接触するなど新たな刺激に触れ、朱子学を奉じて近世初頭の転換期に独立を果し、豊臣秀次や徳川家康といった為政者に招かれて、漢学の権威であった五山僧に対抗した。惺窩の門人たちは還俗した僧、武士や医者などの出身であり、大名のもとに寄寓して指南役となる一方、私塾を開いて新たに門派を

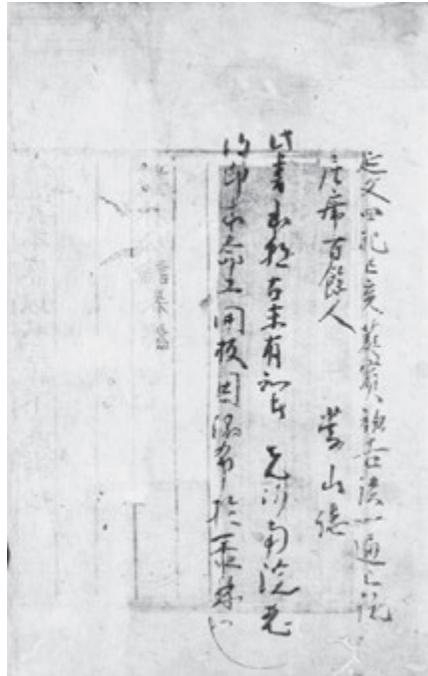
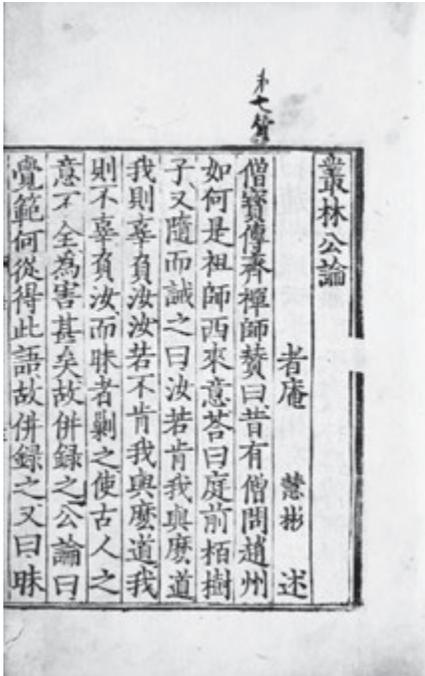
始め、儒学を広めていったのであるが、経済的に独立する上で欠かせなかったのは、京都に勃興した出版業との結びつきである。古活字版の流通を経験し、これを手に入れ解釈を加える過程で重視されたのは、しかるべき訓点の移写であり、博士家や五山以来の蓄積が継承され、そこに新たな解釈を盛り込んで、学問的立場を明らかにする表現として用いられた。活字印刷の産み出す書物の数が、増え続ける需要に応えられず、営利出版の基礎が木版を彫り整える整版印刷に置き直されると、活字では難しかった訓点付きの漢籍が出版され、伝播の主役となった。この現象は新興の儒者たちに活躍の場を与え、有名無名の学者がこの作業に協力し、漢籍の出版に手を染めた。整版付訓本の漢籍が劇的に増加したのは寛永年間（1624-44）のことであるが、このような江戸時代刊行の漢籍を、和刻本漢籍と呼んでいる。和刻本は、江戸中期には大坂や江戸にも版元が増え、次第に広く行われた。和刻本の来源は様々で、その本文は古活字版を中心に、新たに渡ってきた明清版や朝鮮版に基づくものもあれば、室町以前の写本や五山版に基づくものもある。付訓については、五山僧の訓点をそのまま引くものがある一方、著名な儒者の名を冠する新規改正の訓点を売り物にすることもある。儒者の世界も、江戸幕府の公認した朱子学一辺倒ではなく、古学と称し漢唐以前の学問に帰ることを主張する者や、明の陽明学に心酔する者、朱子学を日本化して講ずる学派も出現したから、漢籍の出版に際して関係者の特色が表れ、訓読を嫌って句点のみを付する本がある一方、「漢籍国字解」といって、漢文を日本語に訳してしまう本さえあって、その振幅が広がった。特に読者が多かったのは「かしらがきほん首書本」で、上層にたくさんの参考記事を施した標注本が作られ、近代に至るまで日本の古典出版の範型を成した。また儒者たちは門戸を競い、自己の理念や漢籍の注釈を著すことに腐心し、何度も稿を改めた末に自著を世に問うた（展示32・33）。このようにして近世社会の一面を代表する漢学の興隆は、潤沢な漢籍の流通を实体として行われ、知識を集めてものを考え、出版を通じ広く共有する仕組みを作り出した。近代になり西洋化の進む一方、漢学への関心が薄れたが、私たちの用いることばやものの中に残り、有形無形の様々な影響を与え続けている。慶應義塾図書館では、塾員の寄贈や収集により、日本における書物の伝流を受け止めるべく努力を払ってきたが、その極めて順当な結果として、日本に伝来する数多くの漢籍を得ることになった。この度の展示ではその特色を活かし、義塾図書館収集の漢籍を窓口として、そこに映し出される日本文化の一潮流をたどっていただけのように心掛けた。

〔付記〕

この解説および以下の展示企画案は、日本学術振興会科学研究補助金による基盤研究「日本国外に現存する日本漢籍に関する研究」（代表佐藤道生）の研究報告をかねた、2006年8月コロンビア大学開催のサマーコースにおける住吉朋彦の講義に基づく。

22. 叢林公論 宋 釈恵彬撰

〔鎌倉末〕刊（〔南禅寺〕） 和 中 1冊（110X 182 1）



冊子本（袋綴、胡蝶装改装）。後補縹色艶出表紙（20.4×14.0cm）。本文楮紙。四周双辺（13.2×10.2cm）有界、毎半張9行、行14字、歐陽詢体。白口、単黒魚尾。

本書は南宋時代の僧恵彬が、仏教や儒教の諸説にわたる読書の覚え書、評論をまとめた書物で、小著ながら、批判をよくした宋代の者らしい著述である。恐らくはもと、浙江あたりの禅宗寺院で出版されたものであろうか。今日、宋代の版本は伝わらないが、日本の禅僧がこれをそのままに複製したことから、おおよその姿を窺うことができる。

展示の版本は、鎌倉時代の臨済宗仏光派の禅僧、南禅寺第2世の南院国師規庵祖円が出版し、師の住院である南禅寺帰雲院に版木が置かれた。本書出版の事情は、展示品の末尾に加えられた延文4年（1359）の蒙山智明の書付けに見え、南院老師が印本を取得、日本には本書が行われていなかったことから出版を命じ、五山禅林に流布させたとある。文献上にも、虎関師錬の行状を伝える『海蔵和尚紀年録』の嘉元元年（1303）に、規庵に随侍していた虎関が、帰雲院蔵版の『叢林公論』第23葉の誤文を看破したことが見え、展示品のその箇所も、字様が変わり修理補刻のあとが見出されるなど、かれこれ符合している。蒙山智明は摂津の人、文永の役で日本に投降した元人に育てられ、中国語に堪能なことで知られた禅僧で、師の出版した本書をもとに弟子を集めて講義を行ったことも書付けにある。本版は初期五山版の出版事情を伝える例証であり、後年の五山僧による講義の流行を予告している点も注目に値する。幸田成友氏寄贈書。

23. 禅儀外文集

虎関師鍊編

〔南北朝〕刊

和半 1冊 (132X 162 1)



冊子本（袋綴）。後補牡丹唐草文空押し丹表紙（23.8×14.9cm）。本文楮紙、裏打ち改装。左右双辺（19.4×11.7cm）有界、每半張11行、每行22字、趙松雪体。線黒口、双黒魚尾。

宋元の禅僧社会では純粹に宗教的な表出の他、集団生活を行う関係上、共同体内外の意志疎通のためにも、様々な文章を作る機会が多かった。例えば新たな住持を迎え、礼拝して高僧の入寺を仰ぐ時や、共同作業の建議を図り、寺僧に告知を行う時など、種々の儀式に際して「疏」「榜」と称する漢文を作り、公表する習慣があった。これらは王朝政治の運行に必要とされた、一定の韻律に従い、巧みな対句をちりばめた美文体の「四六駢儷文」を応用したもので、中国の禅宗が宮廷や高級官僚との関係を濃くする過程で禅林に移入された。鎌倉時代から興隆した日本の禅宗では、宋元禅林と直接に繋がり、寺院生活そのものを模倣したから、このような儀式文を綴ることも学ばれた。東福寺の出身で南禅寺に寄寓し、来朝僧の一山一寧に從学した虎関師鍊は、広範な漢学の知識を備え五山の学藝を牽引したが、彼は日本での必要に応じ、模範とすべき宋元禅僧の儀式文を集め、用途ごとに分類したこの『禅儀外文集』を編み、後進を導いた。

本書に対する需要はその刊行を促し、展示の版本を生んだ。本書に掲載するのは宋元の僧侶の著作であるものの、虎関の編集に係り、日本の禅林のために作られた「準漢籍」である。またその様式においては中国の版本を模倣し、元朝に流行した趙孟頫の字様を追っている。日本の五山禅林周辺で刊行され、宋元版の様式を備えた版本を五山版と呼ぶが、展示品はその早期の典型といえる。近世の取書家、小津桂窓の旧蔵書。

24. 諸家集註唐詩三体家法3卷 存卷3

宋 周弼編 元 裴庾 積門至注

〔南北朝〕刊 和 半 1冊 (110X 110 1)



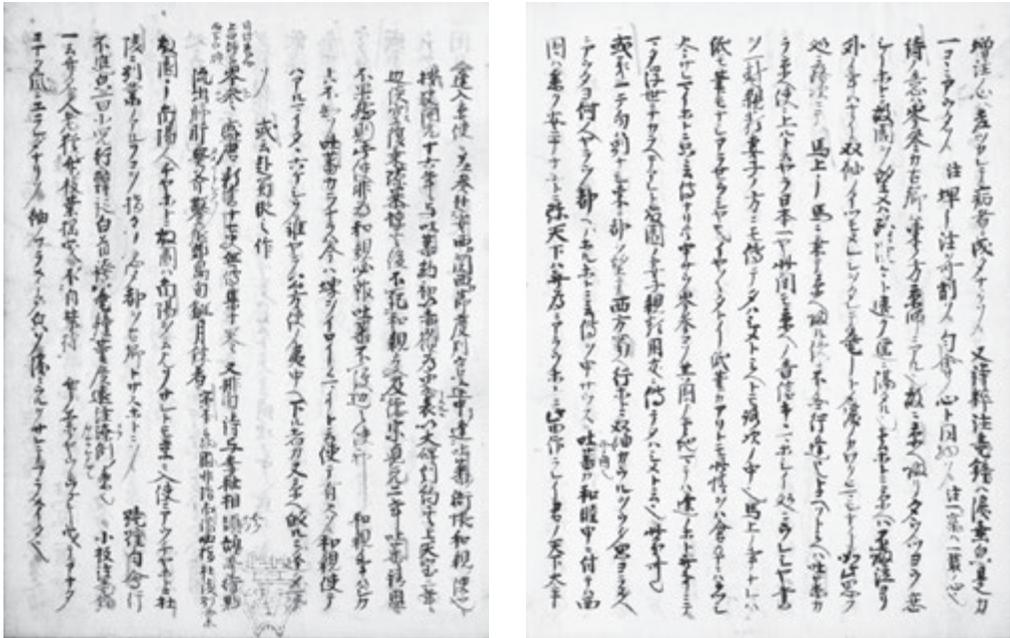
冊子本（袋綴）。新補古丹表紙（24.3×14.9cm）。本文格紙、裏打ち改装（原紙高19.3cm）。左右双辺（19.3×11.4cm）有界、毎半張12行、毎行25字。線黒口、双黒魚尾間「三体詩（体詩註）」。

中国で詩の定型が確立した唐代の作品は、格調が高く中国文学の精華といわれるが、そうした評価が定まったのは宋代のことである。宋代の詩は、唐詩とは別の境地を示しているが、一方で詩作にふける人の階層が広がり通俗化したことも指摘される。本書の編者周弼は、そうした傾向の進んだ南宋時代の詩人で、嘉定年間（1208-24）の進士、時に官僚の道を離れ諸方に遊歴した。周弼の編んだこの詩集は、通常『^{さんていし}三体詩』と呼ばれ、唐代の五言律詩、七言律詩、七言絶句の三体を集めて各1巻とし、さらに叙述の仕方によって分類する。この形は詩作の参考書として便宜がある。李白や杜甫を輩出した盛唐より、唐代後半の作を多く収める偏りがあるが、中国ではあまり流布しなかったが、日本では南北朝以降、禅僧の間で漢詩の初学書に用いられ、江戸前期までの間を最盛期として、明治に至るまで広く行われた。

展示の版本は、元の裴庾（字季昌）注を主に、僧門至（号天隱）の注を加えた内容で、元版の一種を伝えた五山版である。中国で行われたのは天隱注本、日本では天隱注に季昌注を増補した本が主流があるが、本版はそれと異なり、七言絶句を第3巻として他本とは逆の順序、この形式の本は稀で、展示品の他、わずかに写本を残すのみである。この版本には校正傍注が見え（図右、湘南即事詩題下）、日本での習学過程を内包する。また禅僧の詩作では心境を凝集する七言絶句が好まれ、『三体詩』の古本には七絶のみの残存が多い。岡田真、戸川浜男旧蔵。

25. 三体詩鈔 不分卷 首尾欠 [塩瀬宗和] 撰

[室町末近世初] 写 和 半 1冊 (132X 30 1)



冊子本（袋綴）。後補記繋ぎ桐花唐草文空押し丹表紙（22.2×18.1cm）。本文格紙。
字面高さ約19.7cm、毎半葉14行、每行字数不等、1筆。

日本の禅僧の間に行われた漢学の伝承は、はじめ師弟間の直接指導を主としたが、南北朝から室町時代にかけて漢籍注説への需要が高まり、専門の師を招いて講義がなされるようになった。その講説がまとめられ、台本や聞書、それを整理した本、その形式を借りた本などの一群の書物を産み出した。これらを総称して「抄物」といい、室町から江戸前期まで、漢学伝承の媒介となった。抄物は、主として当時の口語で記されたから、現在では日本語研究の立場からも注目される。本書はそうした抄物の一つで、『三体詩』七言絶句を対象とする。

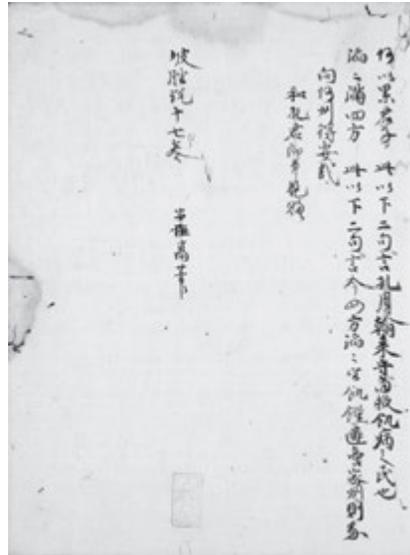
日本における『三体詩』の受容は南北朝に遡り、入元帰朝した禅僧の中巖円月が伝えたときられる。禅僧が本書の元版を携えて帰国し、その習学が始まったことは、展示24の五山版の刊行を見ても明らかで、在元中、文学を好む臨済宗大恵派に学んだ中巖が関与したとする話には説得力がある。禅僧の間における『三体詩』研究は次第に熱を帯び、その注説が成立して、中巖から南禅寺の義堂周信へ、義堂から建仁寺の江西龍派やその門弟に伝わったとされる。そして室町末、建仁寺の説を学んだ者の1人に、新興知識人である饅頭屋林宗二の同属、塩瀬宗和があり、他説を交えてこの『三体詩鈔』を作った。この本は江戸初期に活字印刷、さらには整版印刷に付され、五山の漢学を後世に伝える回路の役目を果たす。展示品は、近世初め建仁寺の僧、林羅山の師として知られる英甫元雄の手沢本である。

26. 坡詩脞説25巻 欠巻5・6、9-15

瑞溪周鳳撰

〔室町〕写 (惟高妙安等) 3種取合せ本

和 大 10冊 (110X 78 10)



冊子本 (袋綴)。第1至2冊〈甲〉代赭色表紙 (22.2×18.1cm) 第3冊〈乙〉新補茶色表紙 (27.0×20.0cm) 第4至10冊〈丙〉渋引き表紙 (28.0×22.6cm)。本文楮紙。字面高さ甲約22.5cm乙約24.5cm丙約25.0cm、每半葉甲12行乙17行丙13行、每行字数不等、甲乙各1筆、丙3筆。

「^{とうばさんこく}東坡山谷、味噌醤油」のたとえもあるように、宋の東坡^{そしよく}(蘇軾)と山谷^{こうていけん}(黃庭堅)の詩は、日本の五山禅林で大いに親しまれたが、蘇軾『東坡先生詩』の宋元版や五山版も多く伝わり、これらの版本には訓点が付され、余白狭しと書入れた注釈の記事に満ちている。東坡の詩が好まれた理由は、その内容が生彩に富み、禅宗に気脈を通ずるだけでなく、典拠を自在に用いた表現を模範と仰いだからであろう。余白からあふれた注説は一書を成し、瑞溪周鳳『坡詩^{はし}脞説』、大岳周崇『翰苑遺芳』、一韓智翹『蕉雨余滴』、万里集九『天下白』などを生んだ。

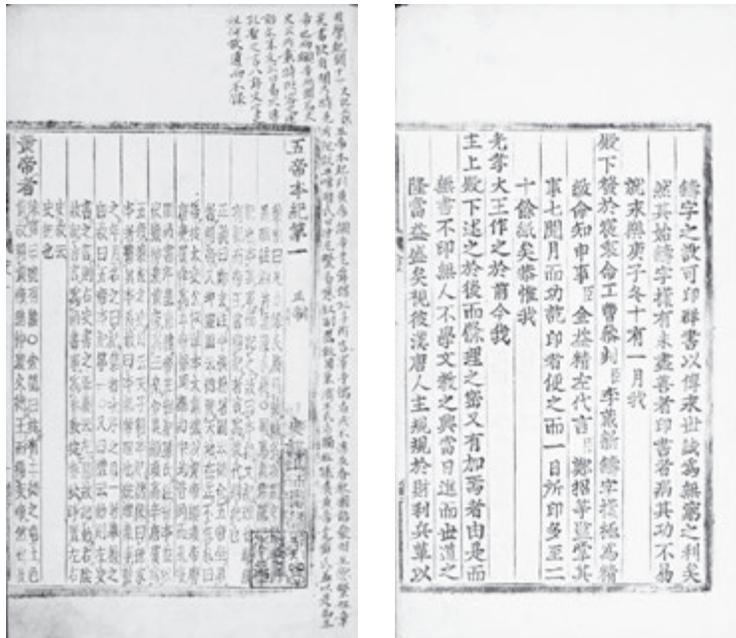
本書題目の「坡詩」は蘇東坡の詩を指し、「脞説」は取るに足らない説の意である。瑞溪周鳳は、室町中期の相国寺の僧で、足利將軍家の秘書役や外交文書製作に携わり、五山の人事を司る僧録の役にあたった。本書は応永35年(1428)の作で、^{いしやうとくがん げんちゆうしゅうがく}惟肖得巖、^{しやうらんせいさん}巖中周噩の説を基に、^{しがじつかい}笑雲清三編集の『四河入海』は、本書を含む前記4部の注釈を取捨合成したものであるが、江戸初期にその古活字本が出ると4部の原本はかえって失われたから、原本の残存は貴重である。展示の写本は、室町後期から末頃の3種の写本を後に合せたもの、第3種丙本には、室町後期を代表する相国寺の学僧で、抄物の作者として著名な惟高妙安の筆跡が含まれる。また「^{ふじわらのせい}冷泉府書」の印記は、近世の初め、禅僧から儒者として立った藤原惺窩の使用と伝える。

27. 史記130卷

漢 司馬遷撰 劉宋 裴駟集解 唐 司馬貞索隱 張守節正義

朝鮮刊 (庚子字)

韓特大 34冊 (110X 557 34)



冊子本 (袋綴)。後補丹表紙 (32.0×19.0cm)。本文楮紙。四周双辺 (22.7×14.6cm) 有界、每半張11行、每行21字。中黒口、双線黒魚尾間「史幾」。耳格。

司馬遷の『史記』(展示13参照)は朝鮮朝でも重んじられたが、殊に学問を奨励した第3代の世宗朝(1419-50)では、廷臣の鄭麟趾に命じ、前朝の興廃を記述する『高麗史』を改撰したこともあり、中国の正史について関心が高かった。そこで世宗は、新たに鑄造した銅活字をもって『史記』を刊行、宮中の鑄字所において印刷した本を、世宗7年(1425)11月8日、文臣に頒布した(『世宗実録』巻30)。展示の本は、この時の刊行にかかる。世宗は文臣に『史記』の講義をさせ、自らその説を聞いた。しかし『高麗史』の編集は、世宗の生前に完成せず、その死の翌年、文宗元年(1451)に完成上進された。

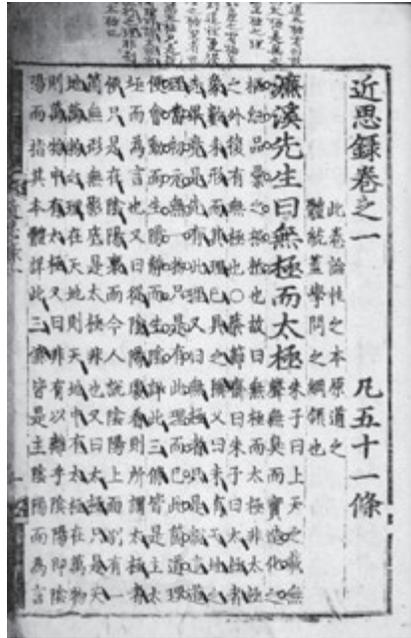
展示品の印刷に使われた朝鮮朝の銅活字「庚子字」は、永樂20年(1422)の卞季良の跋文によってその製作事情が判明する。韓半島では高麗時代から金属活字印刷が行われたが、朝鮮朝では国事としてこれを行い、第2代の太宗3年(1403癸未)に銅活字を鑄造、これを「癸未字」と称し印刷を試みた。しかし技術的難点を抱えていたため、第3代の世宗2年(明永樂18、1420庚子)11月に、癸未字を鑄つぶして改鑄、7ヶ月後にこの庚子字を完成した。従って展示品の印刷時期は、世宗3年から7年(1421-25)の間と推測され、世宗朝初めの文化事業を伝えた遺品といえる。展示品には朝鮮宣宗朝(1568-1608)の儒生鄭思億と、江戸前期の妙心寺の僧大通宗密の印記が見られるから、この間にもたらされたのである。

28. 近思録14卷

宋 朱熹 呂祖謙編 葉采注

朝鮮刊 覆甲寅字刊本

韓特大 4冊 (132X 21 4)



冊子本(袋綴)。表紙(32.9×22.9cm)。本文楮紙。四周双辺(28.3×18.6cm)有界、
每半張9行、每行18字、甲寅字体。大黒口、双花口魚尾間「近思録幾」。

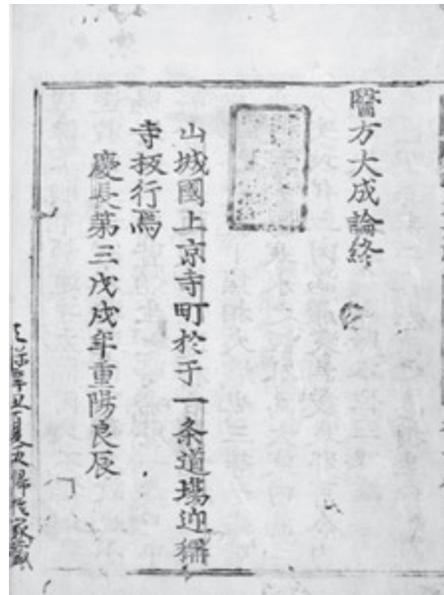
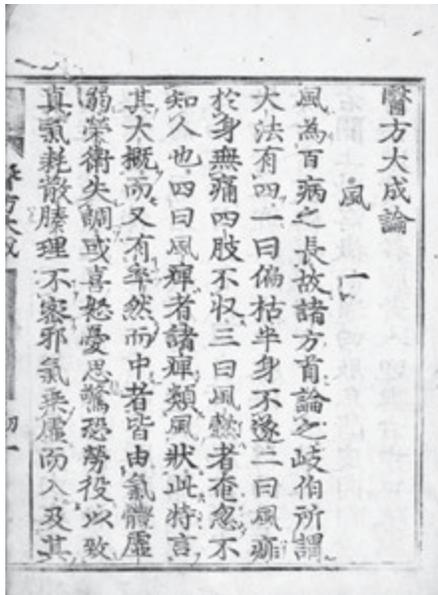
本書は、宋代の儒学の体系化を行った朱熹が、呂祖謙と共に著した書物で、宋学の祖と仰がれる周敦頤、程顥、程頤、張載らの著書から抜粋し、近來の思潮をまとめたものである。朱熹を信奉する朱子学者の間で入門書として重んぜられ、朱熹の孫弟子に当たる葉采が注書『近思録集解』を著し、その解説を容易にした。朱子学が各地で興隆し、元延祐元年(1314)に科挙が復興され、朱子学に準拠すべきものと定められてから、さらに広く学ばれ流通した。韓半島では、仏教に帰依した高麗朝の末、文人官僚の中に、元朝の朱子学を国家経営に取り入れようとする者が現れ、李成桂の勢力と結びつき朝鮮朝を作ったので、新王朝では朱子学に基づいて制度政策が立てられ、朱子学に拠る科挙や研究が行われたから、本書に学ぶ者も多かった。

朝鮮朝では朱子学の振興と並行して、金属活字印刷による良書の複製が図られ、太宗の癸未字、世宗の庚子字鑄造が行われた(展示28参照)。世宗は文化の浸透に心を致し、中央の活字印刷と地方の木版印刷を同時に進めたが、銅活字の研究を深めて鑄造を繰り返す、世宗16年(宣統9、1434甲寅)、衛夫人の書体をもとに「甲寅字」を製作した。甲寅字はその完成度の高さによって、後の「乙亥字」とともに朝鮮朝の活字の模範となったが、世宗18年(正統元、1436)には甲寅字による『近思録』の印刷が行われた。展示品は、その甲寅字刊本を基に木版で覆刻した版本で、元の字様が窺える他、活字本を基にした書物普及の一端を示している。

29. 医方大成論 元 孫允賢撰

慶長3年(1598)刊(古活字 京 迎称寺)

和 大 1冊(110X 170 1)



冊子本(袋綴)。後補渋引き包背表紙(25.1×20.1cm)。本文楮紙。四周双边(20.4×16.3cm)無界、每半張9行、毎行16字、甲寅字体。上大黒口下白口、単黒魚尾下「医方大成」。

著者の^{そんいんけん}孫允賢は文江(現江西省)の人、元の延祐年間(1314-20)前後に活動した儒者兼医者で、『新編医方大成』10巻を著した。現在その元刊(鄭氏宗文書堂)本を台北の故宮博物院に蔵するが、これはもと幕末の医者小島宝素が所持した本で、室町時代の書入れを有するという。展示の本は、常用に即して同書を簡約したものであるが、やはりもとの宗文書堂の刊記を遺す。宗文堂は、元末明初に商業出版を行った建陽(現福建省)鄭氏の書店である。

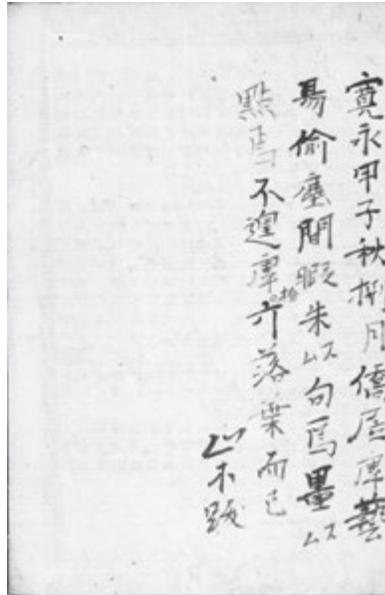
日本における活字印刷事業は、近世初頭、朝鮮の影響を強く受けて始まるが、天皇や武家、京都の寺院と並んでこれに携わったのは、新興知識人層を成した医者であり、文禄から慶長の初年にかけて(1600前後)医書などの活字印刷を行った小瀬^{おぜほあん}甫庵の名がよく知られている。医者が出版に携わるのは、医書の需要が深刻だからであり、当時重用されていた本書もたびたび刊行されたが、展示の本はその中で最も古いもの。慶長3年(1598)にこれを刊行した迎称寺は、「一条道場」と称する時宗の寺院で、古活字版の草創期、医療に配慮して活字印刷を行ったことは注意される。この活字は朝鮮朝の銅活字「甲寅字」に酷似する木活字であるが、甫庵刊書の一部と同種と見られ、甫庵には文禄5年(1596)に本書を刊行する旨の文章があるから、展示本との関係が予想される。展示品には、江戸初期の訓点書入れがある他、天保12年(1841)本書を入手した、小島宝素の書付けと印記が認められる。幸田成友氏旧蔵。

30. 北溪先生性理字義 2 卷

宋 陳淳撰

〔江戸初〕刊（古活字）

和 大 2 冊（110X 116 2）



冊子本（袋綴）。栗皮表紙（28.8×20.0cm）。本文楮紙。四周双辺（23.7×16.6cm）有界、每半張10行、行18字、乙亥字体。白口、花口魚尾間「性理字義」。

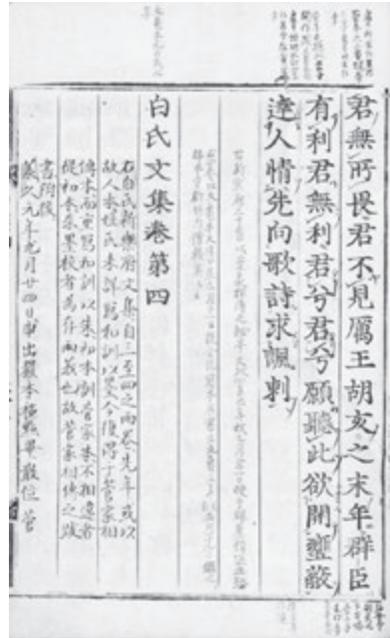
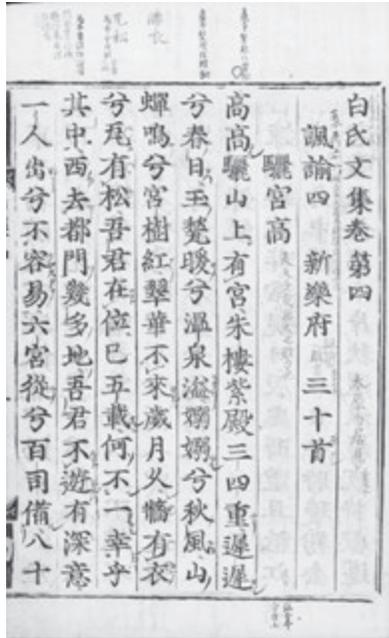
宋代の儒学を大成した朱熹^{しゆき}の学問は、性理の学と呼ばれる哲学に立って經典や孔孟の説を読み直す内容であるが、その基礎となる性理学は、独特の観念や弁証を用い、難解な部分が多い。そこで朱熹の門弟である陳淳は、直伝の解義により性理学の用語を説明し、この『性理字義』をまとめた。元代からは朱子学の理解が官僚の採用資格として求められようになり、朱子学の要諦を示した本書の需要が高まった。このことは、朱子学を自らのものとし、中国以上に純粹に奉じたとされる朝鮮朝においても同様であった。

本書の宋版はすでに伝わらないが、これには著者生前の初刊本と、さらなる筆削を経た没後の再刊本があったとされる。前者では元版と、朝鮮朝に行われた嘉靖32年（1553）晋州刊本が古態を止める。展示の本は朝鮮版を用い、江戸時代の初め、元和4年（1618）以前に、朝鮮の銅活字「乙亥字」を模倣した日本の木活字で翻印したもの、この古活字本からさらに整版付訓本を生じた。また後者は、日本の寛文8年（1668）刊『字義詳講』によって伝える。中国では明代に両者を合せた本が作られ、古本は伝来が稀であるのに対し、朝鮮や日本の本は古態に忠実で、校勘の上で重視される。展示品は、京・詩仙堂に隠棲した文人、石川丈山の訓点書入れ本。丈山は「烏鱗子」「山木山人」と号し、朝鮮の朱子学を吸収した藤原惺窩^{ふじわらのせいこ}の門弟である。末尾の書付けに上巻は元和4年、下巻は寛永元年（1624）の加点と記している。近世の考証家屋代弘賢、徳島藩主蜂須賀家旧蔵。

31. 白氏文集71卷 唐 白居易撰

元和4年(1618)跋刊(古活字)

和 大 30冊(110X 430 30)



冊子本(袋綴)。後補索引表紙(28.7×19.6cm)。本文楮紙。四周双辺(22.8×16.1cm)有界、毎半張9行、行16字、乙亥字体。粗黒口、花口魚尾間「白氏文集」。

唐の詩人白居易は、生前からの流行作家でもあったが、平安時代の承和年間(834-48)にその『文集』が舶載されると多くの追随者を生み、日本でも白詩一色の大流行となった。本書の本文系統は三大別されるが、その一は日本に伝わった唐鈔本の転写本、これは版本以前の古本であるが、不幸にして全部は伝わらない。その二は北宋刊本の翻印本、この系統は朝鮮朝に伝わった。以上2系統は「白氏長慶集」を基礎に、作者が折々に増補した元来の組織をもつ。その三は南宋刊本の系統で、宋紹興年間(1131-63)刊本が伝わるが、これは校訂を重ねた上、文体により再編成した形、中国ではこれが流通したため、第一、第二の系統は亡逸した。展示の本、日本の古活字刊本は、第二の系統に属する完全な本文で、唐鈔本と北宋刊本が失われ、日本の古写本と朝鮮本が不完全である現在、原型の全貌を伝える本として価値が高い。

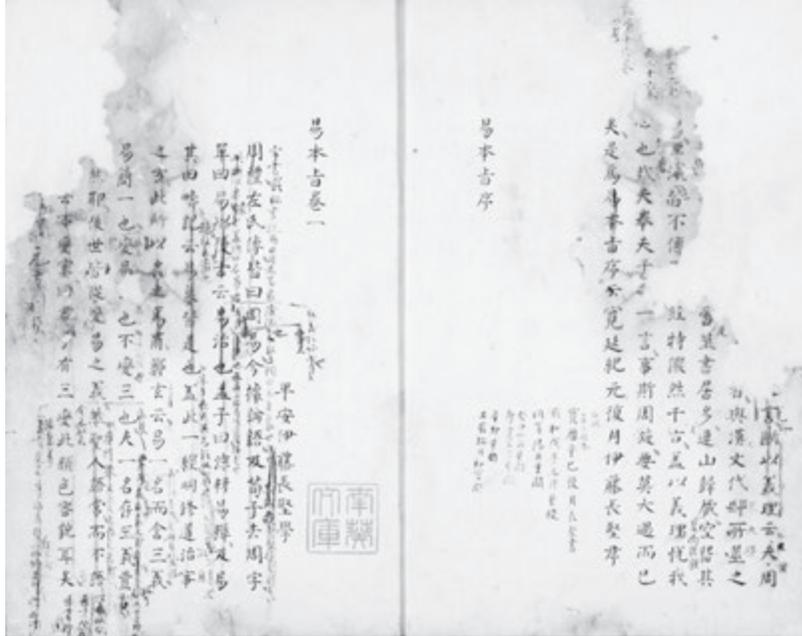
この古活字本は、那波活所によって刊行された。活所は、林羅山や石川丈山、堀杏庵と同じく藤原惺窩門下の儒者。中世、五山僧に好まれなかった本書の振興を図り、朝鮮製の銅活字「乙亥字」に酷似する木活字を作って、本書と古辞書『倭名類聚鈔』を刊行、両者ともよく行われた。展示品は、初め堀杏庵が所持し、江戸後期には幕臣の新見正路が収蔵、正路は文政4年から天保15年の間(1821-44)公務の暇に朱墨藍の書入れを行い、幕府収蔵の金沢文庫旧蔵古写本、明清版や明活字本と詳細な校合を行った。当時勃興した近世考証学の跡を止める。

32. 易本旨 5 卷 附繫辭解 文言解各 1 卷 欠卷 5

伊藤蘭嶋撰

宝暦11年 (1761) 写 (自筆第 2 稿本)

和 大 6 冊 (27X 4 6)



冊子本 (袋綴)。新補淡茶色絹表紙 (27.5×19.6cm)。本文楮紙。字面高さ約 19.1cm、每半葉10行、每行19字。

儒教の經典である「^{ごぎょう}五經」の第一は『易經』であるが、本書はわが国の儒者^{いとうらんくう}伊藤蘭嶋が、これを注解した書物である。蘭嶋は、江戸前期の儒者伊藤仁斎の五男で、名を長堅、字を才蔵という。父仁斎は、林羅山以来幕府公認の儒学となった朱子学^{いとうじんさい}に疑問を抱き、孔孟の言行を記した『論語』『孟子』の言を純粹な哲理と考える「古学」を提唱、京堀川に私塾^{ごぎどう}古義堂を開き、朝野にその名を知られた。仁斎の没後、長男東涯が古義堂を嗣ぎ、父の学説^{とうがい}を継承敷衍したが、蘭嶋は、父兄が『論語』『孟子』を絶対と考えたのに従い、その見解をもって「五經」を読み取ることに努め、「五經」の注解『易憲章』『書反正』『詩古言』『春秋聖旨』『禮札記』を著した。蘭嶋は和歌山藩主徳川宗直に招かれて仕え、一時、東涯没後の古義堂にもどり、幼少の東所の後見を務めたが、和歌山藩儒として儒教の研究と教育に力を尽した。

蘭嶋の自筆稿本は、その多くが天理図書館古義堂文庫に収められ、『易憲章』にも稿本 2 種が遺される。しかし蘭嶋は、晩年まで自作の改編を続けたため、別に和歌山藩仕官後の改稿本も遺る。展示品は『易憲章』の改稿本であり、題目も『易本旨』と改めた。寛延元年 (1748) に初稿を記したが、宝暦11年 (1761) さらに第 2 稿本を作り、明和 5 - 9 年 (1768-72) に何度も手を入れ改めた痕が夥しい。改稿の末、安永 2 年 (1773) に書写した第 3 稿本も現存 (大東急記念文庫蔵)、近世の儒者が著作にかけた執念を伝える。和歌山藩主徳川家旧蔵。

33. 韓非子翼毳20卷 首1卷 太田全齋撰

文化5年(1808)刊(木活字) 自筆書入本 和 大 21冊(110X 610 21)



冊子本(袋綴)。縹色卍繋ぎ桐花唐草文空押し艶出し表紙(26.0×18.1cm)。本文楮紙、裏打ち修補。単辺(21.3×14.9cm)有界、毎半張9行、毎行20字、方刻体。白口、上辺「韓非子翼毳」、単黒魚尾、下辺「全齋活版」。

中国戦国時代(前3世紀)、韓の公子として生まれた韓非^{かんぴ}は、儒家に学びながら、法と刑罰のみをたのむ法家思想を形成した。その書を『韓子』、後世には『韓非子』と呼ぶ。のちの始皇帝、秦^{えいせい}の嬴政は、本書を喜び敬慕したというが、韓非は秦に捕われ自殺、その祖国も滅ぼされた。しかし秦はその思想を取り入れ、諸国の統一を成し遂げた。

本書の著者太田全齋^{おたぜんさい}は、江戸後期の福山藩士、考証学をよくし藩儒となる。『韓非子』の研究に取り組み、半生をかけて本書を成した。天明3年(1783)いったん成稿、『韓非子翼毳』と名付け序文を記した。「翼」は鳥の羽、注を左右に付して本文の意を明らかにし、「毳」は鳥の腹毛、余説をも収め参考^{よくぜい}に供することをたとえた。その後十数年、さらに稿を改め定まらなかったが、江戸巢鴨の火災が藩邸に迫り、稿本の灰燼に帰することを恐れ副本の印刷を思い立つ。享和元年(1801)佐藤一齋が作らせた木活字2万個を得て組み版を開始、活字が整わず作業は難航し、子息を動員、不足の活字を自ら彫るなど苦心が続く。妻が病に倒れ、幼児を抱え貧窮に陥るが、親類の塩田屯の援助を得、辛苦の末に文化5年(1808)印刷造本に漕ぎつけた。本書はその苦心談とともに世評が高まり、明治の「漢文大系」に取められ、広く読まれるようになった。しかし展示品を見ると、活字印刷の後も推敲を止めなかったことがわかる。

洋書

展示書（洋書）リスト

図録番号	書名
1	ジェフリー・オヴ・ヴィンソフ『新詩法』写本（イタリア中部、おそらくヴィテルボ、14世紀前半） / Galifridus de Vinosalvo [Geoffrey of Vinsauf]. <i>Poetria nova</i> . Central Italy (probably Viterbo), first half of the 14th century
2	聖サバスのアンティオコス『パンデクテン』他 写本（地中海東部、12–14世紀） / Antiochos of Saint Saba. <i>Pandects</i> . Eastern Mediterranean, 12th – 14th century
3	「ラテン語時禱書」 写本（ルーアン、1465–80年頃） / Book of Hours, Use of Bayeux, in Latin. Rouen, c. 1465 – 80
4	時禱書零葉 写本（ゲントあるいはブルージュ、1510–20年頃） / Leaf from a Book of Hours. Ghent or Bruges, c. 1510 – 1520
5	「リヨン式ミサ典書」（リヨン、1500年） / <i>Missale Lugdunense</i> . Lyon: Petrus Ungarus, 1500
6	『ローマ式聖母マリアの時禱書』（パリ、1503年頃） / <i>Hore intemerate dive virginis Marie secundum usum ecclesie Romane</i> . Paris: Jehan Poitevin, c.1503
7	キケロー『善と悪の究極について』 写本（フィレンツェ、1450–60年頃） / Cicero (106–43 B. C.). <i>De finibus bonorum et malorum</i> . Florence, c. 1450 – 60
8	キケロー『ストア派のパラドックス』、『スキピオの夢』 写本（イタリア、15世紀後半） / Cicero (106 – 43 B. C.). <i>Paradoxa Stoicorum, Somnium Scipioni</i> . Italy, late 15th century
9	プルタルコス『英雄伝』（ヴェネツィア、1478年） / Plutarch (c.46 – c.120). <i>Virorum illustrium vitae</i> . 2 vols. Venice: Nicolaus Jenson, 1478
10	セビリヤのイシドルス『語源論』（[シュトラースブルク/ストラスブール]、[1473年頃]） / Isidorus Hispalensis (560–536). <i>Etymologiae</i> . [Strassburg]: [Johann Mentelin], [c. 1473]
11	ラウル・ル・フェーヴル『トロイ歴史集成』ウィリアム・キャクストン英訳（ブルージュ、1473–74年） / [Raoul Le Fèvre]. <i>The Recuyell of the Histories of Troye</i> . translated into English by William Caxton. Bruges: William Caxton, [1473 – 74]
12	『主イエス・キリストの生涯』（ライデン、1500年） / <i>Dat Leven ons Heren Jhesu Christi</i> . Leiden: Hugo Janszoon van Woerden, 1500
13	アリストテレス『全集』 6巻（ヴェネツィア、1495–98年） / Aristotle (384 – 322 B. C.). [<i>Opera</i> .] 5 parts in 6. Venice: Aldus, 1495 – 98

- 14 フランチェスコ・コロナ(伝)『ポリフィーロの狂恋夢』(ヴェネツィア、1545年)
/ Francesco Colonna (attr., 1433 – 1527). *La Hypnerotomachia di Poliphilo*. Venice:
Aldus, 1545
- 15 ホメロス『イリアス、オデュッセイア』(ヴェネツィア、1504年) / Homer. *Homeri
Ilias*. Venice: Aldus, 1504 / *Ulyssea. Batrachomyomachia. Hymni xxxii*. Venice:
Aldus, 1504
- 16 『ルクレティウス著作集』(ヴェネツィア、1515年) / Lucretius (c.94 – c.49 B. C.).
Lucretius. Venice: Aldus, 1515
- 17 16世紀の合冊本 (16th-century Sammelband)
- (1) ポンポニウス・メッラ『世界地理』(パリ、1507年) / Pomponius Mela. *De
Totius orbis descriptione....* Paris: Jean Petit, 1507
- (2) コルネリウス・ネポース『英雄伝』(ミラノ、1511年頃) / [Cornelius Nepos].
Probi Aemilii De excellentibus imperatoribus opus. [Milan: Niccolò Gorgonzola,
c. 1511]
- (3) ソリヌス『世界の驚異について』(パリ、1503年) / *Solinus de memorabilibus
mundi diligenter annotatus & indicio alphabetico prenotatus*. Paris: Jehan Petit,
1503
- (4) ポンペイウス・トログス(ユスティヌス抄録)『地中海世界史』(パリ、1507年
以降) / Justinus. *Marcus Junianus Historia ex Trogo Pompeio*. Paris: Jehan Petit,
[not before December, 1507]
- 18 デシデリウス・エラスムス『痴愚礼讃』(シュトラースブルク / ストラスブール、
1511年) / Desiderius Erasmus (1466/69 – 1536). *Moriae Encomium*. Strassburg:
Matthias Schurer, 1511
- 19 トマゾ・カンパネッラ『克服されたる無神論』(ローマ、1631年) / Tommaso
Campanella (1568 – 1639). *Atheismus Triumphatus*. Rome: B. Zannetti, 1631
- 20 ハンス・ホルバイン『死の舞踏』(リヨン、1538年) / 『旧約聖書挿絵』(リヨン、
1539年) / Hans Holbein (1497 – 1543). *Les simulachres & historiees faces de la
mort....* Lyon: Melchior et Gaspar Trechsel freres, 1538 / *Historiarum Veteris
Testamenti Icones....* Lyon: Melchior et Gaspar Trechsel freres, 1539
- 21 ヨスト・アマン『聖書図絵』(フランクフルト、1571年) / *Bibliorum Vtriusque
Testamenti Icones*. Frankfurt am Main: J. Feyerabend, 1571
- 22 アンドレア・アルチャーティ『エンブレム集』(パリ、1536年) / Andrea Alciati (1492
– 1550). *Livres des emblemes*. Paris: Chrestien Wechel, 1536
- 23 フアン・デ・オロスコ・イ・コバルビアス『道徳エンブレム集』(セゴビア、1589年)
/ Juan de Horozco y Covarrubias (1550 – 1608?). *Emblemas morales*. Segovia: Iuan

- de la Cuesta, 1589
- 24 ジョバンニ・ボッカチオ『デカメロン』(フィレンツェ、1527年)[ファクシミリ版 ヴェネツィア、1729年] / Giovanni Boccaccio (1313 – 75). *Il Decamerone*. Florence: Giunta, 1527. [Venice: Pasinello, 1729]
- 25 フランソワ・ラブレー『ガルガンチュワ物語』(ヴァランス、1547-48年)[ジュネーヴ、1600年頃] / François Rabelais (1494? – 1553). *La Plaisante et ioyeuse histoyre du grand géant Gargantua*. Valence: Claude La Ville, 1547 – 48. [Genève (?), c.1600 (?)]
- 26 トマス・マロリー『アーサー王の死』(ロンドン、1634年) / Thomas Malory (c.1405 – 71). *The Most Ancient and Famous History of the Renowned Prince Arthur King of Britaine....* London: Printed by William Stansby for Iacob Bloome, 1634
- 27 『羊飼いの暦』(ロンドン、1556年) / *Here begynneth the kalender of shepardes....* London: William Powell, 1556
- 28 『ニューイングランド初等教本』(ボストン、[1800-14年]) / *The New England Primer*. Boston: Manning & Loring, [1800 – 14]
- 29 (1) ジャンバッティスタ・マリーノ『アドニス』4巻(アムステルダム、1678年) / Giambattista Marino (1569 – 1625). *L'Adone*. 4 vols. Amsterdam: S. D. Elsevier; Paris: Thomas Jolly, 1678
- (2) トルクァート・タッソ『ゴッフレード、あるいは解放されたエルサレム』2巻(アムステルダム、1678年) / Torquato Tasso (1544 – 95). *Il Goffredo, overo Gierusalemme Liberata*. 2 vols. Amsterdam: S. D. Elsevier; Paris: Thomas Jolly, 1678
- (3) ジョヴァンニ・バッティスタ・グアリーニ『忠実な羊飼いの』(アムステルダム、1678年) / Giovanni Battista Guarini (1538 – 1612). *Il Pastor fido*. Amsterdam: S. D. Elsevier; Paris: Thomas Jolly, 1678
- (4) グイドバルド・ボナレリ『スキュロスのフィリス』/ トルクァート・タッソ『アミンタ』(アムステルダム、1678年) / Guidubaldo Bonarelli (1563-1608). *Filli di Sciro*; Torquato Tasso. *Aminta*. Amsterdam: S. D. Elsevier; Paris: Thomas Jolly, 1678
- (5) フランチェスコ・ペトラルカ『ペトラルカ詩集』(ヴェネツィア、1531年) / Francesco Petrarca (1304 – 74). *Il Petrarca*. Venice: Bernardino Stagnino, 1531
- 30 シャルル・ボードレー『悪の華』(パリ、1857年) / Charles Baudelaire (1821 – 67). *Les Fleurs du mal*. Paris : Poulet-Malassis et de Broise, 1857
- 31 ジェームズ・ジョイス『ユリシーズ』(パリ、1922年) / James Joyce (1882 – 1941). *Ulysses*. Paris: Shakespeare and Company, 1922

- 32 デイエゴ・コリヤード『羅西日辞典』（ローマ、1632年） / Diego Collado, O. P. (1589? – 1641). *Dictionarium sive thesauri linguae Iaponicae compendium*. Rome: Sacr. Congr. de Prop. Fide, 1632
- 33 フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト、ヨーゼフ・ツッカーニ『日本の植物』（ミュンヘン、1845–46年） / Philipp Franz von Siebold (1796 – 1866) and J. G. von Zuccarini (1797 – 1848). 'Florae Japonicae familiae naturales adjectis generum et specierum exemplis selectis', 2 parts, in *Abhandlungen der mathematischphysikalischen Classe der Königlich Bayerischen Akademie der Wissenschaften*, 4.2 (1845), pp. 109 – 204; 4.3 (1846), pp. 123 – 240

慶應義塾図書館の洋貴重書

慶應義塾大学文学部教授

松田 隆美

慶應義塾図書館貴重書室の洋書コレクションには、17世紀以前の写本と刊本を中心に約4500タイトルが所蔵されている。コレクションの内容は多岐に渡るが、慶應義塾大学の研究者の専門領域を反映して、中世写本零葉、インクynaブラ、エンブレム・ブックに代表されるような16・17世紀の挿絵入り本、18・19世紀の博物学文献、中世後期から近代の科学史・哲学史、西洋経済史・法制史、キリシタン史関連文献が特に充実している。これらの書物は過去19回の慶應義塾図書館貴重書展や慶應義塾大学図書館のデジタル・ギャラリーで既に多数紹介されてきたが、20周年の記念展示となる今回の展示では、近年の貴重書展で展示されることがない書物を中心に、書物と読者との関わりに注目して、中世写本から現代文学までの様々な分野から33点を選択した。

書物は、特定の時代に特定の人物によって書かれたテキストを現在と未来の読者へと伝えるための単なる媒体ではない。書物にはそれぞれ個別の出版事情があり、また、一冊毎に異なる読者や所有者が存在する。それは、書物の形態やデザイン、装飾、読者による書き込みなどに反映され、書物を一冊ごとにユニークな存在としている。時代を超えてきた書物は文化遺産であると同時に、それが特定の個人によって利用されて今日まで受け継がれてきた点において、プライベートな歴史の証人でもある。一冊の書物からは、書物を取り巻く固有の文化的文脈が読み取れるのである。

今回の展示では、書物が歴史のなかで生まれ、それぞれが持つに至った個性に注目しながら、ヨーロッパの書物文化を中世から現代まで跡づけてゆく。展示は、以下のセクションに分けられ、ほぼ年代順に構成されている。

〈中世ヨーロッパの写本〉 貴重な羊皮紙に書かれた手書きの写本は、一冊毎に異なる成立事情と物理的特徴を有している。そうした点に焦点を当てて、中世後期に西ヨーロッパとビザンツで制作された写本を紹介する (No. 1-2)。

〈15・16世紀の時禱書と典礼書〉 中世にもっとも数多く制作された彩色写本は、教会の典礼儀式で聖職者が使用するミサ典書や聖務日課書、または一般の信徒が私的な祈りのために所有した時禱書などである。その需要は15世紀以降活版印刷術の時代になってからも衰えることはなく、手書きの細密画のかわりに木版の挿絵を用いた宗教書が印刷された。15世紀後半から16世紀前半にかけては写本から活版印刷本への緩やかな移行期であると言えるが、その時代に制作された時禱書 (写本と印刷本) とミサ典書を展示する (No. 3-

6)。そこには、技術革新を越えて中世から近代初期へと受け継がれていった人々の心性がうかがえる。

〈ルネサンスの古典研究と写本〉 ルネサンスのヒューマンイズムの基本は、ギリシャ・ラテンの古典文学の写本を系統的に整理して原テキストを復元する原典研究である。特にキケローの著作はそうした研究の中心的素材で、ルネサンスの教養人にとって必読書であった。15世紀イタリアの美しい人文主義書体で書かれたキケローの写本を展示する (No. 7-8)。

〈インキュナブラ — 印刷術揺籃期の書物〉 ヨーハン・グーテンベルクは1454/55年頃に、西洋初の活版印刷本『42行聖書』を完成させた。これ以降、西洋の書物生産は活版印刷の時代にはいるが、1500年末までにヨーロッパで活版印刷された印刷物をインキュナブラと呼ぶ。「インキュナブラ」とはラテン語で「ゆりかご」を示す 'cunabula' から派生した言葉で、「ゆりかごの中のもの」、つまり生まれたての活版印刷本を意味する。初期の印刷業者の仕事には組版技術等に未熟さがうかがえるものの、当時の写本に倣って手彩色の装飾をほどこしたり木版画を用いたりして、美しい書物を生み出した (No. 9-12)。

〈16世紀ヴェネツィアのアルドゥス版〉 活版印刷術の揺籃期を経て16世紀に入る頃には、用途も形態も様々な印刷本がヨーロッパ中で印刷されるようになる。ヴェネツィアのアルドゥス・マヌティウス (Aldus Manutius; 1449/50 – 1515) は16世紀を代表する印刷業者で、ギリシャ・ラテンの古典テキストの刊行によってルネサンスの古典研究に貢献した。また、アルドゥスはこうした古典文学を初めて携行に便利なポケットサイズの小型本 (アルドゥス版) で刊行し、書物の形態に革命をもたらしたと言っても過言ではない (No. 13-16)。

〈ヒューマニスト達の書物〉 ルネサンスのヒューマニスト達の思想は、国際語のラテン語で出版されることで、国境を越えて速やかにヨーロッパ中に広まっていった。16世紀の大学等で人文主義教育に使われた古典テキストの合冊本と、デシデリウス・エラスムス『痴愚礼讃』とトマゾ・カンパネッラ『克服されたる無神論』の初版本を展示する (No. 17-19)。

〈16・17世紀の挿絵入り本 — 木版画とエンブレム・ブック〉 版画の手法は活版印刷術の登場とほぼ時期を同じくして確立し、16世紀になると、版画で挿絵を入れた書物が盛んに刊行されるようになった。なかでも、版画と詩文を組み合わせた版画集や、寓意的挿絵とその解説で構成されるエンブレム・ブックは人気を博した (No. 20-23)。

〈中世・ルネサンスの物語文学の刊行〉 17世紀に入る頃には、中世やルネサンスのポピュラーな物語も様々な版で刊行され、さらに広い読者層へと浸透していった。廉価版や海賊版も登場し、その一方で定評ある版のファクシミリも作られた。16・17世紀に刊行された14-16世紀の人気作家 — ボッカチオ、ラブレール、マロリー — の諸版を紹介する (No. 24-26)。

〈実用書としての書物 — 近代のロングセラー〉 近代のヨーロッパでもっとも長期にわ

たって版を重ねた書物は、暦や教科書の類の実用書である。それらは手間や費用をかけて制作されたものではないが、挿絵を多用して、読み書きや生活の知恵、基本的道徳を教えた。しかし皮肉なことに、実用書であったがゆえに大切に保存されることも少なく、今日では現存部数が極めて少ない稀観書になっている (No. 27-28)。

〈エルゼヴィル版の世界〉 エルゼヴィルは17世紀のヨーロッパを代表する出版社で、1580年から1712年の間に、西洋古典、現代文学、法律や哲学などの分野で3000タイトル以上を刊行した。出版の中心は、16世紀のアルドゥス版よりも一回り小さなエルゼヴィル版と称される小型本で、安価であるにもかかわらず版組が美しいことで人気を得た (No. 29)。

〈19・20世紀文学の初版本〉 それまでの文学の伝統や常識を踏み越えるような作品が世に出る際には、検閲などの障害がつきまとうことがある。そのような状況下で刊行された文学作品の例として、ボードレール『悪の華』とジョイス『ユリシーズ』の初版を挙げる (No. 30-31)。

〈書物に見る日欧交流〉 書物は常に異文化を知るための媒体として中心的役割を担ってきたが、西洋が地理的に遠い日本の明治以前の姿を知りえたのは、来日した西洋人によって記された書物によるところが大きい。そうした書物のなかから、コリヤード『羅西日辞典』とシーボルトの論文『日本の植物』を紹介する (No. 32-33)。

〈展示図録について〉

展示図録の洋書部分は、展示書毎に、(1) 日本語による著者名、書名、出版地、出版年、(2) 原語による著者名（生没年がわかる場合は併記）、書名、出版地、印刷・出版者、出版年、(3) 解説および図版、(4) 書誌記述、(5) 目録典拠および参考文献、(6) 慶應義塾図書館の請求記号で構成されている。書誌記述は、原則としてFredson Bowers, *Principles of Bibliographical Description* (1949; repr. Princeton, NJ: Princeton UP, 1986) に即して標題紙 (title page)、奥付 (colophon)、校合式や丁付け等の書誌事項 (collation) を示した。ただし、標題紙と奥付の転写においては、略字 (abbreviation) は完全な形に開き、大文字・小文字の使用は標準化し、書体は統一した。Statement of signingの記述では、文字のヴァリエーションや活字セットの違いは、それが誤った折記号と解釈されうる場合を除いて特記していない。また、標題紙には通常折記号が付されないの、付されていなくとも特記していない。

目録典拠への言及は主要なものに留めた。展示書が過去の慶應義塾図書館貴重書展の展示図録で紹介されている場合は、その図録名と参照番号を略号で記した。図録執筆に参照した文献は展示書毎に列挙し、解説文中でそれらの文献から引用する場合は、引用箇所に () で著者名と引用ページを示してある。また、解説中の該当箇所に対応する図版を「図1」あるいは[1]、[2]と [] に入れて明記した。また巻頭のカラー図版は、[c1]、[c2]として示した。他の展示書への相互参照は、解説中の該当個所に (no.) として図録の番号を示した。

書誌調査や図録の準備においては山岸恵美子氏、徳永聡子氏の助力を得た。この場を借りてご協力に感謝したい。

〈略語一覧〉

Ahmanson-Murphy : Barker, Nicolas and others, *A Catalogue of the Ahmanson-Murphy Aldine Collection at UCLA* (Los Angeles, 1989 – 92)

BN : 鷲見洋一『繁殖する自然 — 博物図鑑の世界』(慶應義塾図書館、2003)

Fairfax Murray (French) : *Catalogue of a Collection of Early French Books in the Library of C. Fairfax Murray*, compiled by Hugh W. M. Davies, 2 vols (London, 1961)

fep : free end paper

IJL2 : *Incunabula in Japanese Libraries (IJL2)*, compiled by Koichi Yukishima, 2nd edn of *Union Catalogue of Incunabula in Japanese Libraries* (Tokyo, 2004)

IKUL : Incunabula of the Keio University Library (慶應義塾図書館所蔵のインキュナブラに収蔵順に付された整理番号。慶應義塾図書館デジタルギャラリー (DG KUL) インキュナブラ・コレクション参照。http://project.lib.keio.ac.jp/dg_kul/

incunabula_about.html)

ISTC : *The Illustrated Incunabula Short-Title Catalogue on CD-ROM*, ed. by Martin Davies, 2nd edn (Reading: Primary Source Media in association with the British Library, 1998)

MB : 松田隆美編 『Mostly British: Manuscripts and Early Printed Materials from Classical Rome to Renaissance England in the Collection of Keio University Library / ローマ帝国からイギリス・ルネサンスへ — 慶應義塾図書館蔵稀覯書展』 (慶應義塾大学、2001)

PP : 高宮利行監修 『「鷺ペンから印刷機へ」展 — 目で見ると西洋写本文化と印刷文化 : 展示会目録』 (丸善、1991)

RA : 松田隆美 『寓意の鏡 : 16・17世紀のヨーロッパの書物と挿絵』 (慶應義塾図書館、1991)

STC : *A Short-Title Catalogue of Books Printed in England, Scotland, & Ireland and of English Books Printed Abroad 1475–1640*, first compiled by A. W. Pollard and G. R. Redgrave, 2nd edn, revised and enlarged by W. A. Jackson, F. S. Ferguson, and Katharine F. Pantzer, 3 vols (London: Bibliographical Society, 1986–1991)

T : 慶應義塾大学HUMIプロジェクト編集 『よみがえるグーテンベルク : デジタル世界への知の継承 — グーテンベルク聖書収蔵記念慶應義塾図書館稀覯書展』 (慶應義塾大学HUMIプロジェクト、1996)

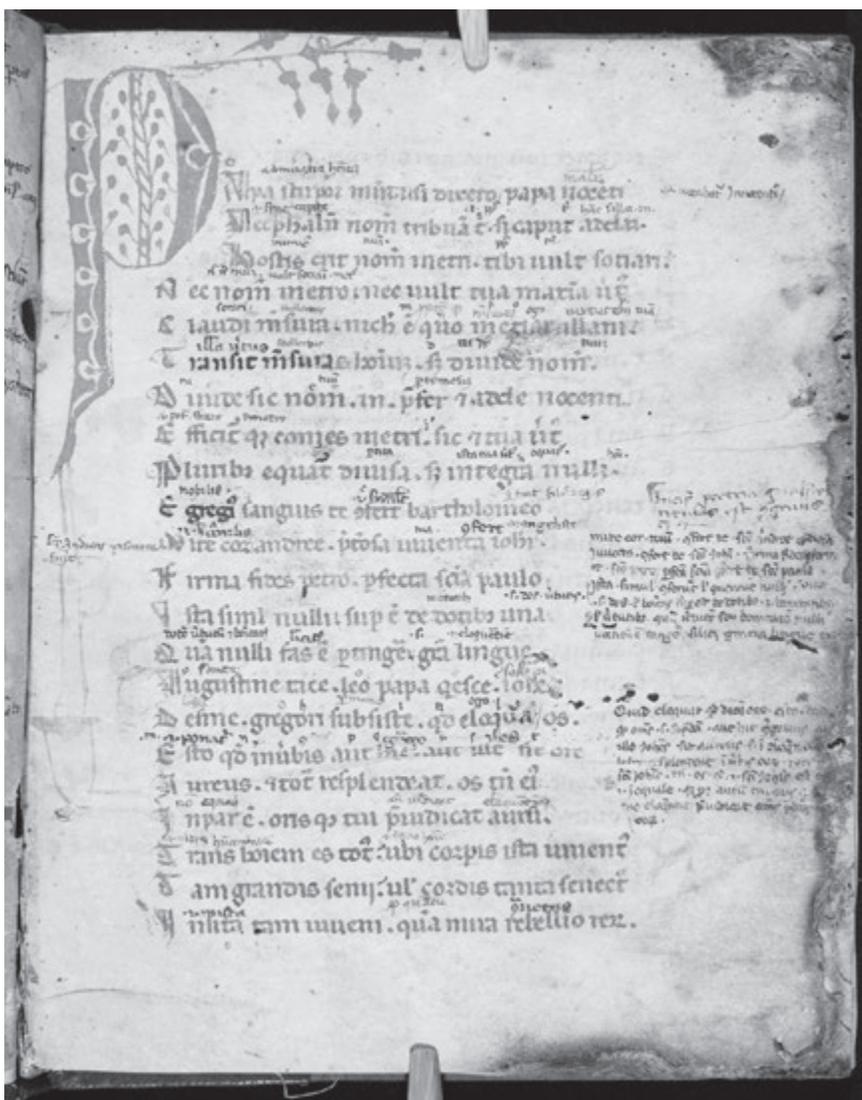
t.p. : title page

〈中世ヨーロッパの写本〉

1

ジェフリー・オヴ・ヴィンソフ『新詩法』 写本（イタリア中部、おそらくヴィテルボ、14世紀前半）

Galifridus de Vinosalvo [Geoffrey of Vinsauf]. *Poetria nova*. Central Italy (probably Viterbo), first half of the 14th century

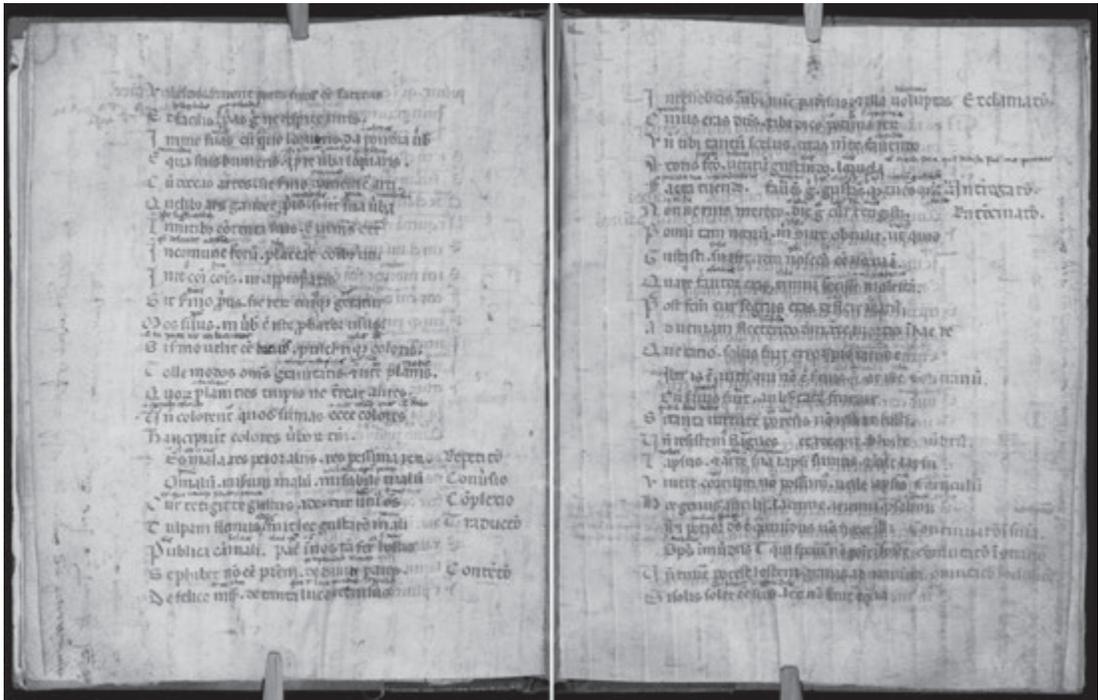


[1: fol. 1^r]

『新詩法』(*Poetria nova*; c.1200-2)は、詩作の原理や修辞法をまとめた修辞学の提要で、6歩格2116行からなるラテン語の韻文で書かれている。著者のジェフリー・オヴ・ヴィンソフについては、イギリス人であることとパリやローマに滞在したことがあるという程度のことしかわかっていない。しかし、この作品がローマ法王インノケンティウス3世に献呈されていること、また、修辞の具体例のひとつとして、ジェフリーの自作と思われるリチャード1世の死を悼む詩が挙げられていることから、宮廷や教皇庁と関係があった人物であると推察される。『新詩法』は、同じくジェフリーが記した『詩作法指南』(*Documentum de arte versificandi*)とともに修辞学の教科書として大学等で活用され、現在でも200点以上の写本が現存しているが、この現存数は中世に著された作品のなかでは群を抜いて多い。14世紀のイギリスを代表する詩人ジェフリー・チョーサーは『カンタベリ物語』のなかで、「卓越した尊敬すべき大先生」(VII. 3347)とジェフリー・オヴ・ヴィンソフに呼びかけて上に述べたリチャード1世への哀悼文に触れており、このことから『新詩法』は中世後期に広く読まれたテキストであったと推察される。

本書は羊皮紙に書かれた写本で、使われている紙葉の大部分がパリンプセストである点は注目に値する。中世を通じて羊皮紙は貴重品であったため、不要になった羊皮紙の表面から書かれたテキストを洗い流したり削り取ったりして白紙に戻し、その上に新たにテキストを書くということが行われていた。そのように再利用された羊皮紙をパリンプセストと呼ぶが、処理が不十分だと、時間の経過とともに消されたはずのテキストが浮かび上がって判読可能になることがある。本写本にも判読可能な箇所がかなりあり、そうした部分を調べてみると、14世紀初期の書体で書かれた公証文書や13世紀末から14世紀の書体による法律文書の写本を再利用したことがわかる[2]。特に、fols 39^v-49^vはイタリアのヴィテルボの書記官がつけていた支出台帳で、紫外線を用いて詳しく調べてみると、「ヴィテルボ市の書記官、アンジェロ・ダ・ナルニ僧によって、1316年3月になされた支払い」(*Impense facte per fratrem Angelum de Narnia, cancellarium comunis civitatis Viterbi de mense marcii 1316...*)と書かれていることがわかる。このため、本書は14世紀初期にヴィテルボで書かれたと推測されている。

パリンプセスト写本の近年の有名な例としては、12世紀の典礼写本の下に、10世紀のビザンツで写字されたアルキメデスの未発見テキストが隠れていたケースがある。「アルキメデス・パリンプセスト」と称されるこの写本は、現在米国ボルチモアのウォルターズ・アート・ギャラリーに寄託されて、最新技術を駆使した解読がなされている。展示書の場合も、書物の「もの」としての側面に注目することで、写本の興味深い前世を知る手掛かりが得られるのである。



[2: fols 34^v–35^r]

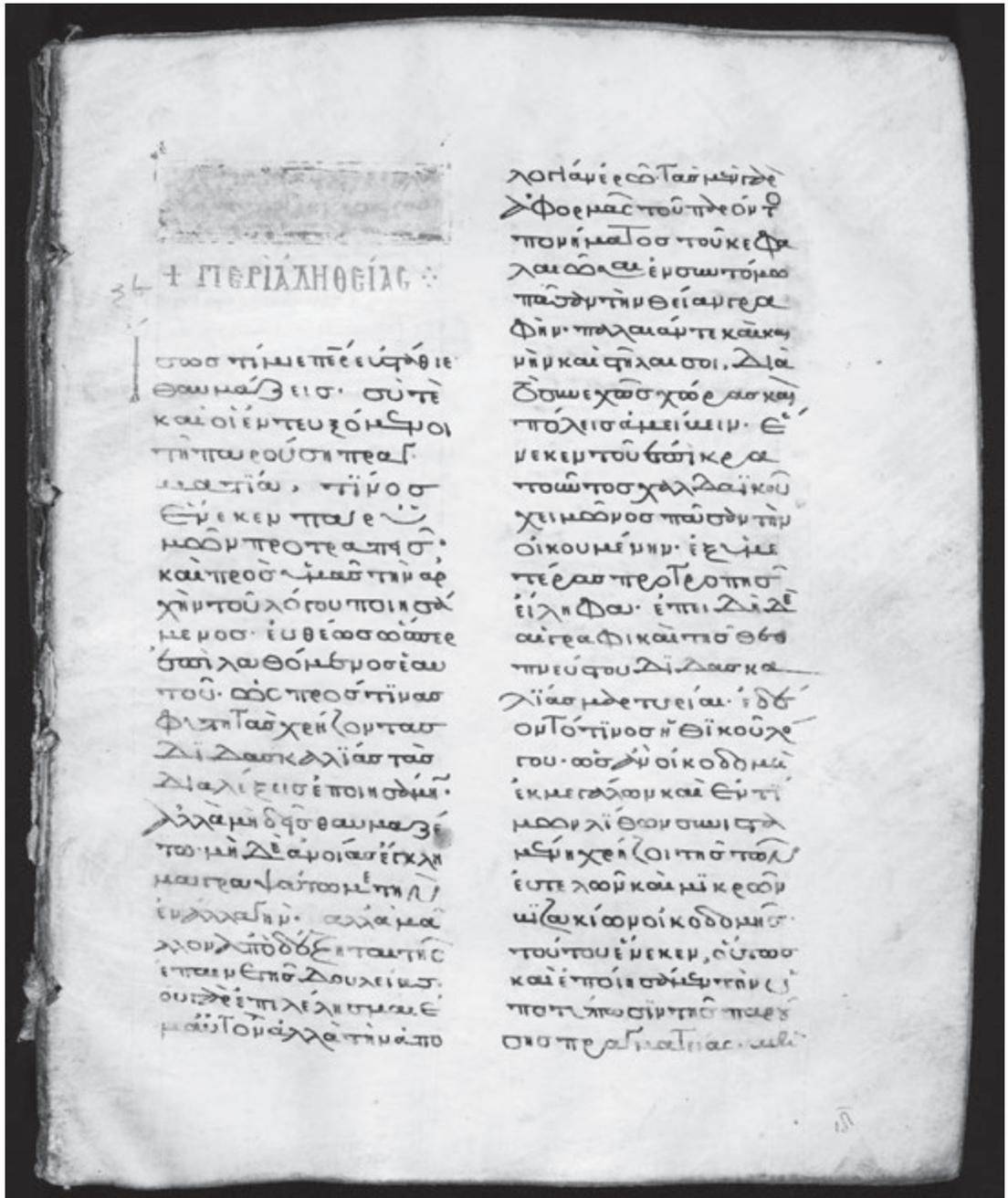
MS on vellum ; 4to : 1–2⁸ 3¹² 4–5¹⁰; 48 leaves unnumbered. 212×165mm. Many of the leaves palimpsest; catchwords at end of each quire; 3 vellum flyleaves (1 at the beginning and 2 at the end). Large gothic miniscule; marginal and internal notes in 14th– and 15th–c. cursive and miniscule.

A. G. Rigg, *A History of Anglo-Latin Literature 1066–1422* (Cambridge, 1992); Edmond Faral, *Les arts poétiques du XXI^e et du XIII^e siècle* (Paris, 1924) pp. 197ff; E. Gallo, *The Poetria Nova and its Sources in Early Rhetorical Doctrine* (Den Haag, 1971)

[120X 972 1]

聖サバスのアンティオコス『パンデクテン』他 写本 (地中海東部、12-14世紀)

Antiochos of Saint Saba. *Pandects*. Eastern Mediterranean, 12th – 14th century



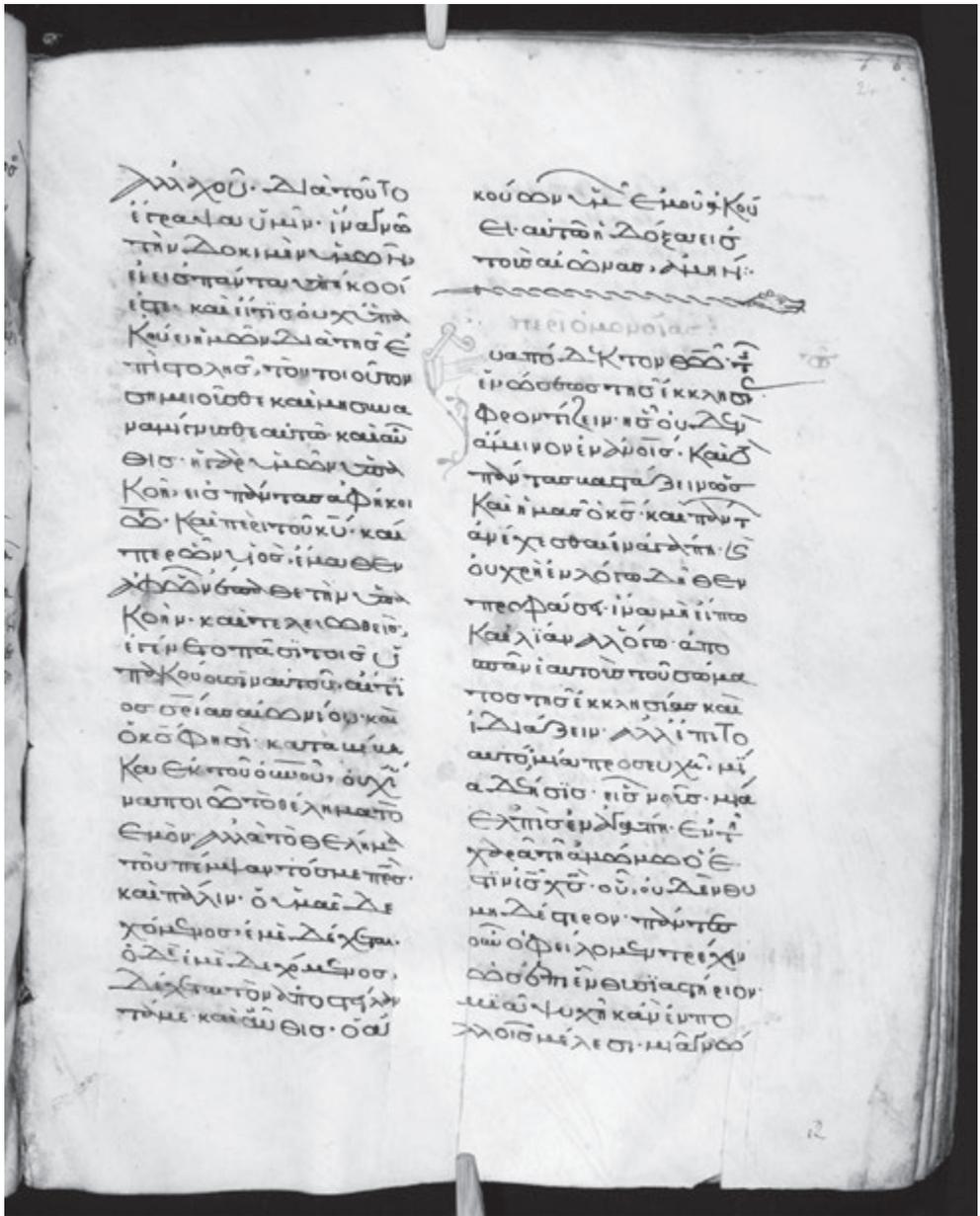
[1: fol. 1']

7世紀のアンティオコスによる著作を収めた中世後期ビザンツの写本である。著者のアンティオコスは、カッパドキアの聖サバス（532年没）によってベツレヘム郊外に創設され、今日も活動を続けているラウラ（東方正教会の大修道院）の修道僧であった。614年にササン朝ペルシャによってエルサレムが占領され、近郊にあった同修道院も略奪されたが、その時は辛うじて難を逃れたようである。

写本には、アンティオコスの代表作で622年以降に執筆されたと思われる『パンデクテン』（fols 1^r-105^{vb}）に続いて、アンティオコスによる祈祷文や演説、アンティオコスの簡潔な伝記、ナツィアンのグレゴリオスの短い著作等が含まれるが、それらの大半は『パンデクテン』に関連する内容である。「パンデクテン」とは、修道院生活に関する教義や戒律をまとめた総覧であるが、ペルシャ人の攻撃に晒され、しばしば移動を余儀なくされた7世紀の聖地の修道院では、こうした要約への現実的な需要があった。聖サバス修道院は、図書館と写字室を備えた重要な修道院で有り続け、11世紀には、アンティオコスを手本にした同種の総覧がニコンという名の僧（Nikon of Black Mountain）によって記されるが、その時も執筆の契機となったのはサラセン人のシナイ半島侵略であった。

本書は、ビザンツ帝国の地中海東部地方で修道院のために制作された写本で、書体から12世紀から14世紀の間に制作されたと推察される。中世のギリシャ語写本に特徴的なタイトバックの装丁になっている。

写本の最初の紙葉には中世の書体で14(=14)というギリシャ文字の折丁記号(signature)が書き込まれており[1]、写本が14番目の丁から始まっていることが明らかなことから、本書は前半部分が欠落した断片である可能性も考えられる。しかし、写本の冒頭には金彩をほどこした装飾があり、全130章からなる『パンデクテン』の丁度真ん中の65章から始まっていることからすると、本写本は断片ではなく、もともと2巻本の写本の2巻目であったのではないかと思われる。また、写本にはモスコス・マルコレオン（Moschos Markoleon）という人物による短い詩も含まれていて、そのなかで、自らこの写本を「写して寄贈した」と述べていることから、この人物が写本の写字生か寄贈者である可能性が高い。



[2: fol. 24^v]

MS on vellum; 8vo: ιδ-κη⁸; 112 leaves (lacks ιε7, ιθ5) unnumbered, 2 cols; 310×245mm. Text in brown ink, miniscule hand of 12–14th c.

Claudia Rapp, 'The Antiochos Manuscript at Keio University: A Preliminary Description', in *Codices Keionenses: Essays on Western Manuscripts and Early Printed Books in Keio University Library*, ed. by Takami Matsuda (Tokyo, 2005), pp. 11–29; Antiochos of Saint Saba, *Pandects*, ch. 65–130 (PG. 89: 1625D–1849B)

[141X 127 1]

〈15・16世紀の時禱書と典礼書〉

3

「ラテン語時禱書」 写本（ルーアン、1465-80年頃）

Book of Hours, Use of Bayeux, in Latin. Rouen, c. 1465 – 80



[1: fol. 60r]

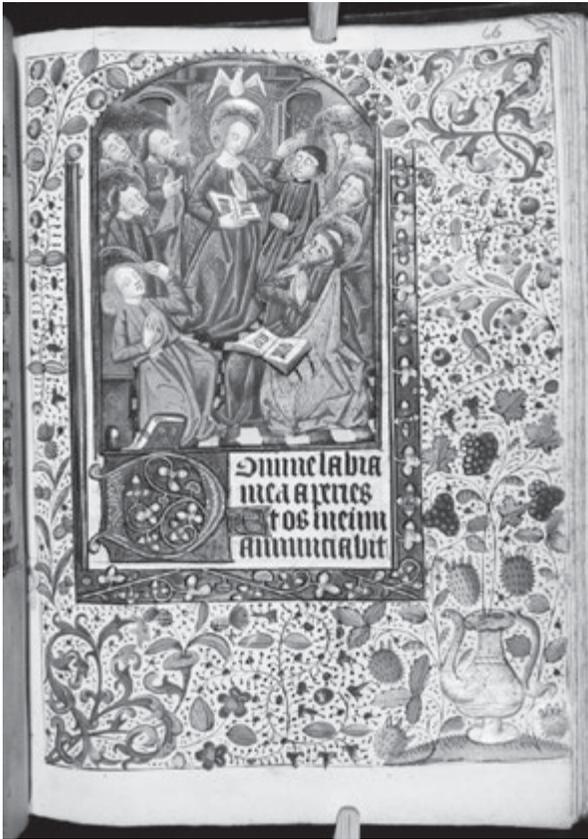
本書は、1465-80年頃にノルマンディーのルーアンで制作された写本の時禱書で、同じノルマンディー地方にある、中世には重要な司教座都市であったバイユーで実施されていた典礼の形式に準拠して編纂されている。

時禱書は、聖職者ではない一般の信徒がミサの時に携行したり、プライベートな祈祷や黙想に使用したりした中世の祈祷文集である。14世紀から16世紀にかけて数多くの写本が制作され、王侯貴族から市民や商人に至るまでの広い層に流通し、中世後期のベストセラーであった。また、最も現存数の多い中世写本のひとつでもある。

時禱書を構成するテキストは、写本の制作地や用途によって多少の差はあるが、基本的に共通している。冒頭には典礼暦がおかれ、福音書読誦、聖母マリアの定時課、悔悛詩篇、死者のための定時課などの祈祷文と聖書からの抜粋が続いている。通常、祈祷文の区切りにはキリストや聖母マリアの生涯を描いた細密画が挿入される。本写本の細密画は、「受胎告知」[c1]、「キリスト生誕」、「聖母戴冠」[1]、「ペンテコステ」[2]、ダビデ王、「死者の埋葬」の場面を描いた6点である。

王族や貴族、高位聖職者の注文によって制作された時禱書には、中世後期の有名画家が細密画や欄外装飾を担当した豪華な写本も存在する。ランブール兄弟が制作した中世美術史の代表作のひとつに数えられる「ベリー公のためのいとも豪華なる時禱書」は、その代表例であろう。しかし、こうした注文生産による一点ものの写本が制作される一方で、パリなどの主要都市の書物生産工房は、手本となる細密画や欄外装飾を写したり真似したりすることで、効率よく既成品の時禱書を制作していた。こうした写本は比較的安価で、中産階級の市民や商人などが購入した。

本書が制作された15世紀後半のルーアンは、約75,000人の人口を抱えるノルマンディー地方の中心都市で、北フランスのみならずイングランド向けにも多数の書物を制作していた重要な出版地であった。ルーアン大聖堂の北門は今日でも‘Portail des Libraires’（本屋の門）と呼ばれているが、当時、付近には書物制作工房兼書籍商が密集していて、主に聖務日課書などを制作して教会に納入するかたわら、時禱書を分業で生産していた。展示品もそうした工房で分業で作られたもので、細密画の様式や細部の特徴も同時期にルーアンの工房で制作された他の時禱書の挿絵と共通しており、15世紀後半に生産された典型的な工房製の写本と言える。慶應義塾図書館は他にも時禱書の零葉を何枚か所蔵している。その中の一枚、5月の典礼暦の紙葉にも同じモチーフの欄外装飾が見られることから、こちらも、おそらくほぼ同時期にルーアンの工房で制作されたものであると思われる[3]。



[2: fol. 66^r]



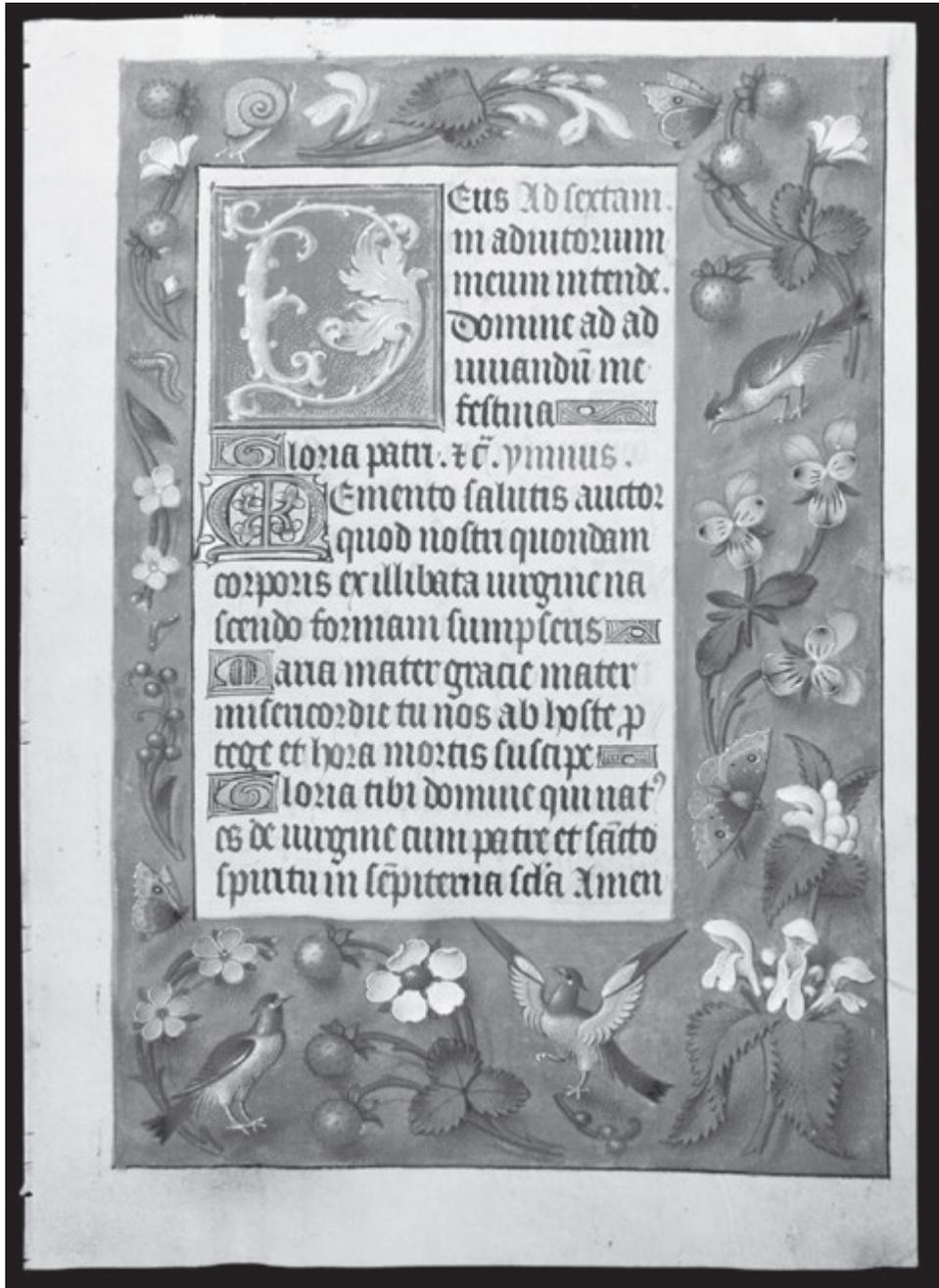
[3: recto, detail]

MS on vellum: 1^s 2^s 3^d 4^t 5–6^s 7^d 8^s 9^{to} 10^s 11–14^s 15^r 16^s 17^e (–17^e); 117 leaves (lacks 9^s, 10²) unnumbered; single column, 16 lines to page. 176×119mm. 2 vellum flyleaves (1 at the beginning and 1 at the end). Written in black ink in a gothic liturgical hand. 6 full page miniatures with full borders in colours and burnished gold; 4 large illuminated initials with three-quarter illuminated borders. A series of alphabet added on 17^s in a contemporary hand.

illumination: The Annunciation (5^{1r} [fol. 25^r]), The Nativity (8^{1r} [45^r]), The Coronation of the Virgin (9^{7r} [60^r]), Pentecost (10^{4r} [66^r]), David in prayer (11^{1r} [70^r]), a burial service (13^{1r} [86^r]).

時禱書零葉 写本（ゲントあるいはブルージュ、1510-20年頃）

Leaf from a Book of Hours. Ghent or Bruges, c.1510 – 1520



[1: recto]

本零葉は、もともとブルージュで使用されていたローマ式典礼の時禱書の一部で、聖母マリアの時禱の六時課の冒頭の一葉である。モチーフが地に影を落とすように描かれる騙し絵（トロンプ・ルイユ）的な装飾技法は、シモン・ベニング（Simon Bening; c.1483–c.1561）に代表される15世紀後半から16世紀初頭のフランダースの細密画の特徴である。シモン・ベニングはフランダースの細密画家の最後の巨匠で、カルロス5世をはじめとするヨーロッパ各地の王族や高位聖職者の依頼を受け、「グリマーニ聖務日課書」等中世後期を代表する写本の細密画を数多く手がけた。こうしたベニングの様式は16世紀初頭のгентやブルージュの工房でも踏襲され、この零葉の小鳥、花、苺、蝶などがあしらわれた装飾枠も、そうした工房で描かれたものである。実際、中央下部に描かれている小鳥は、ベニングが「グリマーニ聖務日課書」に描いた小鳥と酷似している。ベニングの様式は立体的に描かれた装飾頭文字‘D’にも表れている。それに対して、本文中のゴシック体で書かれた小型の頭文字は、より伝統的な様式で装飾されている。

おそらく、この零葉は、本文部分が15世紀後半にフランスで書かれた後、16世紀初頭にгентかブルージュのシモン・ベニングの様式を踏襲した工房に持ち込まれ、大型の装飾頭文字と装飾枠が描きこまれたと推測される。

MS on vellum; single leaf, single column. 206×148mm. 17 lines written in black ink in Gothic textura quadrata script.

MB 21; Alain Arnould and Jean Michel Massing, eds, *Splendours of Flanders: Late Medieval Art in Cambridge Collections* (Cambridge, 1993); Maurits Smeyners and Jan van der Stock, eds, *Flemish Illuminated Manuscripts 1475–1550* (Ghent, 1996); *The Grimani Breviary* (London, 1972)

[170X 29 1]

「リヨン式ミサ典書」(リヨン、1500年)

Missale Lugdunense. Lyon: Petrus Ungarus, 1500



[1: a1]

本書は1500年にリヨンで印刷されたミサ典書である。

ミサ典書 (Missal) は教会の典礼儀式で使用される書物で、司式司祭とその補佐役が唱え歌う式文を収めている。本書は、通常のみサ典書の内容である暦や祝日と週日の固有文などに加えて、司祭がひとりで歌う先唱句の楽譜が付いた「典譜付きミサ典書」(Noted Missal) と称される形式をとっている。冒頭のページは手書きの欄外装飾で飾られていて、15世紀末のフランスの時禱書のスタイルに似ている[1]。小鳥や木イチゴなどのモチーフを配した草花文様と、ソロモンを描いた挿絵入り頭文字が余白を埋め尽くし、さらに下段には、15世紀のインキュナブラにしばしば見られるように (No. 9参照)、所有者の紋章が描きこまれている。また、本書には「君臨するキリスト」と「磔形」を描いた見開きの全ページ大木版画2点があるが、それぞれに丁寧な手彩色がほどこされている[2]。他にも彩色された木版の挿絵入り頭文字が31点あり、キリストの生涯などが描かれている。16世紀初頭に印刷された典礼書や時禱書では、木版の挿絵に手彩色をほどこすことは珍しくないが、本書は大型のフォリオ版であるために、特にその鮮やかさが目立っている。

本書を印行したのはペテルス・ウンガルス (Peterus Ungarus) で、Ungarus (ラテン語でハンガリーの意味) という名からハンガリー出身と思われるこの人物は、1482年からリヨンで活躍していたことが知られている。

巻末には十数葉の紙葉が綴じられているが、そこには、16世紀の筆跡で書かれた祈禱文や賛美歌のほか、法王レオ10世の教皇教書がびっしりと書き込まれている。また、タイトルページに17世紀の筆跡で「リヨン大聖堂、マグダラのマリア礼拝堂用」(‘Pro Sacello B. Magdalence Ecclesiae Lugd.’) と記されていることから、本書が出版地のリヨンで実際に使用されていたと推測される。しかし、装幀は17世紀のイギリスのスタイルなので、ほどなくイギリスに持ち込まれたのであろう。表表紙の裏には19世紀のトマス・ウェルド=ブランデル (Thomas Weld-Blundell; d. 1887) の蔵書票が貼られているが、ウェルド家はドーセット州の由緒あるカトリックの一族である。トマスの伯父 (Thomas Weld; 1773-1837) は枢機卿にまでなった人物で、さらにその父 (Thomas Weld of Lulworth; 1750-1810) は、フランス革命の難を逃れてイギリスに渡ってきたカトリック教徒を援助し、亡命してきたイエズス会士のためにストーンニーハースト・コレッジを寄付し、トラピスト派の修道院を経営していた。本書がイギリスに渡った後、代々敬虔なカトリック教徒の一族によって受け継がれてきたことは明らかである。

本書はリヨンの大聖堂図書館に4部 (内完本は2部)、ヨークの大聖堂図書館に1部現存するのみで、極めて希少である。



[2: n4^v–n5^r]

Title, †1^r: Missale ad vsum | Lugdunum.

Colophon, L9^v: impressum per | magistrum Petrum vngarum im- | pressorie artis bene peritum fe- | liciter absolutum. Anno incarna- | tionis domini. M. ccccc. Die. xvj. men | sis aprilis. Regnante christianissi | mo rege nostro Ludouico. Anno regni sui secundo.

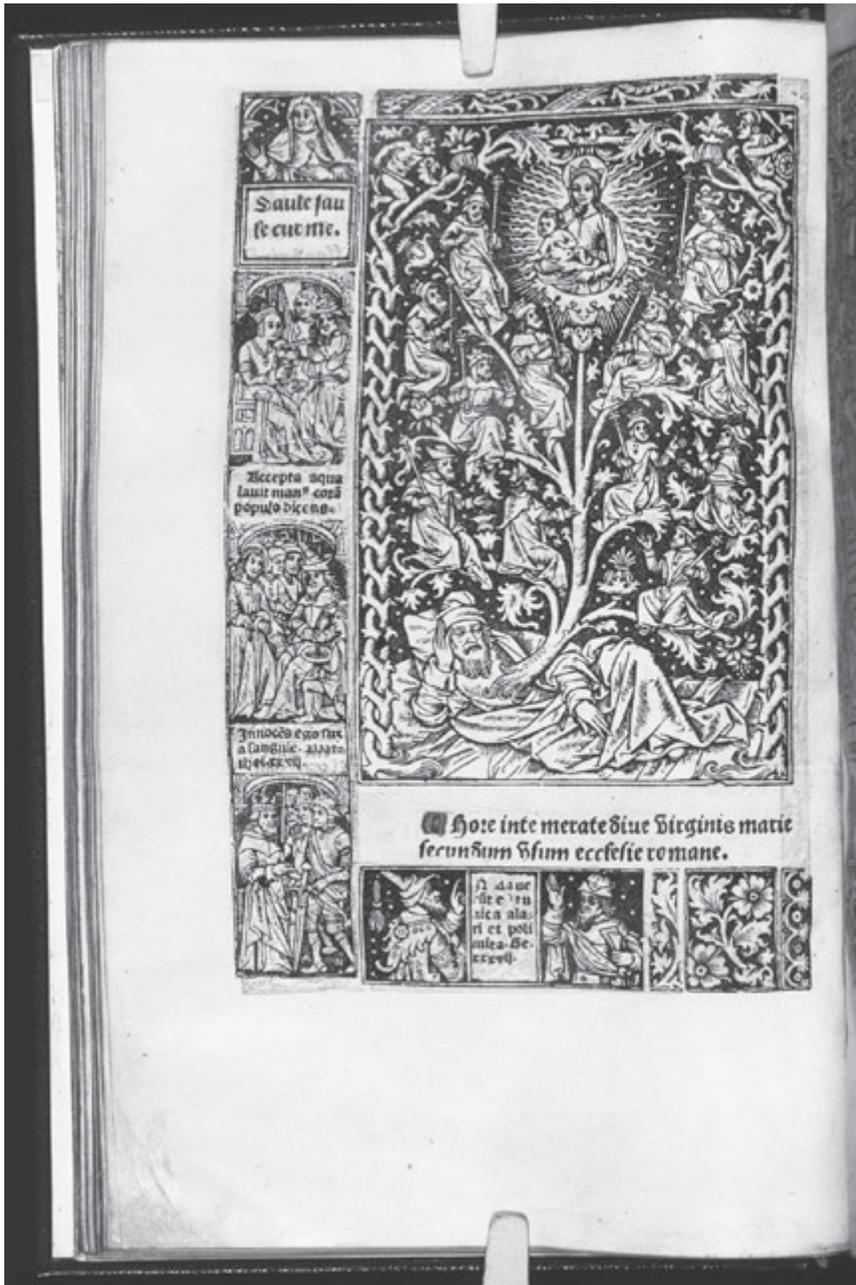
folio: †¹⁰ a-n⁸ o⁶ p-x⁸ y⁴; A-E⁸ F¹⁰ G-K⁸ L¹⁰ (-L10) [\$4 (-o4, y3,4; + †FL5) signed]; 271 leaves, ff. [10] [I] II-C [CI] CII-CIX [CX] CXI-CCLXI [misnumbering XXXVIII as XXVIII, CVIII as CX, CLXXIII as CLXXII, CXCIV as CCXVII, CCXLII as CCXL]. 329×245mm. 10 leaves added at the end, filled with manuscript hymns and prayers in the same hand and the transcription of a papal Bull of Leo X from 1514.

ISTC im00670200; IJL2 277; W. H. Jacob Weale and H. Bohatta, eds, *Bibliographia Liturgica: Catalogus Misalium Ritus Latini Ab Anno M.CCCC.LXXIV Impressorum* (London, 1928), no. 548

[141X 128 1]

『ローマ式聖母マリアの時禱書』（パリ、1503年頃）

Hore intemerate dive virginis Marie secundum usum ecclesie Romane. Paris: Jehan Poitevin, c.1503



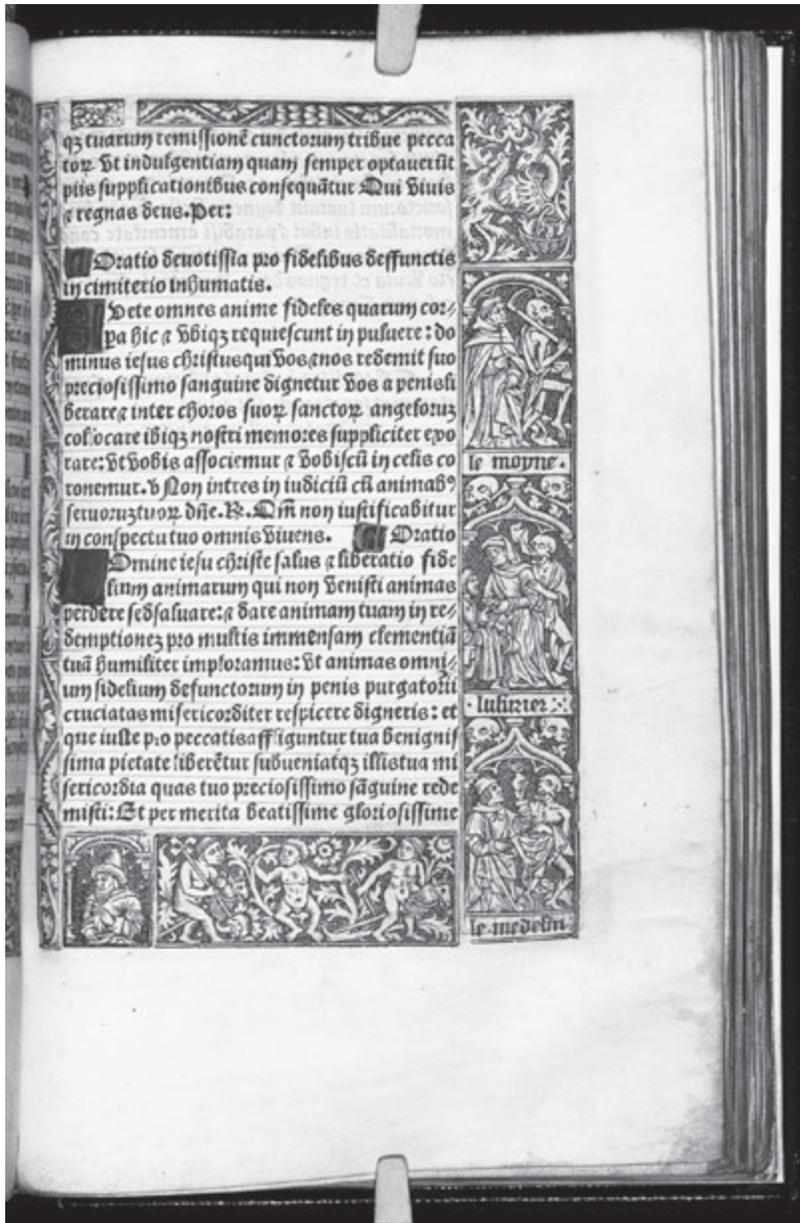
[1: aa8^v]

中世に制作された彩色写本の多くは、聖務日課書、ミサ典書、典礼用詩篇、あるいは時禱書といった典礼書や祈祷書の類であり、貴族や高位聖職者のために注文生産された写本のなかには、当時の代表的な画家が細密画を描いて装飾した豪華なものも多い。印刷本の時代になると、そうした豪華さを少しでも再現するために、木版画を多数用い、手彩色をほどこした欄外装飾で飾られたものが次々と刊行された。

本書も、そのような木版画をふんだんに用いた印刷の時禱書である。キリストと聖母マリアの生涯を中心に描いた木版による全ページ大の挿絵が16点、使徒や聖人を描いた小型の木版画は29点も使われており、全てのページが、聖書の予型論的の主題、聖人、死の舞踏、グロテスクなどのモチーフを組み合わせた小型の木版画から成る装飾枠で飾られている。装飾枠と大型の挿絵との内容はしばしば関連しており、たとえば「生誕」の挿絵には、再臨の意義を伝えるべく、キリストの復活の場面とそれを予型論的に暗示する旧約聖書の2つの場面 — ガザの門を担ぐサムソン（「士師記」16：1-3）と鯨に吐き出されたヨナ（「ヨナ書」2：11） — の装飾枠が組み合わされている[c2]。さらに、死の舞踏のモチーフ（No. 20 参照）は、主に「死者のための祈り」と「痛悔詩篇」の装飾枠に用いられていて、テキスト内容にも対応するような工夫がしてある[2]。これらの木版は、もとは同じくパリで活躍していた印刷業者のフィリップ・ピグーシェ（Philippe Pigouchet）が考案したもので、15世紀後半にオランダで作成された木版本の「貧者の聖書」（*Biblia pauperum*）の挿絵などを手本としている。16世紀初頭に印刷された時禱書には頻繁に見られる、ポピュラーな意匠である。

初期印刷本では、一部を特製版として、紙ではなくヴェラムに印刷することが一般的であった。本書もヴェラムに印刷されており、通常は無いフランス語の痛悔詩篇が巻末に付け加えられていることや、頭文字が金彩を用いた手書きであることから、特別にあつらえた一冊であることがうかがえる。

ラファエロ前派の画家で、19世紀を代表する絵画や稀覯書の蒐集家であったフェアファックス・マレー（Charles Fairfax Murray; 1849-1919）の旧蔵書である。



[2: i8^v]

Title, aa8^v: Hore intemperate diue virginis marie | Secundum vsum ecclesie romane.

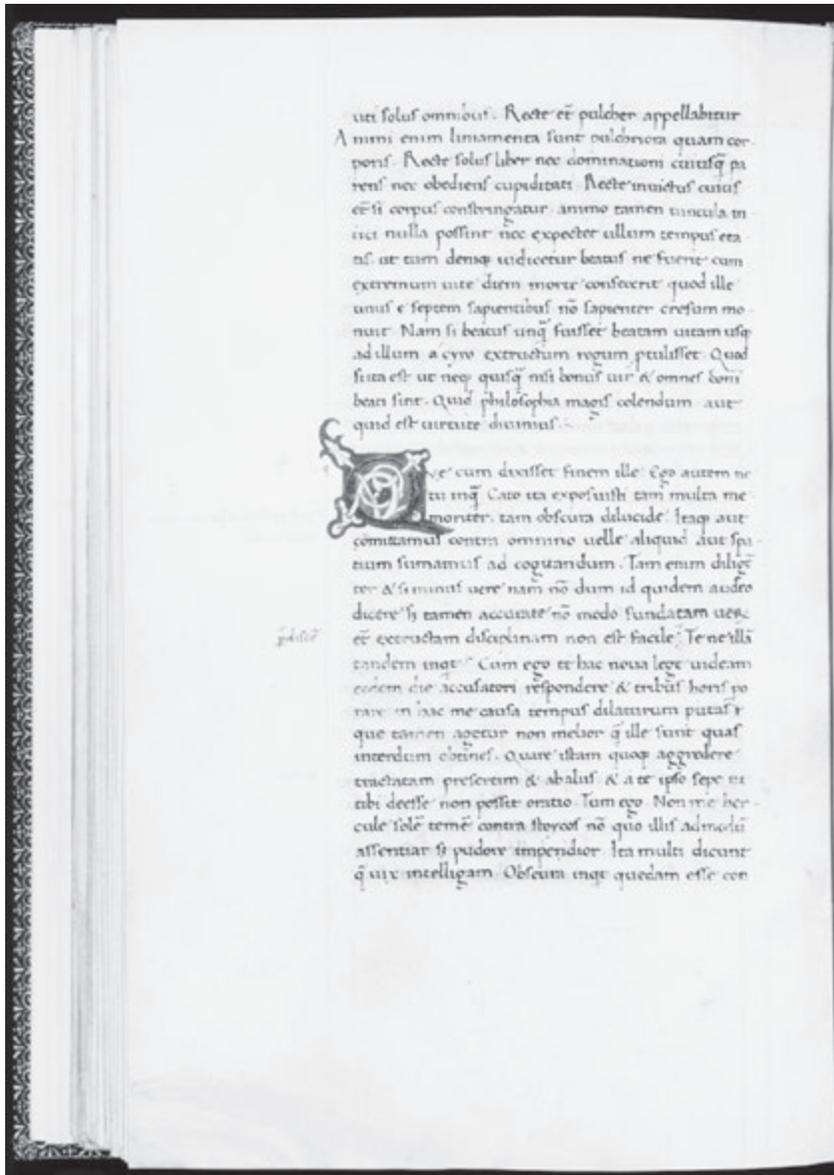
Printed on vellum. 8vo: [a]⁸, aa⁸, c-i⁸, A-B⁸ C⁴, ã⁸ [\$1, 3 (-C3) signed]; 100 leaves unnumbered. 224 × 140mm.

Fairfax Murray (French), 264; *H. P. Kraus Catalogue*, 121: *Illustrated Books from the XVth & XVIth Centuries* (New York, [1968]), lot 49; Paul Lacombe, *Livres d'heures imprimés au XV^e et au XVI^e siècles conservés dans les bibliothèques publiques de Paris* (Paris, 1907: repr., 1963), no. 133

[120X 1159 1]

キケロー『善と悪の究極について』 写本（フィレンツェ、1450-60年頃）

Cicero (106 - 43 B. C.). *De finibus bonorum et malorum*. Florence, c. 1450 - 60



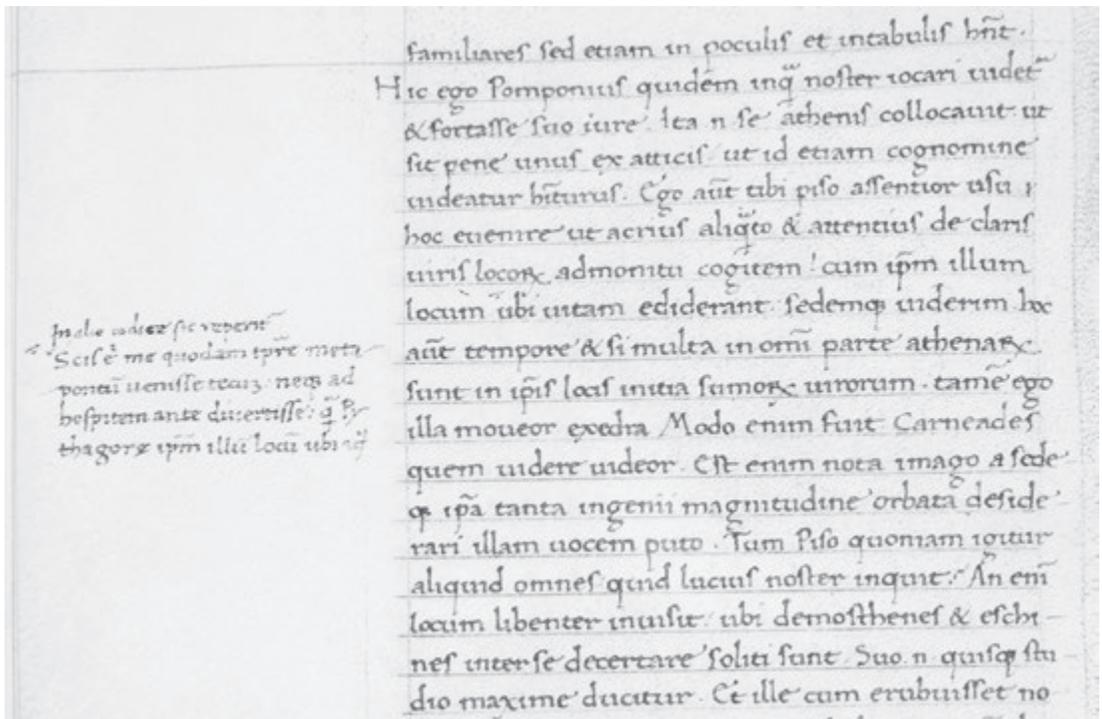
[1: fol. 56^v]

本書はキケローの最晩年の哲学的対話篇で、倫理学の原理を扱った『善と悪の究極について』の写本である。冒頭ページの装飾は、15世紀後半にフィレンツェで活躍し、メディチ家のために多くの写本の装飾を手がけたフランチェスコ・ダントーニオ・デル・ケリコ (Francesco d'Antonio del Cherico) の様式とされる[c3]。随所に見られる書き込みは、ヒューマニストのジョルジョ・アントーニオ・ヴェस्पッチ (Giorgio Antonio Vespucci; c. 1434-1514) のものである[2]。ヴェस्पッチは当時のフィレンツェを代表する古典学者で、教え子で後に新大陸へ航海して「アメリカ」の地名の由来となったアメリゴ・ヴェस्पッチ (1454-1512) の叔父に当たる。また、フィレンツェのプラトン・アカデミーに所属し、マルシリオ・フィッチーノと親交が深く、蔵書家としても知られていた。

ヴェस्पッチは晩年はドメニコ会のサンマルコ修道院に入り、本書も同修道院の所蔵となった。18世紀まではそこにあったと思われる。慶應義塾図書館所蔵となる前は、20世紀を代表する中世・ルネサンス写本のコレクターのひとり、ブライアン・クローン (Brian S. Cron; 1913-2002) が所蔵していて、クローンによる装幀や本書の来歴に関する注記が遊び紙に記されている。

ルネサンスの基底には、散逸していた古典文学の写本を蒐集して系統的に整理し、それをもとに可能な限り原典通りにテキストを復元する原典研究がある。キケローは、そうした原典研究の中心的素材であった。ペトラルカによる『アッティクス宛書簡集』の発見 (1345)、ローディの司教ジェラルド・ランドリアーニによる『弁論家について』の完全版の写本の発見 (1422) などが具体的な契機となってキケロー研究は進展し、それにつれてキケローの様々な側面が明らかにされていった。キケローの文体はルネサンス期の修辞学上の模範となるのみならず、均衡を求める知的パラダイムの規範となってゆく。

15世紀を代表するヒューマニストの自筆の書き込みがある展示書は、イタリア・ルネサンスの古典研究の姿を伝える一級資料に他ならない。



[2: fol. 74^v, detail]

Heading, fol. 1^r: M Tulli Ciceronis de finibus bonorum et malorum ad Brutii Liber primus

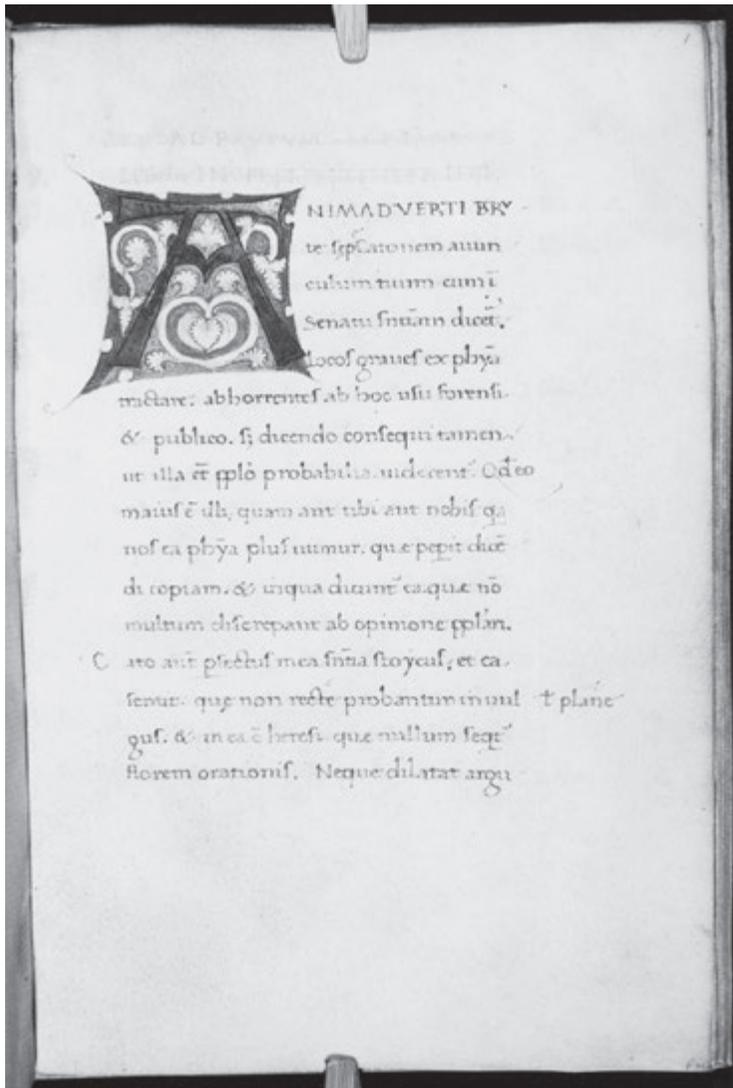
MS on vellum; sm folio: 1⁸⁺¹ 2¹⁰⁺¹ 3⁸⁺¹ 4²⁺¹ 6⁴⁺¹ 6²⁺¹ 7⁸ 8² 9⁸ 10² 11⁹ 12² 13⁶⁺¹ 14² 15⁸⁺¹ 16² 17⁴ 18²;
 97 leaves unnumbered; single column. 264×165mm. fols 53 and 58 misbound.

『キケロー選集 10 哲学Ⅲ』(岩波書店、2000) ; 高田康成 『キケロー — ヨーロッパの知的伝統』(岩波新書、1999) ; Richard A. Linenthal, 'Medieval and Renaissance Manuscripts: A Handlist of the Collection of B. S. Cron', *The Book Collector*, 54(2005)

[120X 1149 2 1]

キケロー『ストア派のパラドックス』、『スキープオーの夢』 写本（イタリア、15世紀後半）

Cicero (106 – 43 B. C.). *Paradoxa Stoicorum, Somnium Scipioni*. Italy, late 15th century



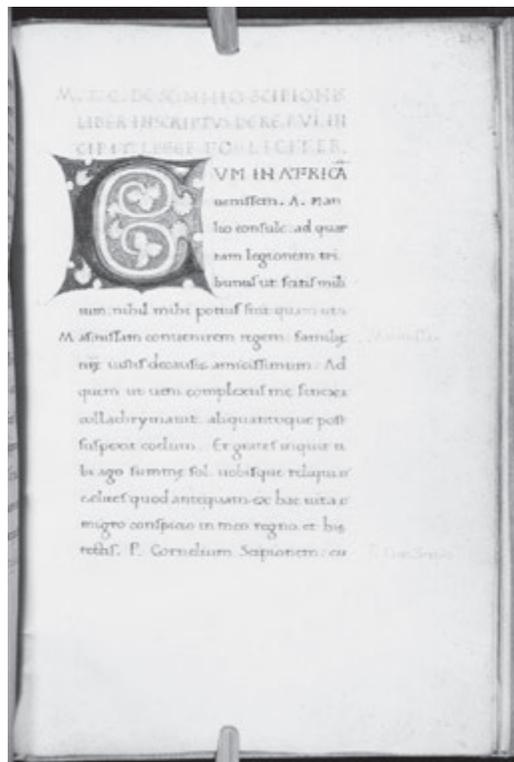
[1: fol.1^r]

本書は、美しい人文主義書体で書かれたキケローの小篇2本—『ストア派のパラドックス』(*Paradoxa Stoicorum*; fols 1^r–20^v) [1] と『スキープオーの夢』(*Somnium Scipioni*; fols 21^r–31^v) [2]—を取めた写本で、15世紀後半にイタリアで制作された。

『ストア派のパラドックス』は、ローマ史から具体的事例を取りあげて、ストア派の倫理観を字義通りに適応することから生じる矛盾を指摘した論考である。

『スキピオの夢』は『国家について』の第6巻にあたるが、中世では断片的にしか伝わらなかった5巻までとは異なり、独立したテキストとして伝播していた。5世紀にはマクロビウスによる注解が書かれたが、この注解を通じて『スキピオの夢』は中世を通じて最も広く読まれたキケローの作品となり、ダンテやペトルルカ、チョーサーにも多大な影響を与えた。内容は、紀元前2世紀の軍人で政治家のスキピオの夢に養祖父の大スキピオが現れて、宇宙のヴィジョンを見せ、天体の調和や靈魂の不滅について教えるというものである。現世の諸事は取るに足らぬが、その一方で、祖国に奉仕する者の魂は肉体の牢獄から解放され、死後、永遠の至福を得ると教えらるる。

本書は、『善と悪の究極について』の写本 (No. 7) と同様にブライアン・クローンの旧蔵書であった。



[2: fol. 21']

MS on vellum; 8vo: 31 leaves unnumbered. single column. 178×120mm.

『キケロー選集 8 哲学 I』(岩波書店、1999)

[120X 887 1]

プルタルコス『英雄伝』（ヴェネツィア、1478年）

Plutarch (c.46 – c.120). *Virorum illustrium vitae*. 2 vols. Venice: Nicolaus Jenson, 1478



[1: I, a2']

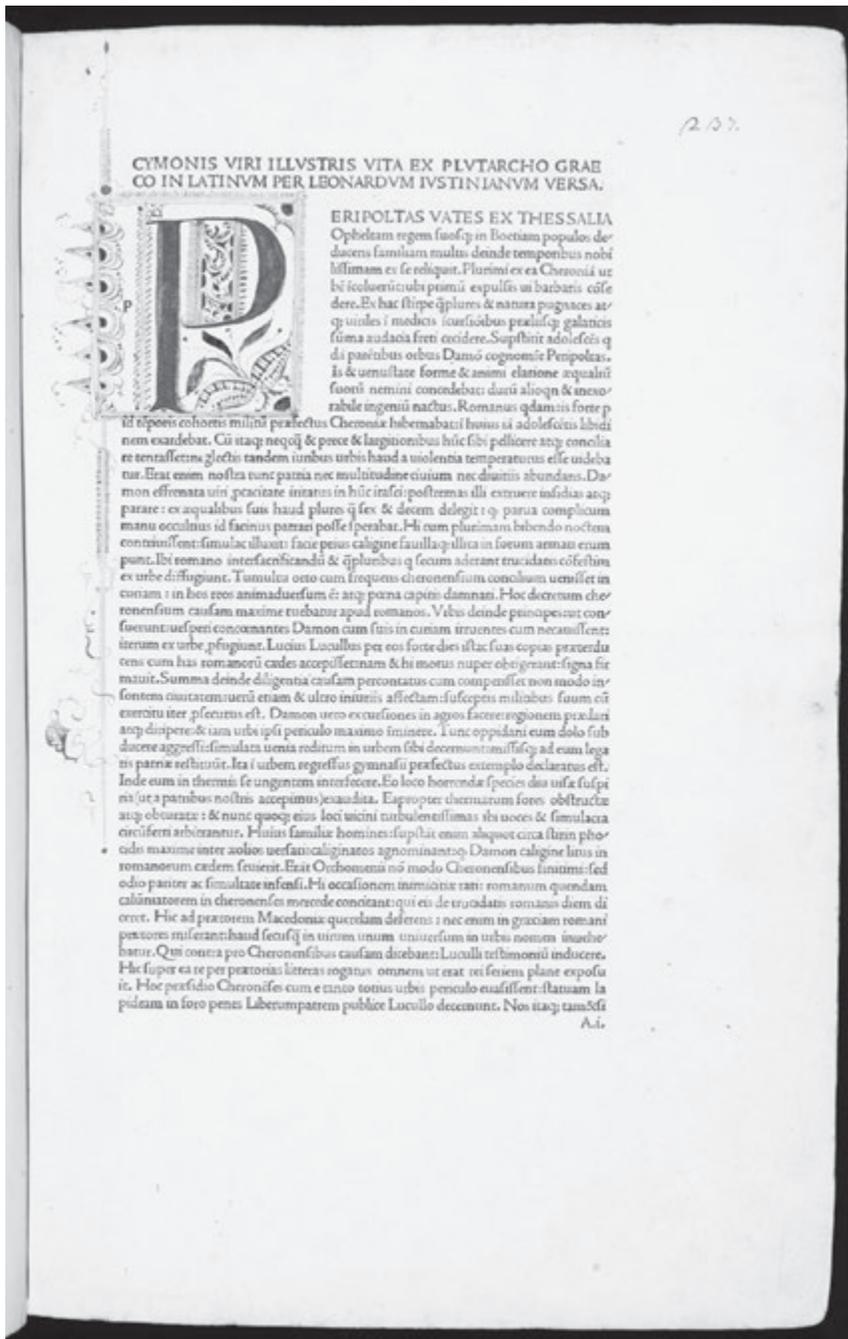
紀元1世紀の著述家プルタルコスがギリシャ語で著した『英雄伝』は、ギリシャ、ローマの重要な哲学者や政治家46人の評伝である。生涯に類似点が認められるギリシャ人とローマ人を一人ずつ組み合わせる「対比列伝」という方式がほぼ全編で採用されている。『英雄伝』はルネサンス期に最も読まれた古典文学のひとつである。それまで部分訳しか存在していなかったが、1470年にジョバンニ・カンパノ (Giovanni Antonio Campano) によるラテン語完訳が刊行されると広く読まれるようになり、その後、ヨーロッパ各国語に訳された。16世紀にはモンテーニュに影響を与え、英訳を通じてシェイクスピア劇にも素材を提供している。

本書は、ジョバンニ・カンパノ訳に続いて1478年に出版された『英雄伝』のラテン語完訳で、イタリアにおける活版印刷の発展の上でも重要な版である。本書を印行したニコラス・イエンセン (Nicolaus Jenson; c.1435–80) はフランス人で、1470年からヴェネツィアで印刷業を始め、古典文学の作品を、独自の美しいローマン体活字を用いて、一欄組みの大型のフォリオ版で印刷した。活版印刷の揺籃期にあたる15世紀に印刷された書物 (インキュナブラと呼ばれる) の場合、通常実際に印刷されるのはテキスト本文のみで、章の冒頭を飾る大型の頭文字や各章のタイトル等は、印刷後に専門の写字生や挿絵画家によって手書きされた。写本に似せて、冒頭のページを欄外装飾や豪華な彩色頭文字、所有者の紋章で飾ることも一般的になされていた。また、1470年代から80年代にかけては、20部程度を特別に、紙ではなく高価な羊皮紙に印刷することも習慣的に行われていた。金箔とテンペラ絵の具を用いる中世写本の装飾は紙よりも羊皮紙に適していたため、羊皮紙に印刷された刊本は特に豪華な装飾で仕上げられた。15世紀の印刷本は、そのレイアウトや装飾において、豪華な写本を可能な限り踏襲しようとしていたのである。

イエンセン版のプルタルコスにも、上記のような特徴が顕著に認められる。冒頭のページには、手書きの装飾が可能なように、広い欄外余白に加えて頭文字のスペースが14行分も確保されている。実際、豪華な装飾がほどこされた羊皮紙の特装本が何部も現存しており、そのようなものは王侯貴族やピコ・デラ・ミランドーラのような著名人が所蔵していた。

展示書は紙に印刷された刊本なので、そのような羊皮紙の豪華本に比べると全体的に地味な装飾である。それでも巻頭ページでは、複雑な蔓模様の装飾が印字面を取り囲んで装飾頭文字の‘Q’を形作り、下部には所有者であるナポリ王国のテラーモ司教フランチェスコ・キエレガーティ (Francesco Chierigati) の紋章が描かれている[1]。この白い蔓模様はインキュナブラの装飾の代表的なパターンで、主に1470年代にヴェネツィアとローマで印行された書物を中心に頻繁に使われている。慶應義塾図書館所蔵のユスティヌス『ポンペイウス・トログスのピリッポス史抄』 (Marcus Junianus Justinus. *Epitomae in Trogi Pompeii historias*. Milan: Christophorus Valdarfer, 1476)、ダンテ・アリギエリ『神曲』 (Dante Alighieri. *La Commedia*. Brescia: Boninus de Boninis, 1487) の2冊のインキュ

ナブラの冒頭ページには、同様の白い蔓模様の装飾がほどこされている。



[2: II, A1⁷]

Colophon, vol. 2, &&10^v: Virorum illustrium vitae ex Plutarcho graeco in | latinum verse solertique
cura emendatae | faeliciter expliciunt: per Nicolaum | Ienson Gallicum Venetiis | impressae .M. cccc.

lxxviii. | die. ii. Ianuarii.

vol. 1 : folio: a¹⁰ b¹² c-m¹⁰ n⁸ o¹⁰ p-x¹⁰ y⁸ z⁸ &⁸ [\$5 (-a2, n5, o4, y1, yz&5; +b6) signed]; 233 leaves (of 234; lacking a1 (blank)) unnumbered. 424×264mm.

vol. 2 : folio: A-E¹⁰ F⁸ G¹⁰ H⁸ I¹⁰ K⁸ L¹⁰ M⁸ N¹⁰ oo⁸ pp⁸ Q-Y¹⁰ Z⁸ &&¹⁰ [\$5 (-AFHK5, oo5, pp2, pp5, Z5) signed; misprinting C1 as cc1]; 226 leaves unnumbered. 426×272mm.

ISTC ip00832000; IJL2 307; PP 95; RA 1; T 24; Jonathan J. G. Alexander, ed., *The Painted Page: Italian Renaissance Book Illumination 1450–1550* (Munich, 1994); 『プルタルコス英雄伝』村川堅太郎編 全3巻 (ちくま学芸文庫、1996); 『プルターク英雄伝』河野与一訳 全12巻 (岩波文庫、1952–56)

[142X 51 2 2]

セビリャのイシドルスは、西ゴート王国が支配していた時代のスペインのセビリャで大司教を30年以上にわたって務め、633年の第4回トレド公会議では中心的役割を演じた。全ての司教座都市に神学校を設立し、聖書の言語であるギリシャ語とヘブライ語、七自由学芸を学ぶことを義務づける教令を発して、ローマ帝国崩壊後、ゴート族の支配によって消えゆく危機にあった古典の学問伝統を教育と宗教によって守ろうとしたのである。

イシドルスの著作は数多くあり、その代表がラテン語で書かれた『語源論』である。タイトルは、アルファベット順に様々な単語の語源を論じた本書の第10章に基づいているが、本書は語源のみを扱った書物ではない。本書は、百数十名の古典および初期キリスト教の著述家の作品を渉猟して編纂された百科全書の嚆矢であり、同時にその分野で最も重要な一冊である。七自由学芸に関する章から始まり、教会、神、人間、言語、医学、法律、生物、地理等を網羅的に扱っている。『語源論』は中世を通じて広く読まれ続け、現存する写本は千点以上にのぼる。13世紀のヴァンサン・ド・ボーヴェの『知識宝鑑』やバルトロマエウス・アングリクスの『物性論』など、中世後期を代表する百科全書は本書を基盤として編纂された。E. R. クルチウスは中世研究の古典『ヨーロッパ文学とラテン中世』(1948)のなかで、『語源論』を「全中世の基本書」(南大路振一他訳、みすず書房、p.725)と呼んでいる。

本書への需要がルネサンス期になっても大きかったことは、1500年までに10以上の版が刊行されていることからうかがえる。展示書は、ヨハン・メンテリン (c. 1410–78) が1473年頃に印行したフォリオ版で、アウグスブルクでギュンター・ツァイナー (G. Zainer) が1472年11月に印刷した版と並んで、最も古い印刷版である。『語源論』の写本にはしばしば手書きの図やダイアグラムが登場するが、展示書では、それらも木版画で再現されている。図2は風の呼び名と性質に関する章で、12種類の風をそれぞれ12ヶ月に対応させて図案化している。インキュナブラにおける木版画の使用例としても貴重な刊本である。

ne ex his velut coagulatur & coagulatus
 non ordinacione dei cogit ex primis virtutibus
 Quorum inspiracione de fructu gormi conce-
 pit. Ethius dicitur arboris compem sumā. cum
 plures igne solis arboribus in canonicis
 Venti autem interdu intelliguntur angelo-
 rum spiritus qui a secretis dei ad labat hiam ge-
 nera p vniuersū mundū mittere. itaq; nū
 munda venti incitatos spūs mediant: p
 eo qd male suggestiois flatu. ad certena
 rectoria iniquoz corda succo dicitur Veritū
 qd serpsū est. collat nū vnde oriens.

DE NOMINIBVS VENTORVM.

Centozū primus cardinalis. Secū-
 trion frigidus & nivalis. flae rectus
 ab axe & face arbor frigora & sic
 eas imbes. hic apertus dicitur. Ureus qui &
 errans. Hic a dextera sepierionis inonans
 facie nitidū & granosū coagulardes. Inqui-
 lo qui & horetis ex alto flans. gelidus atq;
 ficans & sine pluuia. qd nō dicitur imbes.
 sed cōstringit. vñ & mento diaboli formā
 fontis q ab iniquitatē frigore gentiliū cor-
 dia cōstringit. Sedus ventoz cardinalis sō
 solus qui & apertus. hic ab ortu inonant
 solus & est riperiens. atq; defecit. Vultur
 nus ipc qui & calcaus vocat dextera: subso-

lari. hic dissoluit cōcta atq; defecit. Eurus
 ex sinistro latere vnde subfolam. cu interem
 nubido irrigat. Torus ventoz auster pla-
 ge meridiane cardinalis qui & euro nebulosus
 ex humili flans humos. calidus atq; fulmi-
 neus. genans largas nubes & pluuias la-
 tiffimas. solicus etiā flozes Euro auster ex
 lipas vena dextera inonant auster. Euro
 nebulosus vnde tempus calidus a sinistris
 austrū spirat. Quare cardinalis Xyperus
 qui & fauons ab occidēte inferi ore flae. Iste
 hieme frigore grauisima vice relaxat. flo-
 resq; ponit. Aferus qui dicitur lips ex zipe
 n dextera laete inonans. Hic genans ei
 pectores & pluuias face. & nubū colli-
 nos. & fontē conuertit. & crebro centum
 fulgurū visus. & fulminū impulsus. Eurus
 qui & agetis ex sinistra pte fauons aspi-
 rans. Eo flante in ortu est nubila sūa in die
 serena. Quosdā autē trāquillū spiritos locoz
 flae. etris appellat vocabulis. qd ex nio se
 in spira. sicut carbas in alia. i sponti de
 errans eron. In galacia circa. In spoma fo-
 gromentis sūe secreta quidā immābiles ex
 flumido aut stagnis aut sinho nominari.
 Duo sūt tam extra hos vbiq; spūs magni
 quam venti. aura & alcaus.



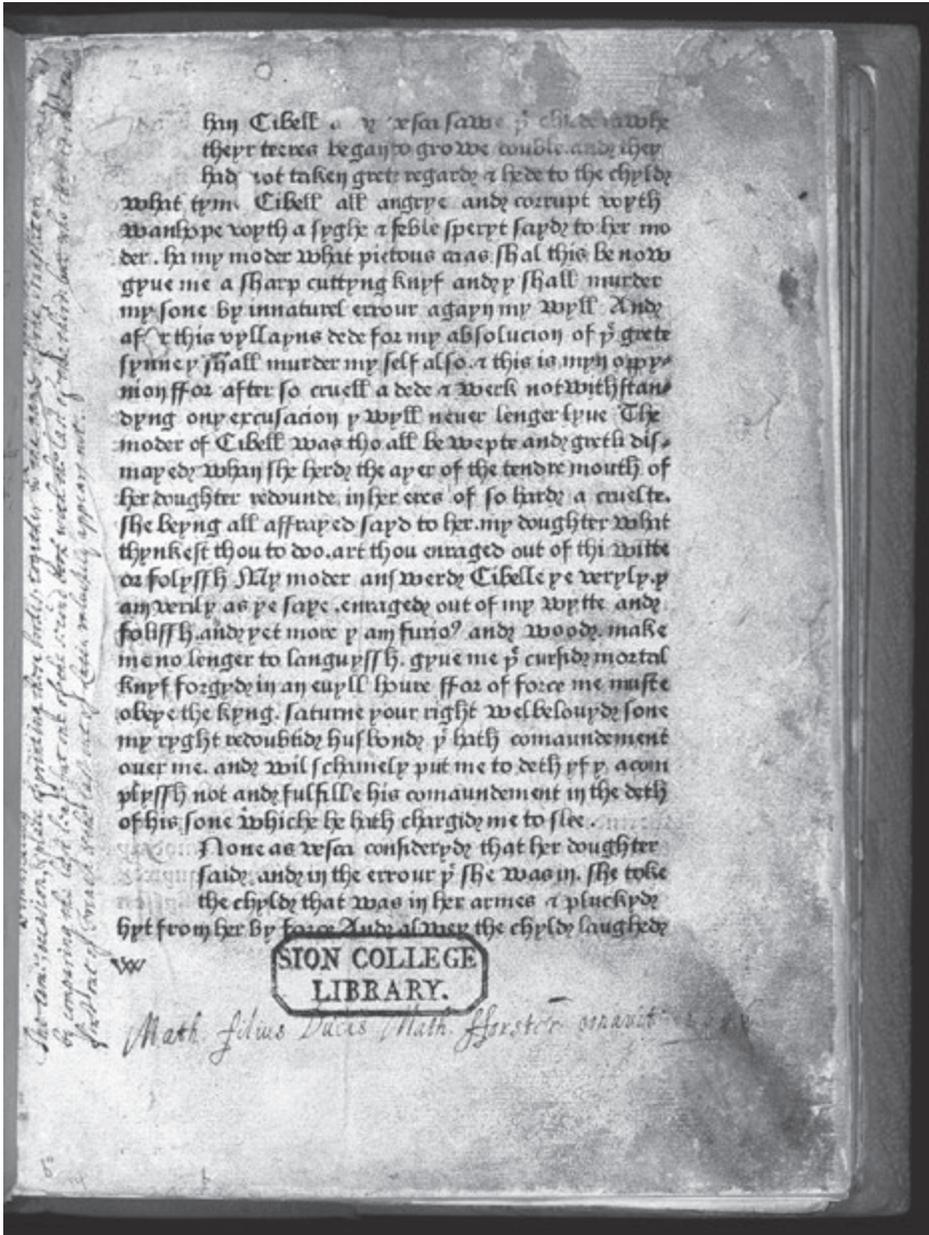
[2: fol. 33']

Incipit, fol. 2^v: *Incipit liber primus Ethimologiarum Isidori Hispalensis episcopi de disciplina et arte. c. i.*
 folio: [1-13¹⁰, 14¹²]; 141 leaves (of 142; lacking a1 (blank)) unnumbered, 2 cols. 391 × 273mm.
 ISTC ii00182000; IJL2 213; *The Etymologies of Isidore of Seville*, trans. with introd. by Stephen A. Barney and others (Cambridge, 2006)

[142X 36 1]

ラウル・ル・フェーヴル『トロイ歴史集成』ウィリアム・キャクストン英訳（ブルージュ、1473-74年）

[Raoul Le Fèvre]. *The Recuyell of the Histories of Troye*. translated into English by William Caxton. Bruges: William Caxton, [1473 - 74]



[1: fol. 14r]

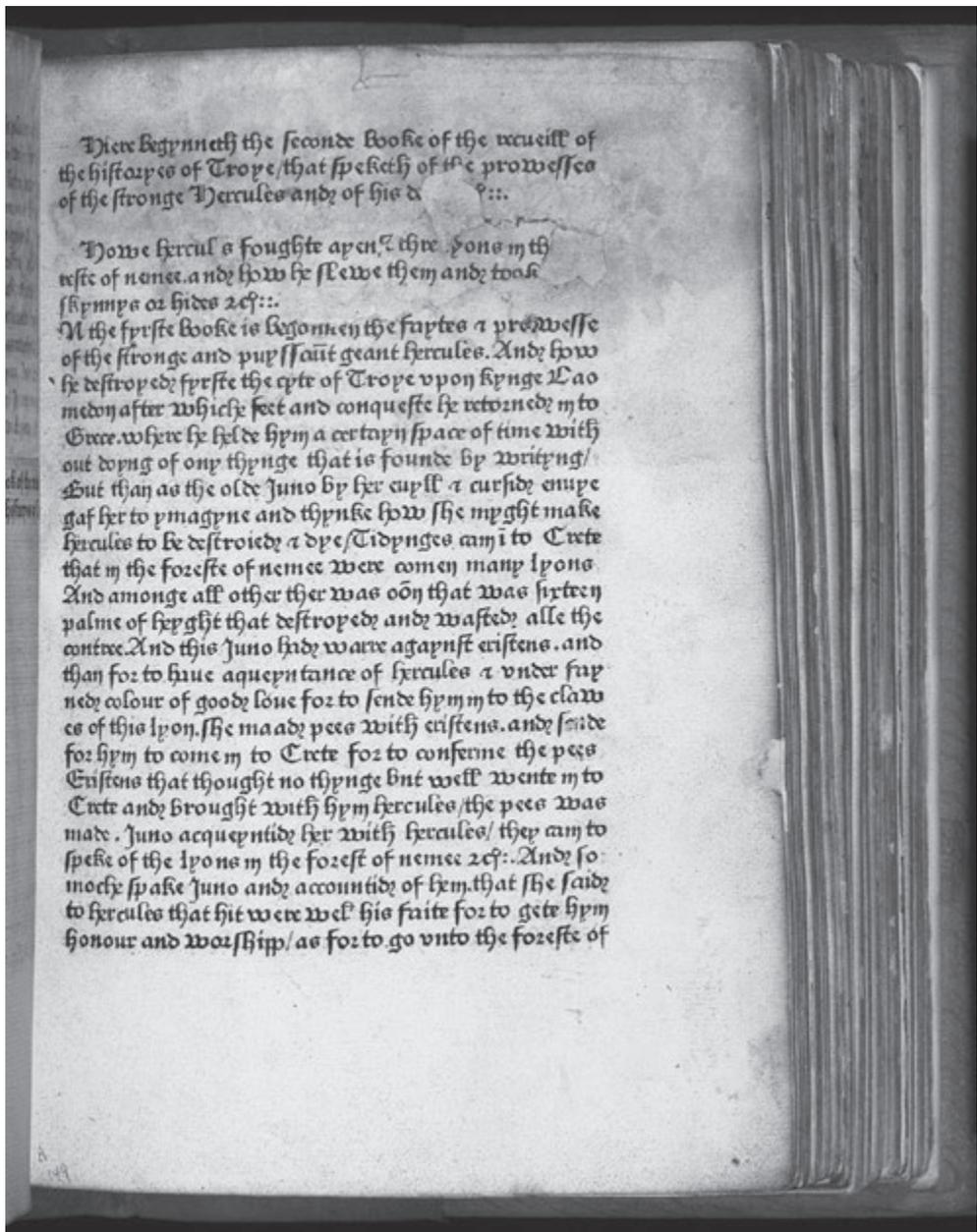
ウィリアム・キャクストン (William Caxton; c.1420–91) は、イギリスに初めて活版印刷術をもたらした人物として歴史に名を残しているが、キャクストンが活版印刷と関わるきっかけを得るのは、ほとんど50才にならんとする頃である。フランダース地方で毛織物を商い、ブルージュ在住のイギリス人の代表として外交的業務にもたずさわり、相当の成功を収めていたキャクストンは、余暇に、当時人気を博していたラウル・ル・フェーヴルの『トロイ歴史集成』(*Le Recueil des histoires de Troyes*) の英訳を始めた。ル・フェーヴルはブルゴーニュ公フィリップ善良公の礼拝堂付司祭で、1460年代初期にフランス語で『トロイ歴史集成』を書き上げ、ほぼ同時期に書いた『イアソン物語』—後にキャクストンはこちらも翻訳する—とともに、フィリップ善良公に献呈している。両作品とも、その後挿絵入りの豪華な写本がいくつも作られた人気作品であった。

トロイの歴史物語は、中世・ルネサンスにおいて最もポピュラーな物語のひとつで、『トロイ歴史集成』もシェイクスピアが劇作品の典拠に用いたことなどから、後世に影響を残している。だが、『トロイ歴史集成』はトロイの話のみを扱っているのではない。3巻からなる本書は、1、2巻はボッカチオの『異教の神々の系譜』(*Genealogia deorum gentilium*) を典拠として、ギリシャの神々の起源とヘラクレスの偉業について語っている。第3巻のみがギリシャとの戦闘の結果陥落へと至るトロイの話で、これはガイド・デツレ・コロネ (Guido delle Colonne) の『トロイア滅亡史』(*Historia destructionis Troiae*; 1287) に基づく。本書はギリシャ神話全体を扱っていると言えるが、トロイ陥落の話は3巻全部に登場しているので、その意味でこのような標題になったのであろう。

1470年にキャクストンはケルンに移り住み、間もなく翻訳を完成した。グーテンベルクによる活版印刷術の発明から二十数年たって、当時のケルンは、ドイツ国内および周辺国へと急速に拡がりつつあった活版印刷の中心地のひとつであった。キャクストンはこの地で活版印刷術を習得し、1473年にブルージュに戻ると、自ら印刷工房を開設して自身の翻訳を印刷、出版した。

この世界初の英語による活版印刷本を、キャクストンはイギリス王エドワード4世の妹で、1468年にブルゴーニュ公のシャルル剛胆公に嫁いだマーガレット・オヴ・ヨークに捧げている。ル・フェーヴルの原作が先のブルゴーニュ公フィリップ善良公に捧げられているため、好意的に受け入れてもらえると判断したのであろう。

本書は全世界に20部ほどしか残存しておらず、そのうち完本はニューヨークのピアポント・モーガン図書館収蔵の1部のみである。慶應本は本文15葉を欠くが、個人蒐集家の所蔵ではなく、1646年から1977年までずっとロンドンのサイオン・コレッジに収蔵されていた。そのため、19世紀にしばしば行われたような薬品によるページの汚れの洗浄はうけておらず、印刷当時の紙葉の状態を伝え得るという意味でも、貴重な現存本である。



[2: fol. 149^r]

folio: [a-o¹⁰ p⁸, A-I¹⁰ K⁸ L⁶, AA-KK¹⁰]; 336 leaves (of 352; lacking a1-10; b1-3, b9-10, KK10) unnumbered. 2 modern blank leaves bound after b8. 262 × 185mm.

ISTC il00117000; IJL2 247; MB 16; Paul Needham, *The Printer and the Pardoner* (Washington, D.C., 1986)

[120X 1161 1]

『主イエス・キリストの生涯』（ライデン、1500年）

Dat Leven ons Heren Jhesu Christi. Leiden: Hugo Janszoon van Woerden, 1500



[1: colophon (verso)]

本書は、フーコ・ヤンゾーン・ファン・ウルデンが刊行したオランダ語の挿絵入り本『主イエス・キリストの生涯』（*Dat Leven ons Heren Jhesu Christi*）の断片である。

ヤンゾーンは15世紀末から16世紀初頭にかけて何度か、挿絵入りの『主イエス・キリストの生涯』を刊行している。大英図書館には、1498年5月25日に刊行された別の版（208葉からなる8折り本、50点の挿絵）が完全な形で所蔵されている。本書は21点の木版面を含む21葉からなる断片で、そのうちの1葉に、「ライデンにて印刷。我らが主の年1500年2月12日」（*Gheprent te Leyden. In ti aer heeren. M.CCCCC. opten xij. d in Februario*）と刊記があるため、大英図書館所蔵本の2年後に刊行された版であることがわかる[1]。現在のところ、この1500年版は他の図書館等での所蔵は確認されておらず、新発見のインキュナブラで、天下の孤本である可能性が高い。木版面には残らず、赤、青、黄、緑、紫の5色を組み合わせた鮮やかな手彩色がほどこされているが、これも同時代のものである。

本書は、キリストの生涯の主要な出来事にまつわる祈祷文や黙想を、聖務日課の八定時課に当てはめて分類し、そのテキストに対応するキリストの生涯を描いた木版面と組み合わせたものである。現存する21葉の版面は、刊記がある最終葉の「三日月上の栄光の聖母マリアと幼子キリスト」の図版を除いて、全てキリストの生涯に直接関係するもので、「受胎告知」から「最後の審判」までの主要なエピソードを描いている。「キリストの地獄下り」の図版では、「地獄の口」からアダムとイブを連れ出すキリストの伝統的図像のなかに、巨大な怪物として描かれた「地獄の口」の上で、ビールのジョッキを片手に「貴方に」（*vobis*）と乾杯をしている人物が小さく描かれている[2]。

本書は木版面のコレクターが所有していたと思われる。木版面の裏面はたいてい本文のみのページになっているが、そうしたページの一部に糊付けされた跡があることから、恐らくスクラップブック等に貼り付けて保存されていたと考えられる。

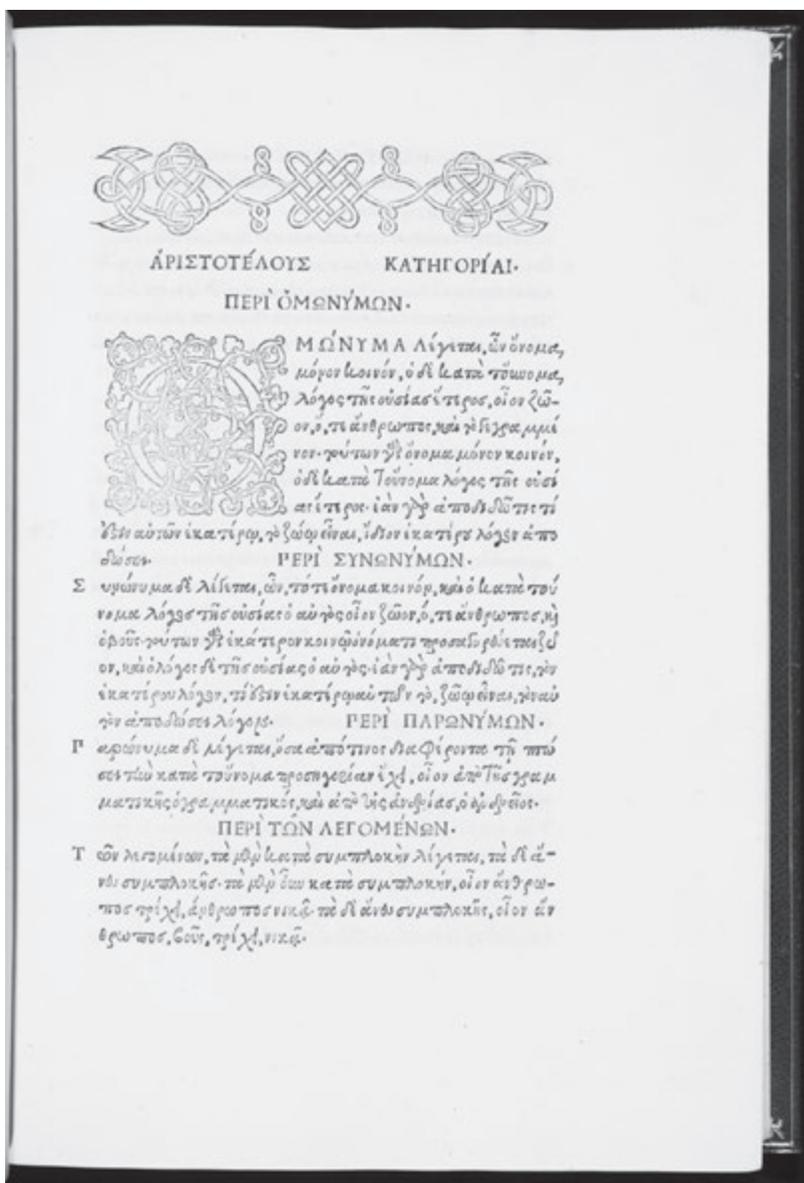


[2: fol. 33^v]

8vo: 21 leaves only, unnumbered. 110×75mm.

アリストテレス『全集』 6巻（ヴェネツィア、1495-98年）

Aristotle (384 – 322 B. C.). [Opera.] 5 parts in 6. Venice: Aldus, 1495 – 98



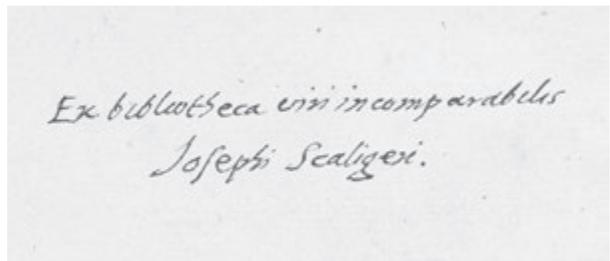
[1: I, B5']

ルネサンス期イタリアを代表する印刷業者であるアルドゥスが刊行したギリシャ語のアリストテレス全集である。アルドゥス・マヌティウス (Aldus Manutius; 1449/50–1515) はヴェローナとフェラーラでギリシャ語を学んだ後、友人のヒューマニスト、ジョヴァンニ・ピコ・デラ・ミランドーラ (Giovanni Pico della Mirandola; 1463–94) の故郷であるミランドーラに滞在していたが、やがてピコの従兄弟にあたるカルピ (エミリア＝ロマーニャ州) の領主、アルベルト・ピオ (Alberto Pio) とその兄弟のリオネッロ (Lionello Pio) の家庭教師となった。

その後アルドゥスは1490年にヴェネツィアに移り住み、ギリシャ語の古典の散逸を防ぐ目的で、ギリシャ語に長けた植字工や校正係を集めて印刷業を始めた。ギリシャ語の印刷は既にいくつかの都市で試みられていたが、ギリシャ語を理解する人材の不足やギリシャ語活字製作の難しさのために、ギリシャ語の古典で印刷されていたのはホメロス、テオクリトス、そしてヘシオドスの一部分に過ぎなかったのである。

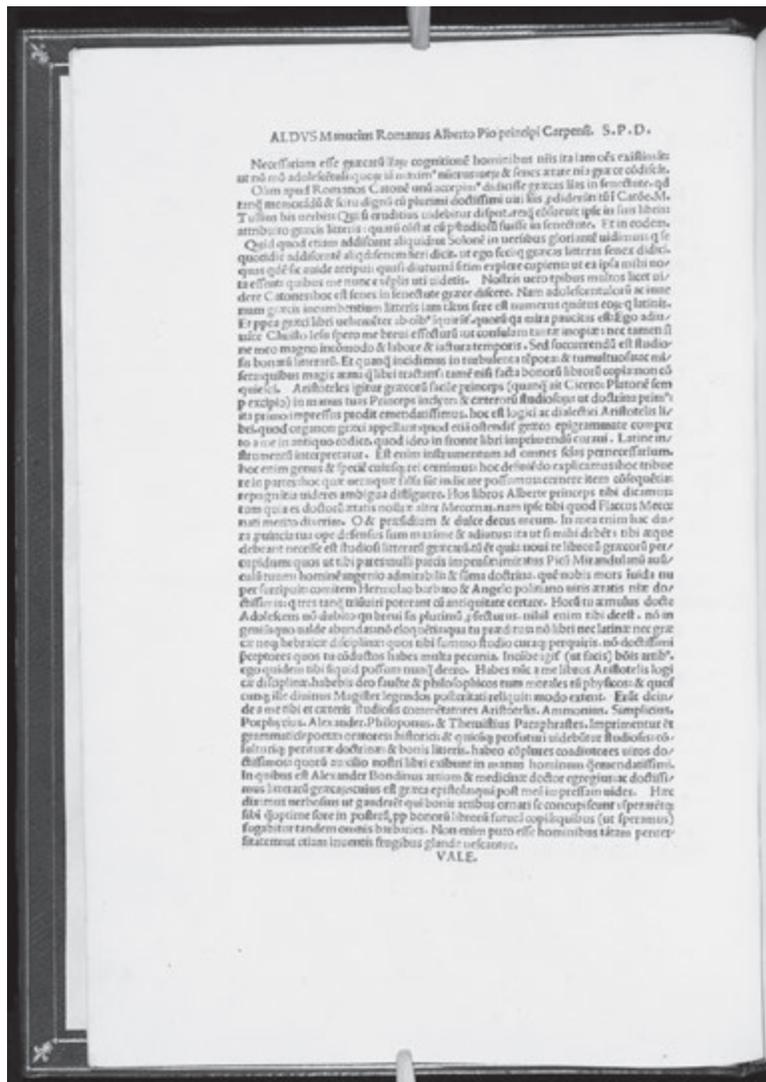
アルドゥスは、1495年から1498年にかけてアリストテレスの全集を刊行した。全5部(6巻)で構成され、当時アリストテレス作とされていた全作品に加えて、アリストテレスの弟子や後世の注釈者の著作も収めている。それまでに印刷されたギリシャ語の全量をはるかにしのぐこの全集は、15世紀最大の出版上の偉業であった。その完成には、パドヴァ出身のスコラ哲学者フランチェスコ・カヴァッリ (Francesco Cavalli)、アルドゥスの美しいギリシャ語活字を彫った元金細工師のボローニャのフランチェスコ・グリフォ (Francesco Griffio)、イギリス人のヒューマニストのトマス・リナカー (Thomas Linacre)、政治的理由でフィレンツェからヴェネツィアへと移住して来たギリシャ人学者のマルクス・ムスルス (Marcus Musurus)、そしてアルドゥスが出版業を始めるにあたって経済的援助を惜しまなかったアルベルト・ピオなどの協力があったと考えられる。本書はアルベルト・ピオに献じられている[3]。ギリシャ語の組版の難しさゆえに、全5部で当時の著名な大学教授の給与の一月分はゆうに越す価格となり、また、誤植もしばしば見受けられはする。しかし、時には遠いイギリスにまで手紙を書いてヨーロッパ中から必要な写本を集めて刊行されたこの全集は、ヒューマニストの原典回帰の指向に見事に応えたと言っても過言ではない。

慶應義塾図書館所蔵本は素晴らしい来歴を持っている。本書は、ユグノー派の古典学者でライデン大学で教授を務めたヨセフ・スカリゲル (Joseph Justus Scaliger; 1540–1609) の旧蔵本である。第2巻の遊び紙には「比類無きヨセフ・スカリゲルの蔵書より」(‘Ex bibliotheca viri incomparabilis



[2: II, fep 2^v, detail]

Josephi Scaligeri) と教え子の古典学者ダニエル・ハインシウス (Daniel Heinsius; 1580/81-1655) の筆跡で記されており[2]、また別な遊び紙にも、スカリゲル旧蔵書であることを示す同様の文言がラテン語で記されている。スカリゲルは、フランス国内の多くのユグノーが犠牲となった「サン・バルテルミの虐殺」(1572)を境にジュネーブに移り住み、1574年までその地でアリストテレスの「オルガノン」を講じていた。本書はスカリゲルの死後ライデンで競売にかけられ、その後19世紀には、同じ本を常に3冊買うことで知られた — それぞれ保存用、読書用、貸し出し用 — イギリス人の大蒐集家リチャード・ヒーバー (Richard Heber; 1773-1833) が所有するところとなり、さらに稀覯書と絵画のコレクター、ベライア・ボトフィールド (Beriah Botfield; 1807-1863) の所蔵となった。



[3: I, A1^v]

vol. 1

Colophon, s6^r: Impressum Venetiis dexteritate Aldi Manucii Romani. | Calendis Nouembris M. CCCC. LXXXV. | Concessum est eidem Aldo inuentori ab illustrissimo Se | natu Veneto ne quis queat imprimeere neque | hunc librum: | neque caeteros quos is ipse impresserit: neque eius uti inuento. | Sub poena ut in gratia.

folio: A–C⁸ Δ⁸ E–K⁸ L–N⁶, a–c⁸ d–e⁶ f–q⁸ r–s⁶ [\$4 (–A1–2, LMN4, ders4) signed]; 234 leaves unnumbered. 312×207mm.

vol. 2

Colophon, K6^r: Excriptum Venetiis manu stamnea in domo Aldi Manutii Romani, & | graecorum studiosi. Mense Februario. M. III D. | [blank line] | Impetratum est a dominis Venetis in hoc quod in caeteris impressis | graece domi nostrae.

folio: ✱⁸ ×⁸ †⁸ [οσ]⁸ αα–ππ⁸ qρ⁸ rς⁸ so⁸ ττ–zψ⁸ &ω⁸, A–B⁸ CΓ⁶ ΔΔ–HΘ⁸ I⁸ K⁶ [\$4 (–CΓ4, K4) signed; misprinting αα2 as α2, λλ4 as λ14, ππ1 as πω, ππ3 as ωπ3, ππ4 as ππ4, rς2–4 as rσ2–4, zψ2 as zφ2, FZ4 as ZF4]; 300 leaves, ff. [32] 1–14 [15] 16–87 [88] 89–268 [misprinting 5 as 8, 29 as 28, 34 as 24, 95 as 69, 99 as 95, 113 as 121, 217 as 117, 263 as 73]. 311×207mm.

vol. 3

folio: 2a2α–2i2ι¹⁰ 2κ¹⁰ 2l2λ–2z2ψ¹⁰ 2&2ω¹⁰, 2A–2O¹⁰ 2P1² 2P¹⁰ χ1 2Σ–2Φ¹⁰ 2X⁸ ✱⁸ [\$5 (–2X5, ✱5) signed; misprinting 2a2α3 as 2α2α3, 2g2η4 as 2g2θ4, 2i2ι1 as 2ι2ι1, 2i2ι4 as 2ι2ι iii², 2x2φ1–5 as 2x2ξ1–5, &ω3 as &ω4, 2K5 as 2I5, 2X2 as X2]; 468 leaves, ff. 1–7 [8–9] 10–400 [I] 401–10 [I] 411–57 [9] [misprinting 59 as 49, 74 as 79, 108 as 110, 140 as 1, 158 as 815, 192 as 193, 193 as 293, 197 as 297, 233 as 234, 243 as 253, 247 as 547, 248 as 238, 268 as 262, 409 as 408, 415 as 419, 418 as 419, 450 as 350]. 310×208mm. 2P1^b, χ1, and 2X8 blank.

vol. 4

folio: †²(–†2) 3a3α–3i3ι⁸ 3κ⁸ 3l3λ–3z3ψ⁸ 3&3ω⁸, 3A–3B⁸ 3C3Γ⁸ 3D3Δ¹⁰ [\$4 (–3a3α1; +3D3Δ5) signed]; 227 leaves, ff. 1 1–226 [=227] [misnumbering 15 as 11, 169 as 158]; 307×208mm.

vol. 5

Colophon, 3P3o10^r: Excriptum Venetiis domo Aldi Manutii Calendis Iunii. M. III D. | Et in hoc inpetratum a dominis Venetis quod in caeteris nostris graece impressis.

folio: 3A3a–3M3m⁸ 3N3n–3Ξ3o¹⁰, α'α–δ'δ⁸ ε'ε¹⁰ α'α⁶ β'β⁶, 3A3α–3O3ξ⁸ 3P3o¹⁰ [\$4 (–α'α4, β'β4; +3N3n5, 3Ξ3o5, ε'ε5, 3P3o5) signed]; 292 leaves, ff. 1–116; ²1–42; ³1–12; ⁴1–121 [I] [misprinting 98 as 89, 106 as 104, 114 as 108, ⁴98 as 103, ⁴103 as 108]; 311×209mm.

vol. 6

Colophon, 4K12^r: Venetiis. M. II D. Mense Iunio. Apud Aldum et hoc cum priuilegio

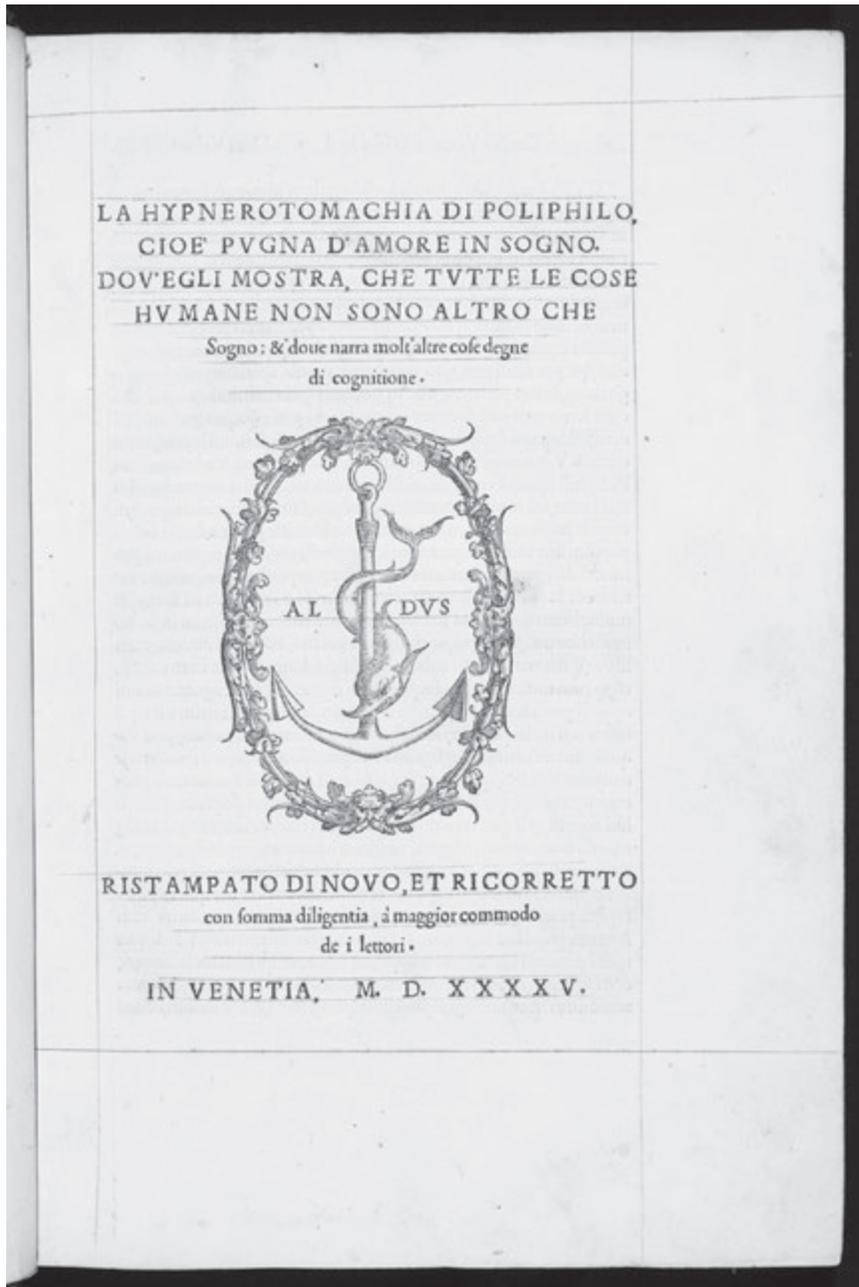
folio: 4α–4ι¹⁰ 4κ⁴ 4λ–4φ¹⁰ 4χ⁶ 4ψ¹² 4ω¹⁰, 4A–4B¹⁰ 4Γ⁶ 4Δ–4I¹⁰ 4K¹² [\$5 (–4κ3–4, 4χ4–5, 4Γ4–5; +4ψ6, 4K6) signed; 330 leaves, ff. [1] 2–9 [10] 11–93 [94] 95–209 [I3] 19 210–316 [I] [misprinting 18 as 15, 19 as 9, 52 as 63, 53 as 63, 97 as 96, 104–5 as 103–4, 115 as 99, 127 as 128, 132 as 131, 160 as 182, 200 as 100, 203 as 1 [] 3, 204 as 104, 219 as 220, 222 as 212, 238 as 138, 242 as 241, 243 as 225, 281 as 2081, 305 as 314]. 312×210mm.

ISTC ia00959000; IJL2 031; Ahmanson-Murphy, I, no. 4, 11–13, 21; T 28; *Highly Important Incunabula, Bibles, Early Greek Printing and Colour-Plate Books from Beriah Botfield's Library* (London: Christie's, 1994), lot 39; Martin Davis, *Aldus Manutius: Printer and Publisher of Renaissance Venice* (London, 1995)

[141X 90 6 6]

フランチェスコ・コロナ (伝) 『ポリフィーロの狂恋夢』 (ヴェネツィア、1545年)

Francesco Colonna (attr., 1433 – 1527). *La Hypnerotomachia di Poliphilo*. Venice: Aldus, 1545



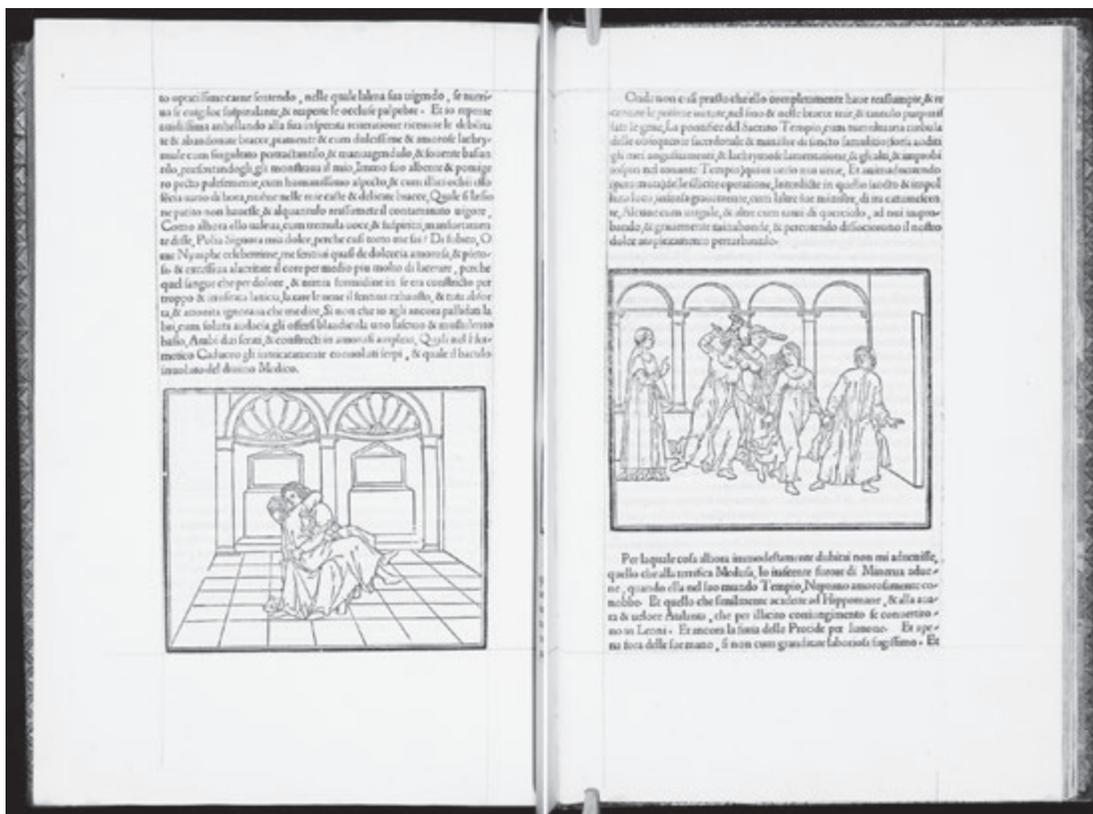
[1: t.p.]

アルドゥスのギリシャ語活字を制作したフランチェスコ・グリフォによるタイポグラフィと174点の繊細な木版画、斬新なページレイアウトが見事に調和した本書は、最も美しいインキュナブラとして愛書家の垂涎の的である。

作者名の記述はないが、各章の最初の装飾頭文字をつなげると、POLIAM FRATER FRANCISCVS COLVMNA PERAMAVIT（修道士フランチェスコ・コロナはポーリアをととも愛した）と読めることから、フランチェスコ・コロナが作者と考えられてきた。コロナについては、ヴェネツィアのドメニコ会修道士ということ以外ほとんどわかっていない。しかし一方で、作者は『絵画論』や『建築論』等の著書で知られるルネサンスの万能人、レオン・バッティスタ・アルベルティ（Leon Battista Alberti; 1404–72）で、本書の主たるテーマは建築であるという見解もある。他にもアルドゥス・マヌティウス自身の作品であるという説もあり、作者については未だ決定的な判断は下されていない。

内容は幻想的な夢物語である。主人公のポリフィーロが眠りに落ち、夢のなかで牧歌的な風景のなかを彷徨い、恋人トレヴィーゾのポーリアを探し求め、その過程でさまざまな古代の人物や遺物に出会う。16世紀にはフランス語版や部分的な英訳が刊行されているが、造語を多用した難解なラテン語的イタリア語で書かれているため、長らく現代語訳は存在せず、1999年によくやく英語による完訳が出版された。この翻訳によって物語を追うことは可能となったが、ギリシャ語やラテン語の語幹を組み合わせ、場合によってはヒエログリフ、ヘブライ語、アラビア語も利用して作られた造語を厳密に現代語に訳すことはほとんど不可能と言っても良いだろう。

初版は1499年にアルドゥス・マヌティウスが外部資金により委託されて印行した。慶應義塾図書館所蔵本はアルドゥスの息子、パウルス・マヌティウス（Paulus Manutius; fl.1533–1557）が1545年に刊行した第2版である。タイトルページ以外は初版と同じ版木が使用されている。



[2: C5^v–C6^r]

Title, [1]1^r: La Hyperotomachia di Poliphilo, | cioè pugna d'amore in sogno. | dou'egli mostra, che tutte le cose | humane non sono altro che | sogno: & doue narra molt'altre cose degne | di cognitione. | [printer's device: Aldus] | ristampato di novo, et ricorretto | con somma diligentia, à maggior commodo | dei lettori. | In Venetia. M. D. XXXXV.

Colophon, F4^r: In Venegia, nell'anno M. D. XLV. | In casa de' figliuoli di Aldo. | [(verso:) printer's device: Aldus]

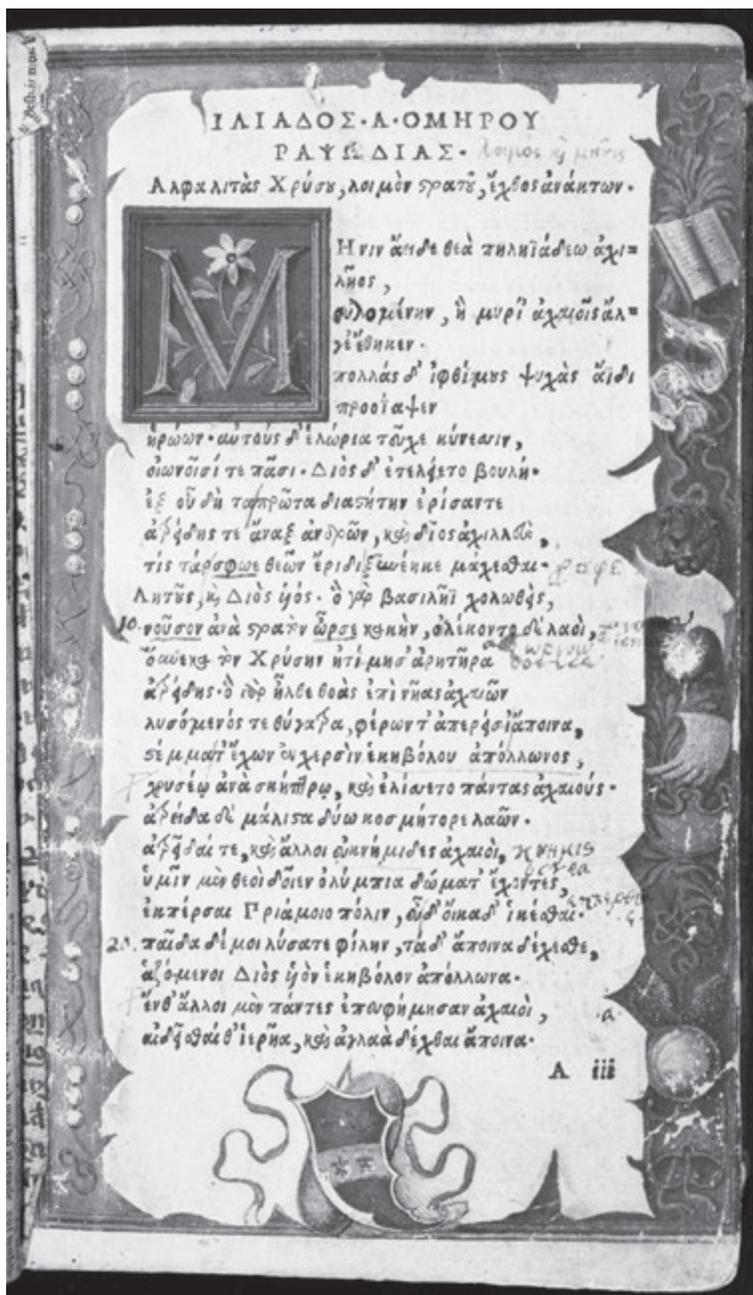
sm. folio; [1]⁴ a–y⁸ z¹⁰, A–E⁸ F⁴ [\$4 (–y2, F3–4; +z5) signed]; 234 leaves unnumbered. 313 × 206mm.

Ahmanson-Murphy, IIIa, no. 300; RA 58; Liane Lefavre, *Leon Battista Alberti's Hyperotomachia Poliphili* (Cambridge, MA, 1997); Francesco Colonna, *Hyperotomachia Poliphili: The Strife of Love in a Dream*, trans. and introd. by Joscelyn Godwin (New York, 2005); e-facsimile: <http://mitpress.mit.edu/e-books/HP/index.htm>

[141X 111 1]

ホメロス『イリアス、オデュッセイア』（ヴェネツィア、1504年）

Homer. *Homeri Ilias*. Venice: Aldus, 1504 / *Ulyssea. Batrachomyomachia. Hymni xxxii*. Venice: Aldus, 1504



[1: I, A3']

本書はアルドゥスの名を世界的に高めたギリシャ・ラテン文学の小型本のひとつである。15世紀のインクナブラには中世の写本の形態とレイアウトを受け継いだ大型本が多いが、16世紀に入る頃には、小型で薄い（よって相対的に安価な）書物が急速に出回るようになってきた。その代表が、ヴェネツィアのアルドゥスが刊行し、今日アルドゥス版として知られるポケットサイズの古典文庫である。中世写本もインクナブラも概してサイズが大きく、時禱書などを除くと小型本は希であった。アルドゥスは、大型本が一般的であった古典文学を、携帯可能な小型本 (*libri portatiles*) として刊行することを思い立つ。狭いスペースになるべく多くのテキストを美しく収めようと、新たな活字をフランチェスコ・グリフォに作らせた。それが、当時の人文主義書体であるカーシブ体をモデルとしたイタリック体である。最初のアルドゥス版は1501年のウェルギリウスだが、本書は1504年に刊行されたギリシャ語の『イリアス』と『オデュッセイア』である。

展示書ではこの2作品が一冊に綴じられているが、『イリアス』の冒頭のページは、狭い余白ながら、15世紀の大型のインクナブラのスタイルを踏襲して、手彩色の欄外装飾、装飾頭文字、所有者の紋章で飾られている[1] (No. 9参照)。こうした装飾は1490年代には減少していったが、初期のアルドゥス版にはしばしば見られる特徴である。装幀は16世紀イギリスのもので、また、1595年の日付のある **Henricus Bell** という署名をはじめ、数名のイギリス人の署名や蔵書票が見られる。このことから、本書は出版後間もなくイギリスに持ち込まれたと思われる。

ΟΔΥΣΣΕΙΑΣ Α·ΟΜΗΡΟΥ
ΡΑΥΩΔΙΑΣ·

Αλλα βιῶν ἀγορή, ὀδυσσεὺς δὲ παλλὰ δὲ βάρσος.



Νῆρα μοι ἔννεπε μῦσα πολύρρο-
τον, ὃς μάλα πολλὰ
πλάγχθη· ἐπὶ φέρον ἴφρον πτολίεθρον ἔπρσε.
πολλῶν δ' ἀνθρώπων ἴδεν ἄστεα,
καὶ νόον ἔγνω.

πολλὰ δ' ὄγ' ἐν πόντῳ πάθει ἄλγεα ὄν κενὰ θυμὸν, ἀλυσω δ'
ἄρτυ μῆκος ἦν τε ψυχῆν, καὶ νόσον ἑταίρων. *κρονικαί*
αἷψ' ἔδ' ὡς ἑταίρους ἐρήυσσάτο ἰεμίνος πῖρ. *τέμναι· σμ*
αὐτῶν γὰρ σφετέρῃσιν ἀτασθαλίῃσιν, ὄλοντο *ατασθαλίαν· γοε*
νήπιοι· οἱ κενὰ βῆσι ὑπὲρ ἰονος ἠλίοιο
ἠέθιον· αὐτὰρ ὁ, τοῖσιν ἀφάλιτο νόστιμον ἦμαρ·
τῶν δ' ἀμόθεν γε βεῖα βύραχ' ἰδὺς, ἧ' ἐκὼς ἦ μῖν·
ἔθ' ἄλλοι μὲν πάντες, ὅσοι φύρον ἀπὺν ὄλιθρον,
οἵ μοι ἔσαν πόλεμόν τε τιφύροισι, ἠδὲ θάλασσαν·
τοῖσ' ἴδον νόσον κελρημίνον ἠδὲ γυμκός,
τύμφῃ κόντι ἔρυνε κελυφῶσ' ἰαβείων
ἐκασίσι γλαφυροῖσι, λιλαίω μὲν πόσιν ἔνοι·
οἷς ὅτε δὴ ἔτος ἦλθε περιπλομένωσ' ἑαυτῶν,
τῷ δ' ἐπεκλώσαντο θεοί, δίκονδ' ἐπέσθαι
ἧ' ἰθακην· ὑδ' ἔνθα κτεφύμενος ἦεν ἀέλων·
καὶ μετὰ οἷσι φίλοισι· θεοὶ δ' ἐλέειρον ἅπαντας,
νόσφι ποσειδάωνος· ὃ δ' ἄσπερχ' ἔς μενέαιεν
ἀντιβῆψ' ὀδυσσῆϊ, πάρος ἦν γυμάν' ἰκίσθαι·
αἷψ' ὄλθῃ ἀέθιοπ' ἄσ' μετ' ἰαβείασι πλοῦθ' ἰόντας.

α. iii

[2: II, a3^r]

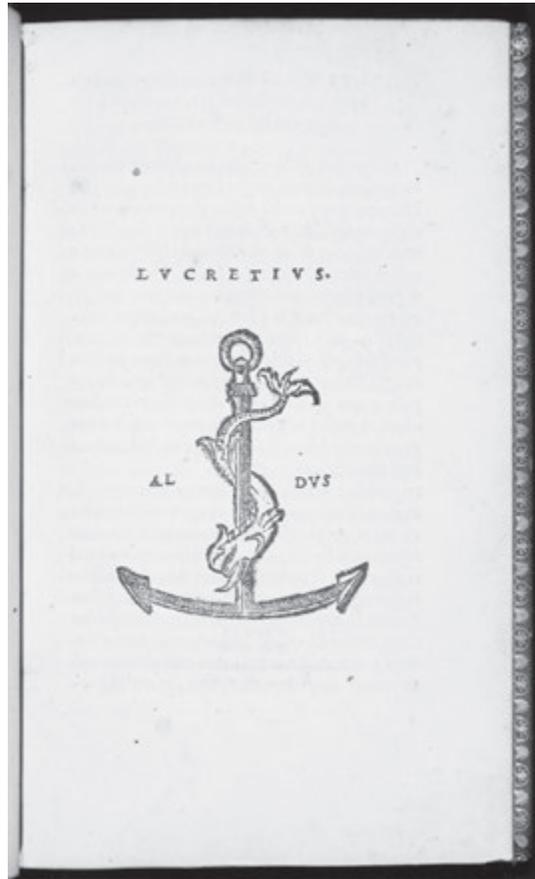
2 vols in one; 8vo: A–Z⁸, AA–LL⁸ MM⁶; χ1 a–z⁸, ²A–G⁸ H¹⁰ [\$4 (–B1, MM4, b1; +²H5) signed]; 522 leaves (of 278 + 1 + 250; lacking A1–2, A7–8, F8, a1–2) unnumbered. 160×94mm. M6 blank; without the additional leaves 1–7⁸ containing the life of Homer at the beginning of the vol. 2.

Ahmanson-Murphy, I, 68/1-68/2; RA 2; Bernard Quaritch Catalogue 1200 (1994), item 27

[120X 923 1]

『ルクレティウス著作集』（ヴェネツィア、1515年）

Lucretius (c.94 – c.49 B. C.). *Lucretius*. Venice: Aldus, 1515



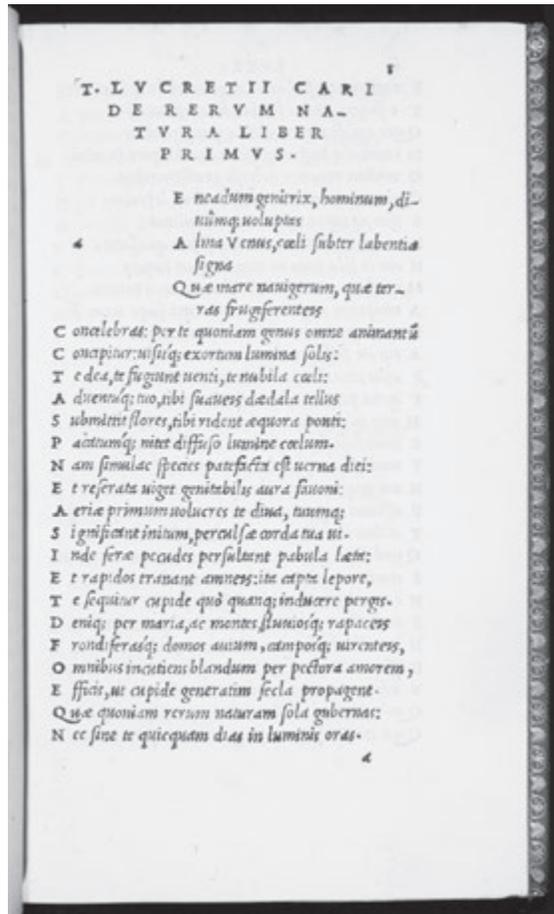
[1: t. p.]

本書は、ローマの詩人で哲学者ルクレティウスの唯一の作品、『物の本質について』（*De rerum natura*）のアルドゥス版である。アルドゥスのために複数のラテン語古典を校訂したヒューマニストのアンドレア・ナヴァジェロ（Andrea Navagero; 1483–1529）によって新たに編纂された版である。

1501年から刊行されたアルドゥスのポケットサイズの古典文学シリーズは大成功を収め、イタリアやフランスでは類似品が販売されるようになった。リヨンの出版者は、アルドゥスと同じイタリック体を用いて、アルドゥスの前文までコピーした海賊版を刊行した。アルドゥスは、偽版を見分ける手引きまで印刷して、こうした流れに対抗した。本書にも

無断転載を禁じる旨が記してある。

1515年1月に刊行された本書は、アルドゥス・マヌティウスの生存中に刊行された最後のアルドゥス版である。アルドゥスを当時の代表的出版人に押し上げた「アリストテレス全集」と同じく、カルピの領主アルベルト・ピオに献呈されている。アルドゥスは、カルピに埋葬して欲しいという遺言を残して1515年2月6日に世を去り、その出版業は息子達に着実に受け継がれてゆくことになる。



[2: a1]

Title, *1^a: Lucretius. | [printer's device: Aldus]

Colophon, q6^r: Venetiis in aedi | bus Aldi, et An | dreae soce | ri mense | Ianuario | M.D.XV.

8vo: *⁸ (-*8) a-q⁸ [\$4 signed]; 135 leaves, ff. [7] 1-125 [3] [misprinting 12 as 11, 72 as 71, 99 as 98, 101 as 107]. 92×57mm.

Ahmanson-Murphy, I, no. 112

[120X 828 1]

16世紀の合冊本

- (1) ポンポニウス・メッラ 『世界地理』 (パリ、1507年)
- (2) コルネリウス・ネポース 『英雄伝』 (ミラノ、1511年頃)
- (3) ソリヌス 『世界の驚異について』 (パリ、1503年)
- (4) ポンペイウス・トログス (ユスティヌス抄録) 『地中海世界史』 (パリ、1507年以降)

16th-century Sammelband

- (1) Pomponius Mela. *De Totius orbis descriptione*.... Paris: Jean Petit, 1507
- (2) [Cornelius Nepos]. *Probi Aemilii De excellentibus imperatoribus opus*. [Milan: Niccolò Gorgonzola, c. 1511]
- (3) *Solinus de memorabilibus mundi diligenter annotatus & indicio alphabetico prenotatus*. Paris: Jehan Petit, 1503
- (4) Justinus. *Marcus Junianus Historia ex Trogo Pompeio*. Paris: Jehan Petit, [not before December, 1507]

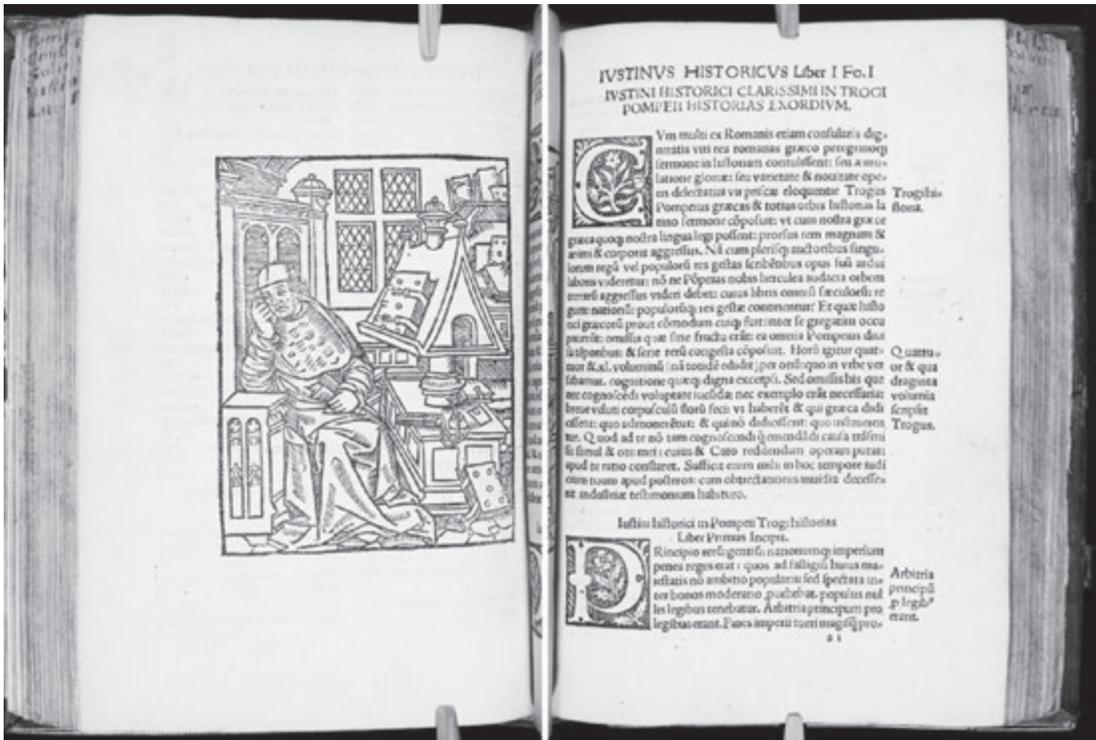
である。その内容は、ミルティアデス (c. 550–c.489 B.C.) から作者の義兄にあたるアッティクスまでの、ギリシャ、カルタゴ、ローマ等の著名人 (将軍、歴史家、王、詩人等) の評伝の集成で、ローマ人と外国人を分けて対比的に描いている。中世を通じて本書の著者は4世紀後半のアエミリウス・プロブス (Aemilius Probus) とみなされており、本書でもプロブス作とされているが、ディオニシウス・ランビヌス (Dionysius Lanbinus) が編纂した1569年版 (パリ刊) においてネポースが全編の著者であるという主張がなされ、受け入れられるに至った。1471年にヴェネツィアのイエンセンが刊行した版をはじめとして、15世紀末まで既に三度版を重ねており、広く知られていたことが推察される。

(3) ソリヌス (Gaius Julius Solinus) は3世紀前半のローマの文法家・編纂者で、プリニウス『博物誌』や上述のメッラを大胆に抜粋して本書を編んだ。『奇異事物集成』 (*Collectanea rerum memorabilium*) としても知られる本書は、ヨーロッパ、アジア、北アフリカつまり古代人が知っていた全世界一を対象とした世界地誌で、6世紀には増補版がつくられた。エチオピアの犬頭人、四つ目人間、巨大蟻などの荒唐無稽な記述にもかかわらず、いやむしろそれゆえに、中世を通じて読まれ続け、16世紀に至るまで学校や大学で用いられた。

(4) ポンペイウス・トログス (Pompeius Trogus) はガリアのケルト系種族「ウォコンティ族」出身のローマ市民で、紀元前19–11年頃に本書を記したと推察される。通常『ピリッポス史』として知られる本書は、ピリッポス王を祖とするマケドニア王朝から作者の時代のローマに至るまでの地中海世界全域の歴史と地誌を描いている。ユスティヌスはおそらく3世紀初めの人物で、当時の文学的慣習に従って、全44巻の原作を、独自の序文や記述を交えつつ、抄録として編纂し直した。本書は中世を通じて読み継がれ、15世紀以降も多く版が印刷された。慶應義塾図書館には、ミラノで1476年に印行されたインキュナブラ (120X 468 1) をはじめ、複数の版が所蔵されている。

以上のように、4冊はいずれもルネサンス期に広く知られていた古代の歴史、地誌の基本書である。このように複数の独立した書物をひとつにまとめて製本したものを合冊本 (Sammelband) と呼ぶが、これは15–16世紀の書物にはしばしば見られる形態である。本書の場合は、古代の地誌という共通テーマのもとで、教科書的に使用されていた小型の著作を一冊にまとめて製本したと思われる。本書の表紙の装幀は薔薇などの装飾モチーフを空押ししたもので、留め金は無くなっているが、保存状態は極めて良く、ルネサンス期の装幀の特徴をよく伝えている。

慶應義塾図書館には、16世紀中期のペトルス・ラムス (Petrus Ramus) によるギリシャ語やラテン語の文法書類点数を一冊にまとめた、ルネサンス期の「必修語学教科書」とでも呼ぶにふさわしい合冊本 (120X 1095 1) も所蔵されている。また、インキュナブラの合冊本も3点収蔵されている。



[2: III, C6^v–IV, a1^r]

(1)

Title, a1^r: Pompenius mela de to | tius Orbis descriptione. Author Lu- | culentiss. Nunquam antea citra | montes impressus. | [*printer's device: Jean Petit*]

Colophon, i8^r: Anno. Salutiferae incarnationis .M. D. VII. Decima | die Ianuarij. Impressum est hoc opus per Egidium Gormun- | tium. & per Torinum Bituricum diligentiss. recognitum. | Parrhisijs. | [*printer's device: Gilles Gourment*]

4to: a-h^{8/4} i⁸ [\$4 (-BDFH3,4) signed]; 56 leaves, ff. [i] ii–xlvi [II]. 197 × 132mm.

(2)

Title, a1^r: Probi Aemilii de Excellentibus imperatoribus opus nu | perrime aeditum quam diligentissime emenda | tum: Vbi dignissima quaeque scitu in mar | ginibus anotata: ex indice tibi ea | cognoscere uolenti facilli | me occurrent | [*printer's device: Nicolas Gorgonzola*]

4to: a-d⁸ e⁴ f⁶; [\$4 (-E3, EF4) signed]; 42 leaves, ff. [i] ii–xlii [misprinting xi–xii as xiii–xiiii, xiii as xi, xiiii as xii, xxvii as xxvi, xxviii as xxviii, xxxiiii as xxxiii].

(3)

Title, π1^r: Solinus de memorabilibus | Mundi diligenter annotatus & indicio alphabetico praë | notatus. | [*printer's device: Jean Petit*] | Venundatur Parrhisiis in regione | Diui Iacobi sub leone argenteo

4to: π⁴ a-c⁸ d⁴ e-f⁸ [\$4 (-d4,e2) signed]; 48 leaves, ff. [4] I–XLVIII [misprinting XL as LX].

(4)

Title, A1^r: Iustini Historia ex Trogo Pompeo | quattuor & triginta epithomatis collecta | Lucii Flori

Epithomata quattuor quaecul | tissima in decem Titi Liuii decadas. | Sexti Ruffi consularis viri ad Valentianum | Augustum de Historia Romana opus | dignissimum. | [*printer's device: Jean Petit*] | [V]enales reperiunter in vico sancti Iacobi | sub Leone Argenteo

Colophon, &3^v: Habes candide lector in hoc volumine non minus | vtilia quam lepida Iustini in Trogum et Flori in Li- | uium in super Sexti Ruffi viri consularis | Epithomata nuper castigatissime in | Campo gaillardo impressa. Quae | apud Io | hannem Petit in vico | diui Iacobi sub | leone Argenteo

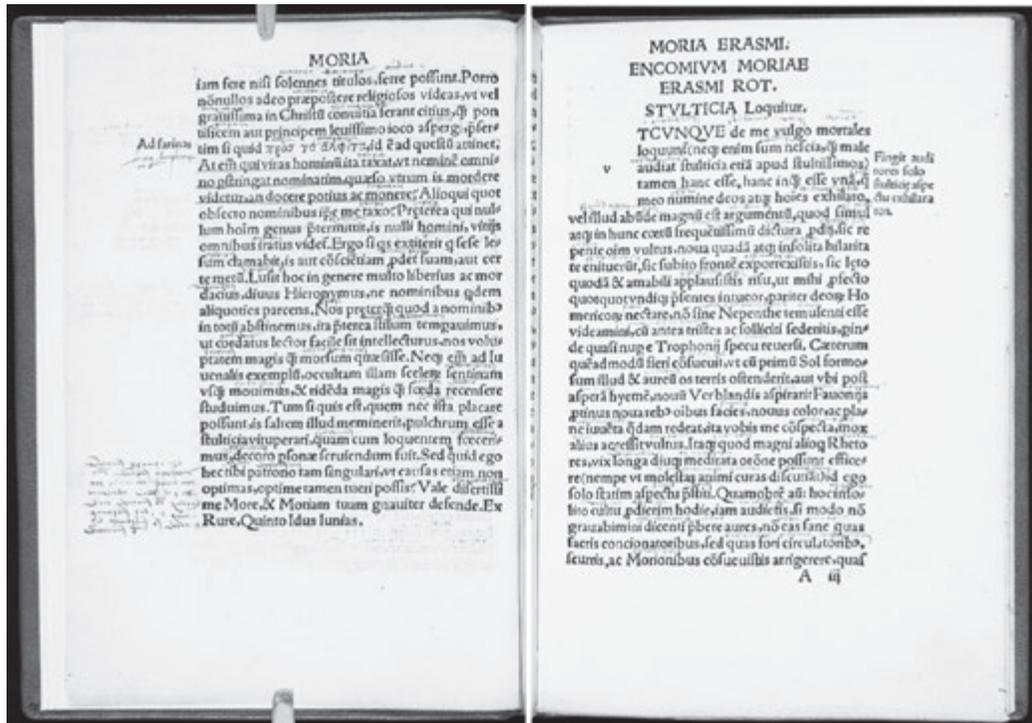
4to: A⁸ B⁴ C⁶, a-y^{8/4} z⁶ &⁴ [$\$4$ (-Bbdfhkmoqsvy&4) signed]; 160 leaves, ff. [18] [1] 2-116 116 117 -140 [141] [=142] [misnumbering 55 as 47].

コルネリウス・ネポス『英雄伝』山下太郎、上村健二訳（国文社、1995）；『ディオドロス神代地誌 / ポンポニウス・メラ「世界地理」 / プルタルコス「イシスとオシリス」』飯尾都人訳編（龍溪書舎、1999）；ポンペイウス・トログス著、ユニアヌス・ユスティヌス抄録『地中海世界史』合阪學訳（京都大学学術出版会、1998）

[120X 1076 1]

デシデリウス・エラスムス『痴愚礼讃』（シュトラースブルク / ストラスブール、1511年）

Desiderius Erasmus (1466/69 – 1536). *Moriae Encomium*. Strassburg: Matthias Schurer, 1511



[1: A2^v–A3^r]

本書はデシデリウス・エラスムスの『痴愚礼讃』の初版である。

エラスムスは、1466年あるいは1469年に聖職者の私生児としてロッテルダムに生まれた。両親の死後に、後見人によって半ば強制的にオランダのハウダ近郊ステインのアウトグスティヌス在俗司祭修道会に入れられ、1492年に司祭として叙品された。20代半ばにそこを勝手に出て以来、安定した聖職禄も年金もないまま、パリ、ロンドン、オクスフォード、ルーヴァン、ヴェネツィア、ローマ、バーゼルと遍歴しながら、著作を発表し続けた。旅は多くの古典学者や聖職者との親交をもたらした。1508年にはヴェネツィアの出版人アルドゥス・マヌティウスのもとに8ヶ月ほど滞在し、アルドゥスが自ら校正するかたちで、『格言集』（*Adagiorum Chiliades*; 1508）の増補改訂版が出版された（初版は1500年にパリでエラスムス自身によって刊行された）。アルドゥスという定評ある出版人によっ

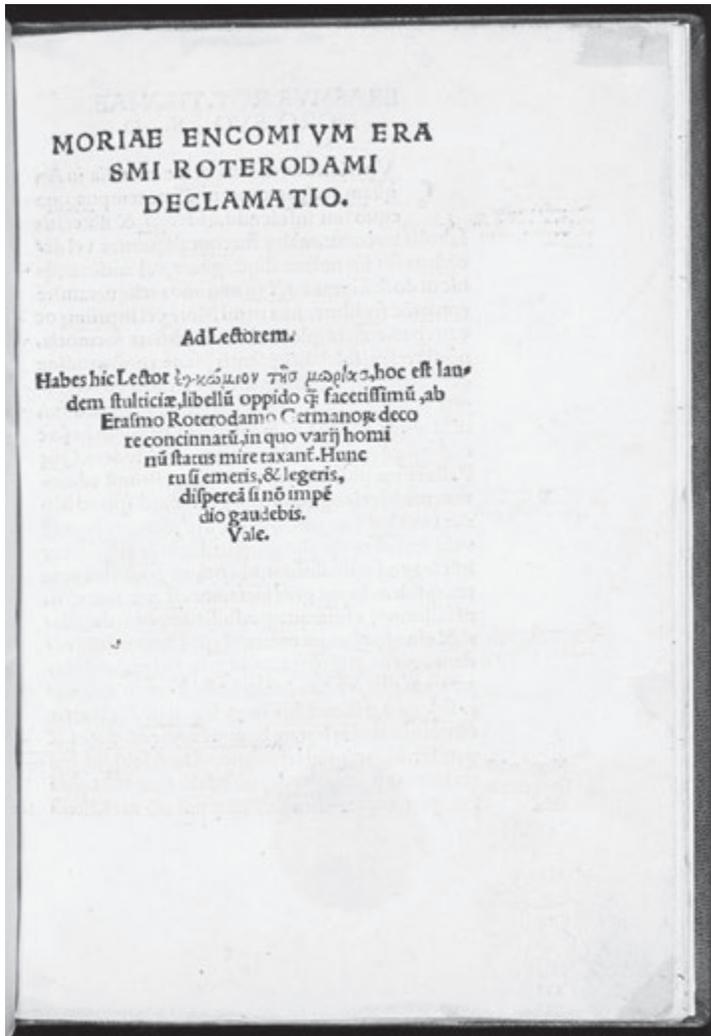
て刊行されたこの新版によって、エラスムスの名声は全ヨーロッパに広がったのである。

『痴愚礼讃』は、『キリスト教兵士提要』(*Enchiridion milites Christiani*; 1504)、『格言集』と並んで、エラスムスの執筆活動初期の代表作である。エラスムスは本書を1509年にイタリアからイギリスへ向かう旅の途上で構想し、ロンドンのトマス・モア(Thomas More; 1478–1535)邸に滞在中に書き上げたとされている。出版されるとすぐにベストセラーとなり、1520年までの間に合計35版が、バーゼル、ケルン、パリ、ヴェネツィア等9都市の14以上の書肆から刊行された。

古典学者、聖書学者としての厳密な方法論に裏打ちされたエラスムスの著作は、カトリックにもプロテスタントにも与しないキリスト教ヒューマニズムに根ざしているがゆえに、繰り返し法王庁により禁書とされたが、熱心な読者を数多く獲得した。ラブレールはエラスムスのことを「自分にとって母のような存在」と呼んで、感謝と敬愛の念を表している。

エラスムスはしばしばルネサンス期を代表するヒューマニストとして名が挙げられるにもかかわらず、今日、現代語で読める著作は必ずしも多くない。おそらくその理由のひとつは、当時の著述家にとっては当然の選択ではあるが、自分の思想を素早く広めようと、国際語であったラテン語で全著作を著したことにあるだろう。全作品の学術的な校訂版は未だに刊行中(1969-)であり、現代語訳が存在しない作品も少なくない。日本語訳も、何度か訳されている『痴愚礼讃』を除くと、『平和の訴え』など数編しか存在しない。

慶應義塾図書館には本書以外にも、『痴愚礼讃』の1515年版(バーゼル)、『平和の訴え』の初版(バーゼル、1517年)、『キリスト教兵士提要』等からなる『作品集(*Lucubrationes*)』(ストラスブール、1517年)の3冊のエラスムスの16世紀の刊本が収蔵されている。



[2: A1^r]

Title, A1^r: Moriae Encomium Era | smi Roterodami | Declamatio. | Ad Lectorem. | Habes hic Lector ἐγκώμιον τῆς μωρίας, hoc est laudem stulticiae, libellum | oppido que facitissimum, ab Erasmo Roterodamo Germanorum deco | re concinnatum, in quo varij hominum status mire taxant. Hunc | tu si emeris, & legeris, | dispeream si non impem | dio gaudebis. | Vale.

Colophon, H5^a: Argentorati in aedibus Matthiae Schurerij, | mense Augusto Anno | M. D. XI. | Conrado Duntzenhemio .II. dictatore | Argentorat. | Regnante Caesare Maxi | miliano Pio Foelici | A V G.

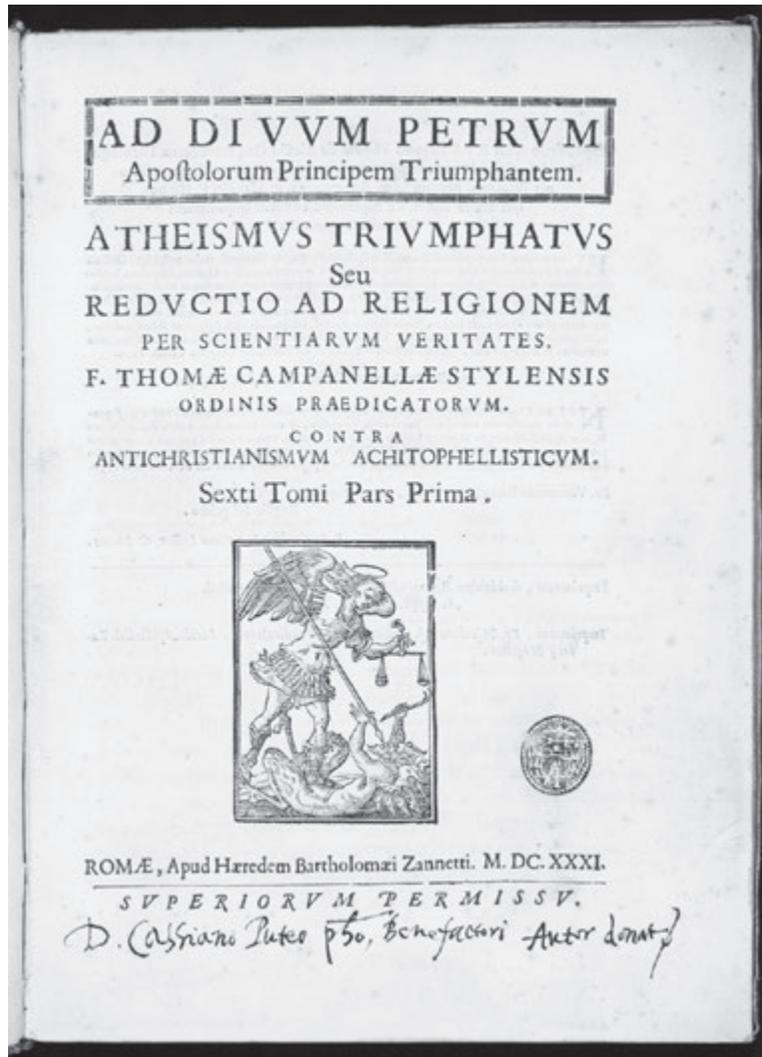
4to: A–F^{8/4} G–H⁶ [\$3 (+ A4–5, C4–5, E4–5, G4, H4) signed; 47 leaves (of 48; lacking H6) unnumbered. 350×200mm.

エラスムス『痴愚礼讚』大出晃訳（慶應義塾大学出版会、2004）；エラスムス『平和の訴え』箕輪三郎訳（岩波文庫、1961）

[120X 933 1]

トマゾ・カンパネッラ『克服されたる無神論』（ローマ、1631年）

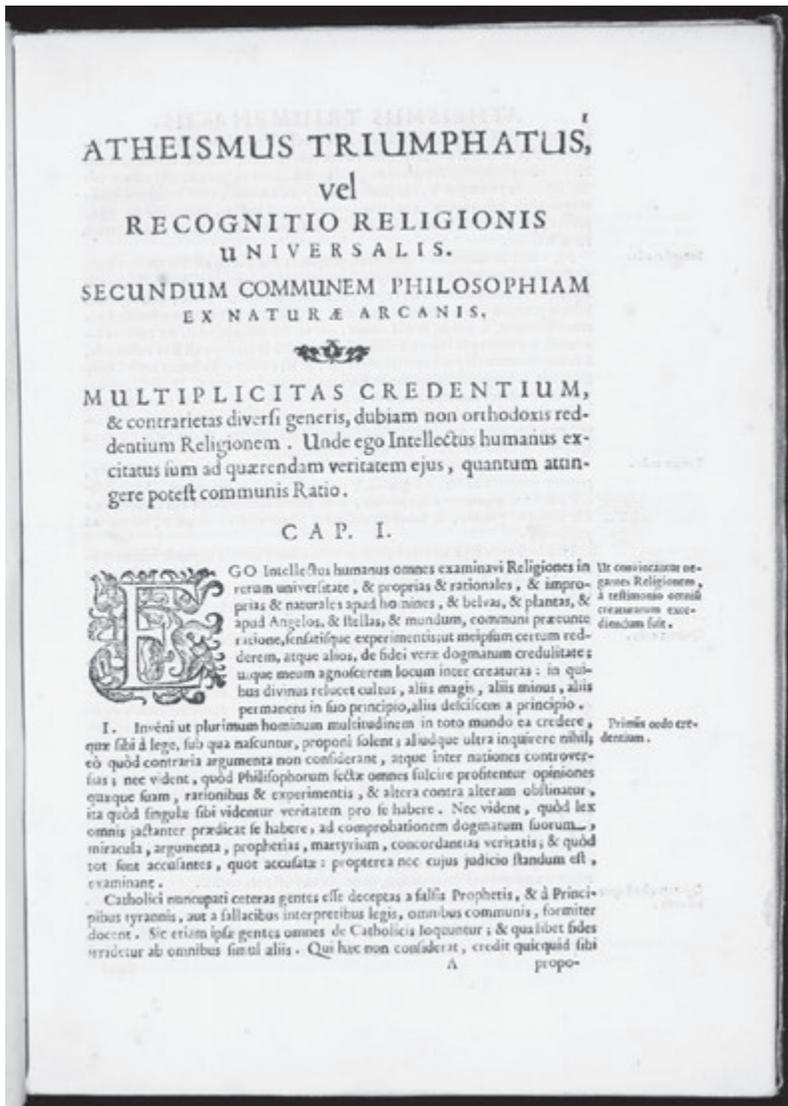
Tommaso Campanella (1568 – 1639). *Atheismus Triumphatus*. Rome: B. Zannetti, 1631



[1: t.p.]

『太陽の都』とならぶカンパネッラの代表作『克服されたる無神論』の初版である。ドメニコ会士で哲学者のトマゾ・カンパネッラは、スペインの強い勢力下にあった16世紀のイタリアにあって、一見すると反カトリック的ともとれる著作の発表とカトリック教会改革運動への加担とで、投獄と釈放を繰り返す一生を送った。『克服されたる無神論』は

ローマ幽閉中の1605年頃に著され、1631年にようやく出版されたが、他の著作と同様に、教会とキリスト教に対する非正統的な思想のために、数ヶ月後には禁書とされ出版は差し止められた。そうした事情を考慮すると、本書が初版であることは貴重である。さらに、展示書のタイトルページにはカシアーノ・デル・ポッツォ (Cassiano del Pozzo; 1588–1657) に宛てた献辞が、著者の自筆で記されている。献辞は「哲学者で恩人のカシアーノ・デル・ポッツォへ、著者献呈」(‘D. Cassiano del Pozzo, pho, Benefactori Autor donato’) と読める。カシアーノは芸術愛好家で、当時ローマに住んでいたフランスの画家プッサンの後援者であった。カンパネッラとは1629年から34年にかけて親交があったと思われる。



[2: p.1]

Title, †1^r: [*within a frame*] Ad Dium Petrum | Apostolorum principem triumphantem. | [*below frame*] Atheismus triumphatus | seu | Reductio ad religionem | per scientiarum veritates. | F. Thomae Campanellae stylensis | ordinis praedicatorum. | contra | Antichristianismum achitophellisticum. | Sexti tomi pars prima. | [*woodcut: the archangel Michael overpowering a devil; orn.*] | Romae, apud haeredem Bartholomaei Zannetti. M. DC. XXXI. | [*rule*] | Superiorum permissu.

Colophon, Q8^v: [*printer's device*] | Romae, apud haeredes Bartholomaei Zannetti. M. DC. XXX. | [*rule*] | Superiorum permissu.

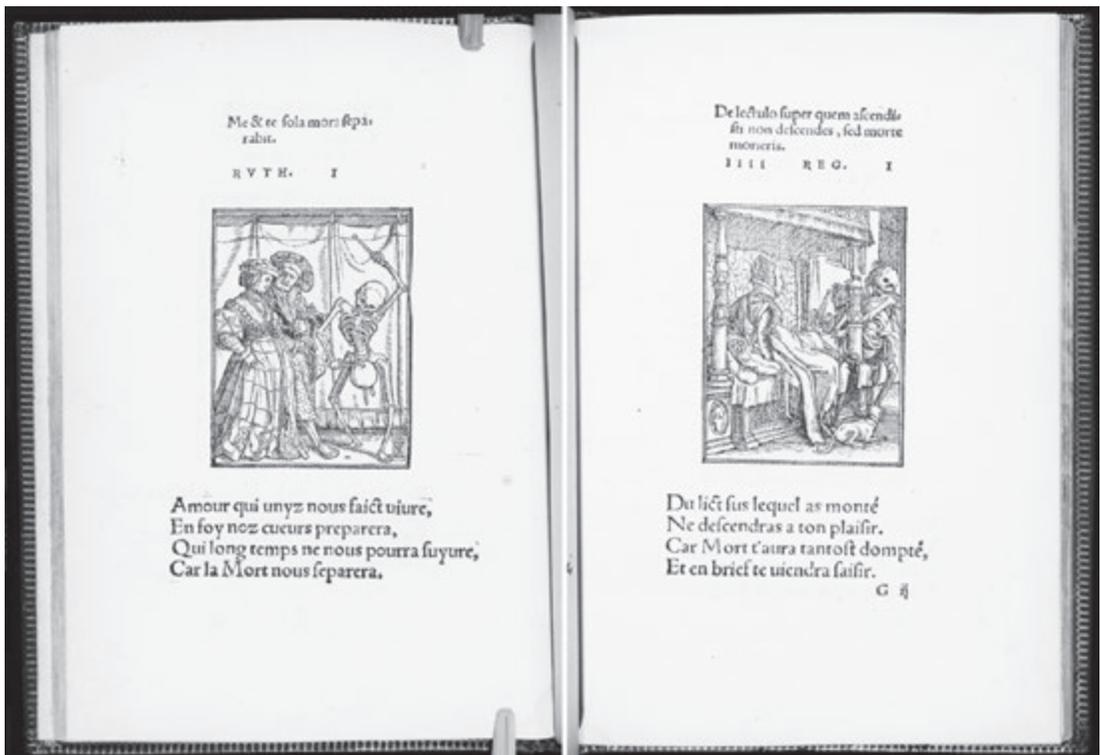
4to: †⁴ A⁸(-A5) B-P⁶ Q⁸ [\$3 (-†3: +AQ4) signed; misprinting O2 as N2]; 103 leaves, pp. [8] 1-11 [I] 12 [I] 13-182 [=184] [I4]. 259 × 185mm. Q3 and Q6 transposed.

[120X 991 6 6]

ハンス・ホルバイン 『死の舞踏』 (リヨン、1538年) / 『旧約聖書挿絵』 (リヨン、1539年)

Hans Holbein (1497 – 1543). *Les simulachres & historiees faces de la mort....* Lyon: Melchior et Gaspar Trechsel freres, 1538

— *Historiarum Veteris Testamenti Icones....* Lyon: Melchior et Gaspar Trechsel freres, 1539



[1: G1^v-G2^r]

書物に挿し絵を入れるための木版（凸版）とエングレーヴィング（凹版）の手法は、1455年頃の活版印刷術の登場とほぼ時期を同じくして確立した。16世紀には、版画と詩文を組み合わせた版画集がドイツやフランスで数多く刊行され、人気を博した。

本書はハンス・ホルバイン（子）が原画を描き、リヨンのトレシエル兄弟が刊行した2冊の挿絵本の合冊である。一冊目は41点の木版画で構成された通称『死の舞踏』（正確

なタイトルは『巧妙に構想され、優雅に描かれた「死」の像と物語』で、各ページは、ホルバインの原画をバーゼル在住のハンス・リュッツェルブルガー (Hans Lützelburger) が版刻した挿絵、ウルガタ聖書からの引用句、そしてその引用を説明するフランス語の4行詩で構成されている[1]。詩は、エンブレム作家でもあるジル・コロゼ (Gilles Corrozet; 1510-68) の作であるという説があるが、確証はない。

「死の舞踏」(danse macabre) は、主に教会や墓地の壁画として14-16世紀にはヨーロッパ諸国で広く見られたテーマである。壁画の「死の舞踏」では、「死」があらゆる階層、職業、年齢の人間をひとりずつ

連れ去ってゆく場面が行列のように連続的に描かれている。15世紀後半になると、そのような「死の舞踏」は印刷本としても刊行される[2]。パリでグエイヨ・マルシャン (Guyot Marchant) が刊行した木版本の『死の舞踏』(1485) や、それを踏襲したアントワーヌ・ヴェラールのもの (Paris: Antoine Vérard, c.1500) は、



[2:「死の舞踏」の木版画(部分)、15世紀、イタリア]

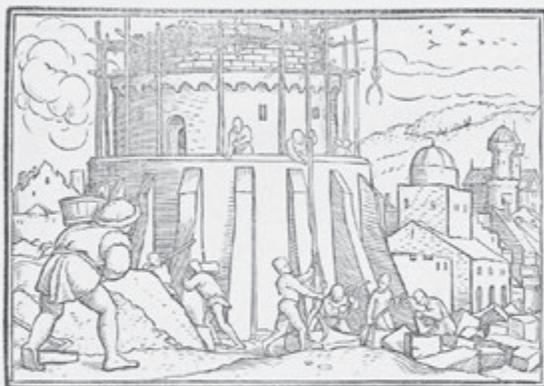
パリのイノサン墓地の壁画を木版で再現し、死の絶対性を強調して改悛を促す教訓的内容の詩句をそえて印刷したものである。マルシャンの木版画のデザインは、16世紀に印刷された時禱書の欄外装飾にも受け継がれている (No. 6参照)。

しかし、展示書を見てわかるように、ホルバインの「死の舞踏」は、「死」と生者の出会いを一組毎に独立した版画として鑑賞できる様にし、それぞれに聖書に基づく教訓をそえて印刷してある。このスタイルは、バーゼル出身の版画家マテウス・メーリアン (Matthäus Merian der Ältere; 1593-1650) による『死の舞踏』(Totten-Tantz, wie derselbe in der löblichen und weitberühmten Stadt Basel. Frankfurt am Main, 1644) にも踏襲されている。

2冊目は、正確には『旧約聖書の教えを迫真的に描き出した図像』と題される旧約聖書の挿絵集で、1539年に出版された。『死の舞踏』と同じように、各ページは、図版、聖書からの引用句、それを説明するフランス語の4行詩から構成されている。人物像などの様式が『死の舞踏』のそれと共通していることから、これら2作品はほぼ同時期に製作されたと推察できる。図3はバベルの塔(『創世記』第11章)を描いている。

BABEL turris ædificatur, ex qua linguarum
confusio suboritur.

GENESIS XI.



*Nembroth geant commenca a construire
La Tour Babel, dicte confusion:
Mais Dieu uoulant si grand orgueil destruire,
Mit au languaige une diuision.*

[3: ²B2^v]

Title, A1^r: Les Simulachres & | Historiees faces | de la Mort, autant ele | gamment pourtraictes, que
artifi- | ciellement imaginées. | [*printer's device*] | A Lyon, | soubz l'escu de Coloigne. | M. D.
XXXVIII.

Colophon, N4^b: Excudebant Lugdu | ni Melchior et | Gaspar Trechsel | Fratres. 1538

Title, ²A1^r: Historiarum Veteris | Testamenti | Icones | ad uiuum ex- | pressae. | Vnà cum breui, sed
quoad fieri potuit, dilucida | earundem & Latina & Gallica expositione. | [*printer's device*] | Lugduni, |
sub scuto Coloniensi. | M. D. XXXIX.

Colophon, N3^v: Luguni, | Melchior & Gaspar | Trechsel fratres | Excudebant.

4to : A-N⁴; ²A-N⁴ [\$3 (-²A3) signed]; 104 leaves unnumbered. 180 × 125mm.

Fairfax Murray (French), 247; RA 46 ; 海津忠雄編『ホルバイン—死の舞踏』(岩崎美術社、1991) ; Henry Green, ed., *Les Simulachres & Historiees Faces de la Mort*, The Holbein Society (London, 1869); Henry Green, ed., *Holbein's Icones Historiarum Veteris Testamenti*, The Holbein Society (London, 1869); *Hans Holbein, Icones Historiarum Veteris Testamenti (Lyon, 1547)*, Octavo Digital Rare Books (Oakland, CA, 1999)

[120X 1003 1]

ヨスト・アマン『聖書図絵』（フランクフルト、1571年）

Biblorum Vtriusque Testamenti Icones. Frankfurt am Main: J. Feyerabend, 1571

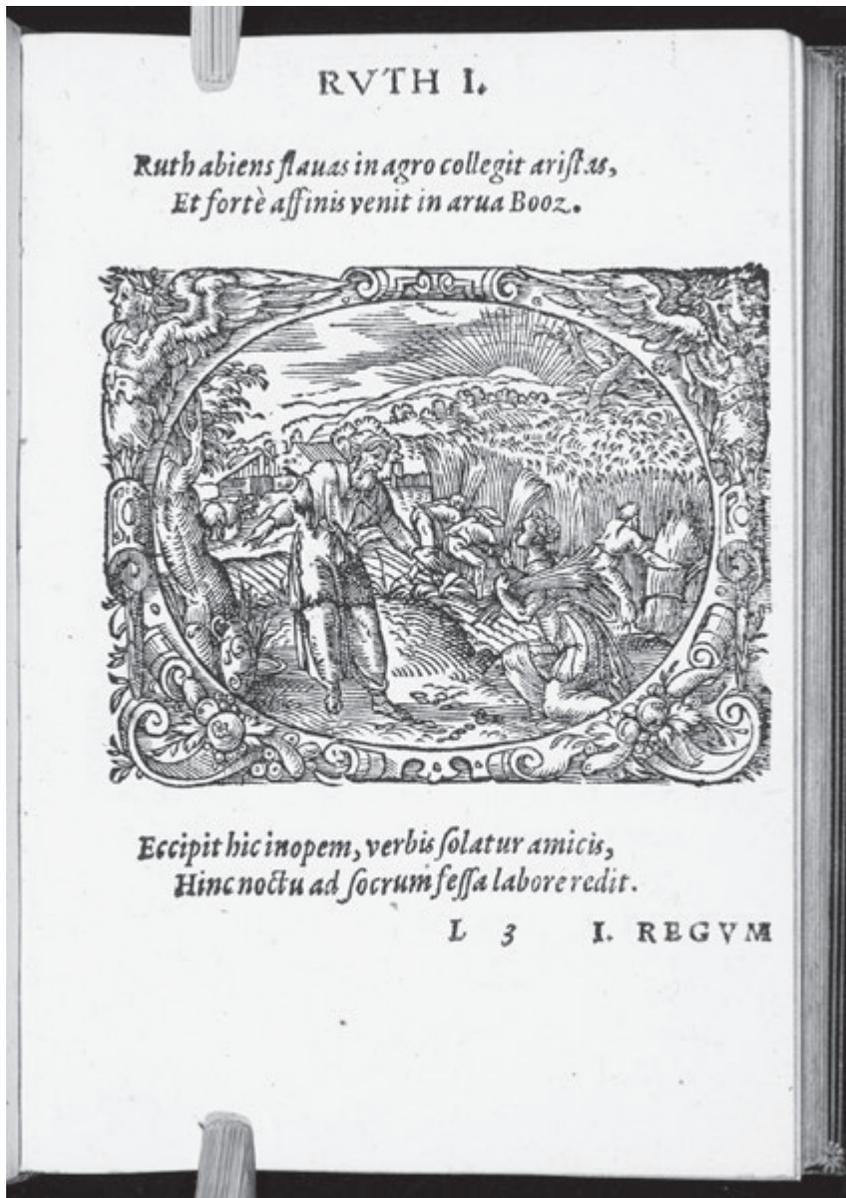


[1: B1]

本書は、200点の木版画（旧約聖書163点、新約聖書37点）からなる聖書挿絵集で、版画家のヨスト・アマンがフランクフルトの書肆ファイアラーベントの委嘱により制作した

ものである。ホルバインの『旧約聖書図絵』と同様に、各ページは挿絵とラテン語の4行詩で構成されている。詩文はコンラート・ヴァイス (Conrad Weis) による。

ヨスト・アマン (Jost Amman; 1539-91) は、チューリッヒかバーゼルのどちらかで版画家としての修行をした後、1561年にニュルンベルクの版画家フィルギル・ゾリス (Virgil Solis) のもとで働き、ゾリスの死後はその跡を継いだ。アマンはニュルンベルクで多くの銅版画や木版画を作成し、約50点の書物に挿絵を提供したとされる。図1はノアの方舟 (『創世記』第6章)、図2はルツとボアズ (『ルツ記』第2章) である。



[2: L3]

Title, A1^r: Bibliorum | Vtriusque | Testamenti Ico- | nes, summo artificio | expressae, historias, sa- | cras ad uiuum exhibentes, | & oculis summa cum gratia repraesentantes: | adeo'que doctis & venustis Carminibus exorna- | tae, ut pius Lector verè sacrorum hinc Emble- | matum, thesaurum possit agnoscere. In om- | nium, qui pietatis & literarum amantes sunt, | gratiam, per candidum studiosorum fau- | torem in lucem nunc primùm | aeditae | In Zoilum Improbum. | Calumniare si velis improbe Zoile, | Vel unicam libro hoc vides quam lineam, | Scias quòd haec minimè tibi parauerim: | Bonis viris licet legere libros bonos, | Indignum iudico te qui legas mea. | Francofurti ad Moenum, | cum Privilegio Caesareo. | M. D. LXXI.

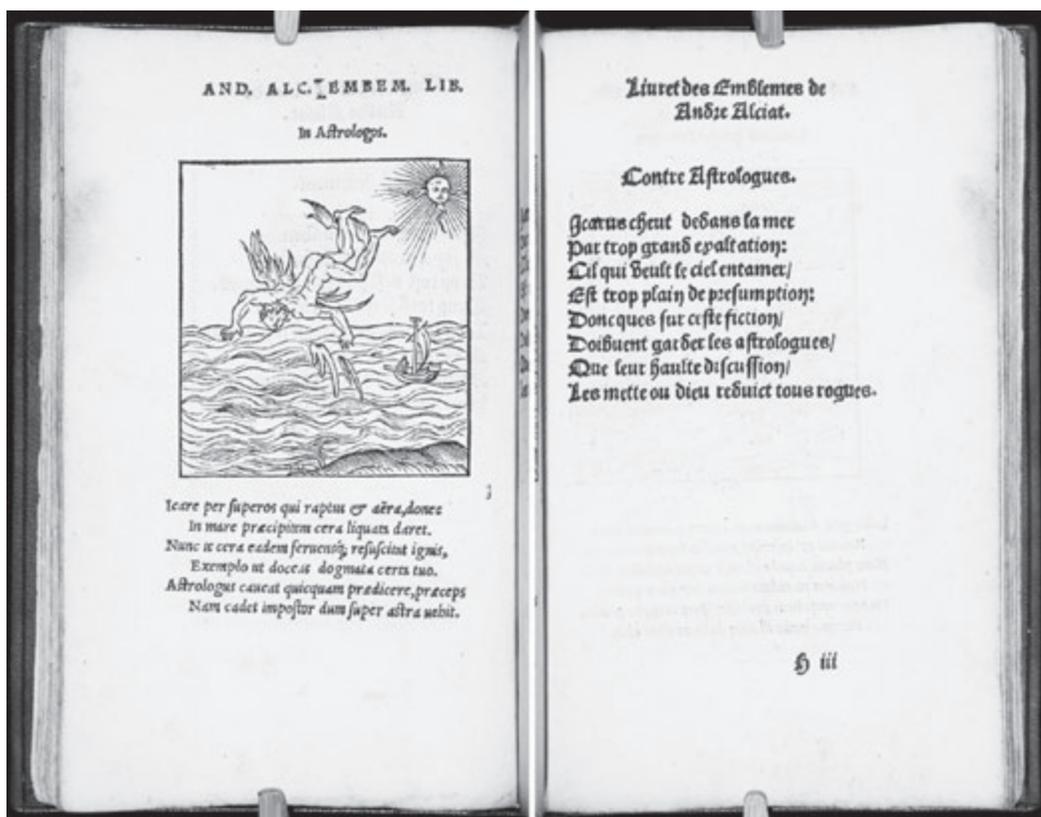
Colophon, c8^r: Impressum Francofurti | apud Georgium Coruinum, | Impensis Hieronymi | Feyerabend. | M. D. LXXI.

8vo: A–Z⁸, a–c⁸ [\$5 (–T1) signed]; 208 leaves unnumbered (printed on the recto page only except c).
127×83mm.

[160X 41 1]

アンドレア・アルチャーティ『エンブレム集』（パリ、1536年）

Andrea Alciati (1492 – 1550). *Livres des emblemes*. Paris: Chrestien Wechel, 1536 [Edition 2]

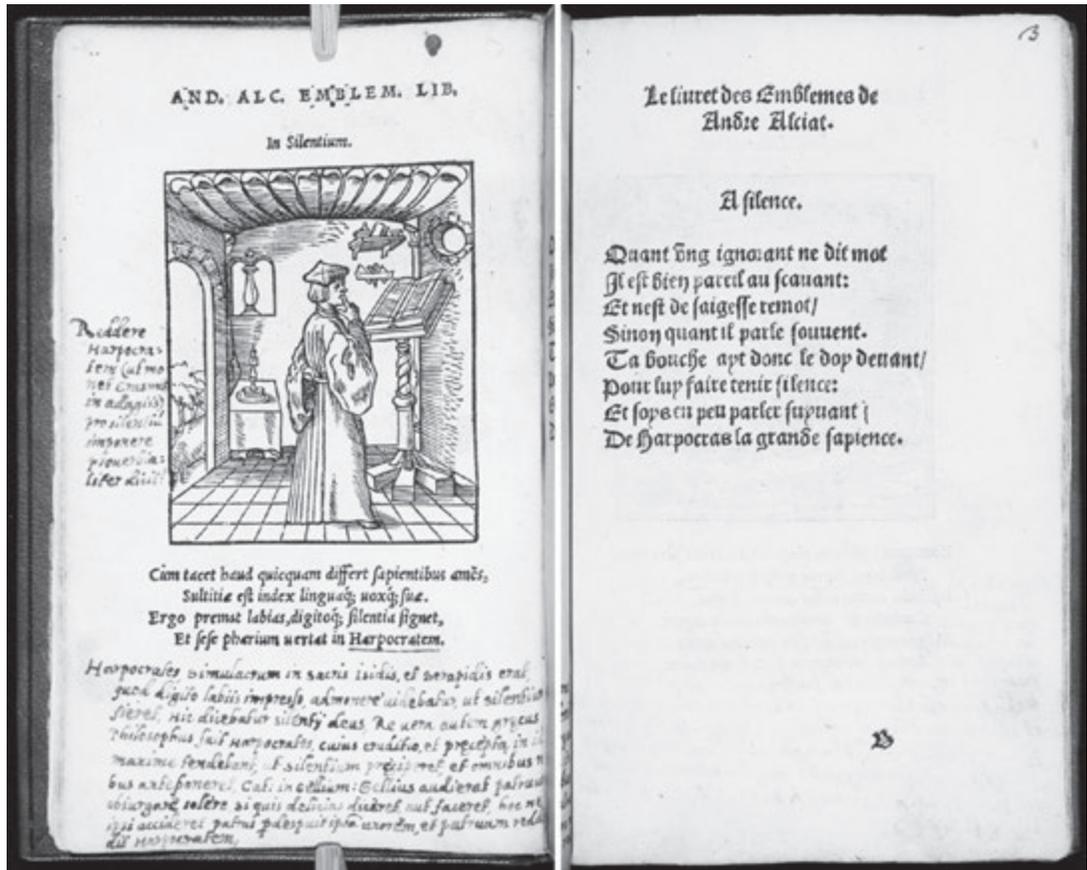


[1: h2^v-h3^r]

1531年にアウグスブルクの印刷業者ハインリヒ・シュタイナー（Heinrich Steiner）は、イタリアの法律家アンドレア・アルチャーティによる挿絵入りのラテン語のエピグラム集である『エンブレム集』を刊行した。これが挿絵とテキストからなるエンブレム・ブックの嚆矢となり、その後19世紀に至るまで、再版も含めて約4000点のエンブレム・ブックがヨーロッパ各地で刊行されることとなる。

エンブレム・ブックとは、複数のエンブレムをまとめて一冊の書物としたもので、その形態は、ホルバインやアマンが制作した16世紀の版画集（No. 20-21参照）に似ている。本書には113点のエンブレムが収められているが、個々のエンブレムは、題辭（モットー）、挿絵（図像）、詩文（エピグラム）の3つの要素で構成されている。

「天文学者に」という題辞を持つ図1は、高く飛びすぎたために太陽の熱で翼を固めたロウが溶け、海に墜落するイカロスを描いている。挿絵の下の詩文は挿絵の意味を解説して、イカルの失墜に触れて過信や僭越を諫め、悪しき例として無駄に知識を追い求める天文学者を挙げている。このように、エンブレムとは、テキストとイメージが互いに補い合って、教訓や抽象的命題を統合的に伝えようとするものである。図2は「沈黙に」という題辞で、沈黙の美德を勧めている。



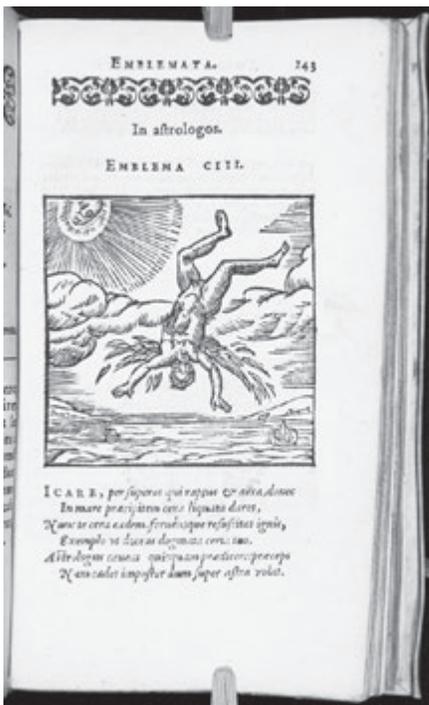
[2: A8^v-B1^r]

エンブレム・ブックは、画家や作家が作品に寓意や教訓をこめるために参照されただけではなく、仕立て屋、金銀細工師、七宝焼きの職人、さらにはつづれ織りのデザインなどを考案する当時の室内装飾業者にも図案集として活用された。近代ヨーロッパにおいて、あらゆる芸術家が手に取ったもっとも重要なレファレンス・ブックであったと言っても過言ではないだろう。

アルチャーティの『エンブレム集』は最初のエンブレム・ブックであるのみならず、16-17世紀を通じて、最もよく利用されたエンブレム・ブックであり続け、多数の版が様々

な言語で刊行された。本書は1536年にパリのクレチエン・ウェシエル（Chrestien Wechel）によって刊行された最初のフランス語対訳版で、もっとも重要な版のひとつとみなされている。

エンブレム・ブックが流行したのは、このように早い時期から複数の言語への翻訳版や対訳版が刊行されたことと無関係ではない。版木はセットで売却されたり、あるいはコピーされて再利用されたりしたが、版が変わるたびに少しずつ変更が加えられ、解説文やエンブレムそのものの数も増加していった。慶應義塾図書館には他にも1584年（パリ）[3]、1626年（パドヴァ）、1661年（パドヴァ）[4]の3つの版が所蔵されているが、同じアルチャーティの『エンブレム集』でも図案や詩文には微妙な差異がある。



[3: fol. 143^r]



[4: p. 432]

Title, A1^r: ∞ Liuret | des Emblemes de maistre Andre | Alciat mis en rime francoyse | & presente a monseigneur | Ladmiral de | France | [*printer's device*] | On les vend a Paris en la maison de | Chrestien Wechel demurant en la rue | saint Jaques a lescu de Basle. | M. D. XXXVI.

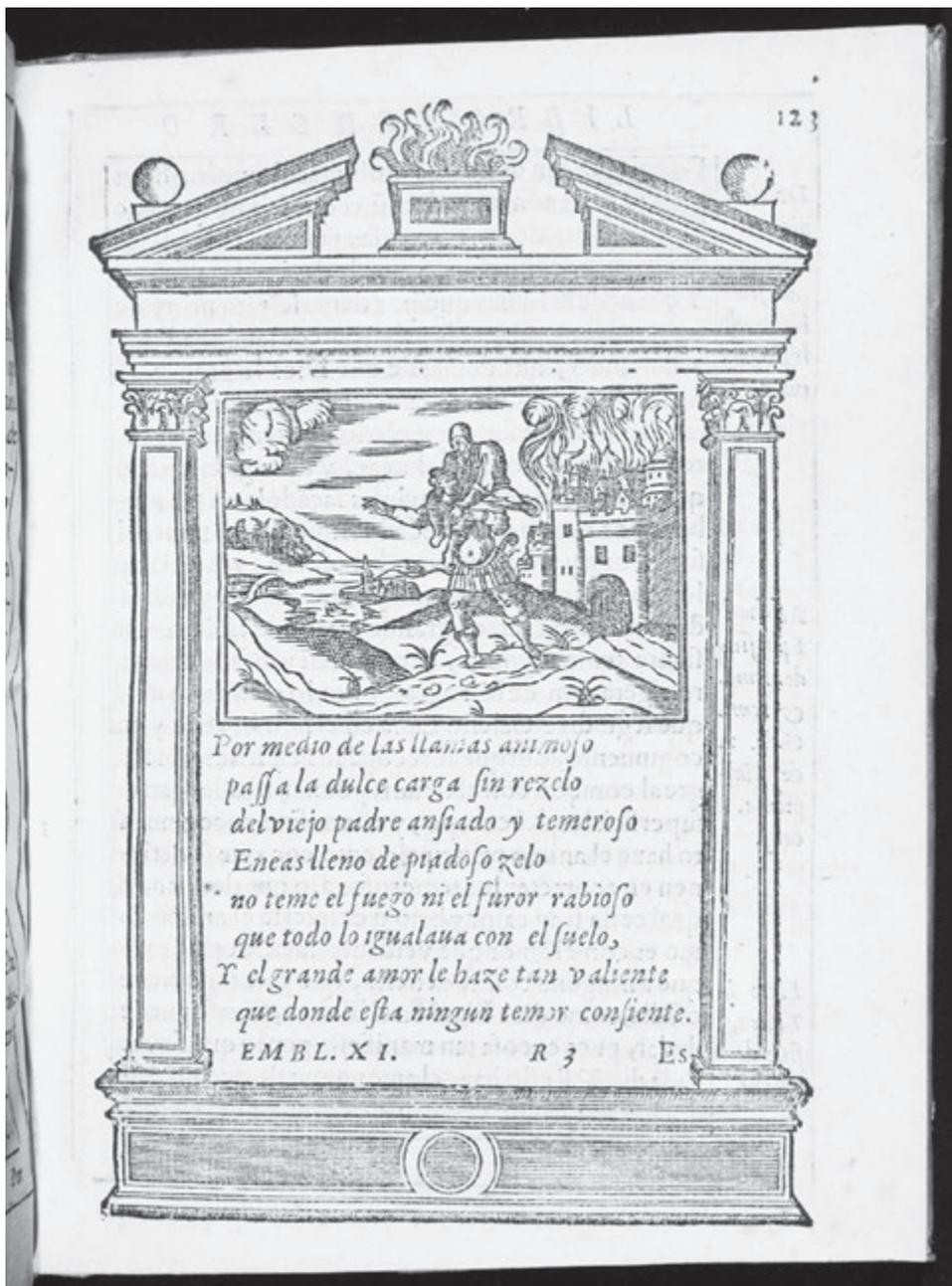
8vo : A-P⁸ Q⁴ [\$4 (-Q3, 4) signed]; 124 leaves unnumbered. 165×95mm.

Alison Adams, Stephen Rawles and Alison Saunders, *A Bibliography of French Emblem Books of the Sixteenth and Seventeenth Centuries*, 2 vols (Genève, 1999–2002), F.006 ; アンドレア・アルチャーティ『エンブレム集』伊藤博明訳（ありな書房、2000）

[120X 1078 1]

フアン・デ・オロスコ・イ・コバルビアス『道德エンブレム集』（セゴビア、1589年）

Juan de Horozco y Covarrubias (1550 – 1608?). *Emblemas morales*. Segovia: Iuan de la Cuesta, 1589

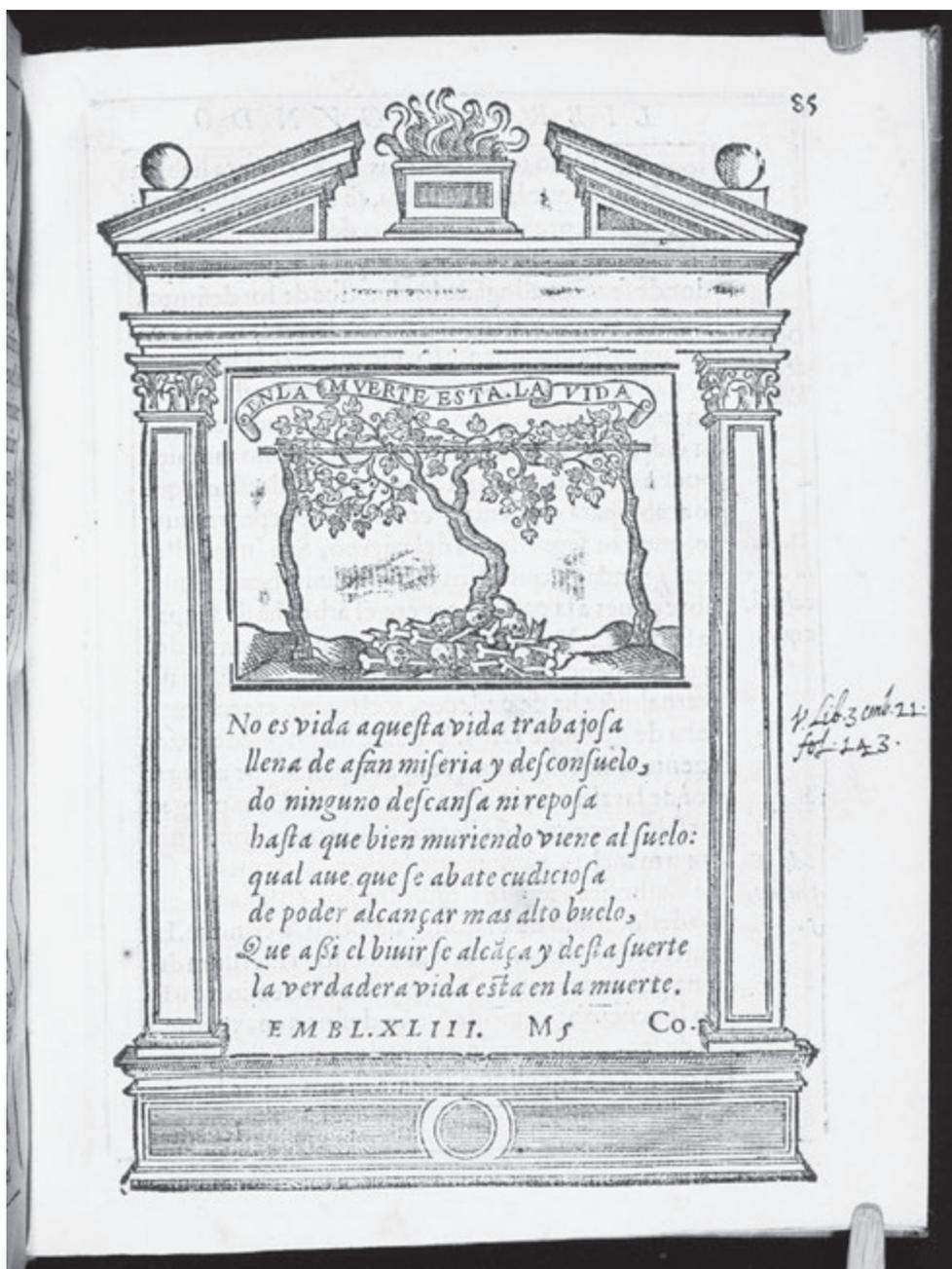


[1: II, fol. 123^v]

本書はスペイン語で書かれた最初のエンブレム・ブックの初版である。全体は3部構成になっており、第1部はエンブレムに関する理論的考察である。第2、3部は101点のエンブレムからなるエンブレム集で、それぞれがモットー（スペイン語、イタリア語、ラテン語、ギリシャ語）、図版、スペイン語によるエピグラムと散文の長い注解によって構成される。本書は1591年と1604年にも再版され、スペイン語のエンブレム・ブックのなかでももっとも広く活用された。

著者はトレドの出身で、セビリャの聖堂参事会員、セゴビアの大聖堂の助祭長を務めた後、グアディックスの司教となった。本書は、著者の叔父にあたる神学者のディエゴ・コバルビアス・イ・レイバ（Diego Covarrubias y Leiva）に献呈されている。著者の一族は学者揃いだったようで、父のセバスティアン・デ・オロスコ（Sebastián de Horozco）は格言の収集をし、弟のセバスティアン・デ・コバルビアス・オロスコ（Sebastián de Covarrubias Horozco）は辞書学者で、1610年にマドリッドで、やはり『道徳エンブレム集』（*Emblemas Morales*）と題されたエンブレム・ブックを刊行している。

図1は陥落して燃えさかるトロイから父アンキーセスを連れて逃げ出すアエネーイスの姿で、肉親への愛をテーマとしている。図2は遺骨の上に葡萄の蔓が成長してゆく様子を描いており、「死のなかに生がある」というモットーとあいまって、死をくぐりぬけての生がより力強いものとなることを教えている。



[2: II, fol. 85^r]

Title, vol. 1, a1^r: Emblemas | morales de Don Iuan | de Horozco y Couarruias Arcediano de | Cuellar en la santa Yglesia de | Segouia. | Dedicadas a la buena | memoria del Presidente Don Diego de Couarruias y Leyua su tio. | [printer's device] | Con priuilegio. En Segouia. | Impresso por Iuan de la Cuesta | Año de. 1589.

Title, vol. 2, A1^r: Libro Segundo de las | Emblemas Morales. Hecho por | Don Iuan de Horozco y Couarruias, Arcediano de Cuellar en | la santa Yglesia de | Segouia. | [orn.] | [printer's device]

Title, vol. 3, O6^f: Libro | Tercero de las Emble | mas Morales. Hecho por Don Iuan | de Horozco y Couarruuias, Ar- | cediano de Cuellar, en la | santa Yglesia de | Segouia. | [*printer's device*]

Colophon, Hh7^r: En Segouia, | Impresso por Iuan de la Cuesta. Año de, M. D. LXXXIX.

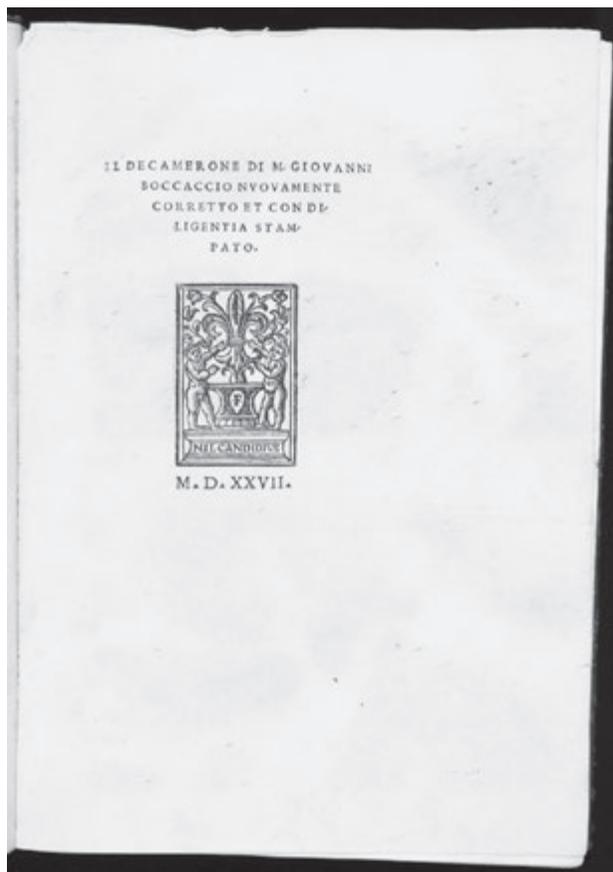
3 vols in 1; 4to: a-m⁸ n⁶, A-Z⁸, Aa-Cc⁸ Dd-Ee⁴ o⁸ Gg² p⁶ Hh⁸ [\$5 (-A1, B1, BNO5, Cc5, Dd4, Ee4, Hh5) signed; misprinting p1-3 as p3-5]; 341 leaves, ff. [1] 2-5 [6] 7-101; ²[8] 1-42 [43] 44-101; 102-204 [27] [misnumbering 19 as 21, ²3-5 as 5-3, 45 as 47, 63 as 64, 76 as 74, 79 as 80, 95 as 96, 100 as 102, 119 as 120, 122 as 121, 135 as 136, 149-50 as 150-51, 175 as 173, 190 as 178, 204 as 104]. 185×135mm.

Pedro F. Campa, *Emblemata Hispanica: An Annotated Bibliography of Spanish Emblem Literature to the Year 1700* (Durham, NC, 1990), SF1

[120X 1171 1]

ジョバンニ・ボッカチオ『デカメロン』（フィレンツェ、1527年）〔ファクシミリ版 ヴェネツィア、1729年〕

Giovanni Boccaccio (1313 – 75). *Il Decamerone*. Florence: Giunta, 1527. [Venice: Pasinello, 1729]



[1: t.p.]

本書は、ボッカチオの『デカメロン』（1350–53）の版本のなかでも希少な‘Ventisettana’と呼ばれる1527年版（Florence, Filippo di Giunta）を、18世紀のヴェネツィアで忠実に再現したファクシミリ版である。ニコロ・デルフィーノ（Niccolò Delfino）の編集による1527年版は、中世以来の『デカメロン』の写本伝統の最後に位置するとともに、そ

の後の版本の基礎ともなる版で、『デカメロン』の初期版本の中でもっとも重要な版とされている。展示品のファクシミリ版は1527年版をそのまま再現しており、タイトルページや奥付をはじめ、本のどこにもファクシミリであることは記されていない。オリジナル版との唯一の違いは、フォリオ番号の打ち間違いなど数箇所の誤植が訂正されていることと、使用されている活字のなかにオリジナルと微細に異なるものが若干あることだけである。こうした点に意識的に注目しなければ、ファクシミリ版と1527年版との区別をつけることは困難である。

本書は、上質紙を使って丁寧に印刷された豪華ファクシミリ版の嚆矢と言うべき刊本だが、300部限定で印刷されたため、現在では1527年版におとらず希少である。出版に際しては、イギリス人の銀行家で、1744-60年までヴェネツィア領事を務めたジョセフ・スミス (Joseph Smith; c.1674-1770) の積極的関与があったのではないかと推察されている。スミスは自ら稀覯書を蒐集し、そのコレクションは1755年までに3冊のカタログにまとめられて公開されている。また1730年代には、協力者の古典学者パスクアリ (G. B. Pasquali) の名をとったパスクアリ・プレス (Pasquali Press) を経営し、アンドレア・パッラーディオ (Andrea Palladio) の建築書のファクシミリをはじめ、多くの学術書を刊行していた。出版社に隣接していた書店「文芸の喜び」(La Felicità delle Lettere) には多くの文人達が入りし、劇作家のゴールドーニとは深い親交があった。このように、単なる蒐集家をこえてパトロン的な役割も果たしていたスミスなので、本書のファクシミリ版の制作に関わったことは十分に考えられる。

I

COMINCIA IL LIBRO CHIAMATO DECA-
meron cognominato Principe Galeotto, nelquale si contengono
cento novelle in dieci di sette da sette donne, &
da tre giovani huomini.

PROHEMIO.

VMANA Cosa è hauer compassione de gli altri, et come
b che a ciascuna persona s'ha bene, a coloro è massimamente ri-
chiesto, li quali già hanno di cesario honore mestiere, & han
nel tronato in alcuni, fra quali, se alcuno mai n'ebbe bisogno, egli
fu caro, o già ne riceuette piacere, io sono mio disingolo, perciò che dalla
mia prima gioventù, & infino a questo tempo oltre modo essend' stato ac-
ceso d'altissimo & nobile amore forse più assai, che alla mia bassa con-
dizione non parrebbe, intrattando, si richiedesse, granpe appo coloro,
che d'iscreti erano, & alla cui notizia perocome, io ne fossi lodato, & da
molto più reputato, nò almeno mi fu egli di grandissima fatica a soffrire,
certo nò p crudeltà della donna amata, ma p severo fuoco nella
mente concetto da poco regolato appetito, ilquale, perciò che a nuno cò-
mentale termine mi lasciava coetno stare, più di mia, che bisogno non
m'era, fusse molte scure mi faceva. Nellaqual mia tanto refrigerio già mi
persero i piaceri di ragionamenti d'alcuno amico, et le sue lusingevoli cò-
solazioni, che io per lo fermissima opinione p quelle esse aduenuto, che
io non sia morto. Ma, si come a talui piacque, ilquale essendo egli infini-
to, dicele per legge incommutabile a tutte le cose mondane hauer fine,
il mio amore oltre ad ogni altro seruitte, & alquale niuna forza di pro-
prietà, o di consiglio, o di negogna euidente, o pericolo, che seguir
ne potesse, haueua fatto me rompere, ne pigiare, per se medesimo in
processo di tempo si diminui in quisa, che sol di se nella mente n'ha al
presente lasciato quel piacere, che egli è nato di porgere a chi troppo
non si uette ne suoi non capi pelaghi nauigando, perche doue faticoso
esser solca, ogni affanno regredendo mia, dilettamente il sono esser rimaso.
Ma quantunque cessata sia la pena, non perciò è la memoria fuggita
de benefici già riceuati d'altri da coloro, aquali per beneuolenza da ho-
ro a me portata, erano graui le mie fatiche, ne passera mai (si come io
credo) se non per morte. Et perciò che la gratitudine (secondo che io cre-
do) tra l'altre virtù è sommamente da commendare, & il contrario da
disprezzare, per non parere ingrato, ho meco stesso proposito di uolere in
quel poco, che per me si può, in cambio di ciò, che io riceuerò, bara che
libero dir mi posso, & se non a coloro, che me atareno, aquali p auca-
ra per le lor seruitte, o per la loro buona ventura non adibogna, a que-
gli almeno, aquali fa luogo, alcuno alloggiamento prestare. Et quan-
a

[2: fol. 1^r]

Title, AA1^r: Il Decamerone di M. Giovanni | Boccaccio nuouamente | corretto et con di- | ligentia
stam- | pato. | [printer's device: *Philippo di Giunta*] | M.D.XXVII.

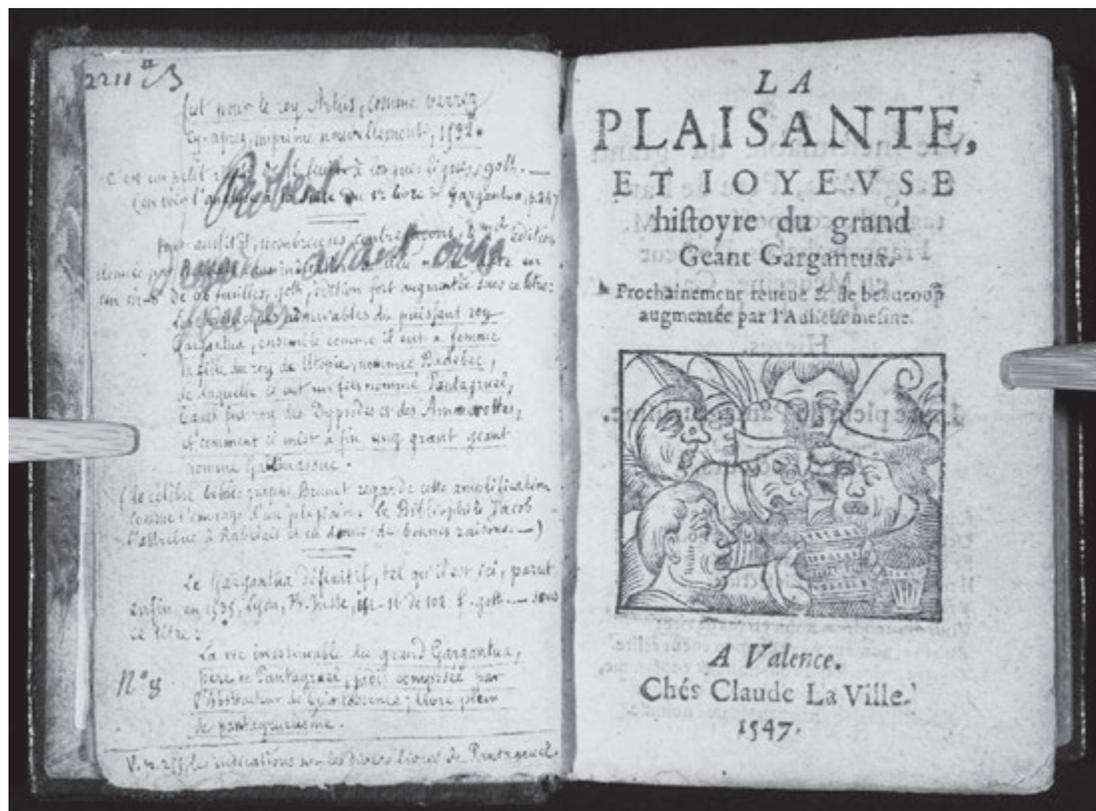
Colophon, I12^r: Impresso in Firenze per li heredi di Philipppo di Giunta | nell'anno del signore. M. D.
XXVII. Adi | xiiij. del Mese daprile.

8vo: AA⁸ (-AA8) a-z⁸ &⁸ C⁸ R⁸, A-H⁸ I¹² [\$4 (+I5-6) signed]; 291 leaves, ff. [7] 1-50 [51] 52-
284. 237×167mm.

[120X 1037 1]

フランソワ・ラブレー『ガルガンチュワ物語』（ヴァランス、1547-48年）〔ジュネーヴ、1600年頃〕

François Rabelais (1494? – 1553). *La Plaisante et ioyeuse histoyre du grand géant Gargantua*. Valence: Claude La Ville, 1547 – 48. [Genève (?), c.1600 (?)]



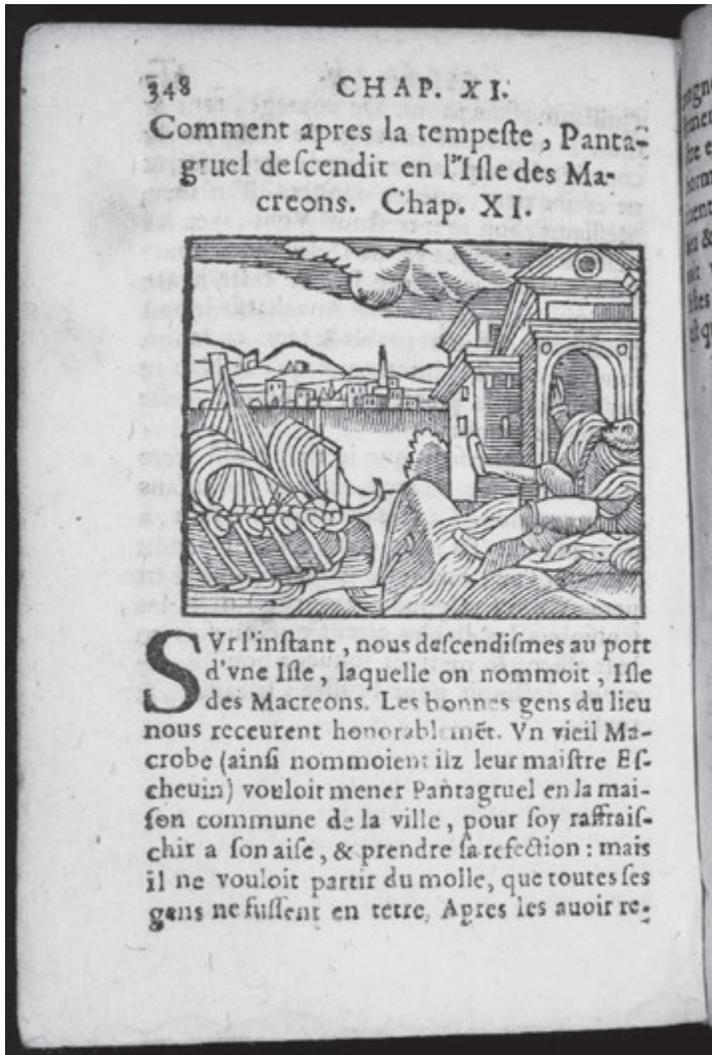
[1: t.p.]

1547年に南仏のヴァランスで、フランソワ・ラブレーの『ガルガンチュワ物語』（1534年初版刊—以下同）と『パンタグリユエル物語』（1532）、およびその続編にあたる『第三之書』（1546）を一冊にまとめた版が刊行された。この1547年版は16折りと小型ながらも、木版の挿絵が163点も付けられている。各書にはそれぞれタイトルページがあり、ページ番号も個別にふられているが、現存しているものはほとんどがまとめて製本されている。ラブレーの最初の全集として貴重な版である。

展示書は、一見するとこの1547年版で、タイトルページにもそのように記されているが、実は1547年版の海賊版で、1600年頃にジュネーヴで刊行されている。どこにもそのこと

を示す記述はないが、『第三之書』に続いて『第四之書』の1-11章までが収録されている点で、1547年版とは異なっている。『第四之書』が刊行されたのは1548年なので1547年版よりも後に出版されたことは明らかで、展示書でも『第四之書』のみ、タイトルページに1548年と記されている。

本書には、読者が書誌学的内容をメモした19世紀後半の薄紙が数枚挟まっており、本文中の白紙ページにも同じ筆跡による書き込みが見られる。この人物の名前や詳細は不明だが、「愛書家ジャコブ」(Bibliophile Jacob)のペンネームで多くの著作を残したポール・ラクロワ (Paul Lacroix; 1806-84) が編纂した『ラブレール作品集』(1843) や、書誌学者のブリュネ (Pierre Gustave Brunet) のラブレールの書誌に関する研究 (1841) に繰り返し言及している。



[2: III, p. 348]

Vol. 1 Title, A1^r: La | Plaisante, | et ioyeuse | histoyre du grand | Geant Gargantua. | Prochainement reueue & de beaucoup | augmentee par l'Auhetr mesme. | [*illus.*] | A Valence. | Chés Claude La Ville. | 1547

Colophon, Q3^v: Cest oeuvre fust imprimé l'an | de grace mil cinq cents qua- | rante, & sept. A Valance chés | Claude la Ville, demeurant | pour lors en la grant ruë ti- | rant à la place des clerks | aupres l'enseigne | du Dau- | phin. | *

Vol. 2 Title, ²A1^r: Second Liure | de Pantagruel, | Roy des Dipsodes, | Restitué à son naturel : avec ses faitz | & prouesses espouventables : com- | posez par M. Franç. Rabelais, | Docteur en Medecine, & | Calloyer des Isles | Hieres. | Plus | Les merueilleuses nauigations du disciple | de Pantagruel, dict Panaurge. | [*type-orn.*] | A Valence, | Chez Claude La Ville. | 1547

Vol. 3 Title, ³A1^r: Tiers | Liure des faitz, et | Dictz heroiques du noble | Pantagruel, composés par | M. Franç. Rabelais, Docteur | en Medecine, a Calloier | des Isles Hieres. | [*type-orn.*] | L'auteur susdict supplie les lecteurs bene- | voles, soy reseruer à rire au soixante | & dixhuictiesme liure. | Nouuellement imprimé, reueu, & corri- | gé, & de nouveau istorie. | A Valence. | Par Claude La Ville. | 1547.

Vol. 3 Section title, ³S5^r: Le Quart | Liure des faitz | & dictz heroiques du no- | ble Pantagruel. | Composé par M. François Rabelais | Docteur en Medecine, & Calloier | des Isles Hieres. | [*type-orn.*] | L'an mil cinq cens quarente | & huit.

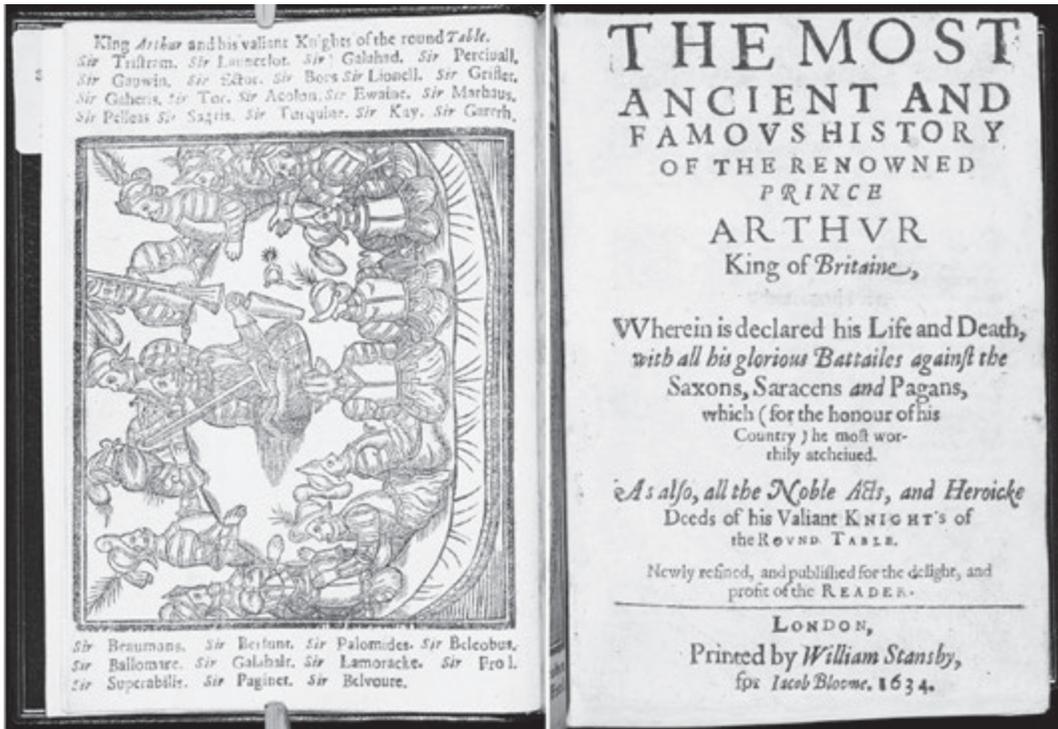
16mo: A–Q⁸; ²A–V⁸; ³A–Y⁸(–Y8) [\$4 (–Q3–4, ²A3, ²BDLOQ4) signed; misprinting N3 as M3, ²H3 as H2, ³C3 as C, ³T2 as T4]; 463 leaves, pp. [1] 2–245 [246] [10] [misnumbering 14 as 4, 16 as 26, 35 as 55, 94 as 54, 96 as 76, 124 as 114, 181 as 18, 238 as 2;8]; ²[1–2] 3–320 [misnumbering 118–9 as 128–9, 152 as 192, 157 as 155, 159 as 179, 244 as 144, 302–3 as 300–1]; ³[1–2] 3–280 [281–2] 283–349 [350] [4] [misnumbering 3 as 6, 6 as 3, 43 as 41, 89 as 96, 94–5 as 92–3, 96 as 86, 121 as 221, 125 as 225, 129 as 119, 142–3 as 140–1, 148 as 142, 149 as 148, 157 as 127, 181 as 18, 182–3 as 180–1, 264 as 146]. 117×75mm.

Stephen Rawles and M. A. Screech, *A New Rabelais Bibliography: Editions of Rabelais before 1626* (Genève, 1987), no. 39 ; フランソワ・ラブレール『ガルガンチュワ物語 / パンタグリュエル物語』渡辺一夫訳、全5冊 (岩波文庫、1973–75)

[160X 39 1]

トマス・マロリー『アーサー王の死』（ロンドン、1634年）

Thomas Malory (c.1405 – 71). *The Most Ancient and Famous History of the Renowned Prince Arthur King of Britaine....* London: Printed by William Stansby for Iacob Bloome, 1634



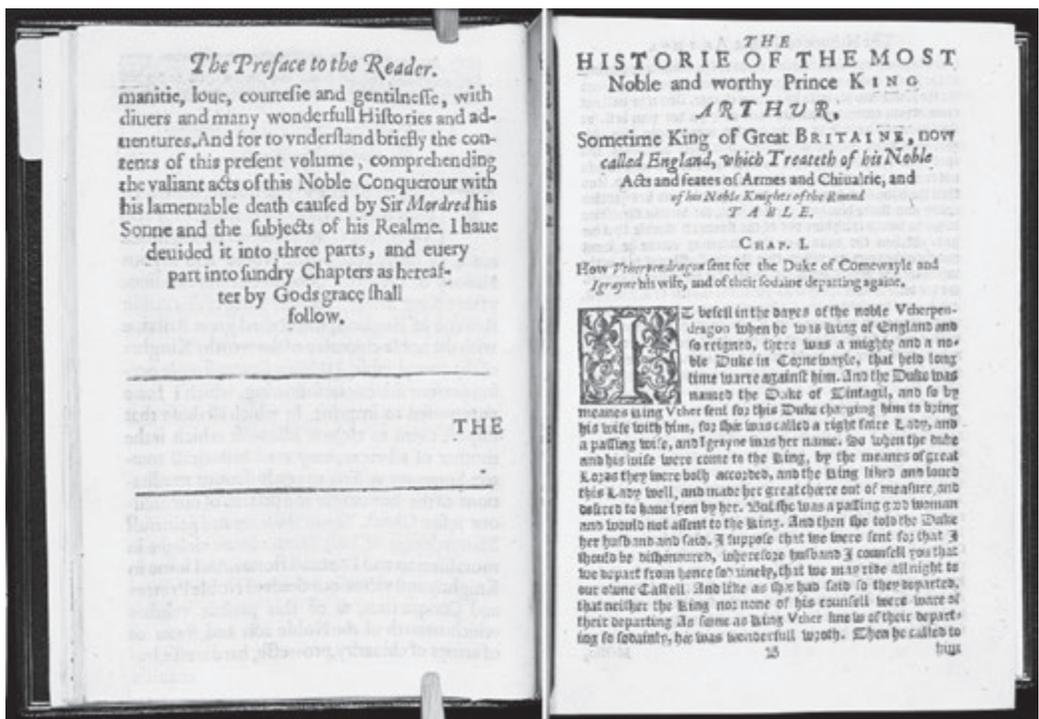
[1: frontis.-92]

英語で書かれた中世のアーサー王文学の集大成といふべきサー・トマス・マロリーの『アーサー王の死』（*Morte Darthur*）は、ウィリアム・キャクストンによって1485年に初めて印刷された。その後もキャクストンの後継者のウィンキン・ド・ウォード（Wynkyn de Worde; 1498, 1529）、ウィリアム・コブランド（William Copeland; 1557）、トマス・イースト（Thomas East; c. 1578）らによって刊行され続け、1634年にはロンドンでウィリアム・スタンスビー（William Stansby）が印刷してジェイコブ・ブルーム（Jacob Blome）が刊行した。本書は、このスタンスビーによって印刷された版で、近代におけるアーサー王文学の受容を考える上での重要な刊本である。

スタンスビー以前の版はいずれも大きなフォリオ版で、版によっては20点以上の木版の挿絵が付いていたが、スタンスビー版は4つ折りでは挿絵は1点のみである。また、使

い込まれて多少摩耗したゴシック体活字を用いて、あまり上質とはいえない紙に安いインクで印刷しているため、裏写りしている紙葉も多い。また、誤植も少ないとは言えない。こうした特徴は、廉価版を目指した結果と考えられると同時に、アーサー王物語自体の人気の下落の指標ともとらえられる。実際、17世紀前半まではほぼ世代毎に新版が刊行され、中世以来連綿と読み継がれてきたアーサー王と円卓の騎士達の物語だが、スタンズビー版以降アーサー王文学は冬の時代に入り、次に『アーサー王の死』の版が刊行されるのはほぼ2世紀後の1816年になるのである。

本書唯一の挿絵は円卓の騎士達を描いた木版の口絵である[2]。中世フランスのアーサー王物語の写本等に描かれている円卓では、アーサーは他の騎士達とともに卓についているが、この挿絵では円卓の中央に、文字通りにテーブルから上半身を出して座っている。イギリス最大の英雄を、まるで食卓中央の飾り物のような滑稽な姿に描いたこの図像は、ピューリタン革命へと至る内戦前夜のスチュワート王朝の王権の脆弱さを暗示しているのだという指摘もある。



[2: §3^v-B1^r]

Title, §2^r: The Most | Ancient and | Famous History | of the Renowned | Prince | Arthur | King of Britaine, | Wherein is declared his Life and Death, | with all his glorious Battailles against the | Saxons, Saracens and Pagans, | which (for the honour of his | country) he most wor- | thily atcheiued. |

As also, all the Noble Acts, and Heroicke | Deeds of his Valiant Knights of | the Round Table. | Newly refined, and published for the delight, and | profit of the Reader. | London, | Printed by William Stansby, | for Iacob Bloome. 1634.

Section title, χ^2^r : The Most | Ancient and | [5 lines] | The second Part. | [11 lines] | London, | Printed by William Stansby, | for Iacob Bloome. 16<34.>

Section title, ¶^2^r : The Most | Ancient and | [5 lines] | The third Part. | [11 lines] | London, | Printed by William Stansby, | for Iacob Bloome. 1634.

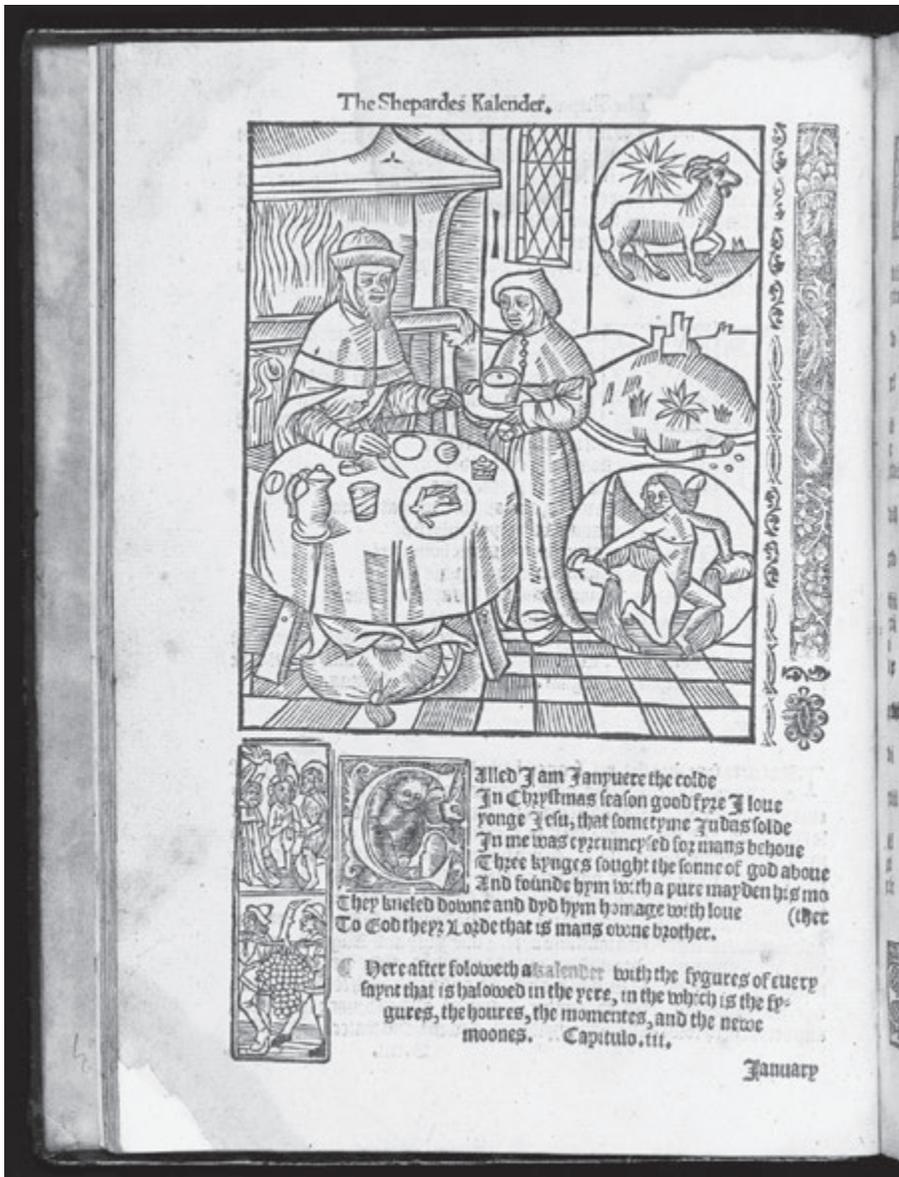
4to: ¶^5 A⁴ §³ B-H⁴ I⁸ K-Z⁴, Aa-Ii⁴; χ^6 ²A-Z⁴, Aa-Qq⁴ Rr² (-Rr2); ¶^4 ² ¶^4 ³A-Z⁴ ²Aa-Pp⁴ [&3 (-²Y3, AaBbFfiLiMm2, ³P3; +I4) signed; misprinting Qq2 as Qq]; 455 leaves, unnumbered. 175 × 120mm. The title page of the first part supplied from another copy of the second part, with the printing 'The second part' obliterated. 3 identical frontis. at ¶^1^v , χ^1^v and ¶^1^v .

STC 806; Tsuyoshi Mukai, 'Stansby's 1634 Edition of Malory's *Morte*: Preface, Text, and Reception', *Poetica*, 36(1992), 38–54; David R. Carlson, 'Arthur Before and After the Revolution: The Blome-Stansby Edition of Malory (1634) and *Brittains Glory* (1684)', in *Culture and the King: The Social Implications of the Arthurian Legend*, ed. by Martin B. Shichtman and Joseph P. Carley (Albany, NY, 1994), pp. 234–53

[120X 962 1]

『羊飼いの暦』（ロンドン、1556年）

Here begynneth the kalender of shepardes.... London: William Powell, 1556



[1: B4^v]

1493年にパリでギュイヨ・マルシャン (Guyot Marchant) により *Le Compost et kalendrier des bergiers* としてフランス語で刊行された『羊飼いの暦』 (*Kalender of Shepherdes*) は、実用書と道徳書を兼ね備えた書物で、教会暦、キリスト教の基本的教理と道徳、天文や星占いに関する基礎知識、民間療法などを扱っている。全編を通じて木版による挿絵が多数挿入されている。初版刊行後、パリのみならずジュネーヴ、リヨン、ルーアン、トロワなどのフランス語圏の諸都市で次々と版を重ね、1503年にパリのアントワーヌ・ヴェラル (Antoine Vérard) が *The kalendayr of the shyppars* (STC 22407) として英訳を出版すると、その人気は大陸を越えてイギリスにもおよび、1506年のリチャード・ピンソン (Richard Pynson) の版を皮切りにして、17世紀前半までにイングランドの複数の出版人によって20近くの版が刊行された。その事実からして、間違いなく16世紀のイングランドでもっとも広く流通した書物のひとつであったと言えるだろう。

しかし皮肉なことに、そうした実用書の性質ゆえにさほど大切に保存されることもなかったようで、広く流布したにも関わらず、『羊飼いの暦』は現存部数が極めて少ない稀覯書になってしまっている。

展示書は、1556年にロンドンでウィリアム・パウエル (William Powell) によって印刷された版で、イギリスで刊行された『羊飼いの暦』の諸版のなかでは7番目にあたる。他の版に劣らず希少な版で、存在が確認されているのは数部にすぎず、また、古書のオークションにも過去数十年で2度しか登場していない。

本書を詳細に調べると、パウエル版の他の現存本には見られない興味深い事実が明らかとなる。本書は基本的にパウエル印行の初版 (1556; STC 22412) だが、一部にトマス・イースト (Thomas Este) の版 (1570?; STC 22415) とジュリアン・ノタリー (Julian Notary) の版 (1518?; STC 22410) から取られた紙葉が使用されている。つまり、複数の版を寄せ集めて一冊の完本としており、さらに一部には、19世紀初期と思われる手書きのファクシミリ (pen facsimile) も使用されている。本書がいつそのような形で装幀されたのか不明だが、ひとつの可能性は、欠葉のあるパウエル版を入手した19世紀初頭の愛書家が、他の版の断片を利用して欠葉を補い、それでも欠けていた一葉については新たに写して補ったということであろう。欠葉のある初期印刷本を完全なものとするために、欠落葉を手書きの正確なファクシミリで再現することは19世紀には普通に行われており、ほとんど本物と見分けがつかないペン・ファクシミリを作成したジョン・ハリス (John Harris) のような人物も存在した。本書のファクシミリ・ページは仕事ぶりがいかにも素人臭く、コレクター自身が自らファクシミリを作ったという可能性も考えられる。3つの版を組み合わせた展示書からは、19世紀初期の愛書家の「完全さ」を尊ぶ心性が読み取れるのではなかろうか。

The Shepards Kalender.

ence, and shall syng very pleasauntly, and they shall be of courage good & diligent, & shall desyre to be chyp above other people, they shall gyve wyse iudgements, & theyr wordes shall sounde all sweetly, & if he bere any office he shall be lyberall, and he shall be subtyl in deedes of warre, and many shall se to him for counsell, he shall haue profyte by women, and he shall be in scruple with toides, and by them shall haue aduantage for his wyfedom, hys signe shall be in the face, he shall be small of stature, with crispe heare and balde on the heade, he wyll be seidome angry, and of all the membyres in a mans body the sonne kepeth the harte, as most myghty planet above all other.

¶ Of the gentle planet Venus.

Venus significat horem a libo trasficum ad ingredunt pulchri corporis et capillorum habentem porcum in unum, pulchros oculos & pulchram faciem, multos capillos habentem ad albi confectum rubore crassum et benevolentem.



Next after the sonne reigneth the gentyll planet Venus, and it is a planet femynine, and she is Lady over all louers, this planet is moist and colde of nature, and her two signes is Taurus and Libra, and in them she hath all her ioye and pleaunce, she causeth ioye, and specially among yonge folke, for greatly she reigneth on them, and on all men that bin ielouse, and on women also, for ielousy is but a loue inordinate, as when a man or a woman loueth more feruently then they shulde, for such wolde netter be from the syght of theyr louers, for if they be, anone they suspecte them, and dye for feare to be begyled. There is no man that loueth a woman by carnall affectiō, but it is by the influence of Venus, and but fewe men can escape out of hys daunger. This planet Venus runneth in. xii. monethes ouer the. xii. signes.

¶ Of her properties.

¶ Has

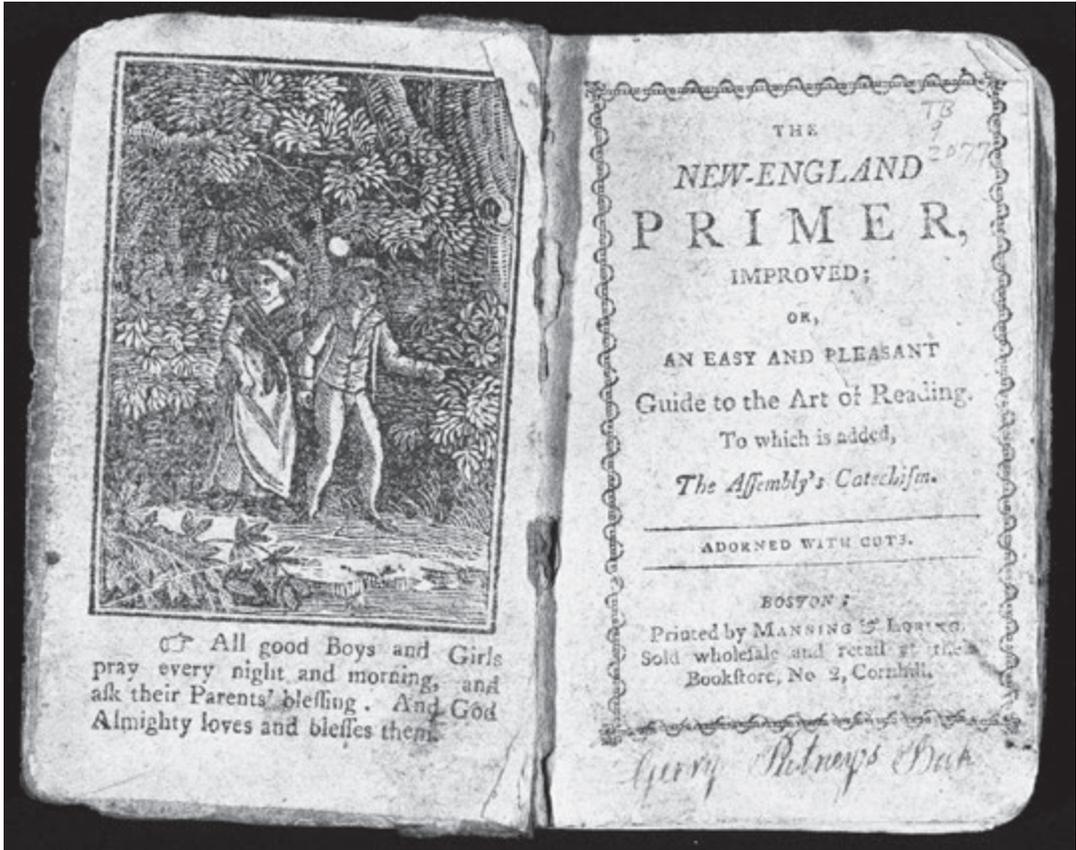
[2: L3^v]

folio: A–M⁸ [\$4 (–C2; +M5) signed]; 100 leaves (of 104; lacking A1, M7, N7–8) unnumbered. 245 × 176mm. M8 misbound after N4; leaves of M5, M6, M8, N1–6 defective with loss supplied in later manuscript (probably early 19th century).

STC 22412; Takami Matsuda and Satoko Tokunaga, ‘A Composite Copy of the Kalender of Shepherdes in Keio University Library’, in *Codices Keionenses: Essays on Western Manuscript and Early Printed Books in Keio University Library*, ed. by Takami Matsuda (Tokyo, 2005), pp. 119–208; Oskar H. Sommer, *The Kalender of Shepherdes: The Edition of Paris 1503 in Photographic Facsimile; A Faithful Reprint of R. Pynson’s Edition of London 1506. Edited with a Critical Introduction and Glossary*, 3 vols in one (London, 1892)

『ニューイングランド初等教本』（ボストン、[1800-14年]）

The New England Primer. Boston: Manning & Loring, [1800-14]



[1: A1^v-A2^r]

英語の ‘primer’ という単語は、中世後期以来小児用読本の意味で使われているが、同時に「時禱書」の英語の呼び名でもあった。実際、両者の間には密接な関係があり、15-16世紀には、通常の時禱書にアヴェマリアや主の祈りなどの（大人ならば当然知っている）基本的な祈祷文やアルファベットの一覧を追加した時禱書が写本や印刷本として制作され、子供が読み書きを覚えるための最初の教科書として機能していた。慶應義塾図書館所蔵の時禱書のなかにも、白紙部分にアルファベットが書き込まれているものがある（No. 3参照）。チョーサーの『カンタベリ物語』のなかに「小さな子どもが小さな本で勉強している / 教室で、席について、プライマーを広げて」（‘This litel child, his litel book lerninge, / As he sat in the scole at his prymer’, VII. 516-7）、という一節があるが、この

プライマー（米ではプリマー）とはまさに、基本的な祈祷文とアルファベットを組み合わせた祈祷書であろう。

読本としてのプライマーがもつ宗教的性格は、読み書きと信仰に関する基本的教義の学習を関連させるというかたちで受け継がれてゆく。カテキズムと小児用読本とを組み合わせた最初の出版物は、1591年にエディンバラで刊行された *Catechisme of Chrystiane Religion, taught in scholes* とされている。

『ニューイングランド初等教本』もこうした伝統に与する小児用読本で、ロンドン在住の書店主でベンジャミン・ハリス（Benjamin Harris）という人物によって初めて刊行された。プロテスタントのハリスは、カトリック寄りのジェームズ2世が即位したことが契機となって1686年にボストンに渡り、本、コーヒー、紅茶、チョコレート等を扱う店を開いた。また、地元の印刷職人を雇ってパンフレットや一枚物のブロードシートを印刷したのが始まりで、その後自分で印刷工房を所有するに至った。ハリスは渡米前に、反カトリック的な色彩を帯びたカテキズムと読本とを合体させたような書物を刊行していたと推察され、その縮刷版を1687-90年頃にボストンで刊行したのが最初の『ニューイングランド初等教本』であったと考えられている。1695年にハリスは、名誉革命を経てプロテスタントでも安全に暮らせるようになったイギリスに戻り、少なくとも1708年までは生存が確認されている。

『ニューイングランド初等教本』は出版と同時に大変な人気を博し、すぐに全ての書店やよろず屋が常備すべき一冊となり、その後少なくとも百年にわたってアメリカの学校で読本として使用され続けた。約150年の間に何度も版を重ね、販売総数は300万部とも600万部とも言われている。しかし、子供向けの安価な小型本であったために保存されることも少なく、『ニューイングランド初等教本』の初期の版は今日では稀覯書となっている。17世紀の版は現存せず、18世紀の版も、少なくとも40版が刊行されたにもかかわらず、現存数は極めて少ない。展示書は、刊記がないため正確な出版年は不明だが、1800-14年の間にボストンで刊行された版である。

『ニューイングランド初等教本』の内容は、版が異なっても基本的に同じである。アルファベット一覧、*syllabarium* と称される母音と子音を組み合わせで作った1～6音節の単語リスト、聖書に基づく格言をアルファベット順に並べたもの（‘An Alphabet of Lessons for Youth’）、24の小さな木版画と聖書やことわざを題材とした短い2行連句の組み合わせ（‘Rhymed Alphabet’）が前半の主たる内容である。‘Rhymed Alphabet’のOの項は「王様を救った樅の木」を描いているが、これは、イギリスの清教徒革命期の1651年に、クロムウェル率いる議会派の軍隊から樅の木に隠れて逃れたチャールズ2世の故事への言及で、本書のイギリス起源を反映している[2]。後半は、主の祈り、使徒信条、メアリー女王治世下のピューリタンの殉教者ジョン・ロジャース（John Rogers）に関する作者不詳の詩、カテキズム、教訓詩「キリスト、若者、悪魔の対話」（‘Dialogue between Christ,

Youth and the Devil’) 等、宗教的な内容で占められている。

展示書は書誌学者のフィリップ・ギヤスケル (Philip Gaskell) の旧蔵書である。



[2: A6^v-A7^r]

Title, A2^r: [within orn. rule] The | New-England | Primer, | Improved; | Or, | An Easy and Pleasant | Guide to the Art of Reading. | To which is added, | The Assembly's Catechism, | [rule] | Adorned with Cuts. | [rule] | Boston: | Printed by Manning & Loring. | Sold wholesale and retail at [their] | Bookstore, No 2, Cornhill.

32mo; [A]⁸ B-D⁸ [\$2 signed]; 32 leaves unnumbered. 100×62mm. A1^a and D8^b pasted to the front and back cover respectively.

Charles F. Heartman, compl., *The New England Primer Issued Prior to 1830: A Bibliographical Checklist for the More Easy Attaining the True Knowledge of This Book. Embellished with a Hundred Cuts and Now Revised, Greatly Improved and Arranged in Two Alphabets* (1925; repr. Mansfield Centre, CT, 2005), no. 331; Paul Leicester Ford, ed., *The New-England Primer: A History of Its Origin and Development with a Reprint of the Unique Copy of the Earliest Known Edition and Many Fac-simile Illustrations and Reproductions* ([New York], 1962)

[TB 9 2077]

〈エルゼヴィル版の世界〉

29

- (1) ジャンバッティスタ・マリーノ 『アドニス』 4巻 (アムステルダム、1678年)
Giambattista Marino (1569–1625). *L'Adone*. 4 vols. Amsterdam: S. D. Elsevier;
Paris: Thomas Jolly, 1678
- (2) トルクアート・タッソ 『ゴッフレード、あるいは解放されたエルサレム』 2巻 (アムステルダム、1678年)
Torquato Tasso (1544–95). *Il Goffredo, ovvero Gierusalemme Liberata*. 2 vols.
Amsterdam: S. D. Elsevier; Paris: Thomas Jolly, 1678
- (3) ジョヴァンニ・バッティスタ・ガアリーニ 『忠実な羊飼』 (アムステルダム、1678年)
Giovanni Battista Guarini (1538–1612). *Il Pastor fido*. Amsterdam: S. D. Elsevier;
Paris: Thomas Jolly, 1678
- (4) グイドゥバルド・ボナレリ 『スキュロスのフィリス』/トルクアート・タッソ 『ア
ミンタ』 (アムステルダム、1678年)
Guidubaldo Bonarelli (1563–1608). *Filli di Sciro*; Torquato Tasso. *Aminta*.
Amsterdam: S. D. Elsevier; Paris: Thomas Jolly, 1678
- (5) フランチェスコ・ペトラルカ 『ペトラルカ詩集』 (ヴェネツィア、1531年)
Francesco Petrarca (1304–74). *Il Petrarca*. Venice: Bernardino Stagnino, 1531



[1]

これら9冊の小型本は、1冊を除いて全てエルゼヴィル版である。エルゼヴィルはライデンを本拠地として印刷出版業を営んだ一族で、1580年から1712年の間に、西洋古典、近代文学、法律や哲学などの分野を中心に3000タイトル以上を刊行した。出版の中心となるのはエルゼヴィル版と称される小型本で、その版組の美しさとテキストの正確さゆえに高い評価を得ており、蒐集家も多い。19世紀における愛書家のエルゼヴィル版蒐集熱については、自ら愛書家であったアレクサンドル・デュマやシャルル・ノディエが皮肉をこめて短編の素材としている（『愛書狂』生田耕作編訳、白水社、1980）。

展示品では、日本の文庫本の3分の1のサイズしかない32折りの小型本が、それよりもさらに一回り小さい16世紀の『ペトラルカ詩集』とともに、'Biblioteca Italiana'（イタリア文庫）と記された箱に収められている。『ペトラルカ詩集』はエルゼヴィル版とは無関係だが、装幀は9冊全て同一なので、当初から揃えられていたと推察される。この箱がいつ作られたものかは不明だが、エルゼヴィル版は携行に適していることを考えるならば、18世紀のグランド・ツアーの旅行者向け携帯用文庫（travelling library）として作られた可能性も否定できない。

この箱に収められているエルゼヴィル版は全て1678年刊行のもので、ダニエル・エルゼヴィル（Daniel Elzevier; 1664-80）が、1638年に設立されたエルゼヴィルのアムステルダム支店から、パリの出版社トマ・ジョリ（Thomas Jolly）と共同で出版している。内容はどれも、タッソ、マリーニ等のイタリア文学の牧歌作品で、随所にフランス人のセバスチャン・ルクレール（Sebastien Le Clerc; 1637-1714）による挿絵が挿入されている。

牧歌は古代ギリシャのテオクリトスやローマのウェルギリウスにまで遡る伝統的な文学形式のひとつで、イタリアでは中世以来、ダンテ、ペトラルカ、ボッカッチオ、サンナザーロと、イタリア文学を代表する作家によって受け継がれてきた。主題は、美しいアルカディア風の情景のなかで羊飼いを主人公として繰り広げられる恋愛悲喜劇や、田園生活と都会風の生活との対照である。

16世紀後半のイタリアでは、フェッラーラ公国のエステ家の庇護を受けてタッソが書いた『アミンタ』（1573）の成功が契機となって、牧歌劇が発展した。タッソはその2年後に、『アミンタ』とならぶ代表作で、多くの恋愛劇を織り込んだ叙事詩『エルサレム解放』（1575）を完成させている。『忠実な羊飼い』（1590）、『アドニス』（1623）、『スキュロスのフィリス』（1607）は、いずれも『アミンタ』の影響を受けて書かれた牧歌劇で、悲喜劇を織り交ぜた構造とその音楽性ゆえに人気を博し、後の歌劇（オペラ）に素材を提供した。

これらのエルゼヴィル版とともに、1531年にヴェネツィアで刊行されたペトラルカのイタリア語詩集—『カンツォニエーレ（歌集）』と『凱旋』—が、同じ装幀で収められている。ペトラルカの抒情詩も牧歌の伝統に与することを考えるならば、全9冊が17世紀末の牧歌趣味で統一されているといえる。



[2: *L'Adone*, vol. IV, pp. 4–5]

(1)

Vol. 1, Title, A2^r: *L'Adone*, | Poema heroico | del | C. Marino, | con gli | Argomenti del Conte Sanvitale, | e l'allegorie de Don Lorenzo | Scoto. | Aggiuntovi | La tavola delle cose notabili. Di nuovo | ricorreto, e di figure ornatto. | Tomo I. | [*printer's device*] | In Amsterdam, nella Stamperia del S. D. Elsevier, | Et in Parigi si vende | Appresso Thomaso Jolly, | Nel Palazzo. M. DC. LXXVIII.

Vol. 2, Title, A2^r: *L'Adone*, | Poema heroico | del | C. Marino. | Tomo II. | [*printer's device*] | In Amsterdam, nella Stamperia del S. D. Elsevier, | Et in Parigi si vende | Appresso Thomaso Jolly, | Nel Palazzo. M. DC. LXXXVIII.

Vol. 3, Title, A2^r; Vol. 4, Title, a1^r: [as in vol. 2, except for volume number; identical type-setting]

32mo: *vol. 1*: A–Z⁸ Aa⁴ [\$5 (–A1–2, B1, C1, F5, Aa3–4) signed]; 188 leaves, pp. [1–4] 5–373 [3] [misprinting 87 as 8, 265 as 26]; plates [5] (opp. sigs. C8, I6, O4, Q8, V2). 98×50mm. A1 as frontis.; *vol. 2*: a–t⁸ [\$5 (–A2; misprinting a3 as a) signed]; 152 leaves, pp. [1–4] 5–6 [7] 8–301 [3]; plates [4] (opp. sigs. c6, f8, l6, p1). 98×52mm. a1 as frontis.; *vol. 3*: A–Y⁸ Z⁴ [\$5 (–A1–2, Z3–4; +D6) signed]; 189 leaves, pp. [1–4] 5–6 [7–8] 9–357 [3]; plates [4] (opp. sigs. E5, M1, P8, V2). 99×53mm. A1 as frontis.; *vol. 4*: a–x⁸ [\$5 (–A1–2) signed]; 168 leaves, pp. [1–4] 5–310 [26] [misprinting 275 as 277]; plates [2] (opp. sigs. e4, m1). 98×52mm. a1 as frontis.

(2)

Vol. 1, Title, A2^r: Il | Goffredo, | overo | Gierusalemme | Liberata, | Poema heroico | del Sig. Torquato Tasso. | Con l'allegoria | Vniuersale dell istesso, | Et con gli Argomenti del Sig. Horatio Ario- | sti, & di bellissime figure adornato. | [*printer's device*] | In Amsterdam, nella Stamepria del S. D. Elsevier, | Et in Parigi si vende | Appresso Thomaso Jolly, | Nel Palazzo. M. DC. LXXVIII.

Vol. 2, Title, A1^r: [as in vol. 2, except for volume number, ‘Tomo II’ added in a separate line after ‘... adornato’; identical type-setting]

32mo: *vol. 1*: A–R⁸ [\$5 (–A1–2) signed; misprinting O4 as O2]; 136 leaves, pp. [1–36] 37–59 [60] 61–85 [86] 87–106 [107–8] 109–33 [134] 135–58 [159–60] 161–89 [190] 191–221 [222] 223–44 [245–6] 247–71 [272]; plates [8] (opp. sigs. A2, C2, D6, F3, I3, M7, O7, Q3). 101×53 mm. full-page illus. in G5 and K8; *vol. 2*: A–R⁸ S⁸ (–S8) [\$5(–A1–2, B5, D1, H5, P5, Q4) signed]; 143 leaves, pp. [1–4] 5–7 [8] 9–24 [25–6] 27–48 [49–50] 51–77 [78] 79–99 [100] 101–20 [121–2] 123–39 [140] 141–59 [160] 161–85 [186] 187–213 [214] 215–47 [248] 249–85 [286]; plates [7] (opp. sigs. E7, G2, I6, K8, M5, O3, Q4). 100×54mm. full-page illus. in A2, B5, D1, H5.

(3)

Title, A1^r: Il | Pastor Fido, | Tragicomedia Pastorale, | del | Signor Cavalier | Battista Guarini, | Con una nuoua aggiunta. | [blank space] | In Amsterdam, nella Stamperia del S. D. Elsevier, | Et in Parigi si vende | Appresso Thomaso Jolly, | Nel Palazzo, M. DC. LXXXVIII.

Section title, P8^r: Facetie | motti & burle di diversi | signori | e persone private, | con | epitafi giocosi.

32mo: A–Q⁸ [\$5 (–I4) signed]; 128 leaves, pp. [1–2] 3–7 [8] 9–13 [14] 15–51 [52] 53–87 [88] 89–134 [135–6] 137–83 [184] 185–238 [239–40] 241–56; plates [Front.], [5] (opp. sigs. A4, A7, D2, F4, M4). 101×53mm. illus. on I4.

(4)

Title, A1^r: Filli | di Sciro, | Favola Pastorale | del Conte Guidubaldo | de’ Bonarelli. | Detto l’aggiunto, | Accademico Intrepido. | Da essa Accademia dedicata | Al Sereniss. Signor. | Don | Francesco Maria Feltrio | Dalla Rovere Duca VI. d’Urbino. | [printer’s device] | In Amsterdam, nella Stamperia del S. D. Elsevier. | Et in Parigi si vende | Appresso Thomaso Jolly, | Nel Palazzo. M. DC. LXXXVIII.

Title, ²A1^r: Aminta, | Fauola Boscareccia | di | Torquato Tasso. | [printer’s device] | In Amsterdam, nella Stamperia del S. D. Elsevier, | Et in Parigi si vende | Appresso Thomaso Jolly, | Nel Palazzo. M. DC. LXXXVIII.

32mo: A–K⁸ L⁶ (–L6); ²A–E⁸ F⁴ (–F4) [\$5 (–AE2, GH4, I5, L4–5, ²A2, ²B1, ²F3) signed; misprinting F4 as F7]; 128 leaves, pp. [1–4] 5–17 [18] 19–49 [50] 51–78 [79–80] 81–106 [107–8] 109–36 [137–8] 139–68 [2]; ²[1–4] 5–9 [10] 11–31 [32] 33–47 [48] 49–59 [60] 61–73 [74] 75–85 [86]; plates [9] (opp. sigs. A5, B1, D1, ²A1, ²A5, ²B7, ²C8, ²D6, ²E5). 101×52mm. illus. on E8, G6, I5, ²A2.

(5)

*Title, *1^r*: Il Petrarca | [illus.] | con la sua vita nuoua- | mente aggiunta. | M. D. XXXI.

Colophon, ²C5^b: Qui finiscono le volgari opere del Petrar- | cha, cio e i Son. le Canz. & i Triomphi | stampate in Vinegia p[er] Messer Ber | nardino stagnino del mese di Fe | braro L’anno del Signore Mil | le cinquecentotrent’uno. | [printer’s device: Bernardino Stagnino]

Section title, ²A1^a: Triom- | [illus.] | phi del Pe | trarcha

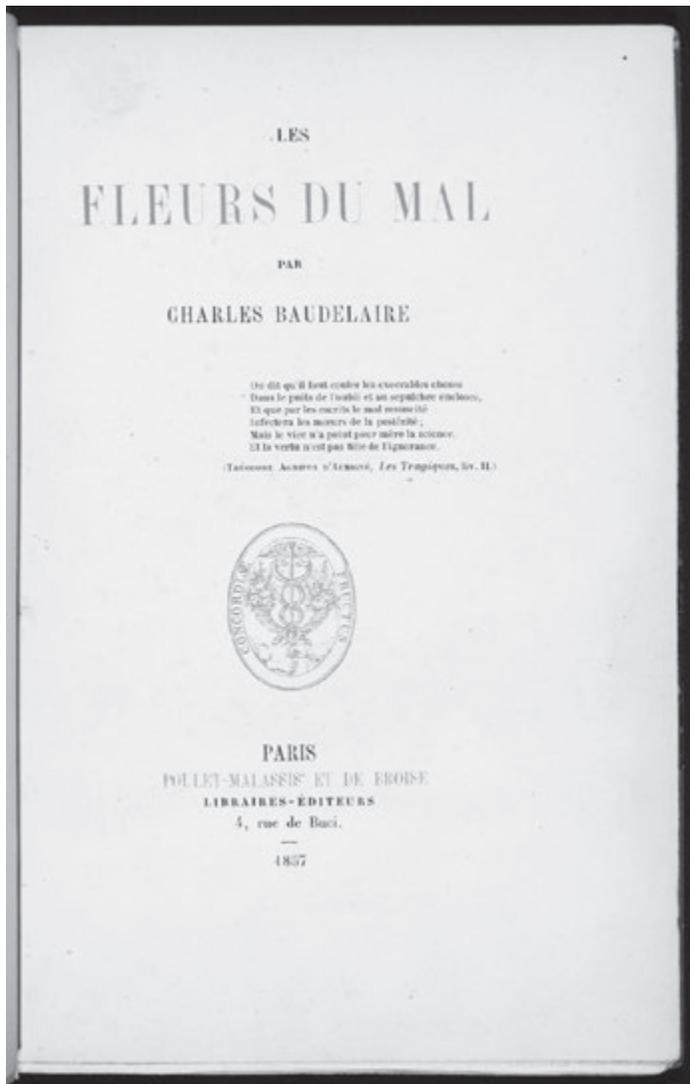
32mo: *¹²A–K¹²; ²A–B¹² C⁶ (–C6) [\$6 (–A1, E3, ²A1, ²C5) signed; misprinting B4 as B3, E3 as E []1]; 161 leaves, ff. [12] I–CVIII [12]; [29]. 98×44mm.

E. Rahir, *Catalogue d’une Collection unique de volumes imprimés par Les Elzevier et divers typographes hollandais du XVII^e siècle* (Paris, 1896), pp. 176–78 (nos. 1673, 1678, 1683, 1694, 1695)

[120X 675/1–5 9]

シャルル・ボードレール『悪の華』（パリ、1857年）

Charles Baudelaire (1821 – 67). *Les Fleurs du mal*. Paris : Poulet-Malassis et de Broise, 1857



[1: t.p.]

本書はシャルル・ボードレーの詩集『悪の華』の初版である。それまでの文学の伝統や常識を踏み越えるような作品が世に出る際には、時に様々な障害がつきまとうが、『悪の華』もその例にもれない。

「読者へ」を含めて101編（うち未刊詩篇は47編）の詩からなる詩集『悪の華』の初版約1100部は1857年6月25日に刊行された。しかし、その直後にギュスターヴ・ブルダンが『フィガロ』紙上（1857年7月5日）で、「これほど僅かなページの中で、これほど乳房が噛まれたり、噛みちぎられさえもする例をわれわれは見たことがない。デモンや悪魔や貧血症や猫や寄生虫のこのようなレビューに立ち会ったこともない。—この書物は、あらゆる精神錯乱、あらゆる心の腐敗に開かれた病院である。」（横張誠「悪の華（初版）裁判の概略」、p. 663）という書評を発表し、それが契機となって、出版の是非をめぐる裁判にまで発展した。同年8月20日のセヌ軽罪裁判所における公判の結果、被告のボードレーと出版人のプーレ・マラシとド・ブロワーズは、公衆道徳良俗侵害の軽罪を犯したという理由で、6編の詩—「宝石」（‘Les Bijoux’; pp. [52]–53）、「忘却の河（レーテー）」（‘Le Léthé’; pp. [73]–74）、「あまりにも快活な女に」（‘A celle qui est trop gaie’; pp. [91]–93）、「レスボス」（‘Lesbos’; pp. [187]–190）、「地獄堕ちの女たち」（‘Femmes damnées’; pp. [196]–197）、「吸血鬼の変身」（‘Les Métamorphoses du vampire’; pp. [206]–207）—の削除と訴訟費用の連帯支払いの義務を命じられた。削除命令は被告が皆故人となった後も効力を保ち、同判決が最終的に無効とされるのは1949年のことである。

そうした事情を反映して、初版には、(1) 最初の意図通りに6編の詩も含むもの、(2) 6編が削除され、新たな刷り直し挿入分のないもの（約200部）、(3) 削除後、刷り直しページが挿入されたもの（前後の詩を刷り直して削除部分を繋げた）、(4) 削除されて裁判所の記録保持書に供託されたページを、後に盗み出して補ったもの、(5) 未製本のままプーレ・マラシが保存していたものを、ほとぼりが冷めるのを待って売りに出したもの（1858年の年記入りの表紙）の5種類が存在することとなってしまった。さらに、表紙も4回刷り直され、その度に微細な訂正がなされている。

1861年の第2版では、削除分は他の詩に置き換えられ、章の配列にも変更が加えられている。

展示書は、削除を命じられた詩を全て含む初版で、また、表紙も初刷りのものであることから、まさに最初に世に出た版であると言える。本書は初刷りの表紙ごとモロッコ皮で装幀しており、表紙の内側にはナポレオン3世のものと思われる蔵書票が貼られている[2]。



[2: front pastedown]

Title, [p. iii] : Les | Fleurs du Mal | par | Charles Baudelaire | [*printer's device*] | Paris | Poulet-Malassis et de Broise | Libraires-Éditeurs | 4, rue de Buci, | [*short rule*] | 1857

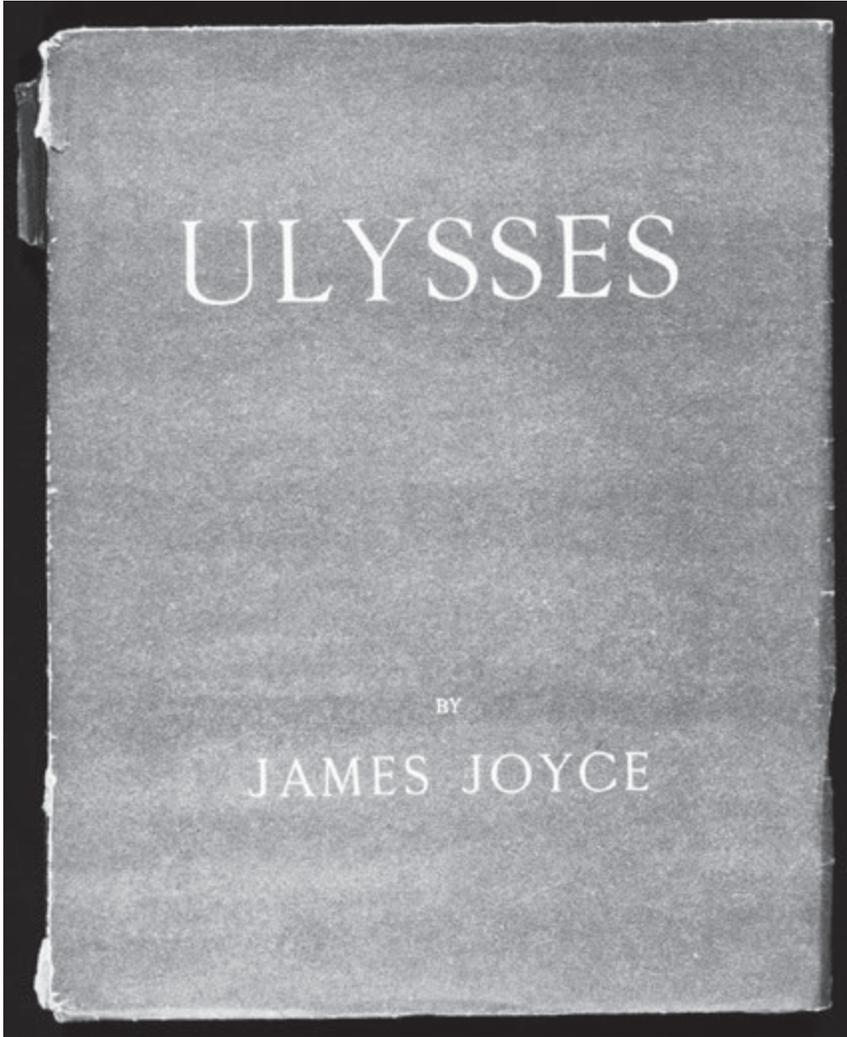
12mo: pp. [i-iv] [1-5] 6-177 [178-81] 182-213 [214-7] 218-25 [236-9] 230-9 [240-3] 244-8 [4]
[the opening page of each poem unnumbered; misprinting 45 as 44]. 188×121mm.

T 56; L. Carteret, *Le trésor du bibliophile romantique et moderne, 1801-1875* (Paris, 1924-28; repr. 1976), I, 118-123 ; 阿部良雄 「解題・詩集『悪の華』の成立」『ボードレール全集 I 悪の華』阿部良雄訳（筑摩書房 1983）所収、pp. 413-60 ; 横張誠 「悪の華（初版）裁判の概略」同、pp. 663-95

[120X 307 1]

ジェームズ・ジョイス『ユリシーズ』(パリ、1922年)

James Joyce (1882 – 1941). *Ulysses*. Paris: Shakespeare and Company, 1922



[1: front cover]

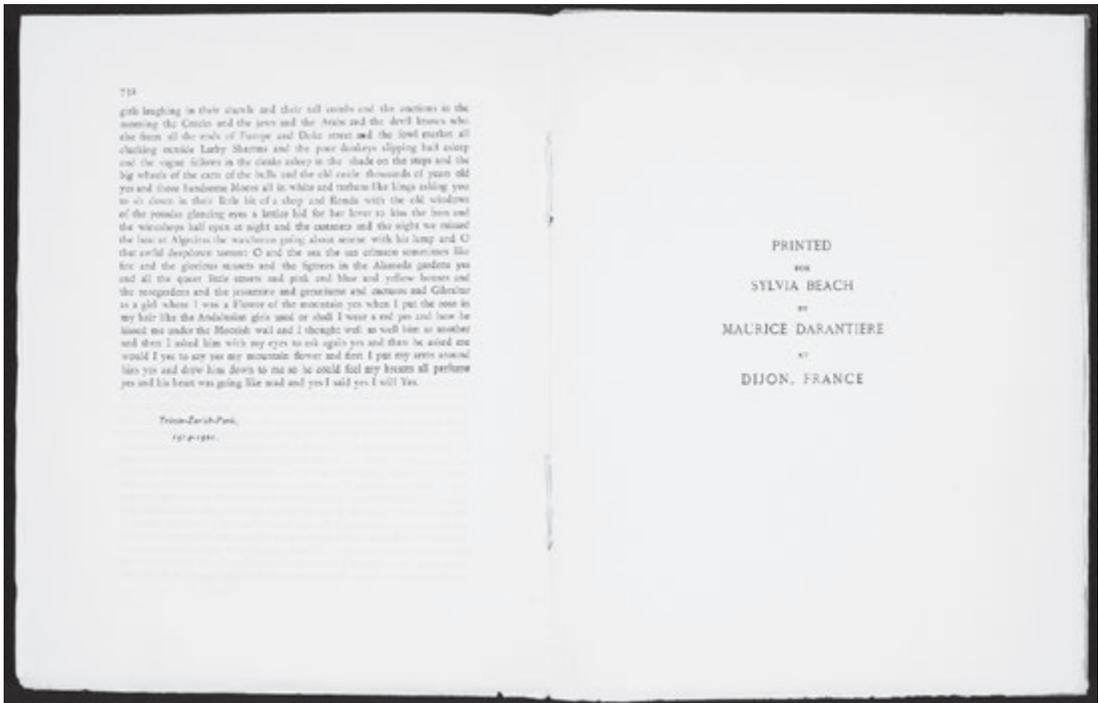
ダブリンの市中を彷徨する主人公レオポルド・ブルームの意識の流れを記録した20世紀を代表する小説『ユリシーズ』も、ボードレール『悪の華』と同様、出版に際して検閲が障害となった。『ユリシーズ』は、当初アメリカの雑誌、*The Little Review*に1918年3月から1920年12月まで連載されたが、内容が猥褻で不道徳であるという理由で検閲を受け、アメリカでの単行本刊行は不可能となった。1920年にパリに移り住んだジョイスは、

英語の本を扱う Shakespeare and Company 書店を経営していた若いアメリカ人シルヴィア・ビーチ (Sylvia Beach) と出会う。『ユリシーズ』が検閲のせいで英米両国で出版不可能なことを知ると、ビーチは同書を、ディジョンのモーリス・ダランティエール (Maurice Darantière) を印刷社として、自身の出版社から、1922年2月2日に1000部限定で刊行した。ビーチがジョイスに何度も校正刷りの修正を許したため、校正を重ねるうちに本文は3割ほど長くなり、ダランティエールを大いに悩ませた。ビーチは印刷した1000部に通し番号を入れて、著者のサインを入れた100部 (no. 1-100) を高級紙 (オランダ紙) に、サインは無いが150部 (no. 101-250) をこれも高級な漉きこみ紙に、残りは通常の手漉き紙に印刷した。本書には713番の番号が入っている。初版刊行の8ヶ月後には英米用にさらに2000部がロンドンで印刷されたが、この版は発禁処分を受け、『ユリシーズ』の刊行が許されるのはアメリカでは1934年、イギリスでは1936年のことである。

こうしたビーチの尽力によって世に出た『ユリシーズ』だが、校正を繰り返した末に刊行された版には誤植が少なからず認められる。それについては、ビーチが「特殊な事情ゆえに避けられなかった誤植に関して、読者のお許しを願います」(“The publisher asks the reader’s indulgence for typographical errors unavoidable in the exceptional circumstances. S. B.’ p.viii) という断り書きを印刷せざるを得ないほどの状況であった。ジョイス自身、1番の番号入りの一冊を妻に贈ったが、後に手紙で誤植が多いことを注意している。その後もジョイスは『ユリシーズ』の校正を止めず、その過程で新たな誤りが生じることも少なくなかった。生前に刊行された6つの版は全て、ジョイス自身の訂正が入っている。

こうした経緯があって、『ユリシーズ』のテキスト校訂の問題は20世紀文学上最大の論争のひとつとなっている。書誌学者のフィリップ・ギヤスケル (Philip Gaskell; 1926-2001) はこの難題に取り組み、『ユリシーズー3つの版の批評』(1989) を刊行した。慶應義塾図書館ではギヤスケルの研究用蔵書コレクションを所蔵しており、ジョイス研究のために集めた資料も多数含まれている。

この初版は、2006年初頭にイギリスで行われた古書のアンケート調査において、20世紀文学のなかでもっとも貴重な (そして高価な) 版とされたことをつけ加えておく。



[2: pp. 732-[733]]

Title, p. iii: Ulysses | by | James Joyce | Shakespeare and Company | 12, Rue de l'Odéon, 12 | Paris | 1922 | Tous droits de reproduction, de traduction | et d'adaptation réservés pour tous les pays y compris la Russie. | Copyright by James Joyce.

Colophon, [p. 733]: Printed | for | Sylvia Beach | by | Maurice Darantière | at | Dijon, France

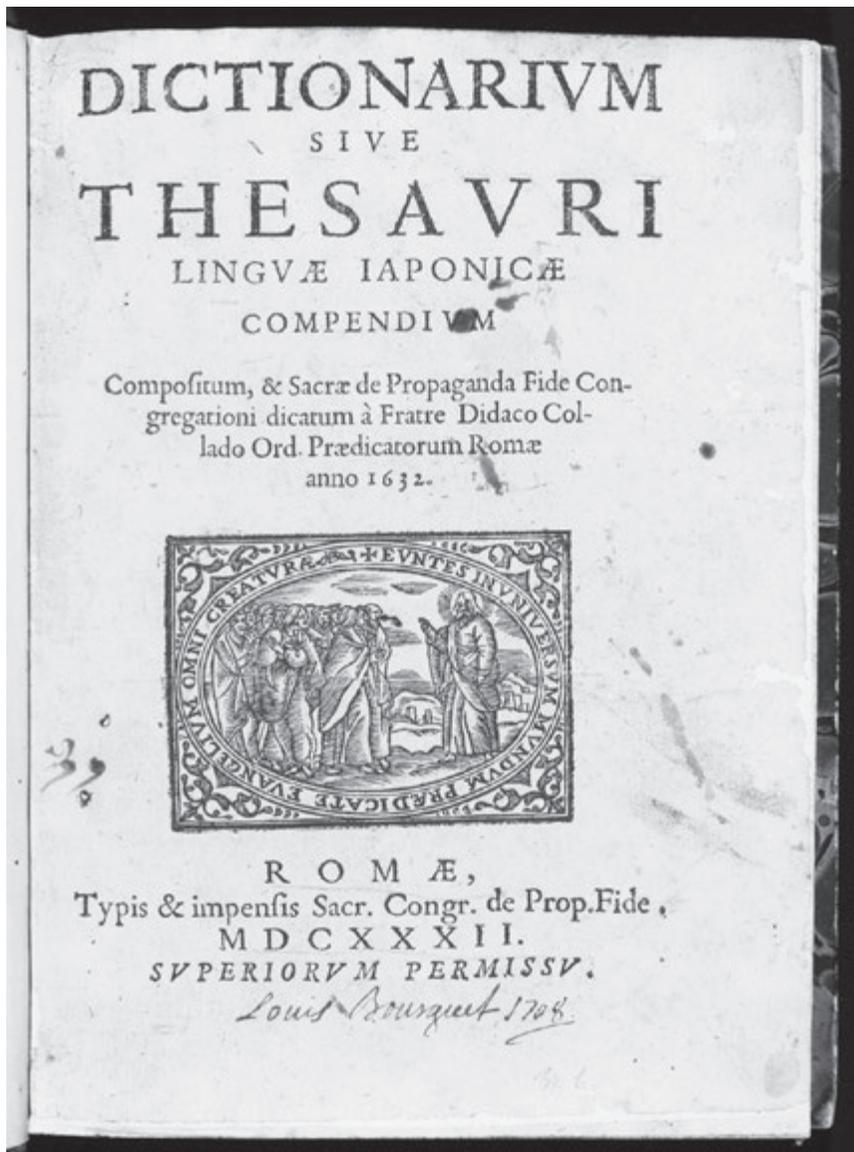
4to: pp. [8][1-3] 4-732 [4]. 235 × 185mm.

T 62; Philip Gaskell and Clive Hart, *Ulysses: A Review of Three Texts: Proposals for Alterations to the Texts of 1922, 1961, and 1984* (Gerrards Cross, Buckinghamshire, 1989)

[120X 854 1]

ディエゴ・コリヤード『羅西日辞典』（ローマ、1632年）

Diego Collado, O. P. (1589? – 1641). *Dictionarium sive thesauri linguae Iaponicae compendium*. Rome: Sacr. Congr. de Prop. Fide, 1632



[1: t.p.]

ディエゴ・コリヤード (Diego Collado) はドミニコ会宣教師で、キリシタン大追放下の1619年にマニラから長崎に渡来し、1622年に離日した。3年間の限られた滞在であったが、コリヤードは事前にマニラで日本語を学んでいたと思われ、来日して半年後には「日本語の進歩が著しいので、あらゆる階層の人々の告解を聴くことができた、という証言がある (大塚、『懺悔録』解説、p. 151)。ローマに戻ったコリヤードは、布教聖省の費用で『日本文典』、『懺悔録』と本書『羅西日辞典』の3冊を1632年に刊行した。

西洋から日本に活版印刷術がもたらされたのは1590年のことである。天正遣欧少年使節 (1582–1590) がポルトガルで活版印刷術を習得し、活版印刷機を携えて帰国したのだ。印刷機は島原半島南端の加津佐に移転したコレッジョに設置され、1595年には、1581年以来編纂作業が進められていた『羅葡日辞典』 (*Dictionarium Latino Lusitanicum, ac Iaponicum, ex Ambrosii Calepini* [Amacusa, 1595]) が印刷、刊行された。コリヤードの『羅西日辞典』は、このキリシタン版に基づいて編纂され、それに新収語彙を加えて増補したものである。

本書はキリシタン版の『羅葡日辞典』と並んで日本語史の重要な資料である。外来語には説明的な訳語が付されていることが多い。たとえば *biblioteca, libraria* (図書館、図書室) は、「書の多く定まった所」 (*qiö no vòqu sadamàtta tocoro*) と訳されている。

Title, [A]1^r: Dictionarium | sive | thesauri | linguæ Iaponicæ | compendium | compositum, & Sacrae de Propaganda Fide Congregationi dicatum à Fratre Didaco Collado Ord. Praedicatorum Romae | anno 1632. | [woodcut] | Romae, | Typis & impensis Sacr. Congr. de Prop. Fide | MDCXXXII. | Superiorum Permissu.

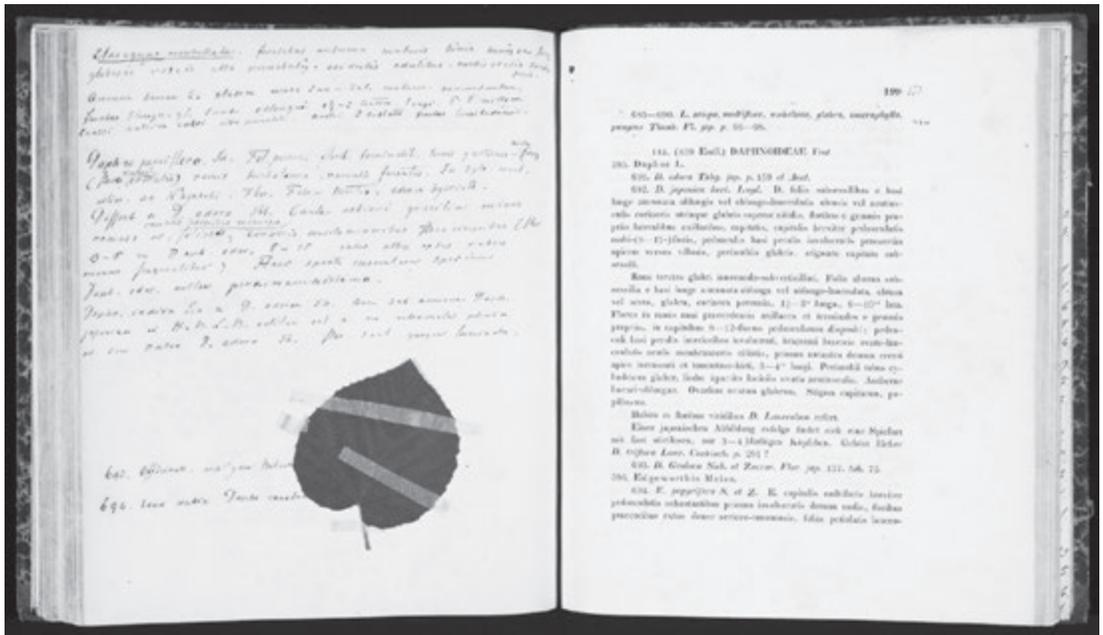
4to: [A]⁴ B–Z⁴, Aa–Vv⁴ Xx⁶ [\$2 (–X1, +Xx3) signed; misprinting Oo2 as Oo3]; 178 leaves, pp. [1–2] 3–158 [159–62] 163 [164] 165–355 [356] [misnumbering 7 as 9, 62–3 as 60–1, 96 as 88, 117–9 as 118 118 11, 270–1 as 268–9]. 204×150mm.

Johannes Laures, S. J., *Kirishitan Bunko: A Manual of Books and Documents on the Early Christian Mission in Japan*, 3rd edn (Tokyo, 1957), no. 56 ; コリヤード『羅西日辞典』大塚光信編、再版 (臨川書店、1966) ; 海老沢有道『キリシタン南蛮文学入門』 (教文館、1991) ; コリヤード『懺悔録』大塚光信校注 (岩波文庫、1986)

[120X 1085 1]

フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト、ヨーゼフ・ツッカリーニ『日本の植物』
(ミュンヘン、1845-46年)

Philipp Franz von Siebold (1796 – 1866) and J. G. von Zuccarini (1797 – 1848). 'Florae Japonicae familiae naturales adjectis generum et specierum exemplis selectis. Sectio prima. Plantae Dicotyledoneae polypetalae'; 'Florae Japonicae familiae naturales adjectis generum et specierum exemplis selectis. Sectio altera. Plantae dicotyledoneae et monocotyledonae', in *Abhandlungen der mathematischphysikalischen Classe der Königlich Bayerischen Akademie der Wissenschaften*, vol. 4, part 2 (1845), pp 109 – 204; vol. 4, part 3 (1846), pp. 123 – 240



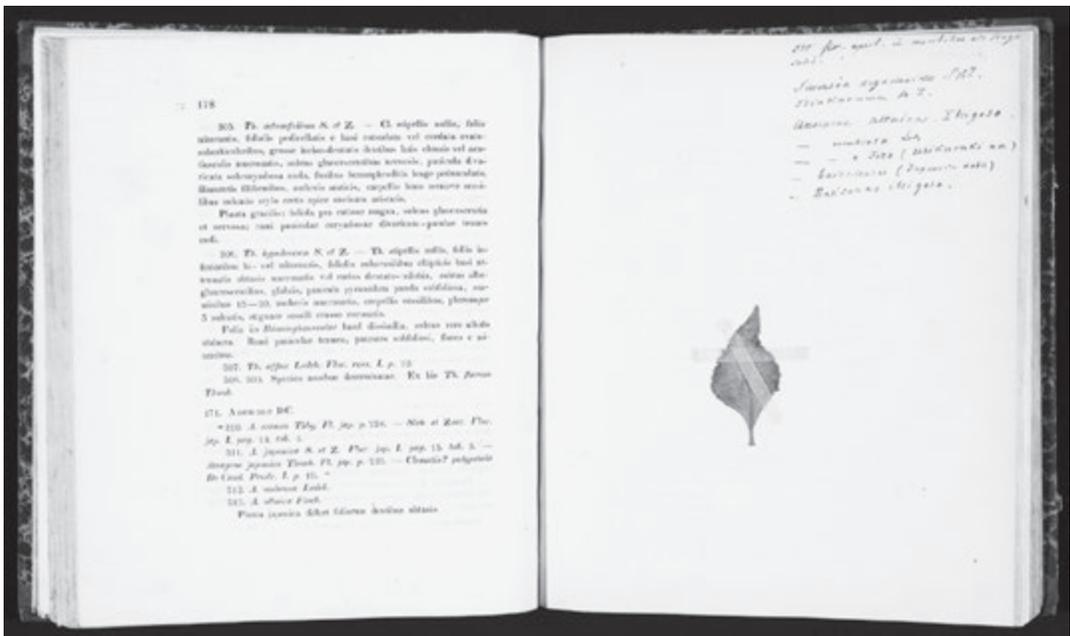
[1: p. 199]

ドイツ、ヴェルツブルクの医者の一族に生まれたシーボルトはオランダで軍医となり、長崎の出島駐在の医師として1823年6月に来日した。日本の動植物に強い関心を抱いたシーボルトは、オランダ商館長の江戸参府に随行するなどして、日本の地理や植生を調査し、可能な限りの標本を収集した。さらに、出島にオランダの気候を再現した温室を建て、日本の植物のオランダの気候への適性を調べることも行っていた。シーボルトが採集した標本は桂川甫賢、水谷助六、川原慶賀等によって細密に描かれ、それらの植物画は「シーボルト・コレクション」の重要な一部を形成し、後に『フローラ・ヤポニカ』（日本植物誌）の挿絵の原画にも使われた。

1830年に帰欧したシーボルトはライデンに住み、日本から持ち帰った標本類をコレクションとして1831年に一般公開した。出島で助手を務め、シーボルトの後継者になったハインリヒ・ビュルガー (Heinrich Bürger; 1806 – 1858) は、その後三度にわたって日本から標本を送り、コレクションをさらに充実させた。

こうして蓄積された資料をもとに、日本の植物に関する著書やモノグラフが、ミュンヘン大学植物学科教授ヨーゼフ・ツッカリーニ (Joseph G. Zuccarini) と共同で多数刊行された。その代表は、1835年からシーボルトの死後1870年までかけて30分冊で刊行された『フローラ・ヤポニカ』である。展示書もツッカリーニとの共著で、1845–46年の2年間にわたって、バイエルン王立科学アカデミーがシリーズで刊行している論文集に前後2編に分けて発表されたモノグラフで、日本植物を包括的に記述しようとしたものである。本書は、別々に刊行された2編を一冊にまとめ、さらに1葉毎に白紙を挟んで製本し直したinterleaved copyで、シーボルト自身が加筆、補正用に使っていたと思われる。挿入された白紙にはシーボルト自身のラテン語による書き込みだけでなく、植物標本も数点貼り付けられている。図1では、ジンチョウゲ科の植物について、長崎での採集にも触れつつ加筆している。図2にはアネモネに関する書き込みがあり、「白山のイチゲソウ」(‘Haksanno itsigeso’) のような和名もローマ字で記されている。また、巻末には罫紙が21枚綴じられていて、ドイツ語とラテン語の様々な書き込みが認められる。

慶應義塾図書館には、1843年に同じシリーズの論文集のなかで刊行された『日本採集植物』(Plantarum, quas in Japonia collegit) が、展示書と同じ装幀で収蔵されている。



[2: p. 178]

Part 1, Title, [p. 109]: Florae Japonicae | Familiae Naturales, | Adjectis generum et specierum exemplis | selectis. | Sectio Prima. | Plantae Dicotyledoneae Polypetalae. | *[rule]* | Auctoribus | Dr. Phi. Fr. de Siebold et Dr. J. G. Zuccarini. | *[rule]*

Part 2, Title, [p. ²123]: Florae Japonicae | Familiae Naturales, | Adjectis generum et specierum exemplis | selectis. | Sectio Altera. | Plantae Dicotyledoneae (Gamopetalae, Monochla- | mydeae) et Monocotyledoneae. | *[rule]* | Auctoribus | Dr. Phi. Fr. de Siebold et Dr. J. G. Zuccarini. | *[rule]*

pp. [3] 112–204; ²[3] ²126–240; plates 1–3 (opp. p.240). 253×210mm. Interleaved throughout; with 21 leaves of MS notes at the end; pages renumbered in red ink as pp. 3–96; 97–214. MS note inserted opp. p. 233.

BN 101 ; 『日本植物誌－シーボルト「フローラ・ヤポニカ」』新装版（八坂書房、2000）；『シーボルト旧蔵日本植物図譜コレクション』（丸善、1994）；市古健次「シーボルトとの邂逅」、*MediaNet*（慶應義塾大学メディアセンター）、13（2006）、63–65

[120X 243 1]

義塾図書館を読む～和・漢・洋の貴重書から～ 展

展示図録 編集・執筆
佐々木孝浩・住吉朋彦・松田隆美

発行

2007年1月

慶應義塾図書館

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45

Tel 03-3453-4511(代)

印刷・製本・昭和情報プロセス(株)
